
こうもり族の反乱

離陸羅臼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じつもり族の反乱

【Zコード】

N7192U

【作者名】

離陸羅臼

【あらすじ】

自分たちの『行為』を収めたビデオを売り物にして生きる志穂（少女）と真紗耶（女装少年）――人がなぜ、このような生きかたを選ばなければならなかつたのか……そこには想像を絶する血塗られた悲劇が隠されていた。ツインテールの元気少女・巫彩が、志穂と真紗耶の闇を紐解いてゆくが、巫彩の出現により一人の危ういバランスが崩れはじめる。そして、志穂が帰る朽ち果てた校舎跡その地に隠された禍々しい秘密とは…？　他の投稿サイトでも連載しております。

じゆもつ族、血の海へ（前書き）

第七章における、真紗耶視点の回想シーンを、志穂の視点で転載したものです。このほうが読者の方も物語の世界に入っていきやすいかと思い……。

「Jリモリ族、血の海へ

Jの手に握り締めたナイフからは未だに赤黒い鮮血が滴り落ち、呆然と佇む私の心情を皮肉るかのように、堅い木の床がボタ、ボタ、と無骨なリズムを奏でていた。

「柴門さん、貴女まさか、まさかその人を殺し……っ！」

駆けつけてきた幼馴染の声に、はっと振り向く私。

彼女……というか彼の顔は、その実あまり驚いていないように見えた。いや、むしろ何かを達成したような満足感すら放っているではないか？

しかしそのようなことを気にしている余裕もなく……

「ま、真紗耶っ！ わ、わ、わた、し、あ、あの、こ、こ、これ、どう、う、すれ、ば」

私は血まみれの体を揺さぶりながら、幼馴染・真紗耶にSOSを出す。

すると真紗耶のその、どう見ても女としか思えない顔が異様にどう黒く輝いたのが、こんな混乱状態のなかでも判った。

「柴門さん落ち着いて！ 貴女は悪くありません！」

女神のような真紗耶の確信に満ちた一言で、心神喪失と混乱状態の境目をさすらっていた私の心は、にわかに得体の知れぬ慢心と安樂のなかへ投げ込まれ、その凄まじい落差ゆえ、この口は急に饒舌になる。

「だつ……だ、だよね……ははっ……そうよね！？ 真紗耶だつてそう思うよね！？ 全部全部、こいつが悪いのよ！ 今だつて、私が『責任とつて一人で育てる』つて頼んだら、『そんなに育てるのが嫌なら墮ろせ』だつてー！ はつはははー！ 自分勝手にこんな清純な女子高生を妊娠させておいて！ なによその言い分は冗談じやないわよははははー！ もう面倒臭いから殺しちゃつた」

半ば裏返った声でけたたましく、目の前に横たわる男を罵倒する

私

そのとき、そんな私があまりにも痛かったのか、それとも憐れだつたのか、あるいはいじらしかつたのか……、真紗耶のなかで『今まで堪えられていた何か』が謎の暴発を起こすのが判つた。

「ああ柴門さん、柴門さん！ 私もう、我慢できません！」
真紗耶は血に染まつた私を強烈に抱きしめてくる。

「…………ま、真紗耶っ！？ 危ない！ 刺さるつて！」

ナイフを持つままの私は、滑稽なことに、ナイフではなく真紗耶のほうを突き放した。

すると、床は崩れ落ちた。

で飾った真紗耶。それは、この世で最も絶美なる妖氣を放っていたのだから。

柴門さん、私が、欲しくはないのですか?」

そうとしているのだ、と思った。だがこのような状況下、私はただあたふたとよろけるばかり。

あ、あ、あ、真紗耶……私……その……」「
そのときだった！

「Jの手で殺してやつたはずの 目の前に無残に横たわる男が、
なんと血を吹き出しながら叫び声を発するではないか！ 奴の吹き
出した血は、真紗耶の体めがけて飛んでいった。」

は俺の女だ
「宗志！ 生きていたのー？」

驚愕する私の頬に、なにか生暖かい液体が触れる……真紗耶が、

その手に付いた宗志の血を、この頬に塗りたくつていいのだ。

「柴門さん？ その男と私と、どちらが魅力的ですか？」

そのまま鮮血を纏つた両手で全身を愛撫され続けると、私は半ば

白田を剥ぐほどいの誘惑を受け、とうとう真紗耶の服のボタンを外し始める。。

それから後のこととはよく覚えていない。

私の意識がはつきりとこの浮世に戻ったのは、宗志が性懲りもなくまた断末魔の叫びをあげたとき。

「あああーっ！ お前たちは何と禍々しい女なのだりつー？ ……祟つてやる！ 崇つて祟つて！」

そのときだつた。

真紗耶が悪態をつく宗志の真ん前に立ちし、烈しい恨みと幾乎かの蔑みを込めた眼差しで彼を見下ろしてみせるではないか。「祟れるものなら、祟つてみるが良い……。それまでの」ときいかれぽんち、虫けら一匹祟る力すらあるものか

「真紗耶？ あなた……」

そんな真紗耶から只ならぬ殺意を感じ取つた私は、ただ呆然とその名を呼ぶ。

すると真紗耶は、信じられない事実を流暢に告げてきた。

「実はね柴門さん」

それは深く暗く、そして悲しくも痛ましい復讐心……。

私は虫の息の宗志に視線を落として軽く叫ぶ。

「なによ！？ 木泊君ひはくが自殺未遂したのって、こここれらのせいだつたんだー？」

以前に出会つた木泊といつ純真無垢な少年……彼の悲劇が目の前で死にかけている男のせいなのだとと思うと、私はこの胸を締め付ける罪悪感を幾らか軽くした。

宗志はこの期に及んでも白らを省みよつともせず、ただ反抗的に醜く叫ぶだけだ。

「ぐおおーっ！ あれはあの宗教が勝手にやつたことだ！ 僕には関係ないっ！」

悪態をつき続ける宗志に、真紗耶はどうぞばかりにおがましき

言葉を浴びせる

「おお、汚らわしき首田宗志よー。木泊せんの受けた痛み、苦しみ、絶望、孤独……その総てを百倍にしてお前に訴えてやるッ！ その救いなき断末魔にて、眞の屈辱を味わうが良いー！」

た。

まつまつまつまつー

死は遙く宗志の田の前にて
初めて深い美を
交わしたのだつた。

思えばこれが、総ての始まりに他ならなかつた
蝙蝠としての人生の始まり。日の当たる場所には二度と戻れぬ、暗
く湿つた血の海を泳ぐような、この呪われし人生の。
 私と真紗耶の、

「もじづく、血の海へ（後書き）

おどりおどりこ開始ですが、物語全体を見渡してみると、そんなに暗いものではなく、普通のラブコメパートやヒューマンチックな見せ場もあつたりするので、ぜひ、最後までついてきて頑けるとありがたいです（笑）。

【シナリオ・スクリプト】呪われし逃亡魔（前書き）

この最初の部分が、物語全体の性格を決定しています。よって、これをプロローグとせず、第一章の最初の部分といつゝことにしました。

【Suehiro - s viewpoint】呪われし逃亡劇

ああ出来るものなら声など発したくはない。お喋りすればそれだけ走る速度が遅くなる。けれども私の後ろを走るあいつの実に素つ頗狂な行ないが、私にそれを許さない。

「やい真紗耶！ あんたは昔つから本当におかしな奴よ！ こんな逃亡劇の最中にメールで彼女さんと会話とは、まあいい気なもんね！」

「ああ柴門さん、どうか怒らないで下さいーーー。いま返事を打たなければ……私はやつとの想いで御田にかかれた《シェエラザード様》に合わせる顔が……！」

「ふん、馬鹿馬鹿しいつたらありやしない！ どうせ上手い具合に騙されて、身を削つて稼いだ金を奪われるのが関の山よーーー全く！ ほり、ほり、それより今は私たちの命のことを……ははは」

自分達の乱痴氣騒ぎを、急き込みながらも嘲笑する私 これは本当の逃亡劇なのか、はたまたパロディーか、あるいは、もはやパロディーとしてしか言及できないほど悲劇なのか。

ぶんつーーーと、後ろを走る真紗耶を振り向いた私こと柴門志穂は、一瞬にして全身から力が抜けるまでの憤慨にとらわれた。真紗耶が呑気に、実に呑気にしゃがんで、メールを打つていやがるのである。「こら真紗耶！ ……もう勝手に姦^{まわ}されて殺^やられやがれ、糞^うつたれが！」

今にも真紗耶を置いて走り去ろうとする私を、こいつは實に涼しい顔で見つめたかと思うと、そつと、ある方角を指差した。

「柴門さん？ あそこは、いかがなものでしょー？」

この鉄屑の臭いに満ちたオフィス街のビルとビルの狭間に在つて、実に薄暗く、湿気ばかりか人の悪意すらそこに密集させるかのよう

な細い路地。真紗耶は、その路地のほうを差している。

「そつちは行き止まりよ、お馬鹿さん！」

などと一応の文句をつけながら路地のほうへ駆け寄ると、真紗耶が指差す先には、心を腐らせるような陰気な薄闇の中に、大きなマンホールがぼんやりと灰色の満月を描いていたことに気がづいた。あそこへ逃げ込むというのか…？

これは、心の不安を搔き立てるような灰色の雲に覆われ、日本国特有の強い湿気に満ち満ちた白昼の出来事であった。この虚ろな空気が醸し出す不快感は、現代人たちの生み出す愚劣なしがらみが幾倍にも助長しているように思える。

そうした日本社会が生み出す若者の腐敗や墮落もまた、ニュース番組やワイドショーにて我が國ならではの湿り氣を帶びて伝えられる事が多いが、これからお話しする私と真紗耶の青春ときたら、陰湿・凄惨なことその非を見ず、私たちの不潔きわまりない生き方や禍々しい過去が明かされるに至っては、往々にして若者の腐敗に慣れ親しんだ現代人も、いやといつほどどの嫌悪と戦慄に打ちのめされずにはいられないだろう。

私は自らの置かれたこの呪わしき日々に半ば気を遠くしながらも、真紗耶と寄り添つて、じめじめとしたコンクリに浮かびあがる灰色の月へ向かつて足を引きずる。

真紗耶はマンホールの蓋を開けながらも、携帯でメールを打ち続けることを中断しようとはしなかった。ふと覗き見をしてみると、実に不健康な青い光を放つ画面に、『自殺未遂』という実に穢やかでない言葉が垣間見えた。

次いで、真紗耶がやりとりをしている相手の名が目にに入る。ここでのところ真紗耶は、その娘と頻繁に話しているらしい。

その娘の名は、巫彩。^{みさや} 知り合いの名前ではなかつたが、どこかでその名前を聞いたような感覚は……あつた。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 シンリーレクイーンの裏側（前編）

改定前のこの物語にはなかつた場面です。改定前はもつと暗くて屈折した女の子がヒロインでしたが、志穂 + 真紗耶があんなふうな上に、もう一人のヒロインまで屈折していくはあまりにもバランスが悪いと思い、元はサブキャラだつた巫彩をヒロインにしてみたと いうわけです。

【Miss a - s viewpoint】シンリレクイーンの憂鬱

よく響く迷いのないあたしの靴音と、か細くて躊躇いがちな彼女の靴音が、ノスタルジックな午後の雑踏と溶け合つ。

「ねえ巫彩、ちょっと巫彩つてば！」

「朱音、ちょっと黙つててよ。ね」

「なんか巫彩らしくないよ！ メール打ちながら歩くなんて……」

友達の朱音は、普段は体育会系で活発なあたしが、こことこ異様にメールに執着していることを訝しがつてる様子。

「アブナイサイトとかには手を出さないから、安心してよ」「でも、心配だよ……」

「よつこりしちょつと」「

「で、真紗耶さん、兄さんの自殺未遂の原因のことは、こいつになつたら聞かせてくれるわけ？」

あたしこと中里巫彩はメールを力ち力ち打ちながら、朱音と共に江ノ電への道を急いでいた。

どんな仕事をしているのか判らないけど、この真紗耶という人は神奈川を活動の拠点としているらしい。

つまり単純に言えば、この鎌倉に住むあたしと近い場所に居つてわけ。

そして、それを知るとあたしは、居ても立つてもいられなくなつた。

誰も教えてくれない《兄さん》の自殺未遂の原因 その真相を知っている人が近くに居るつて思うと、もう……。

「何度も言つようですが、知らないほうがいいことだつて、この

世にはたくさんあります】

真紗耶さんからの返信はいつだつてそんなもの。

カツとなつたあたしは、

「いててててて！ 離して~許してえ~！」

腰の辺りから響く男の声を無視して感情的な返信を打つ。
「あんた兄さんの苦惱が『再発』してもいいっていつの！？ 人間の心の闇なんてね、腫瘍とおんなじ。ちゃんとケアとかないと、いつ再発するか判らないのよ！？ それにこれは、兄さんを引き取つた彼女の願いでもあるの！」

「つたくもう！ イライラするつ！ てあーつ！」

あたしはさつきから手に掴んでいた中年男の腕をギュウウウウと捻つてやつた！

「巫彩！ それ以上やつたらその人死んじゃうよ！」

朱音に言われても、あたしの怒りは収まらなかつた。

「力で女を捻じ伏せようだなんてサイテー！ あんたみたいなのをこの世のゴミにしていくのよ！」

「『めんなさい』

ちなみにあたしが『コイツ』を捕らえたのは、朱音が でも、心配だよ……とか言った直後。

朱音とあたしの体をまじまじと見つめる『コイツ』の視線に、あたしは何分も前から気づいていた。それでもって、『コイツ』の手が朱音のお尻めがけて伸びた瞬間、あたしが よつこらじょつと て具合に捕まえたと、そういうこと。

腕をぶんつと振つて男を地面に叩きつけると、あたしは土の付いた赤い靴で脂ぎつたその顔をなじつてやつた。

「ぞまあみなさい！ 正義のヒーロー・中里巫彩様の御前で痴漢だなんて、百万光年早いのさつ！」

「ひいいいーつ！ すんません~」

といったところで背後から、自転車に乗つた駐在さんが笛を鳴ら

しながら登場！

「こ～らこ～ら～。まーたやつてんのか！ そいつはちょっとやりす
ぎじやないか～？」

すると朱音は駐在さんの元へトコトコ駆けてゆき、ペコリと頭を
下げた。

「刑事さん、巫彩は私を助けてくれたんですつ！」

それを聞くと、駐在さんは荒々しく地団太を踏んだ。

「ぐわあー、まーた痴漢かい！」

あたしは得意げな顔で、痴漢男を駐在さんの元へ連行する。

「もうや、地球温暖化のせいで日本の男の頭、沸いてるんじゃない
かしら？ 今日だつてほら、まだ三月だつてのにジメジメして厭な
気候よね～」

今日も鎌倉特有の澄んだ空気が、日暮れの商店街を吹いてゆ
くけれど、……やっぱりガキンちょの頃に感じた、あのすがすがし
い春風とは全然違う。これが鎌倉じやなく他の場所だつたとしたら、
もつとドロドロした空気になつてゐるはず！

日本の四季の崩壊 生ぬるい春、暑すぎる夏と秋、それから雪
の多すぎる冬。そういうのが多かれ少なかれ、人の心に悪影響を及
ぼし始めてる気がしていた。

ふつと南国のカラリとした空氣を感じたくなつたあたしは、すぐ
隣の果物屋に置かれたカゴから新鮮なオレンヂを手に取ると、皮の
上からガブツとかじりついた。

南国のがすがしい太陽の匂いが心に広がつたと思つたとたん、
大人の大声が二重放送であたしにふりかかりなさる！

「お手柄だ、中里みさい～」 「こ～らあ～ 中里みさい～ またうち
の果物を勝手にイ～」

それはすなわち、痴漢男に手錠をはめた駐在さんと、陳列された
果物の合間に怒鳴る果物屋のオバサン。

話の内容なんかどーだつていい！ あたしは一人の大人を交互に

ギリリと睨みつけてやつた。

「だーかーらー、『みさい』じゃないってのよッ！　あたしの名前
は巫彩！　み！　さ！　ゑ！　覚えれ！」

あたしはツインテールをプロペラみたいに振りながらそっぽを向くと、賽を投げるように後ろ手で小銭を果物屋めがけて投げ放ち、そのままその場を後にした。

江ノ電の駅までもうすぐ。このあたりはホントにイマドキ珍しい、人情味あふれる商店街で、下校時にはいつだってコロッケの揚がる香ばしい匂いが漂う。

それで、もう少しすると……ほら、丸いプラスチックに覆われた街灯たちが、赤く染まつた空の下でやるせなさそうに灯り始めた。

「あ、巫彩。セーラーカラー、乱れてるよ、また」

「いいわよ別に」

「だめ。校則にあるでしょ？　『服装の乱れは心の乱れ』って」
あたしの背後に回り、襟を直してくれる朱音。どうやら、せつきの一連の騒動で乱れてしまつたらしい。

もう、セーラー服なんて、めんどくさいし！　暑いし！　動きにくいつたらありやしない！　おまけにああいつ痴漢が寄つてくるのだつて、きつとこの厄介な服のせいなんだから！

しかし、背中に感じる朱音の気配ときたら……これが異様なほどの存在感の薄さで。いつだってあたしはこの少女が心配になる。

「あらららら～。タイが曲がっていてよ？　みたいな？」

なんておどけてみせるのも、心に発生した杞憂を打ち払うため。

あたしたちが通う『鎌倉マッシュユータス女学園』は、『お堅い』ことで有名な女子中学だけ、そのおかげで朱音は何とか水を得た魚みたいに、平穀無事に暮らせている気がする。

つまり、鎌倉という古雅な土地と、女子だけのお堅い中学という秘密めいた空間が、朱音にとって都合のいいファンタジーを生み出

しているんじゃないのが、と。

正直言つて、朱音は普通の共学校に馴染めないと思つ。この神経質なまでの生真面目。決して他人の色に染まらない意志の強さ。馴れ合いを重視する近年の若者集団の中では、疎まれる存在になること請け合いだと。

ほらほらん。他人の襟を直すのにだって、もう一分近くかかつてるじゃないの！

「これでOKね。巫彩、ツインテールだから襟が目立ちやすいのよ。気をつけて」

確かに朱音のセーラーカラーは、そのまますぐな長髪に隠れてほとんど見えないけど、あたしは左右の髪をそれぞれ耳の上で縛つているから、襟がハッキリ見えてしまつといつ。

再び歩き出すと、やつきの件の影響か、朱音の視線が妙に凝わしげに周囲を気にするようになつていて。

「ほーひ。やっぱりあたしが居なきやダメなんじやない？ 朱音」「巫彩……」「めん。私のために……。ほんとは横浜に転校したいんですね……？」

「いいのよ~。あたしだつてあの学校、好きだし」

「でも……、でもあのご両親と一緒に暮らしくくられない？」

どこまでも心配性な朱音が少しもどかしくなつて、あたしはその柔らかな頬をグニグニとつねつねする。

「あたしはあんたとは違うの~！ 兄さんが目覚まして、横浜に引き取られて行つてからはず、もうサッパリしたもんよ。兄さんが病院で寝てた頃はもう、いつあのクソ夫婦が兄さんを安樂死させるつて言い出すかつて、冷や冷やして暮らしてたけどさ」

「そう……」

そう。あたしが一歳であるの家に引き取られたときにはもう、兄さんは自殺未遂をした後で、物心ついた頃にも彼は病院のエエ

で管に繋がれて眠り続けていた。

それでもあたしがこんなに木泊兄さんを気にかけるのは……、四歳か五歳のあたしが放つた、

起きろ！ ネボスケ！

の一言によつて目を覚ましてくれたという過去があるから。それから病院に通ううち、あたしと兄さんは心を通わすようになつたつてわけ。

あたしを引き取つた親、つまり兄さんの両親は元々あたしの遠い親戚で、あたしが親に棄てられて孤児になつたところ、『孤児を引き取つた英雄夫妻』なんていうステータス欲しさにあたしを引き取つたつて寸法。

あのクソ夫婦は兄さんが自殺未遂した時点で、彼を施設に入れるつもりでいたらしいけど、それを見かねた心優しい女性が、兄さんの引き取り手になつてくれた。

I C H I で眠つている間、そんな優しい引き取り手の呼びかけにさえ答えなかつた彼が、あたしのその一言に答えるように目覚めてくれて……それがあたしと兄さんの間に芽生えた最初の絆といふことになる。

駅に着き、一人してホームに佇むと、あたしはどこか儚げな朱音の横顔を見て不安になつた。

「それより朱音こそ、よく毎日毎日、こんな長い距離を通つてられるもんね」

この狭山朱音さやまという少女は、隣県から何度も乗換えをしてこの駅まで通つている。

「大丈夫。この学校、気に入つてゐるし。でも毎日お母さんと言ひ争つて疲れる。お母さん、私を共学校に通わせたいみたいで」

ドン！ と黄色い線を足で叩くあたし。

「くわーっ！ お互い親には苦労させられるわね～！ ほんつと子供つて損！ 親の一聲で生活変えられたり、学校決められたり！」

よく親は子供を選べないって云つけどさ、子供だつて親を選べないつてのよ！」

「……私たちの学校、寮があれば良かったのにね」

「ホントよっ！」

といったところで見慣れた江ノ電が物静かな面持ちでホームに到着。

ウエスタン・リバー鉄道にでも乗つてるような、江ノ電特有の緩やかな感覚のなか、あたしはまたケータイを開いてみる。するともう何分も前に真紗耶さんからの返事が返ってきていて、ちょっぴり申し訳ない気分になつた。

「解りました。……私とて貴女のお兄さんが心配です。では来週は私、幼馴染と共に『Sweet Season』の辺りをうろついていることにします」

即座に返信を打つあたし。

「ありがと。それならあんたを見つけられそうだわ」

『Sweet Season』っていうのは、ぐだんの、兄さんを引き取つた女の人気が運営してるバーのこと。

その女人の人というのはあたしの義母の従姉妹で、自殺未遂を起こした兄さんを半ば衝動的に引き取つたから、兄さんの詳しい事情を知らないという。

彼女は最近、あたしのことも引き取ると言ってくれてるけど、朱音を一人にしたくないというあたしの意思で、その話は流れている。

「あーあ。会う約束しちゃった」

隣から聞こえてくる、からかうような声。

「ああもう、人のメール覗き見とか、いい趣味してるわね」「

とはいへ、これ以上電車のなかでメールを打つてたりしたら、イマドキの学生と何ら変わらなくなつてしまふ。いや、あたしは事実上、イマドキの学生なのだけれど、『お堅い』鎌倉マツシユータス

文学園の生徒である以上、そこの人のケジメはつけておきたいところ。

ふうと力を抜いて背もたれに寄りかかると、初めて自分が猫背だつたことに気づく。

朱音の合唱部が休みの日は、あたしもテニス部を休んで一緒に付き合つたま、車内はガラガラに空いていた。本当に、うちの学校の帰宅部の面々がまばらに見られるくらいのもの。

見慣れた人々が窓のすぐ向こうを流れてゆくさまも、こいつ空いた電車から眺めるとなぜか胸が躍る。人が多いと、窓の外を見る余裕なんてないわけだから。

「じゃ、また明日ね。気をつけて」

「分かつて。また明日……」

あたしは途中の駅で降りて、そのまま家路を急ぐわけだけど、朱音は終点・江ノ島まで行って、そこから乗り換えて隣県まで行かなきゃいけない。正直言つて、心配なことこの上ない。

ホームを出てふと振り返ると、車両の中、窓の向こうで少し俯く朱音の横顔が見える。緩やかな台形を描く目、ほんのちょっとぴり肉づきのいい、綺麗なラインを描く風体。「こんなにも孤独が似合つてしまふ朱音という少女を、あたしは哀れに思つた。

ほら、ほら。車両に乗つた他の面々は楽しそうにお喋りしているのに、朱音はあたしが降りると完全に沈黙してしまうじゃないの。

……朱音は、学校で一人ぼっちのようだった。そしてそんな彼女の姿がいつだつて、あたしのなかで兄さんと彼の。だからあたしは、彼女を放つておけない。

あたしには朱音のほかに友達が一人居たけれど、『あたしに友達が居ると朱音があたしと付き合いにくいから』という理由で、今は学校ではつるまないようにしている。……と、噂をすればほら。

「巫彩、お帰り~」

「オッス！ お姫様のエスコート~」苦労様！

ほんわかした紗那とボーアイッシュな眞子。

「あー、また迎えに来ててくれたわけね」

「だつてねえ……」

「部活が休みの日くらいしか会えないじゃない?」

オレンヂに染まる二人の顔を見ると、あたしの心がにわかにその緊張を解ほほどくのが判つた。

朱音と居る間のあたしどきたら、常に『この子を守るんだ!』なんて使命感に燃えていて、心の休まる暇つていうのがない。その点、この二人に会つと、心が少し前があたしに戻るようで、どうにも心安らぐ。

「紗那、眞子、ありがとね」

ふつと心が安らいだせいか、意外にも素直にそんな感謝を述べてしまつあたし。

眞子はそんなあたしが可笑しかつたのか、こちらを指差して首を横に振つた。

「へえー、我らがカマジヨのシンデレクaineも丸くなつたもんねー」

その隣の紗那は、この夕映えと同化するように静穩な笑みを浮かべる。

「そうだよ……。あたしたちが好きで巫彩に会いに来たんだし。行こつ」

「こうやつて三人、植木鉢や垣根に挟まれた細い路地をゆくと、会わない時間なんてなかつたみたいに、これが当たり前の光景に思えてくるから不思議。

朱音のために彼女たちと距離を置いたあたし……それをこの二人は、『そこまでしなくとも』とも『友達想いなのね』とも言わいで、当たり前のことをみたいに快諾してくれたし、こうやつて現に実践してくれてもいる。

常につるんでなきや友達じゃなくなる? そんものはホントの友達なんかじやない。それを理解している、そういう一人……

あたしはいつか、あの一人と朱音が仲良くなれたらいいな、なんて思つたりしている。そうしてあたしも含めて『仲良しカルテット』なんて名前が付いたりして、楽しそう……。

少し歩いて眞子が、そしてもうちょっと歩いて紗那が、それぞれ垣根の木戸をくぐつて、いかにも鎌倉！ってカンジの、昭和的な日本民家に入つてゆく。あたしたちが友達になりやすかつたのは、こんなふうに家が近かつたせいもあるのかもしれない。

ところがあたしが帰るのは、そんな古雅な家並みに反発するようになされた、西洋もどきな四角形の箱。

家を覆う白い塀の仰々しさも気になるけど、その塀の所々に、まるで落書きを消したようなペンキの跡があるのはもつと引っかかる。けど、仲がいいわけでもない義理の両親にそういうことを訊くわけにもいかず……。

「ただいま」

玄関を開けると、現代家屋特有のキンとした冷徹な空氣とともに、派手なブランド物の衣服を身にまとつた義母が出迎えてくる。

「あーらまア、巫彩ちゅわん、お帰りザマス♪ さつき警察からご連絡があつてねエ、ふふふ、またお手柄立てたみたいねえ！」

！」

「はい。そりやどーも」

冷たくあしらつて一階へ上がろうとする、「待つザマス」と引き止められた。

階段の中ほどで、視線だけ下に落として義母の話を聞き流すあたし。

「巫彩ちゅあん？ 貴女は我が家の誇りザーマス。よつて、付き合う友達もそれ相応の質の高い者でなければならぬザマス」

「…………だからなに？」

「バレーボール部キャプテンの多岐川眞子、および図書委員長の上うえだたきがわ

田紗那は無問題ザマス。しかし、最近付き合いだしたといつ、あの狭山朱音といつ子、あれはようじくないザマス！」

「どうしてよー！？」

あまりの横暴さに、あたしは階段を駆け下りて義母と向き合ひ。「興信所に調べさせたザマス。あの狭山といつ子、小学校時代に普通の学校に馴染めず、登校拒否になつた拳句に、女子小学校に転校した過去があるとか。おまけに、今の中学校では友達らしき存在もないとのこと」

「だからなによー！？」

「狭山朱音は、対人恐怖症、もしくは自閉症の可能性があるザマス。もしも巫彩、貴女が彼女と付き合つつもりなら、彼女にはまともな人間になつてもらわなければならぬザマス！ よつて狭山朱音には、彼女の母親を通じ、リタリンという薬を服用してもらつザマス！」

リタリン。聞いたことのない名前だったけど、あたしは言つようのない理不尽さに押しつぶされそうになつた。

「薬つて……どうしてよー？ 朱音は、朱音は病気なんかじゃないッ！」

「いいえ。病氣ザマス。普通、中学生といつのは学生同士で戯れるもの。人間としての欠陥がある者と付き合えば、巫彩ちゃんまで欠陥品になつてしまつザマ……つて巫彩ちゃん！？」

義母が話し終わる前に、あたしは自室めがけて駆けていた。

ようするに、こうことなのよね。兄さんも、朱音とおんなじくらいいいえ、もっと自己主張が弱くつて、内向的な子だつた。おまけに女装が趣味とくる。そんな兄さんに、この親が手厳しい制裁を与えないわけがなく。結果、自殺未遂に追いやられたつてこと。

あたしは部屋に戻ると、ばたんと戸を開めてそのまま崩れ落ちる。鉄臭い家の中、ちょっとでも木の温もりを感じられるようにした

くつて、あたしは家具一式を木製のもので揃えていた。いつもしてると、《木に宿泊》してるみたいで安らぐ。

《木に宿泊》それは兄さんを身近に感じる言葉でもあった。兄さんの名前が《木泊》^{いはく}なんていう、変わったものだから。

親の悩みは、紗那にも眞子にも、もちろん朱音にも話せなかつた。彼女たちをあたしのステータスのアップダウンに関わるオブジェクトとしか見ていない連中の話なんて、聞かせられるわけない。

そこであたしは、ケータイを胸ポケットから取り出した。真紗耶さんになら、この心のモヤモヤを心置きなく話せるだろうから。

あたしはドアの前に崩れ落ちたまま、ポチポチ、と寂しい音を部屋に響かせだした。

「ねえ真紗耶さん、ちょっと聞いてよ。ウチの親つたらりも「サイテーだわ。あたしの友達にリタリンとかいう薬を飲ませろって言うのよ? 友達が少ないと、それだけで病気なの?」冗談じゃないわよ!」

【Massayasu viewpoint】下水道にて（前書き）

すみません、改訂しても改訂しても、この有様です。それほど昔の私が書いたものはカオス度がハンパないということですね。

【Masa ya - s viewpoint】下水道にて

「嫌あああーつ！ な、なんといつことを…」

「真紗耶！ こんな下水道の底で騒ぎなさんな」

「ああ柴門さん！ 柴門さん… これを、これをご覧になつて…！」

「何よ…？ ん？ ……な、なんだつていうのこれは！？ リタリン…巫彩つて子の友達までリタリンに！？ 真紗耶、すぐにリタリンを打たせないよう説得しなさい…！」

「言われなくともそうしますよ…！」

「おいおい、そんなに慌てて打つたら携帯が壊れるがな！」

煌びやかな街を生み出すために設えられた、腐臭漂う醜い下水道。そこに、いつだつて穏やかでない私たちの声が冷たく響き渡つてありました。

私は憤慨に震える指を、手探りの理性で動かし、巫彩さんへの返信を打ちます。

巫彩さん！ リタリンだけはダメです！

例え医者に処方されたとしても、絶対にそのお友達に打たせてはいけませんからね！

リタリンのせいで、私の幼馴染は人生を壊されました！

あれは使いよじよつては麻薬同然です！

私もね！ ある日バカ教師にリタリンを打たれそうになりましたよ…寸でのところで幼馴染に助けられましたがね！

それから、貴女のお友達が病気なら、私も病気といつ事になつてしまりますよ…

はははははははははははは…

すると意外にもすぐに、巫彩さんは返事を下さいました。恐らく、家にお帰りになつたのだろうと、私は直感しました。部屋に居れば、

常にネットを見ていられるわけですか。

わかったから！ ね！？ あたし、彼女にはリタリンを打たせないから！

だから落ち着いてよ。

変なことを言つてごめん。リタリンって恐ろしいものなわけね？ でもさ……

真紗耶さん、あんたが心の闇の部分を私にさらけ出してくれて……：嬉しかった。

生まれて初めてかも。こうやって、誰かに強い口調で何かを諭されるのつてさ。あたし、ほんとの両親にも義理の両親にも、一度も叱られたことないしねー。

クラスメイトも、あたしに怯えてるのか、妙に大人しいし。なんか嬉しかったわ。ありがとね。

それを読んで幾ばくかの冷静さを取り戻した私は、改めて冷静に、事情を話そうと思いました。

巫彩さん、さつきは激昂してしまつてすみませんでした。

ですが、敢えて昂つた私の感情をそのまま書こうと思つたんです。あれはそれだけ恐ろしい薬ですので。

しかし変ですね。

リタリンはかつては、確かに鬱病や対人恐怖症なんかに処方されていましたが、

現在ではその危険さゆえ、あるいは麻薬代わりに利用する人が後を絶たなかつたゆえ、

とつぐに規制された薬なんですよ。

現在ではもっぱら、ナルコレプシーにしか用いられていないはずなんですが……。

そのメールへの返信には、しばしの間がありました。

遅れて「ごめん。リタリンのこと、今ケータイで色々調べてたのよ。確かに昔は、鬱病や引きこもりの人に処方されてたみたいね。でも、処方された人たちがことごとく体をぶつ壊してる……。なんであたしの義母つてば、こんなもんを朱音に飲ませようとしてるのよ？」

朱音つてね、母親と二人暮らしなんだけど、

その母親つて人が、いい人だといいんだけどね。

いくらあたしの義母がリタリンを飲ませようとしたって、母親が反対すればそれまでなんだからさ。

できることならばいつまでも巫彩さんと話してみたいところでしたが、ここは下水道。しかも隣で膝を抱え、時折あてつけがましくアクビをしたりため息を突いたりする彼女の手前、次を最後のメールにしようと、そう決めた私でした。

お母さんと二人暮らしの状態で、

お母さんが彼女にリタリンを奨める可能性があると「うその状況！ とても怖いです。

どうかどうか、自分を大切にしろと言つてあげて下さい。お願ひします。

今の彼女のその状況で、彼女を守る事が出来るのは、彼女自身しか居ないのですから。

では今日はこの辺で。ありがとうございました。

ところで、巫彩さんの文章を見て、特に何の変哲もない女の子の話し言葉だと感じる人は、ネットを良く知らない人でしょう。そしてネットに詳しく、なおかつそれなりの知性を持つた人ならば、彼

女の文体に多少なりとも驚くことと思われます。

すなわち、一度も顔を合わせたことのない相手と文字で会話する場合、あのような話し言葉を使つことはまずありません。そう、ネカマでもない限りは。

私の心は今、これだけ生氣あふれる文を書く巫彩さんには囚われております……そしてその理由に、私は薄々気づきかけています。すなわち、私はシャフリヤール、巫彩さんはシルカラザード……

暫しの間、私が携帯電話を打つ音だけが淡々と響いていた下水道。その沈黙を今、

「おーい真紗耶くんよーー、いつまで巫彩ちゃん喋くつてんのー？」「んな下水道の底でさあ……。リタリンやめりつて言つてからずいぶん経つてるお」

などと、彼女の甘く明朗な声が破りました。

向日葵のように明るい美顔を、肩まで届く優美なセミロングヘアが縁取る……その様を懐中電灯の光がぼんやりと映し出しています。

ほんの少し肉付きが良いせいで、その朗らかさがいつそつ際立ちますが、この暗さでも、そんな彼女の『適度に艶美な』輪郭には心惹かれてしまします。そう、もう十何年もの付き合つてになるにもかかわらず……。

少し気取った笑みをこしらえてペコリ、と横に座つた彼女に軽く頭を下げる私。最初は戸惑つたこの長い髪も、今では完全に我が物となり、こつして顔を動かす際も重く感じじる」とはなくなりました。

私は河東真紗耶、そして柴門志穂が彼女です。

下水道の底で体育座りをする私達。これをもし写真に撮つて逆さにしたなら、一匹の黒い蝙蝠が天井から吊り下がつているような図になることでしょう。

といつのも、私達は同じ格好をしているからです。

「それにしても成長しませんね私達。今でも柴門さんが通つてた高校の制服を着れるなんて」

「はは、そりや、《こんな生活》してりやあ成長もしないつて。私たちの心は永遠に17才のまんまー。けど真紗耶も物好きね、いくら私が他に服が無くつて制服着てるからつて、自分で…もしかしてコスプレ好き?」

いつもながらの彼女の諧謔的な言葉に、いつもながらやはり少しイラつく私。

「いいえ、わかるでしょ? 私が何もかもを貴女と同じにしたい気持ち……」

まるで本当の女のようになんとなつた私を、柴門さんはちよつぴり困つたように温かく笑いました。

「はは、『じめん』『じめん』笑つていた柴門さんは視線を私から逸らし、何ともメランコリックに膝を抱えます。「あなたの口からね、その言葉をまた聞きたかつたの……」

「柴門さん……」

柴門さん… などと慕情に満ちた声を隣の女にかけながらも、私は巫彩さんから次なるメールが来ていなか、確認してしまいます。

惚けている私を、隣の柴門さんがジトーッと見つめているのに気づいて、私はハッと目を覚ました。

「あー すみません柴門さん!」

「ふつ、もう慣れた」

とりあえず巫彩さんに關する話はここまでにしておきましょ?

さて。私が17のよつに蒸し暑い場所においても上着を脱げないのは、一つには、《この姿》になつた途端に寒がりになつてしまつたといつものあります……。小さい頃は、真冬でも半袖で暮らしていくくらいいたのに。

「けど柴門さん、よく私が性転換してこんな姿になつても、私への

接し方を変えないとおもいましたね

今度は私が柴門さんをイラつかせます。もちろん、私も故意に。「わかるでしょ！？」少なくとも私のあんたへの気持ちが、愛だの恋だのじやあないつてこと」

「すみません。貴女の口から、またその言葉を聞いたかつたんですね

……

さつきのしかえしをする私。ところが柴門さんは私の意図などとつぶに気づいていたらしく、私のほうを向いてほんの少し微笑むと、すぐに前を見て真顔に戻ります。

「ふつ、私には、いつもいつも付き合つてる男が居た。でも、どれもこれも簡単に激しく燃えて、そのくせすぐには燃え尽きちゃった。で、私にとつての最後の男は、これか……」

柴門さんは私の黒い上着をめぐりました。そこには黒く変色した血液の付着した、柴門さんと同じ形の白いブラウス……私が上着を脱げないのは、まさにこのためです。

「柴門さん……」

柴門さんがその人生において最も凄惨な場面に着ていた服を身に纏つて私は……。

「真紗耶、私たち、蝙蝠になっちゃったのよね。あんたは、学校やめた時に、そして私は、奴を殺」「柴門さん……」

柴門さんの言葉を咄嗟に遮つた私を、

「ははーん、壁に耳あり障子にメアリーってか」

ど、気さくな邪悪さで優しく嘲笑する柴門さんの、その高貴な諧謔性……それは陶酔とか眩暈を通り越して頭痛や吐き気すら催すほど。どんなに軽妙な言葉を発そうと、どんなに蓮つ葉な態度をとろうと、この人の身体は、常になにか近寄りがたい、貴族的な優雅さに覆われているようだ……、私は常日頃、緩い畏れから開放されることがなく彼女と過ごしているのです。

さて……

「そろそろ出ましょうか。もう大丈夫でしょ？」

私が今になつて、なぜ自分たちがこんな下水道に居たのかを思い出すと、柴門さんはこの頭上を何度もゲンコツで軽妙に叩いてきます。

「とつくに大丈夫だろーさ！　あんたがネットばっかりやつてるから、隣で私は宇宙一無駄な時間を過ごしてたのよ！？」

「柴門さんもケータイでネットやつてれば良かつたじゃないですか」私の軽い言葉に「けつ！」とそっぽを向く柴門さん。ヤミロングの髪が蝶の羽のように舞います。

「私ネット嫌い。あんただつて……『あの人』、ネットのせいに自殺未遂を」

「言わないで……お願い……『あのこと』には触れないで……」突然、両耳を両手で塞ぐ私。柴門さんは暫く唾然としましたが、やがて気さくに話題を変えました。

「……結論！　私たちいな素晴らしい人間にネットは相応しくないつ……」

長い付き合いになる私だから分かる事ですが、、「冗談めかしているとはいえ、恐らく、今の言葉（私たちいな素晴らしい人間）は柴門さんの本音でしょう。そう、決して冗談などではなく。

嗚呼、嗚呼、もしかしたら、柴門さんのそうした気質が、あのような悲劇を招いたのかもしません……。

少し声のトーンを落とす私。

「柴門さん、ごめんなさい。リタリンを打たれそうになつていた巫彩さんのお友達が心配で……」

リタリン……その四文字が再び出た途端、まるで諧謔といふ名の仮面が剥がれるかの如く、柴門さんの表情がシリアルスになりました。それはあたかも、朗らかに咲いていた向日葵が突然の雨に打たれ、さらに一瞬のうちに真夏が真冬に変わつて凍つた花と化すように。

「そうよね……全く厭な話だわさ！」

私は朱音さんという人の置かれた状況に気が遠くなり、嫌らしい曲線を描く自らの太股に顔をうずめながら話します。

「リタリンの恐ろしさは、あまり知られていませんからね。テレビもネットも、オタク批判だの芸能人のスキャンダルだの、やつても誰も救われない事に精を出していますけど、もつと、伝えるべき事が幾らもあるでしょうに」

私は日本のマスメディアを憎まずにはいられません。柴門さんの負った不幸の原因は、リタリンそのものというより、その怖さを全く伝えてこなかつたマスメディアにあると思うからです。リタリンによつて人生を壊されていく人は十年も前からたくさん居たのに……。

「つ、日本のジャーナリズムのへタレッぱり！ そのせいで、そのせいで果音様かおんたちも私も……！」

「柴門さんっ……」

ただただ柴門さんの肩を優しく撫でることしかできない私だったのです。

さて、暫しの間いたわり合つた後、私は梯子を上り、マンホールの蓋を開けて辺りを見回しました。

「大丈夫みたいですよ柴門さん」

「そ？ ジャ、地上に這い上がりますか。おっと真紗耶真紗耶、変装変装！」

「あ、忘れてました」

「忘れんな。命に関わる」

私達はサングラスを忘れずにかけました。

「ふう、夜じや夜じや 私らの行動時間だあ！」

「こんなところまで蝙蝠と同じとは……」

と、すっかり辺りが暗くなつたことに安心しながらも、少し距離

を保ち、やはり早足で忍ぶように歩く私達。決して寄り添つて歩くようなことはしません。一人バラバラなら《気づかれない》ものも、

二人一緒だと背格好から《気づかれてしまう》恐れがあるため。

ふと私は、街路樹と街灯に挟まれたベンチに腰を下ろします。

「ちょっと真紗耶、なにを呑気に…」

危なつかしいわねえと言わんばかりの怪訝顔で、しぶしぶ柴門さんは私の隣、ではなく、街灯を隔てた隣のベンチに腰掛けました。そして、わざわざ携帯電話で話す私たち。

「柴門さん、善良な動物の群れに見えますね。黄色や、白の動物。その中に、何匹か赤い動物が混じっているんです。仲間を喰い殺して、返り血で真っ赤に染まつた羊が……」

「てか、それ私のことだけね…… Red ram、逆さ読みすると、Merder」

電話から響く柴門さんの声のトーンが別人の声のように低くなっています。私はいたたまれなくなり、電波を経由しなくとも聞こえるほどに強い口調で訴えます。

「いいえ？ 柴門さん、貴女は逆に白い羊ですよ？ 私の比喩は、人を殺したか否かの件ではありません。今の弱肉強食社会のことを言つたんですね。貴女は寧ろ、喰い殺された側でしょう…」

「真紗耶ありがと。さて、今日も儲かつたし、そろそろ帰るとするか。《追っ手》らしい奴らに出くわした時はビビッたけど、何とか下水道に隠れて逃げ切れたし。何とか今日も、無事に終わったね」

いつも帰る時間になると、柴門さんの顔色がブラックパールのような冥^{くら}い輝きを放ちます。無駄とは思いつつも、優しく説得を試みる私。

「柴門さん、やはり貴女、本当のお母さんの所へ戻ったほうが……。

お母さん、ビラ配りしてまで貴女を探してるじゃないですか。そのお気持ちを考えると私は……」

「真紗耶、何のために私が家を出たと思つてる？ 私のせいで疲れきつたお母さんの顔なんか見て暮らしたくないからでしょ。ずっと

前にもアンタには言つたけど、私がRedramになつてから、お母さん、異常に私に気に遣つようになつちやつて。《何とか普通に娘と接そつ》つて必死なのが見え見えで痛くて……。ねえ、Redramになつたことで、私つて私じゃなくなつちやつたの？」

「いいえ。古い付き合いの私としては、柴門さん、貴女が《ああなつた》のは至極自然な事だと思いましたよ」

「でしょ？ 結局、私を解つてくれるの、真紗耶だけだった。で、逃げるように《あの校舎跡》に駆け込んだのよね。それがこんなことになるなんて……」

《あの校舎跡》とは、現在、柴門さんが暮らしている家のこと。当初、柴門さんは住み込みといつ形で、あそこへ逃げ込んだのです。

……あの場所の事を思つと、やはり私は、本当のお母さんの所へ戻つたほうがいいという想いをいつそう強くします。

「柴門さん、貴女の気持ちは解りますが、貴女を失つたお母さんはもつと疲れた顔をしてると思いますよ？」

「だから、お母さんの気持ちなんかどうでもここ。私が見たくなつの、つらいから。お母さんにほいつまでも、あの年齢不詳な若々しい女で居て欲しかつた。その輝きを喪えさせた原因が私にあるわけだから、どうしても、一緒に居るとなつらくなるのよ」

実際に柴門さんらしい回答… 私は柴門さんらしい言葉をもつと聞きたくて、更に彼女を突つついてみます。

「それなら、私がお母さんに会いに行つて、もう娘を探すのはやめて自由に生きて下さって説得しましようか？」

「ダメ！ お母さんが私のこと忘れるなんて耐えられない！ 今までいいの……」

これはまた自己中心的な考え方。《お母さんが苦しんでいる今のこの状況のままいい》と言つているのです。しかし、柴門さんがこういう人でなければ、私はこんなにも柴門さんと親しくはなれなかつたでしょ。

「やつですか…分かりました。もう、余計なことは言いません」
「」で、《少しば人の気持ちも考えなよー!》と言つのが普通の友達。私がそれを言わないという事を知つていて、敢えて柴門さんは自分の脆い面や汚らしい面を見せびらかしているのでしょ「。例えば、そり……

「言つてよ、余計な」と。たまには突ついてくれないと、寂しい「こんなふうにね。

「ふふふ、了解です。では、ここで…」

「うん…」

私達は電話を持ったまま、別れの挨拶を交わします。

「また明日」

「うん、明日も私が生きてたらの話だけどね…」

「柴門さんっ！」

「はは、冗談冗談じゃあね」

そしてそのまま顔も合わせず、家路につく私達、の筈でした。

次の瞬間！ 豊胸によつて異様に膨らんだ私の胸の下に、慣れ親しんだ柔らかい腕が。

「柴門さん…」

「真紗耶、私の無事、祈つててね…」

「どうかどうか今日も「無事で…」

暫く一人で涙した後、私達はそれぞれの家路につきました。我が子を戦へ送り出す親の気持ち、それを私は毎日こうして味わうのです。戦という表現は大袈裟かとは思いますが、命の安全が保障されていらないという意味では、戦場も《あの家》も同じこと。

腕を離す瞬間、柴門さんは声にならぬ言葉を発したよつと思えました。はつきりとは聞き取れませんでしたが、敢えて言つなれば、それは私にはこう聞こえたのです……

「これが、これが私の受けた罰なの？」

柴門さんが『あの家』（尤も、あれが家なのかどうかは判りませんが）で今日はどんなふうに過ごすのか、それを考へると気が重くなります。ですが、その分、一人になると気楽に歩けるようにもなります。片方だけになれば、『追つ手』に気づかれる確率も減るでしょうし。ですがそんなものは私の気休め！ 一人だらうが別々だらうが、気づく者は気づく…嗚呼！

延々とそのようなことを考へながらも、私は無意識の内に横須賀線や京急をはじめ幾つかの列車をひょうひょうと乗り継ぎました。何年もの間、いつもして同じことをしていると、京急などの列車が全て、自分の第一第二の家のようと思えてくるから不思議なものですね。

そう、私と柴門さんがいつも通つてているのは主に横浜近辺なのです。とりあえず、『あれ』が一番よく売れるのが、横浜の裏町であるということだが、今までの経験で判りましたし、東京は私も柴門さんもそこはかとなく苦手です。

但し、私がこんなにも朗々と街を歩けるのは、柴門さんの温もりが体に残っているからなのでしょう。そもそも私は、あのトラウマから、怖くて出歩けはしないと思います。

柴門さんの温もりがトラマナになつていてるからトカウマが中和される…（ 、 、 ）ナンチテ

などと、このように心の中で駄洒落をかわす余裕があるのは、私が巫彩さんや柴門さんに比べたら、ずっと幸せな人間だからといえるでしょう。なぜならば、私にはいつもして帰る場所がきちんと存在しているからです。

無論、私がここでいう『帰る場所』というのは精神的な意味であります。巫彩さんの義母という人は我が娘の心を微塵も理解しておられないようですし、柴門さんは……、いつもいつもあの地獄へ帰つて行くのですから。

江ノ電・柳小路駅を降りてたどり着くのは、江戸情緒あふれる閑静な街。

のれんやすだれ、和風な観葉植物などが並ぶ、無限に続くかとも思えるような路地 その複雑な迷路のなかでも一際異彩を放つ、瓦の付いた塀に囲まれた大規模な日本屋敷、それが私の家です。私がガラガラと『城塞』の門を開けると、

「あら真紗耶、今日は遅かつたのね」

桃色の立派な着物を身に纏つた母・河東禱里^{かとう·いのり}が心配そうに、障子を開けて顔を出しました。障子を開ける無機質な動作をはじめ、直ぐ隣の障子紙と保護色の肌、その白色を反転させたかのような漆黒の長髪、何もかもが命を吹き込まれた市松人形のようで、この世に産まれた時点から一緒に居るにもかかわらず、私は今なお彼女の持つ怪美な雰囲気に圧倒されそうになります。

「お母様、ただいま帰りました。途中、追っ手らしき者に見つかりそうになつたもので」

「まあ……とにかくお入りなさい」

「お邪魔します……つて自分の家でしょう！」

『お入りなさい』などと言われてしまつと、つい……。

柳小路特有の古雅な風が吹き抜ける庭園を歩き、そして玄関へとたどり着くわけですが、その間、屋敷全体に響く獅子おどしの音が五度か六度、この耳を潤します。

そこから、木々や植え込みの葉々が石灯籠の光によつて神秘的に照らされるさまを一概に見渡せる、屋敷の外側を囲む廊下を歩き、母の部屋の障子を開けました。

「お母様、どうです？ 良い人形、出来ました？」

母はこう見えても、特に硬い人間ではなく、寧ろ、

「うーん、もうそんな気持ち無くなっちゃった。施設に居た頃はね、お人形さんの形が出来上がつていくのにドキドキしながら拵えてい

たものだけど、それをビジネスにしたら……」

などと甘い声で囁くような人です。どこか浮世離れした、良い意味で世間知らずな雰囲気は、幼い頃から思春期にかけて施設で育つたという生い立ちのせいもあるのかもしません。

「まあ、そんなものですよね。日本人って、自分の好きなことを仕事をするのが理想って考えるみたいですが、そうすると、趣味が義務になつて、義務が苦労になつてしまつ。あんまり無理しないで下さいね」

たかがそれだけの気遣いの言葉にも、母は嬉しそうに微笑んでくれます。但し、やはりそれも人形がメカニカルに表情を変えるように。

「ありがとー　　あ、夕ご飯、なにがいい？」

「えーとね……」

「ごめんね。私、『えーとね』は拵えたことないから……」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

「『そういう意味じゃなくて』ってそれも拵えられないのよ。ごめんね」

どこかズれている母。いわゆる天然です。『大きな家+人形』といふと、おどろおどろしく厳格な印象があるのですが、実際はこのように、今どき珍しいくらいに穏やかな家なのです。

この母でなければ私は、今まで生きてこられたかどうかは、判りません……。

「お母様…いつもありがとうございます」

「あら、どうしたの急に?」

「…いえ。あ、夕ご飯、もつ鍋がいいです」

「わかった。昆虫鍋ね?」

「え…!?」

柴門さん、どうかどうか今日も「無事で…」

真紗耶の言葉を胸に抱き、重々しい気分で家路をゆく私。ともあれ、真紗耶の温もりがトラマナになつてゐるから、私は今日もあの妖魔の家へ帰ることができるよう。

真紗耶は子供の頃……もうそれはそれは面妖な人生を送つてたと
いうのに、ああして私を慰めたり励ましたりする優しさと「うか余裕を持つていてるのだから、まつたくもつて不思議なもの。

恐らくは唯一の家族である禱里ちゃんがああいう人だからでしょ
う。今も昔も、真紗耶のようなタイプの子供は親からは距離を置か
れてしまうという哀しき定めを持つてゐる。ちょうど、巫彩ちゃん
のお兄さんとかいう人がそうであつたよ。

そして私の場合は……これが良く解らないのである。私がレッド
ラムになつてから、母は明らかに私への態度をガラリと変えたけれ
ど、あれは虐待されるに等しく　とにかく私は母の元から逃げ出
したかつた。そしてしばらく母の元から離れる、もう母の元に帰
るのが億劫でしかたなくなるようになつた。敷居が高い、というや
つだ。

さて、いつもながらに私は、まつすぐには帰れない。
なぜつて……怖いから。

まるで、学校へ行かずに街を学ランでウロつく不良の如く、ブラ
ブラとあてもなく彷徨つて気晴らししてから帰る。今日は手近なゲ
ームセンターに駆け込んだ。

ところが、『どれだけ客から小銭をかき集められるか』それがこ
うした小便臭い施設の狙い。私はゲームに熱中してヤケクソになり、
時間を忘れて様々なゲームを興じてしまつた。

「こんな畜生！　いいことなんか一つもないよー　けつ！」

などと誰にともなく暴言を吐き、ゲーセンから出ようと出口付近に刺しかかったときだつた

不意と、背中に得体の知れない嫌な視線を感じて振り返る私。そこには、オタクふうな男達がニヤニヤしながら私の体を舐め回すように見つめていた。

まさか、こいつらが追っ手……！？

私は失禁しそうになりながらも、足が千切れても飽きたらないほどの勢いで逃げ出した。私の美質に見惚れてこっちを見ているだけなのか、それとも追っ手なのか、その見分けがつかない。

そう、私と真紗耶は、追っ手の顔を知っているわけではない……。

私は走つた。ビュンビュン追い抜く街の光はネガのようだけれど、口マ通りの速度は次第に遅くなつてくる。あの家に近づくにつれ、どんどん人工物が少なくなつていくから。

走つて走つて、私は家の付近まで辿り着いた。この辺りは本当に誰も寄り付かない。鬱蒼とした森に囲まれた、田んぼの跡地ばつかりの暗い場所。もうどこに痴漢やら通り魔やらが潜んでいるか判りはしない。

空気が……とても澄み切つている。それはもう、怖いくらいに。

そういうえば、実家から逃げ、ここへ来て間もない頃は、この空気に大きな安らぎを感じたものだった。ところが今はこの澄み切り具合が逆に、崩壊したあの家の冷たさを不気味に演出する結果となつてしまつている。

そして、……着いてしまつた。真紗耶の家同様、城壁に囲まれているとはいゝ、こちらの壁は悪魔の城を想わせる錆びた鉄柵。以前は白く塗られていて、それがヨーロッパ的な優雅さを醸し出してたけれど、今ではそのペンキも完全に剥がれ去り、元から黒い柵だ

つたように見えてしまつ。

安手のホラー 映画のような音を立てる門を開けると、いつも必ず手が少し黒くなる。

門をくぐつてまず目に入るのは、月光によつて不気味に照らされる大きな造花工場の残骸。廃墟なんていうレベルじゃなく、もう完全に瓦礫の山だ。この工場跡を含め、鉄柵の内側の土地は全て、今ここに住む主あぶらじが買収している。

いつも私はここでしばらく、しゃがみ込んで目を閉じ、手を合わせる。

「あなたたちは何と運の悪い人間なのだろう。あなたたちがあの世で魂の平安を手に入れることを望むことしか出来ないこの私を、どうぞ、どうぞ、お許し願いたい。けれどもあなたたちはこの腐敗した現世とは既に無縁の存在となつていて。どうか、どうか、これから何十年にも亘りこの現世にて生きていかねばならない私をお守り願いたい」

などと、そのような想いを込めながら。

手を合わせていると突然！

『家』のほうから派手にガラスが割れる音、そして即座に、機関銃のようなけたたましき打撃音を立てて人が走る音が響いた。

「また…か」

私は独り言を呴き、暫し沈黙した後、沈鬱きわまりない歩調で『家』へ向かい、大きなガラスの入口を開けるが、この瞬間はいつも、木が腐つた臭いが鼻から肺へ入り込んでくる。元々この建物は校舎で、あの残骸になつた工場は校庭だつた場所に建てられたものだ。

校舎すなわち家に入ると同時に、私はいつもポケットから財布を出す。中身を確認すると……なんということー 私はゲーセンで、

無意識の内に稼いだ金を半分くらい摩つてしまつていたらしい。

恐る恐る、ギシギシと音を立てる木の廊下を歩く。妖しい月の光が、廊下のいたる所に張られし蜘蛛の巣を微かに輝かせ、またあちこちが落とし穴のように剥がれた木の床をぼんやりと照らす。

ここは南棟の廊下であり、教室への扉が並んでいる。私の部屋も元は教室だった場所だ。その私の部屋まで、一メートル。

そして廊下の中央に、北へと続く通路がある。その先はもちろん北棟で、音楽室とか理科室への扉が並ぶ廊下がある。そしてそこには、この建物が学校だった頃、《開かずの間》と呼ばれていた部屋も……。

今、ポーランドの牛車^{ハイドロ}の如き轟音を立てた後、バン！と閉まつたのは、まさにその開かずの間の、重々しき横開きの鉄扉に他ならない。

そしてそして、それに続いて、ギシッ、ギ、ギシ、と、疲弊しきつた足音が聞こえた。財布を廊下に置き、部屋へ逃げ込んでしまおうと思つたけれど、なぜか足が動かない。私は、果音^{かおん}の顔がどうしても一日に一回は見たいのかもしれない……。

立原果音とは、この土地を買収した女のことであり、まさにこの家の主に他ならない……。

枝分かれした通路から戸口戸口姿を現すと、果音はボロボロになつていた。この暗さでも、服のあちこちが裂け、腕に幾つも生新しい切り傷をこしらえているのが判つた。

美しかつた筈の長髪は山姥の如くボサボサになっており、微塵の優しさも人間味も宿さない無慈悲な瞳が、月光によつて怜悧に光つている。

果音は私に気づくと疾風のよつに駆け寄つて来、私が手に持つた財布を強引に奪う。

そしてその中身を確認すると即座にこの頬へ平手を飛ばしてきた。

冷たい打撃音がこの腐った空気を切り裂く。

軋む木の床に叩きつけられる私。そのまま床を突き破るほど勢いで！

震えながら倒れていると、女王が奴隸を鞭で強打するような音と共に、私の体に幾重にもわたり鋭い衝撃が走る。

恐らく素手で殴られているのだろう。果音の力の強さには異常なものがあり、この痛みは鞭で打ちのめされるに等しい。

あまり体に痕が残ると困るけれど、果音は私がああいう稼ぎ方をしているのを知つていて、敢えて大事な部分は殴つてこなかつた。

「ごめんなさい…明日からは…ちゃんと稼いできますから……」

倒れまま上田遣いで果音に訴える、そんな私の消極的な態度が果音をカツと逆上させたのか、

「つ……！」

今度はお構いなしに足で袋叩きにしてきた。

足蹴にされるたび、私の体がこの軋む廊下に埋まつていいくような錯覚にとらわれる。

嗚呼、これは埋葬の儀式か！？ 理に適う金額を稼いでこなかつた私の罪は死をもつてしか償えはしないといつか。

私は舌を噛んで痛みに耐える。舌の痛みで体の痛みが和らぐからだ。やがて暴行に飽きたと、果音はお金を持って開かずの間の近くにある音楽室へ戻つて行った。

「巫彩、これは何ザマス？」

プラスチックの臭いしかしない白い台所。あたしは義母に、リタリンの危険さの書かれたサイトを印刷した紙を無造作に差し出していた。

「リタリンって、もうお蔵入りになつた薬だつてこと」

義母は手渡された文書に目を通すと、文書を投げるようテーブルに置き、自らも後を追つて投身するようにテーブルに伏した。

「そう。そういうことザマスのね！ PTAの仲間が、かつて不登校だった子供にリタリンを飲ませた経験があると言つていたザマス。だからその狭山朱音つて子にも飲ませれば解決できると思つたザマス！ ああ、もう嫌！ もう、何もかも面倒くさいザマス……。リタリンを打たせれば解決すると思いましたのに！」

と、そこで台所奥のリビングから義父の声が響く。

「ハツハツハ、それならば巫彩にはその狭山朱音とやらとの縁を切つてもらうしかないようだな！ ハツハツハ、コレラやインフルエンザと同じだ。友達も作ることができぬ出来損ないと共に居ては、ハツハツハツ、巫彩、お前まで出来損ないに等しくなつてしまふ！ 大丈夫だ、ハツハツハツ、親同士の繋がりを利用すれば、いくらでもお前に友達を紹介してやれるからな。ハツハツハツ」

壁をくぐつてリビングへ駆け、ごわごわしてキモチワルいソファでくつろぐ義父を見下ろす。

「お父さん！？ 冗談じやないわよッ！ あたしはあたしが好きな相手とだけ付き合つ！ 友達つて親に決めてもらうものなの！？」

「つるさいなあ。ハツハツハツ。親の言つことを聞かない子供は子供じゃない。ハツハツハツ、あまり聞き分けが悪いと、施設に入つてもらうぞ！」

義父が笑いながら宣言すると、あたしに次いで義母も「つちへ駆けてくる。

「まああーっ、アナタッ！ 施設はダメザマス！ そんなことをしたらワタクシたち、『引き取った子供を施設に入れた冷酷な夫婦』という烙印をおされてしまうザアマス！ それでなくたってアナタ、やつと木泊のことの痛手から立ち直りつつあるというのに……」

「面倒くさいなあ……ハツハツハツ！ それより巫彩、お前ももう中学一年生か。ハツハツハツ、なかなか女らしい体格になってきたものだな。ぐびれも、健康的な肌の色も、実に綺麗だよ、ハツハツハツ」

義父は笑いながら、あたしの全身を嘗め回すように見つめてきた。ぞくぞくと、あたしの心に得体の知れない嫌悪感が襲いかかってくる。

「い、いや……いやっ！」

そしてまたさつきと同じように、部屋に駆け込んで籠るあたし。もちろん、できるものならあの義父を背負い投げでもしてやりたかった！

でも、それをしたらどうなる？ 多分あたしはここを追い出される。そして転校にでもなつたらあたしは朱音を守れなくなる……。

あたしは朱音のためだけに、この義両親には『強く出ない』ことにしているのだった。

あたしはドアの前に崩れ込んだまま……

「紗那……眞子……真紗耶……さん……」

自分の心を理解してくれる人たちの名前を呟く。
会つてみたい。真紗耶さんに会いたい。

朱音はおろか、紗那も眞子も、あたしはあの両親の監視下で付き合わなきやならないわけで。そんななか、唯一誰にも知られない関係を築きたい……

あたしは引きずり込まれるように眞紗耶さんのメールを読み返し

た。彼が会う場所として指定したのは、兄さんが暮らすあのバー。
その名は Sweet Season 甘い季節、か。

「真紗耶、もうすぐだからね」

「ゆっくりでいいですよー…」

私が『もつ鍋』と言ったのを『昆虫鍋』と勘違いした母。味見をする表情が穏やかです。

「ウンウン、完璧ね 真紗耶、できたわよー」

お鍋を置いたテーブルに90度の形で座る私と母。私は母のこの怪美な姿を見ながら食事は出来ませんし、母も性転換によって妖艶に変貌した私を見ながら食べるには気が進まないのでしょう。

「いただきます」

明るく食べ始める私を、なぜだか心配そうに見つめる母。

「ねえ、大丈夫？ 志穂ちゃんに巫彩ちゃん」

「ん、どうして急に改まって彼女たちのことを？」

「えー、真紗耶が明るく『いただきます』って言ってるの見たら、何だか哀しくなってね。彼女達は、こんなふうに明るくタジ飯が食べられるのか、って」

食べながら話すには重過ぎると感じ、私は一旦、カチッと箸をポン酢の入った小皿に置きました。

「うーん、どちらかといつと、柴門さんの抱える問題ほうが深刻かもしれません。なぜなら、すぐにでも命に関わるからです。でも、柴門さんのほうはね、私が毎日、じかに会って様子を訊くことが出来ますから、場合によつては、私が力ずくでも本当のお母さんの元へ引っ張つて行くことも出来ますし。けど……」

私が口籠つたわけを母は直ぐに察してくれます。

「うん、巫彩ちゃんとはなかなか会えないものね」

「それが数日後、会う約束をしてしまつて」

何気なく言つと、カチン、と母が箸を置きました。その表情からもつこ一瞬前までの穏やかさが消え失せ、私を不安げな、けれども

なよなよと媚びるような瞳で見つめきました。

「巫^{ミツ}彩ちゃんとはお友達、よね？」

「そうですよ！ なに心配してるんですかお母様？ そもそも私は、柴門さんと共に『あんなこと』をして」

私が言い終わる前に、母はテーブルをドンと叩いて声を荒げます。それはあたかも、清楚な一抹人形に善からぬ悪魔がとり憑いたかのように！

「身体^{カラダ}だけの女なんて怖くないわっ！」

「お母様……？」

母は席を立つと、私の背後まで歩み寄り、この肩に腕を回してきました。それはもう、母親が子供を抱く動作ではなく、女が愛人を抱くような情念を含んだ動作で。

着物の袖がこの上半身を包み込み、とても安らかな気分になります。

「ねえねえ、真紗耶つたら、どうしてそんな美少女になっちゃったの？ お母さん、小さな頃の、女の子っぽい男の子なのか、男の子っぽい女の子なのか判らないような、そんなアナタが大好きだったのに……」

「お母様、私がこの世で愛しているのは……貴女ただ一人でござります」

とてもすんなりと、その言葉を吐くことができました。

母も私の言葉に欺瞞がないことを感じ取ったのか、それ以上の苦言は呈できません。

その代わり、その両手で私の肩をつかみ、戒めるような視線を私の両目めがけて放ってきます。

「もしも他の女の子に魂を奪われたりしたら、祷里、許さないから自らをその名前で呼ぶ母。

少々恐ろしくはありましたが、一日に三人の女性を味わえると いうのも悪くはない……

かつて私をあやすために子守唄を口ずさんだその唇に、私はそつと口づけました。柴門さんの力強く健康的なそれと違い、どこまでも柔らかく、そして熟れた感触……

「うふふふふ！ 冷めないうちに食べちゃいましょっ」

母はすっかり機嫌を直し、席に戻りました。この昆虫鍋とて恐らくは、私を欲情させるための道具に違いないのです。

さて、私の言う 三人もの女性 。一人は柴門さん、もう一人は母。そしてもう一人は……

世界で最も美しい、この私自身に他なりません。鏡の前にて自らを愛撫するのは、さしづめ私の口課のようなもので……。

【Massaya - s viewpoint】感想（後書き）

書いていて気持ち悪くなつてきました……。

【Shiori - s viewpoint】開かずの間

「柴門さん、来週は毎日、あのSweet season付近で落ち合いましょう。実は来週」

痛みと恐怖で眠ることすら出来ず、だだ広く真っ暗な教室跡で、ドアの前に膝を抱えて座る私。

そんななか、真紗耶からこんなメールが届いていた。そこには何と、巫彩ちゃんが会いに来るかもしれないということが書かれている。「うーん、どんな子だろう…？」

それはそうと夜にメールが届くのは本当にありがたい。凍りついた心に蠅燭の炎が燈るようで救われるからだ。この家は本当に、人類が全て消えてしまつたかのような静寂に包まれているか、あるいは暴力的な轟音が鳴り響くか……。そのどちらかしかないものだから。教室に置かれていた机がそのままになっているこの部屋……

ふと私の瞳は、規則正しく並んだ机の一つに置かれた、紅茶色の造花に焦点を合わせる。スズランの茎からバラの花をぶら下げたような作品で、しかも紅茶色。そう、造花なら、どんな姿の花も勝手に人間が考えて創造できるのである。

私はそんな造花が好きだ。なぜなら私はかつて、造花のような愛を真紗耶に与え続けていたことがあるからで、そのことがあるから、私と真紗耶の結びつきはこんなにも深まっているのだと考えられる。真紗耶は、自分が美女（自分自身すらも！）を偏愛するようになつたのは、自分の心の傷が原因だと思っている筈。もちろん、それもあるのだろうけれど、あれは殆ど、私が与え続けたその『造花の愛』に原因があると、そう思えてならない。

よりよろと造花の前まで移動し、しばしその人工美に見惚れていふと、ふと、私は思うところがあり、それを手に取つて部屋を出た。

そして、廊下の中央で直角に曲がり、北棟への渡り廊下を偲び足で歩く。この通路の正面に、《開かずの間》の黒光りする鉄の扉が、月光に照らされて微かに見えていた。

その扉は、この校舎のどの部屋の扉よりも厳重なものになつていて、内側からは決して開けられぬように果音が細工してある……。

しかしなんという悲運！ 開かずの間まであと一メートルといつとこりで、その直ぐ隣にある音楽室跡の扉から果音が出て来てしまつた！

「…………！」

果音は憑かれたような瞳でしばらく、私が手に持った造花と、開かずの間の扉とを交互に見つめると……

やがて断罪するかのように縦横無尽に平手を振り、私の頬を打つてきた。何度も何度も！

「い、嫌…………うわっ、ああっ、もうやめ…………て！ やめて痛い！ 痛いのおーっ！ 果音様あー…えぐっ…ああーっ！ あああーー！」

「…………！」

私は一日に一度もこんな日に遭う自分が哀れむのを、

とつとつと嗚咽して泣き出した。立つたまま！

やがてこの唇が切れて血が出ていることに気づくと、果音はどどめどばかりに私の手から奪つた造花を床に落としてギュウと踏みつけ、そして気が済んだように音楽室へ戻つて行つた。

けれども私の場合、小さな傷は大抵一晩で消え去る。果音のおかげで治癒力が鍛えられたのかもしない。

「巫彩、そのままいいから聞くべザマス」
義母がドアの前で呟く声に、あたしは淡くて小さな期待を抱く。
『そのままでいいから聞いて欲しい』その響きには、何かをあた
したいたいというニュアンスが感じられるから。思えば今まで、
一度もあたしに何かを訴えたことのない母だっただけに……
ところが……

「来週の水曜日、PTAの面々を集めてうちでホームパーティーする
ザマス。朝から晩まで楽しむザマスから、巫彩、貴女も学校から帰
つてから参加するなら、狭山朱音のことだけは億尾にも出さないよ
うに気をつけろザマス！ あんな問題児と付き合つてはいると知れた
ら、ワタクシの沾券にかかるザマスゆえ」

あたしは机前の椅子の上で片方の膝を抱えて座り、消しゴムを指
で無造作に弄びながら、無表情のまま呆れ果てていた。

同時にあたしは心に決めていた。その水曜日にこそ、真紗耶
さんに会いに行こう、って。

もちろん真紗耶さんに会つたからつてこのクソッタarena境遇が変
わるとは思えないけど、何かがそこから広がつていきそうな、そん
な、そんな淡い予感を心に抱きながら。

けれどあたしは知らなかつた。真紗耶さんが幼馴染と共に、底な
しの血の海を泳ぐような人生を送つてゐるんだということを。

そして……、真紗耶さんに近づくことで、あたし自身もその血の
海に足を踏み入れようとしているんだとこつこつことを。深くて、恐ろ
しくて、そして悲しい血の海に。

【M i s a e - s v i e w p o . n c t】 もれせかな希望（後書き）

第一章は「」で終わりです。お疲れ様でした。とこりかこんなもの読ませて、めんなさい。

【ストーリーライン】淫靡なる商売（前書き）

物語を改訂する場合、取捨選択が本当に難しいですね。正直、この一章にも無駄な部分は残つてしまっています。今回の改訂では、『削つたほうが一般受けするであろう部分』は敢えて残してしまつている感じです。『削らないと物語としての価値が下がる部分』はもちろん削除したつもりですが。

また『晩壓不~~堪~~』は架空のバーチャルアイドルユニットです……たぶん。特定のモデルなども、もちろん存在しない……と思します。

【Shinoh-s viewpoint】淫靡なる商売

柴門さん!? また何かあつたんですか!? 明日は日曜日です
か……大丈夫ですよ。さつき巫彩さん、メールで言ってたんですけど、私に会うのはどうしても水曜日がいいそうです。」

「それって巫彩ちゃんが会いに来るのが明日だつたら私の願いはス
ッポカしてたつて」とー?」

「いえいえ、もしさうなつたら、巫彩さんを連れて柴門さんとこつもの場所に…」

「へえ… やつやちょっと嫌かも。とにかく、畠田は止めにこいつの場所に来てよ~。」

「水曜日まではベッタリしますよ。」

「…………」私と真紗耶はメモリでこんなやりとりをしていてた

一日に二度も暴行を受けるのは初めてのことと異常に混乱しているから、私の文はこんなにも激昂している。散々酷い目に遭っている私だから、この程度の可愛いやがママを言つ権利は有り余つてゐるはず！

ところで私は見ての通り、メールの中にいわゆる顔文字というやつを全く使っていない。顔文字をふんだんに混ぜた文章は、もはや現代日本のキャラキャラした女の常套語で、例えば、

『こんばんは、柴門です。いま私には大好きな恋人が居ます。』
と、たつたこれだけのことを言うのに、

《「ン バ (*・・) 人(・・・*) バンワアーー！」

柴門】 D H 一彌(・・) いま (・・・) にわダイシヒ

(((*・・(・・・*)))) ううー！キな恋人タンが居ます(

つ、*) H ^》

……こんな面倒くさい表現をしなければならない。

一体なんのためにこんな回りくどい書き方をしなければならないのか理解に苦しむ。大方、《みんなが使ってるから》みたいな一種の惰性なんだろうけれど。

それはつまりは、最近の女の子といつのは、顔文字をふんだんに使わなければ《文章で感情表現》ができないということになる。文章というのは無限の可能性を秘めたツールで、やりよつによつては顔文字など一切使わなくたつてその人の心を表現できるもの。ところが最近の若者ときたら、顔文字にばかり頼つて、自分の文章を見つめようとしない。

そう……そう。心中とはいえ、私はもう 最近の若者ときたらなんていう言葉を使つような年になつてしまつていた。

閑話休題。だから真紗耶が、初めて巫彩ちゃんの文章を読んだ時に感激したというのも、大いに理解できる。使い古された表現だけれど、《今時こんな生氣あふれる文を紡げる少女が居たのか！》と、そんな気分だつたに違ひない。

さて、巫彩ちゃんだけでなく、今までその顔文字を使わない理由、それは、かつて真紗耶に、

柴門さん！ そんな下衆な記号を日本語に混ぜてはいけません！ そこいら辺の小娘じやあるまいし！

なんて叱られた事があつたから。私は上記のように元々、顔文字が面倒で嫌いだつたけれど、しばしば学生時代の名残で使うことがあつた。真紗耶はそれにいちいち反応して……あいつも結構、私に厳しく指図する事が多い。

さて 今はすみれ色の帳(じがた)が夜の闇を追い払う時刻。

私は俗に《お化けビル》なんて呼ばれる廃ビルの、コンクリの破片で散らかった屋上に座り込み、気の早い春空をぼんやりと眺めていた。こんな場所でしかグラサンを外して会つことが出来ない私と真紗耶を皮肉るよつに、空は早送りでその明るさを増していく。

そんな私たちに、《世界は広い。もつと大らかに生きる》などと説教をするのは實に無粋きわまりない行為！ 地球上のどこの間に屈ようとも、そこには既に《追っ手と化した輩》が潜んでいるかも知れないのだから。もう、どこの誰が追っ手と化しているか、本当に判らない……。

あーそれにしても……ム・カ・ツ・ク！
「遅いっ！？ 遅すぎるわッ！ 真紗耶の糞つたは何を燻ぶつてんのよ！？」

高さとしては十一階に相当する、この寂寥とした殺風景な屋上に、哀れな美少女の地団太が虚しく響き渡る。

多分、袴里ちゃんが守るあの家の居心地の良さのせい。私は逆に、あんな家（こうなつたら《あれ》が家なのかどうかという議論はやめにしましょ）で暮らしているから無駄に早い時間に家を出て来てしまひ。

いつしてぼんやり真紗耶を待ち忽けていた今にも、暗く乾いた声で、

おしほ、待たせてゴメン…

なんて、性転換する前の真紗耶が現れるよつな錯覚にとらわれる。

そう、そう、真紗耶は完全な女になる前、私のことを《おしほ》などと、下の名前に《御》を付けて呼んでいたのだった。

風雨にさらされて凸凹になつたコンクリに寝そべり、そつと目を開じると……ふふ、やはり今でも、私の目蓋の裏には昔の真紗耶が居る。

完全に女になる前の真紗耶には、一種奇怪な魅力があつたものだ。

元々あいつは女っぽい姿をしていて、年をとつてもすっとのままで姿でいられるよね、などと浮かれていたけれど、いよいよ鬱の濃さが尋常ではなくなつてくると嘆き苦しみ出し、そして女性ホルモン剤を常飲し始めた、といつ寸法だ。

私が物思いに耽つていると口食が起こつた。しかし太陽を覆い隠したのは月ではなく、見慣れきた真紗耶の顔……。

「ふふふ、私のこと考えてましたね柴門さん？」ニンマリと私を見下ろす真紗耶。

私は起き上がりつてその憎たらしい顔を睨みつけた。

「んなこたービーでもいいの！」けれど私は顰めていた顔を一瞬のうちに温かい笑みへと変化させる。「…おかえり真紗耶」いつもここで会うときは、先に来たほうが『おかえり』と言う事になつている。もちろん《そうしよう》と決めたわけではなく、自然とそうなつただけではあるけれど。

「ただいま、柴門さん…」

涼しげな美声でそう言い、私に静謐な微笑みを向ける、この真紗耶に魅力がないと言えば嘘になる。

けれど今の真紗耶。長い黒髪、豊満な肉体、適度に大きな瞳、それから華麗でありながらどこまでも日本の端正さを持つ顔立ちと、これは完全にあの二人組バーチャルアイドルユニット『晩壓不^{ばんあつひかん}垢^く』の『告^{いく}汚^{ごふく}』という子のレプリカだ。こんなふうに穏やかな顔をしているときも、常にその全身は妖しく黒光りしてくるようと思える。

バーチャルアイドルといつのは、主にネットにて、実在しない架空のキャラクター（主にアニメ系美少女）を、あたかも実在するアーティストのように活躍させるというもの。CDを発売したり、透明なスクリーンにキャラクターを映して（これがどんでもない現実感！）ライブをしたりもする。

ことに『晩壓不^{ばんあつひかん}垢^く』は今流行のヤンデレ（相手への強すぎる愛情

ゆえに心を病んでしまう少女のこと）を探り入れたバーチャルアイドルユニットとして一世を風靡しているもの。

「ねえ真紗耶、突然だけど、私、性転換する前のアンタも、結構タイプだつたりしたわけよ。ただ女になるだけでも良かつたのに、わざわざ真紗耶は《ついでに告汚飼の姿になりたい》なんて言つた。あれつてさ、私のせいよね。ごめん」

今更ながら説明すると、私こと柴門志穂は、同じく『晩壓不^カ』の『廉^{れん}坩^{かん}紡^{ぼう}弊^{へい}順^{じゅん}』と瓜二つの美貌を持つている。何もかもを同じにしたい私たちだけに、真紗耶が廉坩紡弊順の片割である告汚飼になりたいと願うのは、やはり私のこの姿のせいではなくなんのか。

立つたまま俯く私の視界の上側に、切なそうに首を横に振る真紗耶が映つた。

「いいえ、いいえ、あれは私の意志ですよ。元々私は、告汚飼が自分に見えて仕方なかつたんですよ。だから整形してもらつたのも、何か重大な想いがあつて…というようなことではないんです。どうかお気になさらずに」

「そつか、確かにアンタ、告汚飼に似てるもんね、その粘着質な性格」

整理しておくと、真紗耶がしたのは『性転換手術』ではなく、『女性ホルモン剤常飲』+『告汚飼の顔に整形』。実にお氣楽に女に変わることが出来たものだと思う。元々女っぽい姿をしていた真紗耶にだけ許される特権か。

真紗耶は実にあつけらかんかんとした私の顔を見て、酷く安心したご様子。

「でも良かつたです、柴門さん元氣そうで。ゆうべのメールを見たときは凄く心配でしたけど…ねえ柴門さん、《あの人》、また暴れたんですね？」

安心に満ちた会話にすぐ立ち込む黒い霧。私たちの会話には、しばしばこういう場面が見られる。

「うん……」

私はハツキリと頷いたけれど、それは私が嘘を言った事にはならない。

『果音が暴れて』私を傷つけたのだから。嗚呼つまり、つまり、真紗耶が今言つた『あの人』というのは……

「柴門さん？　まだ、痛みますか…？」

厭らしくいぐらい甘い声とグロテスクなくらい色っぽい歩き方で私に寄つてくる真紗耶。それは、いつもの白日夢の始まりを意味し……

……私は『気さくな女』といつ殻を乱暴に投げ捨てる！

「痛いの……痛くて痛くて死にそうなのよ真紗耶！　消えないの！　一日中、どこに居てもこの痛み、消えないの！」

演劇のように激しい身ぶりで嘆く私を、真紗耶は憐れみと母性を感じさせる表情で見つめる。……いや、いや、そうではない。憐れみと母性が入り混じっただけならば、こんなにも私の心に烙印の如く焼きつくような顔にはならないはず。

真紗耶は常時、その表^{おもて}つ面^{づら}の裏に何か別の表情を隠し持つてゐる。今この顔の裏にあるもの、それは

嘆きが私たちの結びつきを強くする　なぜならば私たちの嘆きは私たち以外の何者にも癒せはしないから　嘆けば嘆くほどこの私は、真紗耶の血となり肉となつてゆく　それをほくそ笑んでいる表情に他ならない。今まで私は、真紗耶の色んな顔を見てきたけれど、この顔は初めて見るものだった。

「あららら、可哀想に。どうして欲しいです？」

「舐めて……痛いとこ全部！」

私は何かに駆られたように、大きな四角い襟からぶら下がつたりボンを解き放ち、白いブラウスのボタンを外してスルリと肩を露出する。

ただし……真紗耶は脱いだ黒い上着を持った手で私たちの傍らに

置かれたビデオカメラのスイッチを入れることを忘れなかつた。

今日はいつもとは事情が違うのに……これが真紗耶という奴。けれども真紗耶は、どんなに激昂しても私の尻の辺りを触つてくることはない。これは真紗耶の趣味というより、気遣いである。私の心には未だ、『ある傷』が生々しく残つてゐるから……

数時間後、私たちは屋上に座り、ビデオに刷られた自分たちの行為を見返していた。

「これは高く売れるでしょうね」

「フヒヒヒヒ」

私たちがわざわざ制服姿で居るのも、まさにこのためでもある。制服プレイというのは世の変態男どもに大変な需要があるため。

「さあ、ダヴィングしますよ」

「OK～い」

私はバッグから小型ノートパソコンと小型の映像機材を出し、幾つものDVDにそれを移しまくつた。

「撮つてすぐに公開つて、韓国ドラマみたいですね」

「ヒフフフフ　これで今日は　殴　ら　れ　…」

……　口が滑つた。

「柴門さん？　この映像と貴女が殴られることが、どう関係あるんです？」

「あ、あー、そろそろ売りに行ひつかー…」

愚かな逃避策だと知りつつも、つい動搖して無駄な言葉を発してしまつた自分を悔しく思つ私。こんな誤魔化しがこの粘着質な生き物に通じる筈がないのに。とにかく真紗耶は、人が言つたことを聞き流すということを知らない。

「まだ昼ですよ？　それより柴門さん、この映像と貴女が殴られることが、どう関係あるんです？」

真紗耶の穢やかでない声が、この乾いた屋上に淡々と木霊する。

「…………」

「柴門さん！　この映像の売り上げと貴女が殴られる」と、ビックリした。「どう関係があるんです！？」

鶴のように鋭い表情で訝しげに、ぶつ壊れたレコードの如く三回も同じことを訊く真紗耶。ともあれ、その間に私は良い言い逃れ方法を思いついていた。それは、ゆうべのボッタクリゲームセンターのおかげといえる。

「もうしつこい！　ゲーセンの格闘ゲームで相手にボコられてなくて済むって話よ」

「それと映像とどういう関係があるんですか！？」

「あのゲーセン、とんだボッタクリ商法しててや、銭^{せん}を入れれば相手が弱くなるって……」

「そうですか。では、なぜそれをいつのに今、一の足を踏んだのです！？」

もーこうなると完全に警察の取調べ。……でも慣れただ。

「あんたに『柴門』さん、ゲームセンターなんかに入り浸つてはいけません』なんて言われそつたからさ」

ここへ来てやつとこさ真紗耶の顔に快晴の笑みが戻る。

「なんだ！　そういうことですか！　もう、水臭いですよ。ゲームセンターに行つたくらいで怒りませんよ私。ただ夜のゲームセンターは危険です。それだけは気をつけて下さい……」

その一言に私は一転、冷や水を浴びせられる想いだつた。

「そうね！　そうだった！　昨日ね、ゲーセンに追つ手らしい奴らが……」

「でしょうー？　そうでしょうー？　『この地球上に何人居るか知らない追つ手たち』に共通しているのは、非常に低俗であるという事です。まあ、当然でしょう、こんな映像を喜んで観る連中なんですかから」

そう、そう、私と真紗耶が『追つ手』によつて自由を奪われた原因は、まさにこの映像にある。

「はああー、今更だけども、私たちも因果な物^{モノ}じらえちやつたよ

ね

私が編集し終えたばかりのDVDを眺めながら憂鬱に呟くと、真紗耶は『とんでもない』と言わんばかりに手と首を横に振る。

「いいえ、いいえ！ 悪いのはインター・ネットではなく、インター・ネットを悪用する人間ですよ！ まさか私たちのDVDの中身を動画サイトに投稿されるなんて…」

「そんな時代になつてたなんて知らなかつたもんねー。あの頃はさ、私もアンタもネットやつてなかつたし！」

「はい……。何だか、異常なファンに追い掛け回されるアイドルの気持ちが痛いほど解りますよ」

「けど、あんときは怖かつたよね。『ネエネエ君タチ、ノノDVD二出テル子タチダヨネ？』って、あのキモイ男どもに声かけられたときー！」

「いや、あれはきっと、神様が私たちに『こいつら追つ手が居るから気をつける』って気づかせてくれたんですよ。あれがもつとタチの悪い連中だつたら私たち、今頃こんなふうに呑氣にお喋りなんかしていられなくなつていましたよ？」

真紗耶のクセにイイ子ちゃんぶりやがつてーと思つた私は、口をふんぞり返つた。

「神様なんて居ないー！」

「神様に見放された人間だつて強く生きていけるんだつていうこと、見せつけてやりましょうよ」

寝転がつた私の体に覆いかぶさり、艶めかしい視線で見下ろしてくれる真紗耶。

「ちよつとちよつと、もう一本いくのかよ……」

今度は私が、録画ボタンを押すのだった。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 炎のトーナメントで頃く（前書き）

IJの章では巫彩はあくまでも脇役ですね。

【Miss a - s viewpoint】炎のテニスさせて頂く

「てあおらーつ！」

カーン！ ズゴッ…… あたしの操るラケットに打たれた球はコートを越え、土の地面に深く食い込んでいった。

今日は日曜日だけれど、学校は部活動を行なう生徒のために解放されている。できる限りあの家に居たくないあたしは、いつだつて日曜をこのテニスコートで過ごすのだった。

「いいかげんにしなさい中里巫彩！ えいっ」

ただのラリー練習のはずが、あたしも相手も熱が入りすぎて、試合同然の事態になってしまっている。

「つるさいのよつー喰らえッ、あたしのファイアーボールを！ ていあーつ！」

あたしはラケットを投げ捨てる、ティクシーコングのごとくツインテールを振り回して球を打ち返す（当然反則）。その球は相手のラケットに当たった…… と思いきや、なんとガットを突き破って地面へ直行！

「なによこれはあああああああ！」

あまりの勢いにペシャンコになつたボールを掲げて相手が叫ぶ。

「ちよつとちよつと貴女たち、やりすぎだつて！ 中里さん頭を冷やしなさいー！」

『いかにも』つて感じの爽やかな顔をした西原部長が、呆れたような笑顔でこちらへ駆けてくる。

そしてあたしの頭にバシャーっとスポーツドリンクをぶつかってきた。相手はそんなあたしの姿を見ると、満足したように嘲笑しながら立ち去る。

ブルブルっと体を振ると、まだまだ冷たい春風が火照つた心身をにわかに覚醒させた。

「冷たつ！……」めん西原さん！ やだ、あたしつたら
「どうせ腹の立つことでもあつたんでしょう？」

ぎくつと竦みあがるあたし。確かに……今あたしはテニスをストレス発散の道具にしてしまつていた。

あのウンコ義両親との確執は前々からあつたけど、それはあたし自身が我慢すれば済んでたこと。ところがあの夫婦、今度は朱音にまで手を出してきやがる。

「このこと兄さんの住むバーのママに引き取つてもらおうかしら？」でもそれであたしが転校とかになつたら、朱音はこの学校で一人つきり。今、朱音には『中里巫彩の親友』つていう肩書きがあつて、そのおかげで無事に過ごせてるようだけれど、それすらなくなつたら、いくら『お堅い』この学園内とはいっても、なにをされ始めるか判つたもんじやない。

また仮に、あたしが横浜から遙々こへ通つとなると、朱音に余計な気を使わせてしまうことになる。朱音はそういう子。あたしは別に朱音のためなら長い距離だって平氣で通えるけど、朱音はそれに耐えられない。きっと、『私のせい』で巫彩が遠くから通つてる……』なんてウジウジ悩むに違ひない。

「西原さん、あんた鋭すぎよ！」

あたしはズベーッと足をおつ広げて、口差しの温もりを宿す緑のゴートに座り込んだ。

西原さんはゴートの向い、あたしのボールが生み出した穴を見つめながら深々と話す。

「怒りや憎しみをテニスにぶつけるのが悪いことだとは思わない。そういうものは闘争力に火を付けるからね。でも、それは本当の強さではないのよ」

「本当の強さ……」

「そう。……大丈夫。中里さんならきっと見つけられるから…… 将

来は立派なアグレッシブベースライナーよ」

アグレッシブベースライナー 攻撃的で激しいプレイスタイル。

その言葉にあたしの闘魂が燃えた。

「まあ、お手柔らかに頑張りますか」

がしつと立ち上がるあたし。西原さんは「じゃあ私が相手をするわ」と、私の対面へ回る。

ところがラリーを再開するなり、あたしはズッコけたりアサッテの方向に球を打つたりと、散々な有様。

西原さんのスタイルはカウンター・パンチャーといって、相手のミスを誘つたり、相手の強打を利用したカウンターを放つたりと、心理戦得意とするもの。要するに、体育会系なあたしが一番一ガテとするタイプ！

あたしの戸惑いを察してか、西原さんはラリーの球を少し穏やかにしながらこんな提案をしてきた。

「中里さん貴女、誰か知的な人とダブルス組んだら？ 私はもう他の部員と組んじゃってるから無理だけど、ほら！ 貴女の友達の……バレー部キャプテンの多岐川眞子さん！ 彼女、部長の座をそろそろ別の人譲りたいとか言ってたじゃない？」

「ああ、でもね、眞子の場合、『バレー部キャプテン』っていう肩書きがあるから、ウチの両親にあたしと付き合うことを認められるようなもんなわけよ。その肩書きを失くしたら、あの糞夫婦、なに言い出すか！ てあつっ！」

そこでバシン！ と烈しいカウンターを打つと、珍しく西原さんはそれを跳ね返し損ねた。じゅうじゅうと、寂しくコートを転がるボール。

「うわ、貴女の親ってそんなことやってるの……？」

西原さんの動搖ぶりを見て始めて、あたしは自分が滅多に話さない身内の愚痴を零してしまったことに気づいた。

「あ、ごめん。まあ、続けましょよ」

「ええ……」

それから、西原さんの勢いは急に衰えてしまった。ぼつりとして、あたしの放った球を見過ごすこともしばしば。

けれどもあたしは、いい打開策を思いついていた。それはつまり、眞子があの両親に好かれた理由が、『バレー部のキャプテン』といふ肩書きだということ。つまり朱音にも何かそういう、あの両親が気に入るような肩書きがあれば……。

そういうえば朱音、幼少期からピアノの塾に通っていたと、ぼろりとそんな話をしていたことがあった。

これは……。

物思いに耽っているあたしに、西原さんが明るく声をかけてくる。

「中里ちゃん、ほら、いつものお客様」

西原さんはこのトースロートを含んだ校庭の、やけにその向こう側を指差しているよう。

マッシュコータス女学園と外界とを遮る石垣の向こうを見ると

「木泊兄さん！」

見慣れきった、けびどいまでも愛しいその顔が、石垣の向こうからじわじわと覗いていた。

【Masa ya - s viewpoint】怪奇なる変装劇

「やい真紗耶、そろそろ売りに行くお（^ ^）」

「あ、はい」

さあ、今日もメイク魂に火をつける時間。まず柴門さんが簡単な化粧を施し、『卑しい行商人』に変貌します。

「ひつひつひつ…では行くとするかー」

柴門さん、声まで変わつておられます。

先ほど、私と柴門さんの会話にも出たことですが、私たちは自らの『行為』を収めたビデオを売り歩いており、しかも、それがネット上で流されたために『追っ手』という負の存在への対処を強要させられているのです。よつて、素顔のまま販売活動は行なえません。そして私は紅茶色をした長髪のカツラを被り、プラウディアのファンデーションで目に細工を施すと…これでもう、完全なる別人です。

「流石だよねえ、私ら。普通、メイクしたつてここまで別人には成れないとてえ」

柴門さんはいつも感心するのですが、私はそのカラクリに薄々気づいています。即ち……

架空のアイドルユニット『晩壓不垢^{アーメ}』に似ている私たち。それは即ち、二次元的な顔立ちである事を意味します。アニメキャラといふのは、顔のパーソやレイアウトが幾つかのパターンから選ばれ、微妙な目・眉・髪型やその配置の違いで、キャラの区別をつけるのです。

つまりそれは、私たちがメイクによつて全くの別人になることが出来うるという事を意味しており。コンパクトの鏡に映る自分を見ると、私は本当に人生を楽しんでいるという気がしてきます。

普段の黒光りする鬱蒼とした女臭さから開放され、純真かつ華美な瞳を持った、髪の色だけでなく人柄までもが『紅茶色』の無垢な

少女へと変貌できるのですから。

変装を終えた私は、か細く甘い声で柴門さんに語りかけます。

「志穂ちゃんつ……その……えつとー…今日も、上手く、いった…かな? 変装」

「うん。奇麗。奇麗よ。もう、死にたくなるくら
い」

などと、柴門さんにしては珍しく、眞面目に評価してきます。

ストレートに褒められて、頬を真っ赤に染める私。

「えつ…えー? そ、そんなこと、ないよお…。志穂ちゃんのほうが…変装…上手いよ…。じゃあ、夕方に、またここで落ち合おうね…」

「うん……。ねえアナタ、もしかしたら理奈子様より、理奈子様らしいかも」

そう。私のこの姿を見ると柴門さんはいつも、晴天が一瞬にして雨雲に覆われるかのように、哀しそと懐かしさが入り混じった表情をするのです。変装した私のこの姿は、かつてある場所にて出会った『香上理奈子』という女性の顔に基づいています。

私たちは廃ビルから出ると、行動を別々にします。なぜなら私たちの変装レパートリーは今のところ、これだけだからです。いつも同じ『卑しい行商人風の小娘』と『紅茶色の髪の美少女』が一緒にあのDVDを売り回っていたとなれば、簡単に足がついてしまうことも想像に容易いでしょ?。

しかし別々に行動すれば、私たちは『単なる売人』という位置づけとなることでしょうから、足がつく危険性はうんと低くなるだろうと考えたのです。

路地裏にて、弱々しそうな男を見つけると、もう勝つたも同然。

「ねえねえ、この映像、欲しくないかな?」

などと甘く誘い、小さなプレイヤーでのハイライトを見せると…

「うはー、うははうは…スゲー! これが噂の…三次元版『

『晩壓不^シ』のAVがあ。はあ？ これマジで『晩壓不^シ』の一人じ
やん！ ハアハアハア 告^シと廉^シが絡んで……つて、
うわあスゲー、ここまで映しちゃつ……。これ、転載OKすか？

「もちろんだよー 勝手に売ってるんだもん」「やつたぜえ。買います。全財産だつて惜しくないつスよ。動画投

稿サイトにあげれば『寄付』によつて元も取れるでしょうしねえ。
俺は『神』になるんだあ！ ウヘヘヘヘ

と、こんな具合に、簡単に万札を数枚、私に手渡してくるのです。
これは、決して不思議な事ではありません。ネット世代の男性は、
色と欲のためならば簡単に大金を手放すのです。

まず第一に需要の面。

今流行の同人誌やコスプレAV。その最大の利点は、健全なアイ
ドルやキャラクターのあられもない場面が描かれているという点に
あります。しかしそれは同人誌の場合は紙のこと。そしてコス
プレAVの場合は似ても似つかぬ実在の人物がキャラクターの衣装
を着ているだけのこと。

その意味で私たちの映像は、バーチャルネットアイドルである二
人がこの上なく忠実に実体化し、しかもそれがあられもない場面を
演じているという意味で、同人誌やコスプレAVよりも遙かに強烈
なインパクトと魅力を持つているわけです。

そして第一に、購買者が動画サイトへ私たちの動画を流すという
スタイル。新作のマスター^{シテ}テープを入手した者が、それを動画サイ
トにアップロードすることがネット界の流行になると、アップロー
ド者が『神』として祀り上げられるようになり、それ相応の寄付な
ども受けられるという特典が多くあります。

ネットで私たちの動画を見ている視聴者の数は約五百万ほど。例
えば、殊勝に寄付をするのがその一万分の一だったとすれば、一人
百円で約五十万円がアップロード者に入ってくるというわけです。
金と女。この二つの欲望を満たしてやれば、人は思い通りに動く

リストキーボードマー・佐久間昇の言葉を、まさに私たちは実践しているのです。

閑話休題。

未だ赤みが微塵も差さぬ空……今日は手早に販売作業が済みました。鞄に入れたDVDは十数枚の万札へと変貌を遂げています。これを期に、ずっと気になっていたある場所へ行こう、と思い立ちました。

公衆トイレにて変装を解き、本来の私に戻つて、と。

私が住む柳小路の隣町へ向かいます。柳小路は滋味深い景色ですが、この隣町には店の看板や塗装などにさり気ない赤や黄色が見られ、空気はずっと華やいであります。

もうこの辺りを歩いただけで、柴門さんと一緒に居るときより柴門さんの匂いを感じるから不思議なもの。

そして私は、青空をバックに透明な花々が描かれた看板の下に立ちます。ここはこの女性的な町を象徴するかのように洒落たレストラン《クウチューカ》。空中に咲く花のように、お客様を地上の苦労から一時だけでも解き放ちたいという理由で付けられた名だとか。そう、そしてこの感じの良い洒落たレストランこそが、柴門さんの実家なのです。ここを訪れるのは何ヶ月ぶりでしょうか…？ 柴門さんのお母様である薔子さんは美人ですし、娘とは正反対のとても穏やかな方なのですが、この事情では会うのがどうにも心苦しく。

しかし、どうしても薔子さんが心配な私は、思い切つて自動ドアの前に立ちます。すると

「いらっしゃいま…ま…真紗耶ちゃん！？ 久しづりね」

などと、テレビドラマなどでお決まりの光景。しかも、いらっしゃいまの《ま》と真紗耶の《ま》が繋がつていて面白いです。ともあれ、薔子さんは何も変わつてはおらず、ひとまずは胸を撫で

下ろした私でした。

即ち、久しぶりね と甘く優しく、しかしどこまでも大人の女性の風格が滲んだ声で囁く薔子さんの態度は、あのような性格の娘が居るとは思わせぬほど たおやかで温和であり、娘と同じ肩までのセミロングも、こちらはややオカツパ頭に近く、その墨のよう に重々しい黒色はどこか私の母・禱里を想わせるものがあります。

それにしても、こんな人が経営するレストランで平然と食事が出来ることの人たちの気が知れません。豊かな胸の下部あたりまで襟が切れ込んだ白いブラウスに灰紫色のエプロンスカートを重ね着したその姿は、そちらの萌え系レストランのウェイトレスよりも遙かに破壊力が大きいでしょうに。

「あの、薔子さん、それで、お元気ですか…？」

それしか訊くことの出来ない私。それでも薔子さんは満面の笑みを向けてくれます。この笑顔を見ると私はいつでも、彼女の一人娘が少し憎らしくなるものです。嗚呼、あのような呪われし校舎跡は捨て、ここに帰つて来て差し上げれば良いのに…と。

「ええ。真紗耶ちゃん、私を心配して来てくれたのね？ ありがとう。でも心配は要らないわ。ネットで人探ししたら見つかつたって いつ話し、よく聞くし……あの子は必ず戻つてくれる。それに、こ うして店に出てれば少しは氣も晴れるしね」

「そうでしたか。早く、見つかるといいですね。…っ！」

自分自身の発した言葉が今、私の心を真つ二つに引き裂くよう した。嗚呼、この人の娘が変装して出歩くのは《追っ手》のせいだ けでなく、薔子さんの情報によつて自分を探す人たちを避けるため でもあるのです…！

「おーい！ ハンバーグランチまだかい！？」

「あ！ すみません！」

調理場へ戻るゝとする薔子さんを私は無礼承知で引き止めます。

「待つて！ 薔子さん！ 一つだけ言わせて下さい！ 例え柴門志穂さんがこの家に戻つて来なくても、私は一生、薔子さんの味方で

「居ますから！」

「ありがとう、 真紗耶ちゃん…！」

ウルウルとし始める薔子さんを尻田に私は、レジの紙とペンを拝借してそこに自分の携帯番号を書くと、薔子さんに駆け寄つてそれを手渡しました。

「店をやっている間は気が紛れても、ふと、夜に淋しくなることはあるかも知れません。そんなときは遠慮なく、私にお電話を下さいませ」

「ありがとうございます。本当に」

「私には、このくらいしか、出来ませんから…」

深々と薔子さんに頭を下げ、店を出る寸前、私はハンバーグランチを待つオジサンに頭を下げ「申し訳、『ございませんでした…』と謝罪することを忘れませんでした。オジサンは私たちのやりとりからただならぬものを感じたのか、やるせなさそうに首を横に振つていきました。

そして店を出たとき、私の心臓は凍りつきました。
見覚えある凹凸のないボディ・ラインが描く、独特的の素朴美あふれるシルエット。

「あ、あなたは…っ！」

私は数歩、後ずさりしてしまつて、クウチューカの自動ドアを開けてしまいました。

咄嗟にドアから離れて《その人》の真ん前に立つと、彼は私の戦慄顔を指差して静穩に微笑みます。春爛漫のこの陽気を夏の終わりの寂しげな晴天かと錯覚させてしまつよくな、涼やかな寂しさを末だに纏つている彼。

「もう、相変わらずネクラなんだから～」

と、少女のような声で囁きますが、その姿もまた、誰がどう見ても女性のもの。

神秘的かつハツキリとした美顔に、腰まで届くかといつぱく細い

髪や、薄緑色のセーラーワンピース……何もかもが纖細で弱々しく、それが私の感傷をいつそう痛切なものにします。

(ちなみにセーラー服というと大抵の人が制服を思い浮かべるでしょうけれど、彼の着ているのはれっきとした私服。私服のセーラーというのは、全く珍しいものではありません。)

「すみません…木泊さん」

彼の名は山口木泊やまぐち・こはく、旧名は中里木泊なかざと・こはく。

すなわち巫彩さんの義兄そ

の人であり……
私ネット嫌い。あんただって……『あの人』、ネットのせいで自殺未遂を

言わないで！！！ お願い！！！ 『のこと』には触れないで！！！ 下水道にて交わされたこの会話において、柴門さんの言つてこりの『あの人』でもあるのです。

彼を引き取つた横浜のバーのママが『山口』姓であるため、彼も山口木泊といふ名になつております。

彼の両親、つまり巫彩さんの義両親は、木泊さんの親権を実に易々と放棄してみせたとのことで……。

木泊さんの消え入りそうな明るさが、私の胸には光る刃となつてグサグサと突き刺さります。

「知ってるだろうけど、ボクは今、幸せですか…………。引き取つてくれた人はとつても優しいし、それにヨコハマはいい所ですから。だから真紗耶さん、もう心を痛めるのはやめて下さい」

十三夜月のように丸く透きとおつた瞳を、その月光を宿す湖水のごとく輝かせる木泊さん。

しかしどうにも私の心にはストンと落ちないものがあるわけです。「木泊さん、これはもう、あなたが幸せになつたか否かの問題ではないんです」

「真紗耶さん、あんまりボクから逃げないでよ」

「は、はい。でも私、あまりにも、あなたがお可哀想で……」

「君、ボクのシアワセな姿、ちゃんと見たことないでしょ～？」

「会いに行く、勇気がありませんでした。ですが最近、巫彩さんと『Sweet Season』で会いたいって、無意識の中に書いてしまつて……。あの店は、あなたが住んでいる場所なのに」

それを聞いた木泊さんは秋空のような笑みで私の肩をトントンと叩いてきます。

「ふふふふふ、そうかあ。ボクが元気に暮らしてる姿を見たら、きっと真紗耶さん明るくなれますよ～」

「そうですね。それで私も、無意識の内にあなたの住む店を指定したのかかもしれません。して、今日はどうしてここへ？」

すると木泊さんはラケットを持つふりをし、素振りをして見せました。

「巫彩がテニスのレンショウしていると、見に来たんです。巫彩、元気そうでした。でも……ピーロのウッパンをテニスにぶつけてるよつこも」

水曜日に会つたらその辺の「」とも詰かなければ、……という想いを強くする私でした。

「…………」

「それで真紗耶さん、志穂さんはどうなつてるの？ 巫彩の様子を見るついでに寄つてたんですけど、」の「」ティッシュには帰つてないみたいですね。ということは、今でもあの校舎跡に、居るんですけど？」

「はい……」

「そうです、か。ん、じゃあね」

木泊さんは緩やかに手を振りながら私に背を向けました。

「はい。お元氣で」

木泊さんと別れるとよつやく、うつすり窓に茜色が差してきました。戻りましょう……柴門さんの元へ。

夕暮れとなると、さすがに見慣れたはずの廃ビルも不気味に映

え　割れたガラス窓の一つ一つが、底なしの闇へいざなうつに口を空けているのを見ると、どうにも足が竦みます。

「なると若干、埃という名の絨毯が敷きつめられた階段を上の歩調も、恐る恐るという感じのものになってしまったのです。

壁上に着くと、柴門さんはすでに戻つており、金網に手をかけて茜色の空を見つめていました。

なぜかとも、彼岸の果てを眺めるような遠い目で……。そして私に気づくと、ノスタルジックな笑顔で振り返り、意表を突く言葉を放つてきたのです。

「真紗耶おかえり。ねえ……お母さん、元気かな？」

「お母さん、って、蕃子さんのことですか？」

セヒドヨウヤクハツモの柴門さんに戻ります。

「他に誰が居るのかつづーの…」

「今、会つて参りました」

「は？」

「蕃子さん」、お会にして来たんです。今日は早くにDVDが全て売れてしましたので」

一気にシリアルス一色の顔になり、私に駆け寄つて肩を掴んでくる柴門さん。

「それで!? 元気だつた!? 奇麗だつた…? 変に老けてなかつた!? 店はうまくいってた…?」

ど、やだまわしの歌のようなことを語りてきます。私は呆れて溜息をつきました。

「あ……柴門さん、そんなに心配ならば、お母さんの元へお帰りになれば宜しいのに」

私が何度も吐いたか知れないその言葉に、ふんつと表情を尖らせて夕陽へと視線を戻す柴門さん。

「もう飽きた、それ」

私は一転、例のごとく自分勝手な柴門さんにいよいよ腹が立つて

きました。今度は私が彼女の両肩をつかみ、その健康的な体を揺さぶります。

「だつてどう考えたつてそのほうが幸せでしょう！？ 貴女にとつても、お母さんにとっても！ まあ、あの工場跡を離れられない事情が幾つもあるのは痛いほど知っていますよ！？ でも、私や姫子さんは、貴女の命のほうが大切なんです！ それなのにどうして、どうしていつもいつもあんな所に帰るんですか！？ ビジしてなんです柴門さん！？」

私の熱っぽい説得も虚しく、柴門さんは田だけを下に向けて足元に転がったコンクリの破片をポーンと蹴りました。

「だつて、楽なんだもん、そのほうが。実家に帰ればお母さんは気を遣つて、私が何も罪を犯さなかつたように必死で明るい生活を提供してくれる。それはお母さんの好意だから、私はどうしても何もなかつたように明るく振舞わなきやいけない。……でも無性に怖くなるのよおっ！ 私はあんな凄惨な事件を起こしたのに、何もなかつたように太陽の下でなんて生きられない！ って！」

「けれども、あの呪われた真っ暗な工場跡に帰れば、それが紛れる、と？」

「うん。あそこは何もかもが怖くて暗いから、私の罪も見えなくなる気がする……」

「まあ、気持ちは解りますよ」

私は本当に柴門さんの心を理解しているつもりですが、柴門さんは今の言葉が癪に障つたようで、私に肩をつかまれたまま、ギッとき鬼のような睨みを私に投げかけてきます。

「真紗耶に何が解るの！？ 返り血を浴びるのがどれだけキモチワルイか解る！？ 今でも奴の血の臭いが鼻から消えないのよ！ どうして私が実家に帰りたくないか解つてないでしょアンタ！？ あの明るい店の客たちが、全部全部、嘘に見えるのよ！ あいつらはみんな、何の罪も背負つてなくて普通に明るい人生をエンジョイしてて、そんな奴らが呑気に飯喰つてると同じ屋根の下に居るのが

どれだけ心苦しいか！ 解んの！？ あんたに！？

「だから今日、あの店を見てきて、私もそう感じたんですよ。こんな明るい場所に帰るのは、確かに柴門さん、おつらいだらうな、と」

私の理解に満ちた言葉に安心するどころか、吐き捨てるよつた溜息をつく柴門さん。

「はあああ、もう、めんどくさい……。実家に住むとなると店を手伝わなきゃ居づらいし、そしたらまた、私の前科を知ってる奴が客として来るかもしれない」

色々言つておりますが、柴門さんが家を飛び出した理由、それはまさに、柴門さんの犯した罪を知つてゐる人間があの店に客として現れ、そのことを彼女に問いただしたからに他ならないのです。

「でもそのあたりは蓉子さんとよく話し合つて……」

「ああ嫌だ嫌だ嫌だ。何もかもめんどくさいよ畜生！ だから真紗耶、お願い、時々お母さんに会いに行つて様子を見て欲しいの。そのくらいしてくれたつていいでしょ？ ね？ 私、真紗耶のせいで子宮、全部失くしちやつたんだから」

それは嘘ではありません。そればかりか、柴門さんがレッドラムになつたのは、ほとんど私の

私は深々と頷きました。

「そうですね。そうします。私、蓉子さん好きですし」

「急にしおらしくならないでよ！ 私が悪者に見えるでしょーが！」

このワサビが効いた傍若無人ぶりが柴門さん最大の魅力でしょう。その屈折した心の襞の總てを我がものにしたくて、私はいつも烈しく彼女を愛してしまう、求めてしまう……。それが結果として、あのような映像となつて大金に変わるのでですから、まあ有意義なことといえるかと。

「ふふ、柴門さん、今日はこれでお別れ、ですかね？」

「そのほうがいいでしょ。昨日は『一緒に帰る』なんて突飛なこと思いつこちやつて、それで追つ手に見つかって下水道なんぞに隠

れなきやならなくなつたからね……

「そうですね……」

私が寂しそうな顔をすると、柴門さんは私に背を向けた後、サラサラの髪をフワリと舞わせて振り向き、金網越しの夕日を背景に、私に優しくもどこか憂いを感じさせるワインクをプレゼントしてくれました。

「また明日ね　また、ここで待つてるから。……私は、ここで暫く夕日を見てから帰るわ」

「はー。どうか今日もご無事で」

「おう！　心配すんな」

ビルの階段を下ると私は、冷たい靴音を踏々と、この荒涼たる地帯に響かせます。この辺りはバブルの落とし子なのか、このような廃墟や瓦礫の山、あるいは建物を取り壊した跡と思われるコンクリの空き地しかなく、この時間帯に一人で歩くには少々寒気を催すものがあります。

角を曲がるとようやく、人の気配のする細い道路が見えてきました。

その道路に向かつて、十三度靴音を響かせたところです……

私の眼前を疾風の如く突進してゆく物体がありました！　車に轢かれそうになつたのです！

そしてそしてその直後！　泣き面に蜂の如く……

「うわあーっ！」

あ、嗚呼、嗚呼嗚呼、私はなんということを！　ええ、ええ、車に轢かれそうになつた事などではありません！　私は私は、男の、男の叫び声を出してしまつたのです！

そしてそしてその直後！　泣き面に蜂の如く……

「いりあーっ！　氣をつけろよ小娘！」

車の窓から顔を出し、私を睨みつけて直ぐに走り去つた男の顔……

…それを見たとたん、私の心はこの夕映えをも黒焦げに焼き尽くす
かのような憤慨に包まれたのです！

私は悪い霊にとり憑かれたように喉を搔きむしりながら、今来た道を疾駆し、柴門さんの元へ急いだのだと思います。ビルの階段を上った記憶は、もはやありません。

そして屋上で柴門さんの顔を見るなり、私は柴門さんに何らかのリアクションをさせる余裕すら「えぬままその胸に縋りつき、救助隊がへりから垂らすロープを掴むかの如く、柴門さんのブラウスにあしらわれた襞を搔きむしります。

「ああーー！ 許わない！ 許わない！ 許かない！ 許さない！」

恐らく柴門さんは、またか、という想いなのでしょう。驚く様子は微塵もなく、その代わり、柴門さんのくせに妙な慈愛すら感じさせる態度で私の背に手を回すと……

真総取　力又天。力又天だから」と、これもやはり意外にも母性を感じさせる声で囁いてきます。

戻していました。

「安心しなさいってば！ 大丈夫だからホントに！ アンタを攻撃していくる男なんでもう居ないのよ！ アンタはいつもいつも、《自分を怒る男》を見るとすぐに敵だと思うけど、もうホント、男なんかにブンブン振り回されんなあー！ 私まで悲しくなるからー！」

「大丈夫よ！ 気にくわない奴が居たら、また私がブツ殺してやるから！ あいつの時みたいに！ それからね、アンタは女よ！ 男の声出したくらいでなによ！？ そんなもん、『生まれた時から女の私』にだつて出せるわよ！！ よおく聞けえ！ ぐわああああーっ！！ ギャアアアアアアアアアム！！ ほらね 」

っ！！ ギヤアアアアアアアアム！！ ほらね

柴門さんのもとへ、私は彼女を冷徹に突き放すとスッと立ち上がり、柴門さんを見下ろして硬直しました。

柴門さん、利を轉こうとした奴には復讐しなくていいんで、
！？ 貴女がレッドラムになるよつ仕向けたのは奴ですよ！？ 奴
の放つた刺客どもが柴門さんに変な薬品を飲ませて氣を狂わせたに
違ひないつ！ でも柴門さんが復讐をすれば柴門さんは犯罪者だ！
あれだけの人数を殺したとなれば死刑は免れない！ 誰もが柴門
さんの死刑を待ち望む！ 誰もが柴門さんの死に興奮する感謝する
感激する歡喜する狂喜する！ あーっはっはっはっはっ！ 弱きを
挫き強きを守る奴らのために、の氣高く神々しき柴門さんが死刑だ
！？ ふざけるな曰帝め！ はつはははははははははははは
ははー！」

天を見上げて高らかに笑う私の狂気が頂点に達したところで、柴門さんは立ち上がりつて私の正面に立つと、実に涼しい顔で、この額をポンと手のひらで叩きました。

かかると、やがて不気味に唄い始めます……

柴門さんにしてはやや低く暗い、バスフルートのような声が、真っ赤に染まる廃墟に不気味に響き渡りました。歌の名は「かごめかごめ」これは、流產の歌と云います。

しばらぐそのままの体制で居ると、やがて、私は我に返りました。
「柴門さん……」めんなせい何かキッカケがあると
…………」

そう、普段はあつけらかんとしているとも、私の心の奥には、常に底なしの血の海が広がっているのです。幼少期に受けた心の傷から流れ続ける血によってできた、深く赤黒い海が……。

そして、そんな私の過去の傷を何もかも知り尽くしている柴門さん。彼女は起き上がりつて私の頭を膝に乗せると、この夕映えに溶け込むような愁いに染まつた笑顔で私を見下ろします。さつきは私の憤慨と同化した夕映え。夕映えとは、実に様々なものにそぐいます。「解つてるつて。何年付き合つてると思ってるのよ？ 仕方ないつて、女性ホルモンの副作用なんだから。全く、リタリンといい女性ホルモンといい、副作用つて恐ろしいわよね～」

「…………

女性ホルモンを常飲すると、副作用として情緒不安定に陥り易くなると云っています。

すると柴門さんの華美な瞳に、僅かな涙が光つたよつて思えました。

「ねえ真紗耶、ねえ教えて。あなたは、誰が憎いの？ 自分を虐めた奴ら？ それともそんな世間をこしらえた人類そのもの？」

「う……わ……か……り……ま……せん……」

「そつか……」

こうなると私の頬にも涙がつたい、柴門さんの白い太ももに零れます。

「もう、分からぬのです。誰かを憎んでいるわけでもないのに、涙が滲み出してしまつ。悲しみもない、恨みもないのに、どうしてこんなに悩むのでしょうか？ どうしても、どうしても、それが分からぬのです……」

「私もよ。私の心中にも、いつも雨が降つてゐるわ。私たちの心に染み込んでくる、この悲しみはいつたい何なのかしら？ 私たちの心の雨はね、いつもシットシット降るの。私たちの悲しい心には、それが雨の歌なのよ」

子供に夢のある童話を聞かせるように語る、柴門さんのその口調

も声も、もろに薔子さんそのものであります。そして、じつじつ憐れみに満ちた言葉を交し合ひ、私はようやく完全に落ち着くことができたのです。

「柴門さん……ありがと……。普通の、幼馴染なら……私を、警察病院に、引っぱって行きますよ……」

柴門さんは私を見下ろしたまま、ちょっとぴり意地悪に笑います。

「はははは、ダメだつて 真紗耶みたいなのが近づいたら、警察病院だつて逃げてくわよ」

「そうですね……」

こうして私はようやく、よひよひと立ち上がりて深々と頭を下げました。

「おいおい、気をつけよ? 帰り道」

「はー……」

力ない私の返事に恐らく柴門さんは心細さを抱いたのでしょうか、夕日の真ん前にまっすぐに立ち、実に新鮮な笑顔を見せてくれました。柴門さんの頭の真後ろに輝く夕日が、まるで日食のように美しい……。

「ほら、心細くなつたら私のこの顔を思い出しなさい。ふふ、私の顔だけは無垢で明るいのよ(笑)」

「ありがとうございます……では」

「こつちこそあつがとー 田帝だの刺客だの、田帝じや絶対に聞けない言葉が生で聞けて大満足よ! また明日ね」

「はい……どうかご無事で」

今日は、私と柴門さんの生活や関係の全てを、顕著かつ端的な要素が凝縮された一日は久しぶりです。

そうなのです。どちらかがどちらかを頼るわけではなく、お互にお互いの脆い部分を支え合つという、このジエンガのような危ういバランスで、私たちは十何年もの間、良好な関係を保つてまいり

ました。

しかし私は時々、無性に怖くなるのです。複雑に頼り合つた私たちの関係……そのどこか一箇所が、ことりどバランスを崩したなら、それで総崩れになつてしまふのではないか、と。

ともあれ、柴門さんのおかげで私はとても落ち着いた気分で家路を急ぎました。そう今日もまた、彼女の無事を強く強く祈りながら

……

【Masaya-s viewpoint】怪奇なる変装劇（後書き）

基地外パートでしたね。
でもこれすら序の口だつたりします。

【Sutori - s view point】ドアの前にて膝を抱え…

「柴門さん、心配しないで下さー。今、家に着きましたから。わしきはありがとうございました。貴女にまた助けられましたね。」

と、真紗耶からメール。ふう、手のかかる奴

私は今田はまつすぐに家路についていた。これだけ稼げば、殴られずに済む、そう思つたら気が楽で……。わしきの真紗耶との会話でも言つたけれど、私が実家よりもあの工場跡を選んでいるのは、そのほうが楽だから、なんである。

壊れかけていようが殴られようが、あの太陽の光に満ち溢れた明るい店の上にある白室で籠るより、あの冷たくて暗くて、だだつ広い教室跡で籠るほうが少しは気が楽なのだ。

そうだそうだ、楽なほう樂なほうへフランコフランコしたほうが少女は美しい！ ここまで逃げたり籠つたり責任転嫁したりし続けて生きてきた私の美しさは尋常ではないはず。また、そうした私の『浮遊美』を徹底理解できる真紗耶も神である。わしき真紗耶がトチ狂つて口走つた言葉『氣高く神々しき柴門さん』あれは真紗耶の本心であると同時に、とても的を射ていると思つた。

『家の門』をくぐるとまた私は、工場跡の前にしゃがんで手を合わせる……。

そして昇降口といつ名の玄関に入ると、横たわつた下駄箱が、

私の行く手を遮つていた。

「なによこれ……」「今まで……今まで『出てきた』つていつの…

……？」

下駄箱の上を歩くと、ぎしぎしと木の板が軋むけれど、これはほほ廊下を歩くのと同感覚だった。

ともかく、南棟と北棟を繋ぐ通路に稼いだ金をそっと置き、私は自分の部屋というか教室跡に戻り、ドアの前で膝を抱える。これが私のいつもの体勢。

しばらくすると、果音の冷たい足音が響き、カサツ、と、万札を握る音が聞こえた後、また果音は自室である音楽室へ戻つて行つた。

そして、この夜の静寂に自らも溶け込んだような気分になつていったそのとき

私のその静かな心を破るかのように、また北棟のほうから魔獸が目覚めたかのような破壊音が響き渡つた！

そのまま後で、果音がダダダダと音楽室から走り出て、無数の鉄屑を激しく搔き混ぜるような音を立てて『開かずの間』の門を開けると、

「――！」

その人の名残じき言葉を叫びながら開かずの間へ駆け込んで行った。

いつも、じつにじつ事になる時間帯は、自らの膝に顔を深く深く沈没させ、恐怖に耐える私……

こんな私を、人は『情けない』と非難するだろうか？ 例えばこれが小説なら、読者はここで、ヒロインである私が捨て身で開かずの間へ急いで、自らも必死で役に立とうとする展開を望むのかしら？ けれども、こうして騒ぎから逃げて膝を抱えていたような私でなければ、真紗耶の心は癒せないことだけは事実だ。

長らく、手負いの獣が七転八倒するような打撃音と、ガラスを爪で引っかくような金切り声とが同時に響き続けた後、『あるきつけ』を期に騒ぎが收拾するのを、私は聞き逃さなかつた。

【Masa ya - s viewpoint】慰安の断罪

「お母様、調子はいかかで……っ！」

母の顔を覗こうと障子を開けたとたん、人形が私めがけて飛んでくるではありませんか！？

その胴体は障子紙に突き刺さり、もげた首は廊下にころころと転がってきました。

「真紗耶？ あなた今日、志穂ちゃんの愛を求めたわねえ？」

後ろ手で人形を投げ放つた母。私に背を向けたまま、意表を突く言葉を吐いてきます。

私が後ずさりすると、この足の裏が人形の首に乗り、「きやあつ」バランスを崩して廊下に尻餅をつきました。

「お、お母様……な……なぜそれを……」

するとムクリと立ち上がる母。

「歩き方！」

崩れ落ちた私に振り向きます。

「気配……！」

そして畳をどすどすと鳴らしながら歩み寄つてきました。

「それから障子を開ける仕草っ！ そういうもので判るのよー！」

びらびらと、私の眼前を舞う着物の袖。平手を喰らうのだと覚悟したそのとき、この頬に触れたのは白く冷たい温もり……。

意外にも頬を撫でられたことに気を緩めた私は、柄にもなく反論をし始めました。

「だ、……だつて、お母様が、柴門さんにお頼みになつたんでしょう？ 『真紗耶が取り乱したときは落ち着けてほしい』って」

母は私の頬を撫でながらも、人形のように表情ひとつ変えません。「それは志穂ちゃんが、母性なんか持っていない女だと思ったからよ。中絶なんて行為をするような女に、母性なんかあるはずがないつて……。でも私の見当違ひだったみたい。あなたはさつき、志穂

ちやんの母性に溺れていた

「でも柴門さんは、取り乱した私を……」

「……でさうと、その白い手が私の頬を驚かみすると、母はにつこりと、子供のように無邪気な笑顔を浮かべます。

「ふふふ、祷里、いい子だから、そのお餅みたいなほっぺを痛めつけたくないわあ」

「……？」

「そのせつな、今度は呪いをかけられた人形の」と、その皿をぎいと吊り上げました。

「真紗耶、誓いなさい！ 金輪際、祷里以外の女に友情以上の感情をいだいたりはしないって！」

「…………」すぐみ上がる私に、

「早くなさい！」追い討ちをかける母。

私はガラス玉のような母の瞳を見つめ、声を震わせつつもいつ宣言しました……

「真紗耶はお母様以外の人間に、友情以上の感情をいだいたりはいたしません……」

「うふふふ、よくできました～」

一転して二コリと、普段の温厚な表情へと戻る母。「じゃあ、ご飯にしましちゃうね～」私から離れてスタスタと廊下を歩いてゆきます。

と、そこで私の携帯が震えました。見てみると薔子さんが早速メールを送つて下さったようで……。

内容を読むと、やはり……この時間に一人で過ごすのはやはり寂しいとのこと。

どのような言葉を紡げば、彼女の孤独をやわらげてあげられるか

……それを漠然と考えていると
「そのメールの相手、志穂ちゃんじゃないわね？ あなたの後姿を見れば判るわ」

振り向くとそこには、丘所へ行つたはずの母が、庭の石灯籠に照らされてぼんやりと佇んでいました。

「ちよっとお母様！？」

母は問答無用で私から携帯を奪い、じばりくその内容を眺め、やがてどこかへ電話をかけました。

「あ、ああ、もしもし？ クウチュー・カさんですか？ ……そう、では貴女、薔子さんね？ お久しぶりです。河東真紗耶の母です。いつもやはどうも。ええ。袴里です」

「…………」

昔に色々あつたため、母はクウチュー・カの電話番号を覚えていたのでしょう。

「率直に言つわ。うちの子は薔子さん、貴女に氣があるの。大方、貴女が真紗耶に色目でもお使いになつたんでしょうけど。でもよりによつて志穂ちゃんの想い人に言い寄ることはないでしよう？ ふつ……ふふふ、そこに志穂ちゃんが居らしたらどんな想いをなさるでしょうねえ？ ねえ？ ふふふふふ、娘と母が同じ人を取り合つなんて……なんだかエッチで……ふふふ、厭だわあ……」

「お母様やめて」

思わず駆け寄る私を片腕で突き放すと、母はにわかに声を荒げます。

「真紗耶は貴女や貴女の娘と違つて純真なの！」と、そこで突然猫なで声に。「そうなお、まだミルクの匂いがとれなくつてえ……うふふふふ。ええ。じゃあお願ひね。真紗耶には私という立派な大人的女が居るの。なにも一番煎じの貴女と恋仲になる必要はないもの。じゃあ、お願ひしますね。おやすみなーい」

その口調にも表情にも、大人の厭らしさは皆無。それは魔法によつて命を吹き込まれた一抹人形が、言葉を得て楽しげに話している以外の何者でもなく、それが逆に異様な妖しさを醸し出しているのです。

携帯を私に返すと、「あ、トカゲの照り焼きがコケちゃうつ！」

などと無邪気に囁きながら、着物の裾を実にもじかしそうに走り去つてゆきました。

なぜか酷く疲れてしまい、食事が済んだら柴門さんにメールしようと、心に決める私。母は 身体だけの女 である柴門さんへのメールだけは、黙認してくれているようです。

【Massayasu viewpoint】懲安の断罪（後書き）

「これまでくると気持ち悪さを通り越してせこせこした気分で書けました。」

【Shinoh-s viewpoint】狂氣の家庭科室

「柴門さん、いじ無事ですか？ なんだか急に恋しくなつちやいまし
た。明日は私も、早めにいつもの場所へ行くかもしれません。」

また夜中に真紗耶からメールが届いた。どーせ私は寝てないんだ
から、一晩中でもメールしたい気分。次に会った時、即、その事を
頼んでみよう。

そう、一晩中このドアの前で膝を抱えて、時々うつらうつら…そ
れが私の夜の過ごし方。特に夏は風邪をひく心配も無いから気が楽
だ。問題は、時間が経つのが凄く遅く感じるという事。この状況下、
こづして何もしないで居ると、自分が生きているのか死んでいるの
かさえ判らなくなつてくる。

ラジオをつけよう。孤独が沁みるこんな夜は、誰かの話している
声を聞くに限る。電源を入れるとつまらん演歌が流れ出し、それが
フェイドアウトで消えるとニュースが始まった。

最初のニュースは他愛のない政治ネタ。ところが……一いつ皿の二
ニュースに私の心は凍てついた。

次のニュースです。東京都に住む四十六歳の女医が、大学受験を
控えた息子に、病院から不法に持ち出した『リタリン』という薬を
投与していたとして、書類送検されました。この薬は、主に精神病
などの治療に用いられていたもので、俗に『合法シャブ』などとも
呼ばれているため、警察では、この女医が息子の受験を成功させる
ためにリタリンを持ち出したと見て、詳しい動機などを調べていま
す。では、次のニュース 今日は気持ちの良い春空が広がり、桜
も満開！ 各地でお花見が行なわれました

「今さら何よ！？ 何がお花見よッ！？ こんな畜生！？」

私は思わずラジオをするりと手から滑り落としてしまった。電池
が飛び出し、じろじろじろじろと虚しく転がる。あと十年早く！

リタリンの恐れこわいアンタラマスコミが大々的に伝えていてくれたる……

すると、ミシ、ミシ、と、果音がどこかへ出かけていく音が聞こえた。あら？ 果音が《あのため》に出かけるのは、半月に一回くらいで、数日前に彼女はその外出を済ませたはずなのに……

さて、私が《自分が出かける時間》に気づくキッカケは、もちろんこの腐った教室跡に鈍い朝陽が差し込み、いたる所に張った蜘蛛の巣を樹氷のように輝かせること。

今日も、その時間が来た。私は北棟への通路を通り、開かずの間の前で立ち止まり、しばしその向こうに想いを馳せるも、すぐ振り切るようにここを通り過ぎて家庭科室へ向かった。

だだつ広い家庭科室が、普通の家でいつどひの邸所になつている。

果音は少なくとも私を餓死させるつもりはないようで、質素とはいえ、きちんと私の食事はこしらえている。

「そりやそうよね、私が餓死したひ、こんなに荒稼ぎは出来ないものねえ」

声にならない独り言と共に家庭科室に入ると、果音はまだ来ていなかつた。

蛇口や流し台の付いた大きな長方形のテーブルが四台並ぶこの部屋。そのうち使っていない三台のテーブルはもちろん、この建物の御多分に洩れず、蜘蛛の巣と埃という二重のヴェールを纏っている。ふと、私はその内の一つ、埃の上に置かれた新聞に目が行つた。果音は確か新聞はとつていない。明らかに彼女は、外界との遮断を徹底したがつてゐるからだ。

では、なぜここに新聞があるのか。……やはり果音だらう。ゆうべ、果音はラジオでのニュースが流れた直後に出かけていった。彼女も同じニュースを聞いたとすれば、それで、いよいよタリ

ンの恐ろしさが世に知れ渡るときが来たか、と淡い期待を抱いて駅の売店がどこかに新聞を買いに出かけたとすれば、ここに新聞があるのも理解できる。

ところが、置いてある新聞にリタリングしき記事は　　書いた。表紙ではなく、三面記事の左下にオマケのように小さく。

私が記事に見入っていると、ドアをガラガラと乱暴に開けて果音が入つて來た。

果音は私から一番遠いテーブルの前に行き、私に背を向けた状態で野菜を切り始める。

そして……、ヘドロが流れるのように低くおぞましい声で、久しぶりに、本当に久しぶりに私に対する言葉を発した……

「……全く、そんな薬を処方したら、患者がどんな不幸を背負う事になるか」

「果音様だつて……」

足を緩やかに震わせながら不安定に立ち竦み、怯えつつ声をかける私。

その消極的な態度が果音の癪に障つたのか、

「……！」

ただでさえ鋭利な瞳を羅刹の「」とく尖らせ、ふんとこちらへ振り向くと、ポット、ゴミ箱、野菜、食器……手近にある物を手当たり次第に私に投げつけてきた。

巨人が街を荒らし回るような凄まじい轟音が家庭科室を震わす。私の後ろの壁に当たったポットが壊れて熱湯が私の足元に広がる。天井にぶち当たったゴミ箱からいつのものとも知れない古いゴミが私の体に降り注ぐ。

野菜の数々が地面でグチャグチャに砕けて嘔吐物の「」とく散乱する。

そしてそして、その上を生々しい音を立てて割れ果てた食器の破片が彩る。

投げる物が次かると、果音はゆっくりと私に一歩、また一歩と近づいてきた。

ガラス片の上を靴下一枚で歩く果音、私の元へ来る頃には、その裏側は真っ赤に染まっていた。恐らく今の果音には、痛覚すらなくなっているのではないか？

できるものならば逃げ出したい！ 逃げ出したいけれど怖気づいて足が動かない！

果音の身体から発せられる邪気が、私の動きを封じてしまうようにも思える。

私に接近しきると果音は、手に取った新聞で私の頬を打つてきた。何度も何度も！

果音の手にかかるとただの新聞ですら、私をそのまま地面に崩れ込ませるほどの凶器と化する。しかし何とかガラスの散らかった箇所には倒れずに済んだ。

果音は新聞を鞭のじとく扱い、崩れ込んだ私の背を直叩きにしてきた。

私の身体に野蛮な衝撃がほとばしるたび、新聞の破片が紙ふぶきのように宙を舞う。

やがて辺り一面が手入れを怠った二ワトリ小屋のじとき參事と化すると、ようやく果音は手を止めた。

その隙に私は、逃げ去るようになにかを後にしたのだった。

体が若干ヒリヒリするけれど……私は気早ながら急いであの廃ビルへ向かう。真紗耶も早く来るって言つていたし。まあ、あいつのことだ、私よりは遅く来るんだろうけど。

ところが、屋上に着いた私は我が目を疑つた。そこには、性転換してから極端に寒がりになつたあの真紗耶が、赤ワイン色のキャミワンピを身に纏い、やつぱり少し寒そうに、右手を胸の下に回して左腕を掴んで立っているではないの。

「柴門さん、あの、おかいなさい」

「あ、あの、真紗耶…」と言いかけて、ははーん、と一気に私は笑みを取り戻した。「あさつては水曜日か！　あの日だ。巫彩ちゃんに会つ日」

「は、はい。そう、なんです」

少し頬を赤らめる真紗耶を見て、何か妙な違和感が……そつか！「アンタ一つ勘違いしてナーライ？ 巫彩ちゃんは 女 の 子 だけど？ そんなエロい格好したつて、別にプラスになることは何にもないと思うけどオ…」

「あ」

硬直する真紗耶。私は呆れて真紗耶に近づき、豊胸した巨大な胸をツンツンつついた。

「アンタ、私たちがしていることが『男女の関係』よりは『レズ』に近いこと、忘れてるでしょお。私はアンタが女になる前からの付き合いだから、別に違和感ないけど、巫彩ちゃんはワケが違うのよ？」

「すみません……」

「まあいいや。ほり、DVD DVD！」

「そうですね」

月曜日も火曜日も、表面的にはいつもと同じ一日が過ぎていった。いつもと同じところとは、ちょっと色々あつた昨日とは少し違つて、ただただDVDを撮つて売つて、夕方にまたここで落ち合つ。それだけの日という意味……

……けれど、なにか真紗耶の雰囲気が昨日までと違つ。何が違うのか、それはハツキリとは判らないけど、強いて言つならば、性転換したばかりで異常に はしゃいでいた頃（もちろん、キヤツキヤツキヤツ、という感じのはしゃぎ方ではなく、瞳や肌が妙に輝いている、という意味）の真紗耶を彷彿とさせた。

これは、もしかしたら真紗耶も感じていることかもしれないけれど、私たちの関係は、ジョンガの」とく複雑に、お互に お互いがお互いを

支え合うことで成立しているのではないか？それは、どこか一つのパートがバランスを崩せば簡単に大崩壊を起こすことを意味する。けれども、私も真紗耶もそんな不安を振り切りながら、こうして十何年も良好な関係を保ってきたわけで、事実、真紗耶が少しつもと違おうとも、私にとつては何の問題もなく明るく過ぐすことができた。

巫彩ちゃんと会つこと……まさにそれが、ジエンガの崩れる予兆だつたとも知らずに。

【Shinō - s viewpoint】狂氣の家庭科室（後書き）

一章はこれで終わりです。
お疲れ様でした（笑）。

哀しき鎌倉Ghosts（前書き）

生存報告に代えて、二章のこの最初の部分を投稿します。更新が停滞している理由は活動報告にて。

初夏を想わせるような南風の吹きすさぶ水曜日。時刻は五時を過ぎていて、

これは一重の意味で学校をサボるチャンスだと、あたしはほくそ笑んでいた。一つ目の理由はもちろん、あのウンコ義母がPTAの面々を集めてホームパーティをするから。ジョークでも『朱音とは友達じゃない』なんて言いたくないあたしだった。

それともう一つ。極度に暑がりなあたしにとって、衣替えが済むまでの春の期間は地獄でしかない。

四月も下旬になると、同じ長袖とはいえ、白い薄手の中間服を着る生徒がちらほらと見られ始める。けど今はまだ三月。あたし一人、中間服を着て行つたら浮いてしまつてさすがに恥ずい。

今だつてほら、赤いパジャマに描かれたクレヨン画タッチのオレンジたちが、熱帯の雨に打たれたみたいに汗でグッショリになつている。まだ冬の寒さが充分残つていい季節なのに！

「つたく、空氣読まない異常気象め！」

野蛮な南風に靡くカーテンを眺めながら叫ぶと、ふと、携帯から朱音に電話するあたし。

話が済むとあたしは、汗で重くなつたパジャマを脱ぎ捨ててシャワールームへ向かう。

オレンジと一緒に熱帯雨に打たれたような身体のべとつきを、水のシャワーで洗い落とすあたし。心臓がビクッていつけれど、その震えはすぐに心地いい冷たさに取つて代わる。

風邪をひかないかつて？ それはもう、この温暖化が穩便に収束するのと同じくらいありえないこと。あたしは生まれてこのかた、病気というものを経験したことがない。もちろん、重いものから軽いものまで、全部ひつくるめての話。

おかげさまで幼稚園でも小学校でも、『健康優良児』なんて賞賛されたもの。

シャワールームから出て部屋に戻ると、あたしはドレッサーの前に立ち、まずツインテールに乱れがないか入念に確かめる。

そうあたしは、寝るときだらうと入浴時だらうと、それぞれ耳の上で結んだこの一本のしつぽを解くことがない。これを解くとあたしの人となりから『元気少女』のレッテルが消えてしまうから。いつか木泊兄さんに、とっても利発で知性的だね なんて評されたこの大きめな瞳も、髪を解くとたちまち『たおやかで心優しい少女の知性的な瞳』に見えてします。

そう、あたしは常に強くなければいけない。もう……身近な人が兄さんみたいなことになるのは嫌だから。

時刻は五時半。すっかり夏色の朝焼けが部屋を染めていた。両親が起きる前に家を抜けてしまおつ。

あたしは赤いミニプリーツスカートを履き、白い袖なしブラウスのボタンをはめると、襟元からスカートと同色の菱型ネクタイをぶら下げる。あたしはどうやら、衣服のどこかに、常に赤い色がないと落ち着かない性質らしい。

鬪魂、情熱……そんなものを想わせるこの色。思えば制服のスカーフも赤だから、あたしは落ち着いて学園生活を送っているのかもしれない。

そつと玄関を抜け出すると、家の壁に残った落書きの跡を無視しつつ、熱い風の吹き抜ける細い路地をゆく。シンと鼻をつくのは、家々の庭に植えられた木々が放つ新緑の香り。

この辺りは本当に、角を曲がれば景色も変わるから、まるでパノラマそのもの。

石垣の形状とか、家の壁とか垣根の木の種類、それから道の隅に

置かれたプランターの花の色……そんなほんのわずかの変化で、鎌倉の路地はガラリと色彩を変える。

せわしい学生生活を送っていると素通りしてしまいがちだけど、いつもやつてなんの目的もなく歩く路地は色々と見所があつて楽しい。

蜜を求めて黄色い花に飛んできた蜂に向かつて、

「まだアンタが出てくる季節じゃないの」「なんて忠告したりして。

ようやく列車と踏み切りの音が南風によつて聞こえてきた頃、あたしは見慣れたセーラー服を着た、やっぱり見慣れた人影に思わず足を停めた。親友の一人、図書委員長の紗那が自分の家の手前にしゃがんでいる。

「あ、紗那、どうしたのよ？」「こんな早くに」

あたしに振り向くと、紗那はかなり怪訝な顔をしなさる。

「み、巫彩！？」「こんな時間にそんなカッコで何してるの…？」サボリ！？」

親友とはいえ、そのお決まりなセリフにはほんの少しカチンときた。

「いいじゃない？朝になつたらみんながみんな、制服着て学校行かなきやならないなんて、決まってるわけじゃないんだし」「学校、つらいの？ やっぱり、朱音さんのこと…」

その胸の底から心配そうな問い返しに、今度は紗那に申し訳なくなるあたし。

「『めん紗那。 そうじゃないのよ。 ちょっとあたし、兄さんのことがあるから学校のことに関してナーバスになっちゃつて』」

「木泊さん…」

「あ、あたしは大丈夫だから、ね？ ただ今日はちょっとさ、会いに行かなきやならない人が居て」

「もしかしてカレシい？ え、なにそれ、学校を抜け出して逢引なんて口マンティックすぎない？ まあ今日は、あつたかいしね、恋も芽生えちゃうのかな」

やつとその柔らかな顔を可憐な笑みで緩めてくれる紗那。この子
ときたら、その風体にも性格にも尖ったところが微塵もなくって、
前髪を真ん中で分けて左右に流し、ウエーブのかかった後ろ髪と合
流させているその髪型は、遠くから見ると華奢な祠のよう。

あたしはホツとしつつ、恐らくあたし以上に心配されなきやなら
ない紗那の隣にしゃがんだ。

「紗那こそ、こんな所で何してんのよ？ 具合でも悪いの…？」

具合が悪いにしては、顔色もいいし機嫌も良さそうだけど。

「ああ、心配してくれたの？ ありがと でも大・丈・夫。ほら、
あれ見て」

紗那の指差した先は、垣根と家の隙間だった。

鄙びた板張り造りの古民家、それが紗那の家。その焦げ茶色の壁
と深い緑の垣根の狭間で、華奢なボリジの鮮烈な青がイサエを放つ
ていた。違う。異彩を放っていた。

『みさい』じゃなくて『みさえ』。それを何度も何度も人に
説明してるうちに、『色彩』が『シキサエ』、『油彩』が『ユサエ』
『なんて思えてきてしまつ今日この頃。

朗らかな風に吹かれ、ボリジは星型の花びらを焰のように靡かせ
ている。

「あれはボリジね？ 花言葉は……安息、だつたかしら」

あたしのマセた指摘に、ちよつぴり恥ずかしそうに微笑む紗那。
「あ、花言葉、安息なんだ？ 知らなかつた。じゃあピッタリね
「え？」

「道のね、石畳の隙間に咲いてたの。踏まれたら嫌だし。へへへ、
だから安息の地に移してあげたのよ」

「そつか……。あたしね、アスファルトの隙間なんかに咲いた花を
見て癒されるのは自己満足だと思つ。当の花たちは、そんな所に咲
きたいわけがないでしようよ」

「うん。そうよね巫彩。私もそう思う。生きづらい場所は、苦しい

よ。花も、人間もね
じんと胸が震えた。

微笑ましく、でもどこか寂しげにボリジを見つめるその横顔を、
あたしは深々と覗き込む。

「紗那……だから一人で、暮らしてゐるわけね」

紗那は何も言わず、こちらを向くこともなく、ただコクリと頷いた。

紗那の両親は今、東京で暮らしているという。

もちろん両親は、一度は紗那と一緒に東京へ越した。ところが紗那は都会の生活に馴染めなかつたらしく、苦肉の策でこの鎌倉に一人、舞い戻つたんだとか。

紗那が自己を省みるように話しだす。

「朝日がビルの上から出てくる世界。コンクリの上を移動するだけの生活。……ノイローゼみたくなっちゃつたから、私は吐いたり、叫んだり、暴れたり」

「たしか有名なアルパ奏者の人もそうだつた気が……。でも紗那を一人にするなんて、悪いけど冷たい両親だつて思わざるを得ないわね」

「仕方ないよ。共働きなんだし」

「でもさ、お母さんのほうは別に働かなくたつて生活には困らないんでしょ？」

「うん……。でも生き甲斐がどうのこうのって、言つてた」

トーンを暗くしてゆく紗那の声。あたしはまた、あの理不尽な憤慨に胸を焼いた。

「ああホンツト馬鹿馬鹿しそう！ 生き物つていうのは子供を産んだらその子供だけに死くすもんなのよ！ 猿だつて自分の子が撃たれそうになつたら身を挺して庇つし、クモなんて子供に自分を食わせるのよ！？ 子供よりも自分よね～とか抜かすなら子供なんか産まなきゃいいのにっ！」

「それを言つちゃ身も蓋もないよ」巫彩、子供を作るのは人の本能なんだし」

「残念だけど紗那、イマドキそんな殊勝な本能で子供を作る親なんか居ないって。出来ちゃつたから産む。みんなが産んでるから自分も産む。まるでテレビやパソコンを欲しがるみたいに、『子供欲しいです〜』とか抜かず大人ばっかり」

「テレビで見たことあるかも……」

「で、その結果、不幸になるのは馬鹿な親たちじゃなくって、……あたしたちよ」

「…………」

俯いて黙りこぐる紗那の弱々しい肩。

なんとかあたしが守つてあげられないかしら？ と心底思うし、実際、あたしを紗那の家から学校に通わせて欲しいと、あの義両親に頼んだこともあった。

まあ、他人の家から学校に通うなど、私たち夫婦が育児放棄をしていると思われるザマス なんて速攻で断られたけど。

紗那と一人、相も変わらぬパノラマのなかを行くと、あたしの心は微かな愁色を帯びる。

なぜなら……まつさらな朝日を受けて優しく光る石畳が、生きる喜びを謳歌するような縁を放つ垣根が、永遠にあたしたちを閉ざしてしまいそうな家並みが、隣の少女を我が者のように受け容れきつているから。

この子に都会は合わない、と。

朱音だけじゃなく、紗那も守りたいと思わずにはいられないあたし。けれども彼女には眞子がついているし、紗那是朱音と違つて、図書委員長として立派に学校生活をエンジョイしている。

あたしのこの体が一つしかない以上、冷徹にトリアージするよりほかないのが悔しいつたらない。そう、紗那が黄色なら、朱音は赤なわけだから。

灼けつく太陽の熱を、ふと頭上に現れた木々の葉たちが和らげ、すでに軽く汗ばんでいたこの体を安らげてくれる。

それは、バレー部キャプテン・多岐川眞子の家の庭木たちが、白い壁を越えて生い茂つていてるから。

家の規模としてはあたしの住むプラスチック箱と大差ないけれど、こつちはとにかく庭が広くて、家の造りも縁側あり土蔵ありの昭和家屋だから、ずっと金持ちに思えてしまう。

ふと、立ち止まるあたし。

「ねえ紗那、やっぱり多岐川家に事情を話しても、住まわせてもらえば？　あの土蔵でもなんでも、一人で暮らすよりはずつといいわよ」

紗那はあたしのすぐ前まで歩くと、そつと悲調を止めて俯く。
「ダメだよ。眞子の家だって、お母さんと一緒に大変なんだから…」

…
「そや。眞子は鍵っ子で、彼女が紗那と仲良くなつたのも、眞子が紗那を自分と同じ『鍵っ子』だと思い込んでいたからだつた。鍵っ子同士仲良くしよう　つて。

つまり紗那は、自分が一人暮らししていることを眞子に明かしていない。

紗那がチャイムを押してしばらくすると、眞子が白い壁に設えられた木戸を開けて、思い切り良くなつたかい！　どうしたのよこんな早くに

「うわーっ、あつたかいあつたかい！　どうしたのよこんな早くに二人そろつて！？　サボリ！？　まあいい天気だもんね！　二十三度だよ二十三度！」

二十三度……三月の気温としてどうなのよ？

紗那も眞子も、この暑さを『あつたかい』なんて表現して、いつもどおりに紐のセーラーを平然と着ているんだから不思議なもの。まあ、暑がりすぎるあたしのほうが可笑しいんだろうけど。

それはそうと、紗那と眞子が同時に視界に入ると、見事な好一対が面白い。

髪先のウェーブとか赤い靴がとても少女趣味的な紗那に、女の子らしいものは何一つ身につけず、白いスニーカーと肩までのシャギーがすがすがしい眞子。

でもあたしは思つ より女のフェロモンを多く持つてゐるのは眞子のほうだつて。

装飾が少なければ少ないほど、少女の《個性》が引っ込んで《性》が強調されるわけで。眞子自身、その飾り気のなさが逆に自分の美質を剥き出しにしていることに気づいていないのがまた、魅力を大きくする。

「ねえ眞子、巫彩つたらね、これからデートなんだつて」

「さ、紗那っ！ だから違うって言つてるでしょッ」

「フーン……。そういう割にはオメカシしちゃつてるじゃなーい？」

「眞子まで！ こんなの、いつもの私服でしううがあ……」

三人で歩く路地は、少女一人の甘い香りが木や風や土の匂いと混じつて、とても心安らぐ時間 それは朱音と出会つ前となんにも変わらなくて、少し前の日々にタイムスリップしたみたいだつた。

「紗那、眞子……、今日は始業まで時間があるわよね」

ためらいがちな言葉に、眞子が気さくに食いついてくる。

「んつ！？ これは久しぶりに行きますかつ！」

「懐かしいね……私も行きたい」

紗那もノリ気のようだけど、今日のあたしには違つた理由があつた。

「今日はさ、あんたたち一人に」 その先を言つのにほちよつぴり勇気が要つた。「朱音に会つて欲しいのよ」

はたり。

止まり果てる少女の靴音。

束の間の沈黙を破つたのは眞子だった。

「え……いいの？ 私たち、纖細な子の扱いとか判らないし」

「危ないよ。もしも朱音って子を傷つけちゃつたら、巫彩一生後悔するよ」

「あー、そもそもね、あたしがダチとつるんだったら、朱音があたしと付き合いにくいだろうってことで、今みたいに距離を置くようになつたわけで。万が一よ？ あんたたち一人が朱音を気に入つたとしたら、それで朱音もあんたたちを気に入つたら、単純に四人組になれるってわけよ」

あたしの単純な提案に、紗那も眞子もいぶかしげな顔をする。

「うーん、そんなに上手くいくかなあ？」

「ちょっととちょっと、そんな単純な……」

「だーかーら、ね？ あんたたちは『偶然そこに居合わせた客』になればいいのよ」

あたしは指を立てて得意げに提案した。

哀しき鎌倉Ghosts（後書き）

私は鎌倉へ行つたことは一度もありません。まあ、空想上の鎌倉と
思つていただければ幸いです。

少女たちの想い（前書き）

穏やかなパートほど時間がかかりますね～

少女たちの想い

喫茶店『イルームの森』

あたし・紗那・眞子の三人で毎日のように通つたこの店は、扉の脇にポツリと置かれた看板によつて、からうじてそこが店なんだと判る。

無限に続くような入り組んだ路地に忽然と現れる店。それはまさに森の中の喫茶店のよう。都会と違つて、家々の一つ一つが日本らしい落ち着いた佇まいをしているから、余計に神秘的だと思つ。扉を開けるとカラーンコロンと乱れ鳴るカウベルも、森の牧場さながら。

あたしは一人を電信柱の影に隠して、一人で店に入った。

「朱音、やつぱり待ち合わせ時間には早く来るのね」

「あ、おはよう巫彩。……いいお店」

カウンターの朱音があたしに振り向きつつ、この落ち着いたブラウントーンで統一された空間を見渡す。

四方を民家に囲まれているから日当たりが悪くて、扉のある側も、窓の前にはいちいち観葉植物が置かれているから余計暗い。

その代わり、温和なアンティークランプがテーブルの上に置かれたり、天井から吊るされたりしているから、店全体はべつ甲のようなブリキのような、どうにもレトロな情緒に満たされている。

「ねえ巫彩、ここって電気を使ってないのね」

朱音が早速鋭い指摘をする。あたしたち三人組といえば、そのことに気づくのに一ヶ月も通う必要があったというのに。

「おーう、これはこれは鋭いねえ新入りちゃん！」

喫茶店のマスターが愉快にはしゃぐ。髪型が肩までの飾り気ないセミロングであることを除けば、あの眞子に顔も声もとてもよく似てこるマスター。

まあ当然だわね。だってマスターの名前は多岐川優、多岐川眞子とは正真正銘の母娘なんだから。

母子家庭の眞子と朱音、親と離れて暮らす紗那、そして義理の両親といがみ合う日々を送るあたし。よくここまで見事に特殊な事情を持つた子供が勢ぞろいしたと思う。

……もちろん、『特殊』っていうのは世間一般の目からすれば、の話。あたしは正直、片親だったり、親が居なかつたりする程度では特殊でもなんでもないと、思っている。

世の中にはもっと、誰からも理解されなければ氣づかれかもしれない苦しみを抱えている人が居るんだって、木泊兄さんのことによく解ったし、これから真紗耶さんやその幼馴染と会うことで、余計にあたしはそれを思い知ることになる……。

「し、『新入りちゃん』……」

纖細な朱音。マスターの気さくすぎる対応に困惑してるのかしら？

「朱音、あのね、この人ってね、脳が腐」

「嬉しい」朱音があたしのフォローを遮る。「そんなふうに気さくに呼ばれたこと、なかつたから」

「ははははっ！ ほーら、頭のイイコは私の良さがすぐ解るつ！」豪快に笑うマスター。

なるほど、こういうガサツだけど大らかな愛情を持った人に、朱音は食べていたのかもしね。

あたしはホッとして、朱音の隣に腰掛けると　　ああ、この感じなのよね、と胸が落ち着く。三人して通ったのは三ヶ月間くらいなのに、それにここに来るのはちょっと久しぶりなのに、じぶんち自分家以上にこの体がこの場所に憩いを感じているのが判る。

「マスター、今日、この朱音をここに連れて来たのはね

本題に入ろうとすると、マスターにチッチッと制された。

「一いつ、朱音ちゃんは食べる途中でしょーが！」

「ああでも時間が……」

「黙らつしゃい！ 育ち盛りの『ヒトツ』で、食べるついでのは何より神聖な行為なのさつ！ ハツハー！」

これが多岐川優という人。

思えば三人でここへ通っていたとき、あたしたちが食べているのをこの人が本当に幸せそうに眺めていたのを、あたしは想い出した。てっきり小食だと思っていた朱音が柄にもなく、ブラウンのサンドwichを頬張っているのを見て、マスターの言葉が正しいことをひしひしと思い知るあたし。

朱音はよっぽど美味しいのか、軽い茶番も気にせずに黙々と食べている。

「サンドwichってこんなに美味しいものだったのね」

「はあ～、変わったコだねえ」

マスターのため息の理由は、朱音の食べているサンドを見ればすぐ解った。

「この少女はよっぽどの草食なのか、トマト、レタス、アボカドの挟まったサンドを実際に満足そうに食している。もちろんこんなサンド、メニューにはないわけだけど、マスター特製の純白なタルタルソースが塗つてあるからまあ、からうじて味はあるわけね。

「パンも野菜もソースも最高。つちの母にマスターの爪の垢を煎じて飲ませたい気分」

朱音のべた褒めぶりに、手を組んで田をウルウルさせつつ大喜びするマスター。

「うはははは！ やっぱりこの『見る田』があるわ。野菜はゼーンブルの庭で採つたやつだし、パンもタルタルソースも自家製だからね」

眞子の家の広い庭。あそこには何種類もの野菜が生き生きと栽培されている。ただ、そのせいでも虫が多くてたまないと、眞子はよくいじぼしているけど。

朱音が食べ終わって、その小さな口を甘くない紅茶でうるおすのを見ると、あたしはやつと本題に切り出す。

「マスター、ちょっと、『営業中』の札、外しててくれる？ どーせこの時間は客少ないんでしょ？ 十分か十五分でいいから、お願い」

「ま、いいけど……」

マスターは多分、あたしが朱音と大事な話があつて、それで客が入ってきたらマズいから、札を外せと言つているんだと思ったに違いない。

けど、それは違っていた……。

「オーライ、裏返してきたよ」

マスターが戻つてくると、あたしは朱音を横目で見つめ店の隅。レトロな光を発するジュークボックスやら、売り物のジャムの陳列された棚やら、そんな物に紛れて実に目立たないアップライトピアノを指差す。

「朱音、あれ、弾いてみてよ」

「え？」

「早く！ 学校始まる前に、ほら！ あんたがいつも音楽室で弾いてた曲！」

「巫彩、あれ聴いてたの！？」 文字通り、頬を朱色に染める朱音。時刻は六時十五分。八時の始業時間には余裕で間に合つといったところ。

朱音はしばらく黙り込んだけど、首を横に振ることも、否定の言葉を発することもしなかった。

実はあたしは以前、部活の長引く紗那と眞子を待ちわびて校舎をウロついていたとき、音楽室から不思議なピアノの音が響いてくるのを聴いた。

まさにそれが朱音の弾くピアノの音で、リリカルな、少し病んだような調べが、茜色に染まる世界と相俟つて、この胸に強い印象を

残したのを覚えていい。

音の響きからして、あれは現代音楽といつやつだと直感したたたし。だからこそ今、あたしはマスターに《営業中》の札を外させた。もしも客がやって来て、その客が朱音のピアノを聴いてしまったとしたら、マスターが犯罪者になつてしまふから。

著作権が切れた音楽を演奏して客に聞かせる、これは違法にならない。けれども著作権が消滅していない音楽を営業中に演奏した場合、最悪の場合店主は御用！（実際、ビートルズの歌を客の前で弾き語りして逮捕された人が居る。）

そして現代音楽となると、作曲者が亡くなつて五十年以上経つていないことが多い。だから札を外すことはマスターを守ることになるつてわけ。

朱音はそつと瞳を閉じつつ立ち上がり、涼しい動作でピアノの前まで移動。コトントンと蓋を開けると、あの田と同じ曲を奏で出した

ギリギリの叙情……というのかしづ。二十世紀、メロディイとかハーモニーより、リズムとか音色が重視されていつた西洋音楽。この曲もまた調がなければ解り易い喜怒哀樂もないけれど、聴いていて割りとフィジカルに心に沁みこんでくるといつうか、不思議なリリズムが充満している。

マスターの目が光つた。普段、あのピアノは著作権の切れたクラシック曲を、マスターが客に弾いて聴かせるためのもの。それだけに、音楽にはそれなりに精通しているといふことになるわけだから。

曲が終わると、マスターは大雑把に拍手しながらピアノの前へ歩み寄る。

「いいんじゃないかい？　ずぶのアマチュアと違つて、音の一個一個に重みがあるしさ、ショニトケの二番を涼しい顔で弾いちゃうってことは、技術も相当なものだね」

シユニトケの「一番」……といふことは、シユニトケつていう人が作曲したピアノ・ソナタ第一番ってことかしら？

朱音はピアノの前で俯いたまま

「あの私、ヒアノなんて自分一人で楽しむもので……。人に褒めてもらえるなんて……」

元に駆け寄る。

「朱龍！ 金鑼部でヒアノ担当してみれば！？」
「そうすればば？」

目を見開いてあたしを見上げる朱音に、
そうすれば
の続きが
言えなかつた。

「 うう、そりゃあ、うちの義両親に朱音を認めてもらえるか
うう、なんていふ理由で、あたしが朱音にそれを薦めてるなんて……。
うう、そりゃあ、あのウン「義両親に朱音と付き合つ」とを認め
てもらえる、だろ? 中里」

「ああもう素晴らしい！」マスターが見事にやらかしてくれた。

୬୮

朱音は立ち上がりつて田を潤ませる。

「巫彩つ！貴女、両親に私の付き合いを反対されてたの!?」
「こうなつたら仕方がない。あたしの本音を話すより他にないでし
ょう。

፳፻፲

「…………。ええ。悪いのは両親よ。友達が居ないことだって、地位がないことだって、あたしは別に恥だなんて思わない！ でもそんな常識、あの両親には通じないのよ！ 一人息子が自殺未遂したことでナーバスになつてて、引き取つたあたしをよっぽど完璧に育てたいんでしようよ！ つたくバカバカしい！」

「そんなんつ
……」

朱音が穏やかじやない冷氣を発すると、マスターがあたしの肩に手を乗せて講釈を垂れる。

「ほりほり、辛氣臭い顔すな！　この中里はな、血のつながらない両親との葛藤に毎日毎日苦しんでんだ！　その上、狭山朱音、君との付き合いにまで口を出されて死ぬ想いなんだよ！　それでもコイツは文句一つ言わずに、それどころか君に何も知らせないまま、君を義両親に認めさせようつて、ケナゲに努力してたんだ！」

「ああ、あんたが今それをものを見事にブツ壊してくれたけどねっ！」

口を挟むあたしを無視してマスターは熱弁をふるい続ける。

「中里の苦労を知らないままだなんて、それじゃもう中里がパンクしちまうよー。コイツはこんなちっちゃな体でさ、実の両親に捨てられた苦しみと、義理のお兄さんの悲しみと、それから義両親の重すぎる期待まで背負わされてるんだ！　私もう見てらんなくってさあつ……！」

その場にしゃがみ込んでしまつマスター。

「巫彩……」

朱音も泣きそりにあたしの名前を呼ぶと、マスターは縋るよつて朱音を見上げた。

「狭山朱音、君しか居ないんだ……。つちの眞子はね、昔に父親と、つまり私の糞主人と色々あつて疲れてるしさ、上田紗那つて子も、なんか事情があるっぽくつて、いつも寂しそうに笑つてる……」

とうとうあたしに友達が居ることをバラされてしまったけど、もう憤りは覚えなかつた。

「だ、だつて巫彩は友達居ないつて……」

なんて戸惑う朱音に、冷静に説明を始めるあたし。

「この際だからもう全部話しちゃうけど、あたしには紗那と眞子つていうダチが居てね。朱音とお近づきになるにあたつて、二人とは距離を置かせてもらつてたつてわけ。でもこれはね、いつか朱音がもつともつと精神的に落ち着いたら話すつもりでいたことだから、

時期が早まつただけつて感じよ」

朱音は少し俯いて、ゆっくり胸のうちを言葉にし始める。

「巫彩は……友達の居ない同士って、ウソをついて私に近づいた……でもそのおかげで、私はすんなり巫彩と仲良くなれた……。それに、自分だつて色々つらいのに……両親が私を気に入つてないことを私に聞かせないまま……私が両親に認められる方法を考えてくれた……」

「そうだろ？ こんなのは、十三歳の口がする氣遣いじゃないってのさ。普通ならとっくに親に相談ものだよ。けどこの口にはさ、相談できる親すら居ないんだ。だからきっと自然に、自分一人で解決策を考える口になつた……。こんなふうにさ、女王様みたいに、人のことを考え、この人のことも考えなんて、イイ年した私にだつてできないつての」

マスターが追い風を吹かせると、逆に朱音は消極的に首を横に振つた。

「でも……でも私が居なかつたら巫彩、両親といがみ合わなくつて済むんじやないの？ それだけが心配で」

「それはっ」

あたしが言いかけたとたん、入り口のほうから声が響いた。

「朱音さんさ、巫彩が必要でもない相手のために、そこまでのことをするようなバカだと思う？ 巫彩はさ、あんたのことが大好きなんだよ……あんたと仲良くしたくてしたくて、たまんないんだ」

「朱音さんっ……、私、前から貴女のこと見てた。優しそうな子だなつて……友達になれたらなつて……」

このブラウンの薄明かりに溶け込むような滋味深い笑顔を浮かべて、眞子と紗那が立つていた。

「貴女たちが、紗那さんと眞子さん……？ はじめまして。狭山朱音です。私が……私が貴女たちの大切な友だちを取り上げちゃつたみたいで、すみませんでしたっ」

「こちらも、このブラウンの世界に溶け込んでいる朱音。

ただそれだけで、朱音・紗那・眞子の三人に緩やかな絆が生じるのが判つた。

これがあの炎天下の出来事だったとしたら、こうはならなかつたでしよう。この仄暗い世界が、三人を繋ぎ合わせる役割を果たしたんだと思つ。

こう言つと穩当じゃないかもしれないけれど、紗那と眞子はネクタだと思つ。もちろん、それはネクラつていう言葉が『明るく見えるが実は暗い』という意味だつていうことをあたしが知つた上での評価。このアンティームな空間が、紗那と眞子の暗い優しさを浮き彫りにして、それが朱音に伝わつたんだと。

ほら今だつて、紗那も眞子も、決して年相応の軽薄な笑顔は朱音に向けていない。要するに朱音はそういう、若者たちが編み出す、早くつて、軽くつて、薄っぺらで、身を隠す場所なんてないくらい明るすぎる世界が苦手なんだろうから。

それに。あちこち置かれたランプたちの、ゆらゆらと不規則に揺らめく炎、これには人の心を落ち着かせる作用があるとか。みんなで優しく、慈悲深くなれる、こんな空間を生み出したマスターを、あたしは改めて尊敬していた。……まあ、人情深いだけに、さつきみたいにオセッカイなことも時々しでかしてくれるわけだけだ。

とりあえず、といった感じで席に着くあたしたち。

あたし・眞子・朱音がカウンターの前に座ると、マスターも涙を拭いてカウンターの向こうへ戻つた。

そして朱音の気を引いたのは、マスターを追うよつにカウンターの向こうへ回つて、パソコンの前に座る紗那。第三者がこの情景を見たら、紗那がこの店の仕事を手伝つてゐるよう見えます。『え、中学生がアルバイトしちゃいけないんじや……』

朱音が当然のツツコウをするとい、眞子が氣さくに朱音に笑いかける。

「朱音もそう思うでしょ？でもこれ仕事してるわけじゃないのよ。紗那ん家ちつてね、ネットがないんだって。だから紗那がネットする場所つてここしかないわけよ」

そう、紗那の両親は『子供一人の生活にインターネットがあつては情操上よろしくない』なんていう、これまた糞みたいな理由で紗那にネットの禁止を強いていやがる。

ただ、紗那が一人暮らしだと知らない眞子とその母の手前、その事情を朱音に話せないのがむず痒かつた。

当の紗那是涼しい顔で、ビーカーに入れた冷やっこを食べながらパチパチとＰＣを打つている。

「こうなつたらね、紗那にはなに言つてもムダ！」

あたしが『冗談めかして朱音に説明すると、意外にも紗那是フランクに声を発した。ただし、手は動かしたまま。

「そんなことないつてば～。ネットできるの、いじしかないんだもんー」

「メル友……とか？」

朱音が消極的に尋ねると、紗那是少しムツとして手を止める。

「もーう、みんな最初はそう訊いて来るんだから～。違うのよつ、小説投稿サイトにね、通つてるの」

と言つてまた手を動かし始めて沈黙。

こんなお粗末な説明じや朱音もワケワカダメダメだろうと、あたしが軽く補足する。

『紗那つて、小説を投稿したりね、ウェブに投稿されてる小説の作者に、感想を書いてあげたりするのが趣味なんだって』

「素敵……」

朱音の吐いたそのたつた一言に紗那是ひびく反応して目を輝かせた。

「やだ、嬉しいな　こうやって見るとね、つまんない小説が絶賛の嵐になつてたり、逆にすごくいい小説に感想が全然ついてなか

つたり、結構不平等っていうか、運次第な世界なの。だから私は、恵まれない人たちに感想を語つてあげたくって」

朱音はとうとう身を乗り出して紗那に感激の目を向ける。

「紗那さんす」「……私もネットやってるけど、あれって流行第一の世界なのよね。トレンドと関係なく生み出されたものは、まず誰にも注目されないけど、そんな中にも埋もれさせちゃいけないものがたくさんある……。紗那さんは、それを掘り当てる、作者に報いを与えてあげてるのね。すごく素敵なことだと思う」

朱音がこんなふうに長い言葉を話すのは初めて見たし、紗那が嬉しく泣きする顔もまた、長い付き合いながら初めて見た。

「うつ……や、やだ、嬉しいな。そんなふうに言われたの初めて。巫彩だつて眞子だつて、面白半分で眺めてるだけなんだもん」

「紗那」「めんつ……」

あたしは正直、紗那がそこまでのことを考えてネットをしているとは思つてなかつた。

一方、眞子のほうは不服そうに頬杖をついている。

「ちょっとちよっとー、私が面白半分で見てんのは紗那のその朝食なんだけど」

確かに冷やつこをビーカーに入れて食べるというのは、どう考えても異常としか思えない。

「だつてえー、こうすると美味しいんだよー？」

……特に理由はないらしく、あたしたちが知り合つた頃にはすでに、紗那はこの謎の朝食を摂つていた。

「どーでもいーけどさ、中里、どーせ何も食つてないんだろ?」

「そうだった。腹が減つては戦はできぬつてやつね」「やつぱりデートなんだあ 『いくさ』だつてえ」

丁寧に突つ込んでくる紗那を無視して、あたしはマスターに「いつも」とだけ頼む。

しばらぐして「はいよ」と出されたのは、白いモチモチパンに地

鶏の胸肉、ベーコン、レタス、トマトをサンドした、肉食系のあたしにま匹ッタリの一品。

もちつとしたパンの後に、シャキッとしたレタスが歯に触れると、いつ段取りが見事で、その後に食べ応えのあるベーコンとトマトの味が口に広がる。

特に多岐川家の庭で、鎌倉のみずみずしい太陽を浴びて育ったトマトは天下一品。もう甘くてみずみずしくて、ピザにパイナップルを乗せるのと同じ感覚になる。

「アーヤッぱり美味しいわ。」のトマト、普通に売っていると味が全然違うのよ。貴女たち母娘の性格が出るのかしら?」

マスターは得意げに笑う。

「そりや そうじ。何があつても笑顔を絶やさない! 太陽みたいな私たち母娘の『氣質』をトマトたちも受け継ぐんでしょう!」

「どーだか」

娘の眞子は母の熱弁に軽く引いている。

「オイオイ、少しさはこの偉大な母に感謝するんだな! 電気を最小限しか使わないこの店がどんなに強いかワカラんかえ?」

「ワカンナーライ」

「くつ……いつからこんなナマイキな娘に 電気がなくとも営業できるってのは凄いことじやないか! ?」

「おふくろつたら相変わらずファンタジー思考なんだから。電気がなくなるなんて、そんなことないとと思うけどね」

「そりやどうかな? 近い将来、どつかの原発がやられて『じりんよ。計画的な停電とか、あるかもしないぞー?』

「「「ありえない」」

「これはなんと、朱音、紗那、眞子の声が重なった。

あたしはまあ、数年後くらいに今マスターが言つたような事態が日本に起こるような気がするけど……。

サンドウイッチを平らげて薰り高いハーブティで喉をうるおすと、

あたしは席を立つて紗那と眞子を真摯にみつめる。

「ねえ、紗那、眞子……紗那のボランティアが済んだら、」

「ボランティアって……」突っ込んでくる紗那と、

「ううん、それって立派なボランティアよ」生真面目に紗那を立てる朱音。

あたしは改めて、

「ボランティアが済んだら、朱音を送ってくれないかしら?」と一人に頼んだ。

「そんなつ、悪いよ」

朱音は消極的に遠慮するけど、眞子は大爆笑。

「はつははははは! 行き先はおんなじ学校だつてのに、なにが悪いんだか!」

紗那もキーボードからいったん手を離すと、からかいつような顔で敬礼してくる。

「了解つ! デートに行く巫彩に代わつてしつかりエスコートするから

「だからデートじゃないつてのよ……」

この期に及んであたしをからかい続ける紗那に背を向けて、あたしは店を後にした。

「つたく紗那つたらデートデートつて、自分がカレシ持ちだからつてつるさいのよ……」

他愛ない独り言を吐きながら歩く路地。紗那は最近、カレシができたとかで大はしゃぎしていて、幸せなのはいいことだけど多少うるさい。けどそのうるささがまた可愛かつたりするんだけどさて、と。

家と家の隙間に江ノ電が垣間見えるようになつてみると、あたしはこれから道のりを確認した。

いつもは途中で下りて学校へGOだけど、今日はそこを降りないで鎌倉駅まで行って、横須賀線に乗り換えればいいわけね。

真紗耶さんの雰囲気からして、あの人気が幼馴染つて人と一緒に後ろ暗い生き方をしていることは何となく判る。けど兄さんことを知つていて、なおかつそれをあたしに教えてくれそうなのは真紗耶さんその他に居ないわけだから、逃げるわけにはいかない。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか！

ラッシュアワーのスカ線に乗ったあたし。といつてもラッシュ真っ只中の時間ではないらしく、座席は埋まっているもののギューギュー詰めの状態というわけでもない。

しばらく江ノ電にしか乗つていなかつたこの体は、その速さ、その大規模さに少し戸惑つていた。

私服姿のあたしを訝しがる奴も居るかと思ったけど、幸い、小学生だとでも思つてくれているのか、おかしな目を向けてくる乗客は居ない。

おかしな目をとある人物に向けることになつたのは、あたしのほうだつた。

列車が揺れて吊り革につかまる人たちも揺れるたび、チラリ、チラリと垣間見える俯いた少女と、その後ろで汚らわしい快樂の笑みを浮かべる髪面の中年男性。

「ちょっと、失礼しまーす」

しばし人の群れを搔き分けて進むと、……ハッキリ見た。中年男性の手が、少女のお尻へ伸びているのを。

周囲の乗客を見回してみると見て見ぬふりなのか、それとも本当に気づいていないのか、みんながみんなあさつての方角を向いている。

そしてその光景に、あたしは今の日本の方程式を見た。
悪い奴が居て、そいつによつて苦しむ人たちが居る。そして大多数の人間はそれに気づかないふりをするか、あるいは本当に気づかないか、そのどちらか。

あたしは中年男性の手を握り締めると、ぐいっと少女のお知りからその手を引き離した。

「な、なにするんだあーーー？」

頭に血が上つたあたしほど、この世で手に負えないものはないで

しう。再びツインテールをツノに変えるほど勢いで、中年男を睨み上げる。

「それはアンタに弄ばれてたその子のセリフでしょー? わあて、駅に着いたら署までついてきてもらひわよー!」

「は、離せえ!」

男は必死であたしの手を振り払おうとするけど、やいぢの中年男の腕力がこのあたしに敵うはずもなく、かえつて腕をひねつてその体を屈ませる結果になつた。

「力で女をねじ伏せようつたつてそういうかないのよー! 少女や幼女なんて抵抗力のないオモチャだと思つてんでしょう! ? オアイニクさま! あたしみたいな怪力も居るんだつてこと、そのチンケな肝つ玉に銘じておくのねー! ホンつト、あんたみたいなのが居るから! 」

そうよ、あんたみたいなのが居るから、眞子は……。

「ひぎーつ! 僕が悪かったす! 何でも言つこと聞きますから! かんにんしてえーつ! 」

情けない叫びをあげる男。弱い者を貶めて生きる奴つていつのは概して、自分より強い者にはく口へ口する。

「もう大丈夫よ。でもできれば警察までついてくれると嬉しいかも」

被写者少女へ目をやると、彼女は全身を凍りつかせたまま、からうづじてあたしに向かつて頷いてみせた。

横浜に着くと、あたしは痴漢を引き連れて駐在所へと向かつ。その後ろを、とぼとぼとついて来る少女。
駐在所の位置は知つていた。ここは何度か兄さんに会いに来た街だから。

幼い頃は横浜というと、『ブルーライトヨコハマ』や『ビューティフルヨコハマ』なんかのイメージから、もつと海の匂いに満ち溢れた、ちょっとエキセントリックな街を想像していたけれど、少

なくとも駅を出でしづら歩く程度では、普通の都会の域を出た風情は見られない。

駐在所に着いて、庶民的な音を立てるガラス戸を開けると、少しだけ見慣れたお巡りさんが深いため息をついた。

「へえ……。まーた痴漢かい」

「ま、そーゆーことよ。おり、座れ！」

あたしが乱暴に痴漢を椅子に座らせると、後ろの少女が暗い声で、けれども的確に言葉を紡ぐ。

「私……、この人に毎朝やられました……。」

「……」

お巡りさんは同情的な視線で少女を見上げた。

「それは災難だつたね……。今度からはこういつ田に遭つたらすぐに警察に連絡することだ」

「はい……」

すると痴漢が実に饒舌に身の上話を始める。

「いやあ、昔は良かつたんですよ。首田宗志（しゅだ・しゅうじ）つていう小説家が居てね、彼の小説が原作のアニメを見れば、幼女たちが暴行されたり殺されたりするから、欲求を満たせていたんですがねえ……。殺されちゃつたんでねー」

お巡りさんは痴漢の頭を書類でバシッ！

「この戯けもんが！ まーた『首田宗志教』かい！ いい年してアニメと現実の見境もつかなくてどうするつてんだ！？ ……終わりだなあ日本も」

首田宗志 その名前に聞き覚えはあつた。

たしか幼女や少女を痛めつけたり斃り殺したりする内容の小説を書く人物で、彼の小説を原作にしたアニメは、いつもいつもPTAの頭を悩ませていたと、あの義母が思い出話をしているのを聞いたことがある。

殺されてくれてせいせいしたザマスとも言っていた義母。その口ぶりからして、首田が殺されたのは相当昔のことっぽい。

痴漢は大袈裟に首を横に振る。

「いやいやいや！ とんでもないっす！ 俺は首田宗志教の信者とかじやなくって、ただのファンだつたでござんす！」

そのとき、だつた

「駐在さん、そいつ、殴つてもいい？」

まるで火の鳥がさえずるような、甲高くも神々しいハスキーボイスがこの背中に突き刺さる。

振り向くとそこには、得体の知れない高貴さを身に纏つた、少女とも女性ともつかない女が、ガラス戸に片手をかけたまま立ち尽くしていた。その一方で、彼女から放たれるオーラはどこまでも明るく放胆なもので、そのロイヤルさとインティメートさのハーモニーが胸騒ぎを覚えるくらい魅力的だつた。

「ああ、好きにしろ」

どういうわけか暴力行為を容認するお巡りさん。

「うヒツ」

竦みあがる痴漢にガツガツと歩み寄ると、女は微塵の手加減もない動きで彼に往復ビンタをお見舞いした。

鞭打ちの刑みたいな音が、この狭い駐在所の空気を切り裂く。

「一発目はそこに居る痴漢被害者の痛み！ 一発目は首田宗志教に傷つけられた人たちの痛みよ！」

情報は何一つなかつた。けどあたしは五感とは違う部分でこう確信していた……

……ああ、この人が真紗耶さんの幼馴染つていう人なんだつて。「ついでにそこのツインテ巫女、お持ち帰りしちゃつていいかな?」「は？」

当然、お巡りさんは女の言つている意味が解らない。

けどあたしはすぐにその意図を理解して、女に向かつて気さくな笑みをこしらえると、

「いいわよ」と答えた。

要するに、あたしのこの白い夏服に赤いネクタイ、それにネクタイと同じ色のスカートという格好が、どことなく《巫女》を連想させる「コーデ」というか配色だつていうこと。

そして彼女はきっと、あたしの名前を知つてゐる。あたしの名前が《巫彩》だとしつついて、あたしを《巫女》だとか言つてきたに違いない。

女を追うように駐在所を出ると、あたしたちは一人して、大抵の建物に平仮名で《みなとみらい》の名前に入る地帯をゆく……

「私、柴門志穂。『晩壓不堪』の廉堪紡弊順にそつくりでしょ？」

「あーあたし、二次元事情には詳しくないから」

「」いつも珍しいわね。まあ、貴女自身が二次元っぽい姿してると當然かあ

「それって褒め言葉かしら？」

「さあ」

「…………。ああ、もう知つてるでしょ」けど、あたし、中里巫彩「中里……か。木泊君の旧姓ね……。なんか色々思い出しちゃうなあ……」

と、こんなふうに気の置けない風情の会話を交わしながら。

この柴門志穂つていう人物の一種異様な雰囲気がそうさせる。

表面的には眞子と似て、明るく健康的で気さくな女。けれども志穂さんの場合は、その裏腹に何かとんでもない暗さ、陰湿さ、気難しさを隠し持つてゐる気がしてならない。

要するにこの人は、日本の女というものが持つてゐるありとあらゆる要素をいっぺんに持つてゐるのではないかしら？だから眞子みたいなタイプでも朱音みたいなタイプでもすぐ仲良くなれるあた

しへりつては、必然的に仲良くなりやすいんだと思つ。

やがて、あたしの視界には街を切り裂く大規模な川が入ってきた。

「ここまで来ればもうすぐ。

「さて、と。志穂さん、貴女が先立つてお田見えつてしへりとは、なにか打ち合わせでもしたいからかしら？」

「あーっ、なんもかんもバレバレってわけか。無理言つて真紗耶に私が先に会いたいって頼んだわけよ。そろそろ来る頃かなーってね、駅前をウロついてたら、貴女が痴漢を連行して現れるじゃない！」

後をつけさせてもらつたつてわけ」

「でも、志穂さんはあたしの顔を知らなかつたのにしへりであたしを……」言いかけて、すぐそのカラクリに気づくあたし。「あ、そうよね。こんな平日のこんな時間に外を歩いている女子中学生なんて、居ないものね」

そう、志穂さんには《あたしが水曜日しへりへ来る》という情報があつたはず。そしてあたしが中学生となれば話は早いといふことね。

「ふひひひひ。じゃ巫彩さん」志穂さんは意外にもあたしを《ちやん》じゃなく《さん》と呼ぶ。「ともかく、しへりじゃちよつとアレだから、打ち合わせが終つたらあのバーへ行きましょ」

「気づけばもう橋の上。

志穂さんが指差したのは橋の下だつた。橋の隅にある階段を下りた先に、バー『Sweet Season』のネオンが存在している。そう、今は光つてなくつて、存在しているだけ。

また橋の柵をはじめ、Sweet Seasonの看板の周囲にも、無数の電球が散りばめられている。夜になるとしへりは橋と共にライトアップされて、それはそれはとっても綺麗なんだけど、あたしは長いことその情景は目にしていない。

「來るたびに思うけど、不思議な場所よね、しへりで、打ち合わせつて……？」

『打ち合わせ』という重々しい響き。あたしが少しばかり消極的に問うと、志穂さんはサラリと私あたしを通り過ぎ、電球を面倒くさそうに避けながら橋の柵に両腕を乗せた。

そして、電球たちに皮肉を言つよう、朝の光によつて自然のライトアップを生み出す川を見下ろす。

「あのね、真紗耶ってね、今までまともに言葉を交わしたの、私と、母親しか居ないのよ」

「え？ でも、学校で結構、嫌な想いをしたつて、メールで聞いたけど。今の今まで貴女と母親としか話したことがない、なんていう状況に置かれるには、学校には一度も行かないことが大前提な気がするけど」

「同じことよ。真紗耶の言葉なんて誰にも通じなかつた。真紗耶が他の子供より劣つていたからなのか、それとも真紗耶を受け容れなかつたクラスメイトたちが悪いのか、それは多分、真紗耶本人にも、私にも、真紗耶のお母さんにも、そして貴女にも、一生、判らないでしょうね」

「そうね……」

思わず志穂さんに歩み寄るあたし。志穂さんはあたしに緩やかに、そしてしなやかに振り向くと、橋の柵に背をもたれた。

「だからね、私が言つのは生意氣だけども、そこらへん、気を遣つてあげて欲しいわけよ」

ああ、そうなのね、と思つた。思わず志穂さんに頭を下げるあたし。

「わかつたわ。志穂さん、注意してくれてありがとう」「どしたの？ 別に礼を言わることじや……」

「あたし、真紗耶さんとメールでしか話したことなかつたから……」

そこまで言つただけで、志穂さんはあたしの言わんとするふうを理解してくれたようで、あははと笑つて橋から離れ、あたしの肩をマレットでマリンバを鳴らすように軽く叩いてきた。

「そつかそつか。文字だけだとアイツ、やけに出来た人間に思える

んでしょ？」「

「そうなのよ。文体がすぐ丁寧で、あたしが興奮しても、傷つかずすに済む方法を知り尽くしてて……。だから、少なくともあたしよりは精神年齢が高い人っていうイメージが、あつたわ。貴女が注意してくれなかつたら、あたし真紗耶さんとの接し方を間違つてしまつてたかも……」

「よし。じゃあ、行くお（^ ^）」

「ええ……」

それにして、つぐづく風変わりな構造の場所だと思つ。橋の隅から伸びる下り階段の始まりには、『Sweet Sea so』と書かれたネオンで飾られたアーチがかかつていて、そこをくぐつて階段を下りると、左が川、右がバーの建物という細い通路に着く。

ここへきてひさしぶりあたしは、ここが東京ではなく横浜なのだとう実感を持つことが出来る。そつ、この通路に座れば、釣りも楽しめそうだ。

階段の途中で、ふと、先を行く志穂さんが立ち止まり、これはまた高貴な諧謔性に満ちた表情であたしを見上げた。

「にしても巫彩さんよ、あんたのガッコのP.T.Aもさ、タイミングのいいときに襲撃してくれたね」

「え？」

「今日は水曜日。水曜日つづいて、この店の定休日だ

「あ、そうだったの？」

「そうよ。私の母とね、この店のマスターが、学生時代からの親友なのよ。だから、今日は私たちの貸切にしてくれるってえ

「あたしのために……？」

「あ、気を遣わないでよ？ 真紗耶つづばさ、さつき話してみたいな事情があるのでしょ？ だから木泊君のことが必要以上に胸を痛め

て、木泊さんが助かつた後も、つらすぎてなかなか顔が見れなかつたんだって。で、今日は、真紗耶と木泊君との涙のご対面も兼ねてるってわけ。まあ数日前にも会つたみたいだけど、改めて木泊君の幸せな暮らしづくりを見せてるってわけ

「そう……」

「じゃあ、とりあえず店へドゾー」

「ええ……」

志穂さんを追い抜いて階段を下り、バーの暗さのために不可欠と思われるとても小さな窓から、あたしは中を覗いてみる。
すぐ近くの席……そこに向かい合つて座っているのは、懐かしい木泊兄さんと、木泊兄さんと似た髪形の女性。それから奥のカウンターの向こうに薄つすら見えるのが、木泊兄さんを引き取ったあの女性。

つまり、あたしにとつて見覚えのない一人が、真紗耶さん……といふことね。

志穂さんはあたしの隣に歩み寄つて來た。

「木泊君と話しているのが、貴女のお母さんの真紗耶よ。……で、あんたも会つたことがあるだろうけど、奥の人はこの店のマスターで私の母の親友。今年、四十一歳になつたとか

「えーっ……」

あたしは店内に聞こえない程度の小規模な叫び声をあげた。

四十一歳とか……ありえない。

あんなキャピキャピしたネーチャンが、木泊兄さんの保護者としてやつていけるのかしら？

なんて、いつも思つてたほどなのに……。

こうしていると、真紗耶さんと木泊兄さんの話が自然との耳に入つてくる。

「本当にアナタにこうしてお会いして良かつたです

「もつと早く来てくれれば良かったのに」

「嗚呼どうかどうか、それは言わないで下さいませ。アナタの顔を見たならば私の心は再び『奴ら』への憎しみを募らせることとなり、またしても憎悪の闇の中に入らねばならなくなると思つたのです。けれども……アナタの元気な顔を見たら、過去の恨みが吹っ切れました」

「ほんとうに、『ごめんな、真紗耶さん、』『ごめんな。ボクがジサシミスイなんかしたから、志穂さんはあんなハンザイを……』

「いいえ、いいえ、志穂さんの事件そのもの、あれはこひらの問題でござります」

……自殺未遂……犯罪……志穂さんの事件……実際に重々しい言葉が次々に姿を現した。

特に『志穂さんの犯罪』といつ言葉にあたしは衝撃を受け、隣に居る志穂さんに思わず田をやつた。

「ちよつ、睨まないでよ」

「あ～ごめん」

田をやつただけのつもりが、睨んでしまつていたらしい。志穂さんは店の壁に背をもたれ、川面を見下ろしていた。

「……いつか、いつかね、いつか、ちゃんと話すから」

「……このよ。無理に話さなくたって。眞面目に生きている人なら誰にでも、話したくないことの一つや二つはあるから。特に、あたしや貴女みたいな、特殊な立場にいる人間はね」

理解を示すと、志穂さんは姿勢を正してあたしを真っ直ぐに見つめ、嬉しそうに、そして本当に純真な微笑みを見せてくれた。けれども、その微笑みはどこまでも儂くれい寂しい……。

「ありがと……」

と、そこで店からマスターと木泊兄さんが出てきた。

双方が「うら若い乙女に見える」のお一人さんはその実、片方が四十一歳になつたという口りおばさん、もう片方が今はやりの男の娘

ところやつなんだから、ほんとに物騒なもの。

兄さんに声をかける間もなく……」のねばさんは自らの口リ属性を証明するみたいに、店を出てあたしたちに気づいたとたんズッテーン！ と何もない所で転んでしまった。

と痛がる声が、これはまたアニメのロリキャラみたいに甲高い。後ろで簡単に束ねた髪だけは年相応だけれど、つるりとした大きな顔に、顔の半分を占めるほどのパツチリした瞳、そして全身から放たれる少女のような若々しさ……というより幼女のような幼さ。やっぱり変！

「ううう、なにしてるんだよ田中。あ、あれ丽彩？」

۱۱۱

起き上がつた母萌さんはあたしと志穂さんと木泊兄さんを同時

「あらーっ！ 亜彩ちゃん、しばらく見な

なつちやつてえ！ やーん、 もう美少女ばっかでモモヒちゃん萌え
萌えーつ 「

……人称が自分の名前である上、それに《ちゃん》をつけておられる。

そして驚くことなかれ。

この人の名前は.....
やまぐち ももえ
山口母萌。

あたしは最初、バーのママとしての芸名なんだと思つた。けれどそうではなく、これが本名だと知つたときは、事実はラノベより奇なり、なんて思つてしまつた。

あたしは木泊兄さんに目を向ける。寒がりな彼も、さすがに今日は白い半袖のセーラー服を着ていた。ロングスカートは白と水色のストライプが涼しげだし、緑色の襟に付いた紫色の巨大なリボンはこの上なく少女趣味的なもの。

とはいっても兄さんは女学生フューチとかそんな嫌らしい趣味は持つてない。

ただ海が大好きだから、海にちなんだ格好をしていたいんだとか。そうそう、立派な店を見て回れば、私服としてのセーラー服は結構簡単に手に入る。

思えばそう……彼が自らの命を絶とうとしてとった行動もまた、船から海に飛び降りる……といつものだつた……。

そんなにまで彼が海に惹かれる理由……それは、彼を引き取つた彼女の名前が象徴してゐると思つ。海が母性の象徴といふのは、よく云われること。

普段は意識もしないのだけど、こいつやって志穂さんや母萌さんと並ぶと、木泊兄さんはひどく肌色が薄く髪が細くって、恐ろしいくらい弱々しくて純粋無垢な雰囲気を持つているのが判る。

兄さんはあたしに向かつてペコリと、ほんの小さく会釈をすると、秋の落日のような儂い笑みを浮かべた。

「えへへ、お久しぶり　ここで会うのはどれくらいぶりだらうね？」

一応、明るい話しさをするけれど、何もかもがその秋の落日に包まれているようで、なんだか抱きしめたくなつてしまつ。

すると志穂さんがしゃしゃり出てくる。

「木泊君つてさ、真紗耶みたいに女性ホルモン飲んでるわけでも整形したわけでもないのに、ホントに女の子より女の子らしいよね。はあ～あ、真紗耶にも木泊君みたいな純真さがあればね、私も袴里りんも楽なんだけどなア～」

さつきあたしは志穂さんを儂げだと言つたけれど、木泊さんの前では志穂さんが堂々と地に足のついた女に見える。

つて、そんなこと気にしてゐる場合ぢゃないツ！

「志穂さん!? 貴女今なんて……っ」

「だーかーら、「同じ言葉を棒読みで繰り返す志穂さん。」つて言

つたのよ。あ、このりんつていうのは、真紗耶のカーチャンの」とね

「えーっ！？　じゃあ今ここには、《そういう人》が一人…？」
てっきり真紗耶さんを女だと思つてたあたしは目が回る想いだつた。

すると木泊兄さんは「ククリと首を傾げて顔の前に片手を上げ、きょとん、と、人差し指を自分の頬に当てる。

「うーん、そんなにフシギかなあ……？」

……どうすればそんな華奢なオルゴールのような声が出せるのかしらと問いたい。

あたしと志穂さんが木泊さんのそんな雰囲気に切なくなつていると、母萌さんが木泊さんの腕を取り、騒ぎ出した。

「へへーん、デートデートー　じゃあみんな、またねー」
「三人で、」ゆっくりビーボー

木泊兄さんはそう言い残し、母萌さんと共に階段を上つて行つた。その背に志穂さんが、

「木泊君、どうかこれからはお幸せにね！」と痛切に叫ぶ。

木泊兄さんは母萌さんと共に立ち止まって振り向くと、全世界すべての優しさがそこに集合したような愛らしげな笑顔を見せてくれた。

「うんっ……ありがとー 志穂さん。じゃあね

母萌さんに縋るように寄り添つて歩くその姿を見ると、あたしは改めて木泊さんの幸せを祈らずにはいられなかつた。

木泊兄さんは今まで、あの糞みたいな両親の元、さつきの《隙間に咲いていたボリジ》みたいな人生を送つてきたわけで。

生きづらい場所は、苦しいよ。花も、人間もね

紗那の手によつて生きよい土の地面に移されたあの花。木泊兄さんも今、ここで母萌さんと生きることでよひやく《土の地面》に来ることが出来たのではないかしら？

だとしたら、今までコンクリに阻害されて活き活きと生きられなかつた分、これからは土の地面からたくさん栄養を思いっきり吸収しながら生きていくって欲しい、と心の底からそう思った。

Missa meets Masaya（前書き）

どんな陰惨な物語でも、そのなかにロマンティックな部分を必ず入れる、それが私のルールだつたりします。けどロマンスって難しいですね。

志穂さんに促されて店の入口を開けると、小さなウインドチャイムが纖細に鳴り響いて、ここがさつきの喫茶店とは一線を画する、立派なバーなんだということが伝わってきた。

定休日のためか、照明といえばカウンターの白いシーリングライトが燈っているだけだけれど、壁も天井も光沢のあるブラウンゴールドっぽい色調だから、どこまでも大人びた色彩が店に充満している。

真紗耶さんは、カウンターに向かつて座つたままだけれど、この暗さでもその長髪がとても黒いことが判つた。

「おい真紗耶、巫彩ちゃん連れてきたお

「ああ、そ、そうですか」

たおやかな口調でそう呟きつつ振り向く真紗耶さん。

その姿は基本的には志穂さんと似ていながら、どこまでも正統派な美少女っぽくて、さしづめこの一人は《同じアニメに出てくる対照的なヒロイン》といった趣。

そして、やっぱり志穂さん同様、その全身からは妙な暗さと「うか、情念深さがオーラとなつて漂つている。

ただし。これまで（特に今日になつて）色々な《日くつき美女》を見せられてきたあたしにとって、真紗耶さんがあの姿にして男…という事実はすんなり受け入れることができた。

「あなたたち、何かのアニメを意識してたりするの？」

二次元に詳しくないあたしに、一人は丁寧に事情を説明をしてくれた。あまりにも複雑なものだから、それを脳内で整理するあたし。

志穂さんは生まれつき、バーチャルアイドルユニット『晩壓不^レ垢』の廉^レ垢紡弊順と瓜二つの姿をしていた。

シャム双生児の如く一心同体で生きてきたせいが、何もかもを同

じにしたいこの一人。

弊順にそつくりな志穂さんと《一対》になるため、真紗耶さんが同じ『晩壓不堪』の告白画の顔に整形。

なんていうSFチックな事情！ 母萌木泊コンビといい、これはもひ、あたしの心の平衡感覚を乱そつといつ作戦を遂行しているかのようにさえ思えてくる。

「じゃーあ、私はこれで失礼するわ。無理言って先に巫彩さんと先に会わせてもらつたわけだし」

志穂さんはそれだけ言つと、疾風のようにそのままの場を去ってしまった。

志穂さんに手を振つて、チャリンチャリンと鳴るウインドチャイムにしばし見惚れた後、ふつとカウンターを振り向くと、そこに真紗耶さんは居なかつた。

代わりに、得体の知れない、不健全な、けれどもどこか愛すべき好ましさを持つた美少女フィギュアが立ち尽くしている。

「ミサヒ……やつと会えた」

やけに乾いた、無機質な口調で言葉を紡ぐ彼（彼女？）。

その人となりは、眞子と表裏一体といつか、好一対になりそうなものだつた。眞子が健康的な少年っぽい少女なら、この人は不健全な幼女っぽい少年。そういうわけかその姿は眞子より幼く見える。もちろん身長そのものは、志穂さんと大差ないのに。

これって女性ホルモンの作用？ それともこの人自身の特徴？ 不思議なのは、中性的でありながら、男性的な要素が微塵もないこと。

あたしはちょっとびり恐る恐る声をかける。

「あの……あなた……は、真紗耶さん、よね？ 髪は……？」

「あれは、カツラ。これがホントの、私。人形……みたい？ それは、母から受け継いだ」

確かに真紗耶さんの背後のカウンターには、バサツと、長くて黒

いカツラが置かれていた。でもカツラを取つただけでこうは変わらない。この人は瞬時に、メイクも剥がしたんだと思う。

「ほ、ホントの……って、女性ホルモンを飲む前のあなた……ってこと? それとも……整形する前の?」

真紗耶さんは力ク力クと首を横に振ると、ほんのちょっと瞳をうるませてあたしを見つめてきた。

「整形なんか、ホントはしてない……。ホントは、プチ整形、しただけ。化粧すれば、簡単に、告白龜になつたり、元に戻つたりできる」

「その」と、志穂さんは?」

「『おしほ』には、何も言つてない。おしほは、私が完璧に、告白龜になつたと思つてゐる。でも……それでいい」

志穂さんの言葉が頭のなかで木靈する……

真紗耶つてね、今までまともに言葉を交わしたの、私と、母親しか居ないのよ

この人はきっと朱音と同じなんだって。

これが真紗耶という人の本来の姿なら、人に媚びず、集団の色に染まろうとしないこういうタイプは、孤独という友達を得るしかない。

「どうして……、どうして志穂さんの前では自分を偽るの?」

すると諦めたように俯いて首を横に振る真紗耶さん。

結局、あたしの問い合わせに答えることなく、真紗耶さんはジュークボックスのほうへ歩いて行つた。

「なんか、しんみりして、いや」

『イルームの森』にあつたやつより一倍はあるかといふ、立派なジュークボックス。

真紗耶さんがチャリンと小銭を入れて操作をすると、いかにもオールディーズといった趣の、セピア色に籠もつたようなピアノの前奏が店全体に充满する。

「この曲……あたしには聞き覚えがある。想い出そうとしていると、どこかアンニヨイな女性のヴォーカルが流れてきた。そこでやつと曲名を思い出すあたし。

「やだ、懐かしい。『Sweet Seasons』ね、キャロル・キングの。たしかドラマの挿入歌になつてたわ……あの、とよた真帆が暴れるドラマ。へえ懐かしい。今が一千九年だから十一年前か。あたし三歳だったわよ。……あの頃までかしらね？ 日本にからうじて『わびさび』みたいなのが残つてたのは。ミレニアムだと二十一世紀とか云う頃にはもう、ネットが普及しちゃって、日本が全然別物になっちゃつたけど」

普通なら、『三歳の頃にあんなドラマを見てたのか！？』なんて突つ込んでくるはず。ところが……

「そう……それは解るけど。でも……、どんな日々だつて、おしほと私にとつては、ただ敵から逃げる……それだけの毎日だつた……」
真紗耶さんは故意か偶然か、一般人が突つ込みそうな部分には見向きもしないで、ただ話題を進めてきた。そんなことをちょっぴり、居心地よく感じるあたし。

そして、『敵から逃げる』なんていう不穏な告白……
「何に追われてるの！？」

「追っ手」

「ほそつ、と答える真紗耶さんに、あたしはムカッ！
「だーからつ、あなたたちを追つてるのは誰なのよッ！」
「私たちのこと……知つてる……奴ら……」

真紗耶さんの言葉に嘘はなかつた。

そしてあたしは、志穂さんの犯した何らかの犯罪を知つてゐる者に追われているんだと、このときそう思った。そう、このときまでは。

一步、あたしは真紗耶さんに歩み寄る。

この人がどうして、あたしの前で変装を解いたのか、その気持ち

を想つと痛ましかつた。

あたしが木泊兄さんにアドレスを聞いたことから始まつた、あのメールのやりとり。恐ろしい者から逃げるだけの日々のなか、この人はあたしに希望をいだいていたのではないかしら……と。

それと同時にあたしは、この人の無表情で寡黙で、ペトルーシュカがそのままバレエから抜け出してきたような雰囲気に、それまで出会つた中性的人物…つまり木泊兄さんや眞子に感じるこのなかつた特別な感情をいだいてしまつてはいなかしら?

やがて、このバーと同じ名前を冠された曲が、長くて思わせぶりな間奏を迎える。

プラスが得意氣に鳴り、ベースが迫るように響くなか、眞紗耶さんはまるで歌の中のセリフ（演歌によくあるあれ！）を語るみたいに、言葉を紡ぎだした。キャロル・キングもまた、どつちかつとうと中性的な声だから、そう聞こえるのかもしれない。

「私たちの毎日は……、パロディとしてしか語れないほど悲劇だから……。素のままの私だと、たぶん耐えられない……。告白龜になつて、おしほと『晩壓不堪』としてセットになれば……、すべてはチャップリンの映画のなか……」

眞紗耶さんが言い終わつた瞬間、間奏が終わつて歌が再開した。それはまるで、『それでもあたしと居る間だけは自分に甘い季節がやって来る』とでも言わんばかりに。

そしてこれはそう……あたしの どうして志穂さんの前では自分を偽るの？ つていづ言葉への返答。

「それあなた、幸せなの？」

「さあ」

ぼそつとした無表情な返答。

「さあ つて……」

「それが、私にとつての『普通』だから……。私が普通に生きられるの、おしほの傍以外にはないから」

「…………」

甘い季節の話をしているの

歌が最後にそう反芻しつつフロイドアウトするなか、あたしは真紗耶さんのまん前へと行き、

「あたし……あたしで良ければ」

と口にしたとたん、真紗耶さんはまるで天敵から逃げるように移動して、やがて地面に崩れ込んだ。

「やめて」

またボソッと、一言だけ呟く背中が、一人寂しく人形と遊ぶ幼娘^{おさなじ}のよう。

「だつたらどうしてあたしの前で素顔を見せたりしたのよ？ 誰かに素顔を見せるの、久しぶりなんですよ？」

「……おしほに言われた。ミサエは女の子なんだから、女としてめかして会つても意味ないって……。だから元の私に……」「それだけなワケないじゃない……」

「…………」

曲も終わつて、この場を満たすのは、ただやるせない静寂。

あたしは街の狂騒が恋しくなつて、ドアに向かつてガツガツ歩き出す。

「あーもうもうもう！ しんみりしてイヤんなるのはコシチのほうだつてのよ！」

ドアを開け、ウインドチャイムの乱れ打ちとともに白昼の光を店に呼び込むと、あたしは思い切りよくツインテールを舞わせて振り向く。

そして何も言わず、この瞳だけで おいで と、うずくまる空ろな人形に告げた。

真紗耶さんはよろよろと、けれどもやつぱりどこか無機質な、命を吹き込まれた人形みたいな動作で歩いて来る。母親譲りだというこの人となり。お母さんもよっぽどの人形美人なんでしょう。

「来てほしい所がある」

真紗耶さんの言葉に誘われて、建物の狭間からいちいち波の輝きが垣間見える地帯をゆく。風向きのせいか、潮の香りも強い。

日はすっかり昇つて、本当にミニーチコア・サマーとも言いたくなる気候。こんな気の早い格好をしてきてよかつたと、改めてあたしは自分を心の中で褒めた。

真紗耶さんはといえば、白黒の横しまワンピースに黒いケープを纏うといつ、ハイセンスな格好で、

「ランドマークタワーを見上げたのなんて……何年ぶりかしら」なんて、腕を上げて巨大な塔を指差すと、ケープがスルリとめぐれて真っ白な二の腕が現れる。触つたらたぶん、蝶のような感触をするに違いない。

「空を見上げる暇さえなかつたわけね？」

あたしの沈痛さが混じつた問いに、真紗耶さんは「クリと、また無機質にうなずく。

「そう。いつも逃げ回つてるか……正体がバレないか怯えてるか……。でも、この姿で歩いたのはたぶん、十年以上ぶり……と思つ」

「あなたたちつて、いくつなの？」

「忘れた。たぶん……二十代後半。十四年前の『あの日』から、きっと、おしほも私も、成長が止まつてゐる」

あたしの糞義両親は、『人は社会との関わりによって成長する』と云つ。そしてイルームの森のマスターもとい眞子の母は、人間つてやつはさあ、社会の仕組みの汚さを知つて、なおかつそれに順応すればするほど、年喰つて老けてくんだ。私の糞曰那がそうだった。へへへ、だから私は、この店から出ないで人生送るぞ。それが多岐川優サマの美容法だあ！ よおく覚えとくんだな！ と一升瓶片手に語つていた。

あんな両親の云つことに共感する氣はないし、マスターが酔つた

勢いで放つた冗談まじりの言葉にどれくらいの信憑性があるのかも判らない。けど、もしそういうのが本当なんだとしたら……

……社会との間に大きなベルリンの壁を張つて、ただ自分たちだけの退廃的で自堕落で、そして耽美な世界で生きてきた志穂さんや真紗耶さんの成長が止まっていることに対すると説明がつく。

一人とも、高校生か、下手すると中学生だといつても疑う人は居なさそうだから……。

最近聞かなくなつた、アダルトチルドレンという言葉をあたしは思い出していた。

「アダルトチルドレンっていう言葉は普通、外見とかは関係なくつて、精神のことで使われてるけど……」

「そう。おしほと私は、ホントの意味でのアダルトチルドレン……身も心も」

「なるほどね」

得意気な顔で横を歩くあたしの顔を、なぜか不気味そうに覗き込んでくる真紗耶さん。

「ミサエ、なんとも思わないの？ 逃げないの？」

「は？」

「私たちのこと……知つたら、普通の人なら汚がる。近づかないようにする」

ドンッとアスファルトを踏みつけて立ち止まるあたし。

「ちよつと真紗耶！？ あたしがそんなチンケな女だと思つてたわけ！？ アッタマきたもうつ！」

「こんなに簡単に上手くいくなんて……」

あたしの散歩前あたりで立ち止まる真紗耶。

「なにが上手くいったってのよッ！？」

あたしは真紗耶に駆け寄ると、返答によつてはこいつのオカッパ頭にタンコブの一つでも飾つてやるのと心に決めた。

真紗耶は一瞬マリと田を細め、にゅるつと首だけ動かして振り向く。

「ふふつ、『真紗耶』って、呼び捨てしてくれた。だから、わざと怒らせた」

「ふぐつ……く、下らないつー」

乱暴にそっぽを向いたあたしのツインテールが顔に当たったのか、真紗耶は小さく「痛つ」と呟くと、すぐに真摯な視線をこちらへ向けてきた。

「ミサエ、私が元の姿のときは、呼び捨てにして。それで、告白箇のときは、『真紗耶さん』って呼んで」

湧いて出たような突飛なルール。それはきっとこの人の、志穂さんに対する想いと、自分の人生を省みる心が入り混じって生まれたもの。

怒つてたあたしも、これには素直に頷かざるを得なかつた。ただし、ツンとそっぽを向いたまま。

「……わかつたわよ。めんべくさいけど、やうしてあげる」「ありがと……」

そんなことを話していくつむか、あたしたちは真紗耶の 来てほしい所 に着いていた。

そこは賑やかな桟橋。あたしは日本の海がそんなに好きじゃないけど、横浜の海は都会的に洗練されていて、かなり的好印象。

夕暉の光を反射して燐然と輝く水面をはじめ、ビル群の淡いグレー、空の青、そして……目の前の客船の白が、コーミングやサザンの歌う海を想わせる。

船体には『マリーンルージュ』の文字。これは確か、ディナーを楽しむ船だったはず！

「はいはいナイスボートナイスボート。銭せん持つてないあたしたちには無縁な乗り物ね。帰りましょ」

「大丈夫、予約はネットでとつてある」
すたすたと乗つていってしまう真紗耶。
「ちょっとちょっとー！」

仕方なく、あたしはその後を追つた。

平日のこの時間だから、当然船内はガラガラ。

船員（店員?）に案内されて一階席のセレッソに入ると、女性が進行方向を向いて座るとの説明。

あたしが何のためらいもなく船が進むであろう方を向いて座るのはともかく、真紗耶まであたしと向き合わずに並んで座る。もうこの人には、男としての部分は残っていないんだろうと、直感するあたし。

メニューは魚系か肉系を選ぶことができ、あたしは迷いなく肉系を注文。対する真紗耶は「せっかく海の上に来たんだから」と魚系を。

「せっかく海の上に来たんだから つてことは、あんまり来ないの？」

「当たり前。いつも私たちは、横浜の歓楽街や飲み屋街をうろついてるから……」

そこまで言つと暗く沈黙してしまつ真紗耶。

確かに横浜はドラクエ3でいうところのアッサラームみたいな街で、煌びやかな表の顔と、妖艶な裏の顔を持っていると、テレビで聞いたことがある。これほど風俗店が密集している地域は滅多にない、と。

けどあたしは少なくとも今日は、その先を訊くつもりはなかつた。今日の趣旨は、真紗耶と志穂さんの生き方を知ることじゃなく、あくまでも木泊兄さんの自殺未遂の原因を訊くこと、なんだから。

「ああいいのよいのよ、話さなくたつて」

「ぐめん」

といった感じで出航。可愛いシーバスとすれ違ひながら、船は陸を離れゆく。すぐ視界に入るのは、横浜国際大桟橋。

すると、『ホタテとサーモンのミルフィーコ』を頬張っていた真

紗耶がナイフとフォークを置いて、はあつとため息をつく。

「ずっと、ずっと……地面から……地上から離れたかった……」

「水の上だものね……地上と全然違うわ」

そう。船に乗るのは小六の修学旅行以来だったけど、床に足がついているのに、なぜか重力から開放されたようなこの浮遊感は新鮮なもの。

そんな軽い感慨を得るあたしに対して、真紗耶のほうはなにやら深刻な面持ち。

確かに。さつきはビルにしか見えなかつたランドマークタワーも、ここからだと本当に塔みたいだし、その隣、船のセールを模つた横浜グランドインター「コンチネンタルホテルも、少し離れた所にある観覧車も、とても生き生きと輝いて見える。

真紗耶は水で喉をうるおすと、なぜか突拍子もない話題を出してきた。けどそれこそが、あたしの求めている話題の前置きに他ならず……

「こうしてると……、何万人何億人つていう人がネットで傷つけ合つてることが、幻みたいに思えてくる」

「幻であつてほしいわよね、そんなの。いつからネットつてそんなふうになつたのかしら?」

どこか他人行儀に言つあたしに、真紗耶は重くて深刻な視線を向けてきた。

「いつからつて……最初から。……そう。コハクがあんなことになつたのは、一九九四年……ネットが一般的に使われ始めた年」

あたしもまた、ジユレとしか思えない『冷製コンソメスープ』を口へ運ぶ手を止める。

「じゃあ真紗耶、兄さんがああなつたのつて、ネットが関係があるつてこと!?」

「コハクは……、タチの悪い宗教団体によって、絶望の底に叩き落す言葉を続けた。

「コハクは……、タチの悪い宗教団体によって、絶望の底に叩き落

とされた……。その宗教は、主にネットで情報交換する団体で……。当時のネットだから、規模はそんなに大きくなかったけど……コハクの家を突き止めるところまでいって……」

あたしの脳裏に家の外壁に残つた、あの落書きを消したような跡の映像が浮かんできた。

「そもそもどうして兄さんはそんな宗教に叩かれたの！？」

「コハク、小学校でヒドいイジメに遭つてた……それで、とうとう耐えられなくなつて、……不登校になつた。そんなとき、コハク、小説を書き始めたの……。それを彼の母親が、つまり今までいうミサエの義母が目をつけて……本を自費出版した……。それを、それをあの宗教は、『登校拒否児の分際で小説を書くなんて言語道断』つて……コハクに攻撃を……っ」

そこまで言つと、沈痛に目を閉じて黙り込んでしまう真紗耶。対してあたしは訊きたいことでいっぱいになつていた。

「あのクソ母の考えそういうことだわッ！ で、その宗教、名前はなんていうのよ！？」

「首田宗志教……」

ついさつき名前を聞いたばかりの首田宗志教 志穂さんがあの痴漢を殴りたくなつたその気持ちを、痛いほど理解するあたし。

「首田宗志教……ですって！？」

「そう……知つてるの？」

あたしは咄嗟にケータイを取り出し、首田宗志について調べだと、ネット百科事典みたいなサイトですぐに詳細が判つたけど、それは想像を絶する凄惨な事実だった。

首田宗志（しゅだ・しゅうじ、1967～1994）は、日本の小説家、アニメ評論家。

一五歳の少女に殺害されるという最期が世を震撼させた。

首田はその少女を流産させようとし、お腹の子を守りうとした少女がやむを得ず首田を殺害、少女は無罪になった。

あたしのなかで、木泊兄さんの『志穂さんの犯罪』とこの言葉と、ここに書かれている事実とが、ぴたりとシンクロする。

「あの真紗耶、もしかして、『志穂さんが起こした犯罪』って……ケータイの画面を見せつひとつと、真紗耶は無言のままあたしの目をまっすぐに見つめてきた……」

真紗耶の目が、言葉なんかで言いつむずつとずつと明確に『その通り』と言い、そして付け足しのことく、

「それから、おしほ……無罪になつたけど、首田宗志教に『こいつが首田様を殺した犯人だ』って、顔写真をネットに流されて……『前科者』になつた。どんな場所でも受け入れてはもらえないくなつて……。あの時期の、おしほの嘆きよう……もづ、地獄のよづな日々だつた。私たちが、こんな落ちぶれた生き方しかできないのは、そのことがあるから」と声に出して告げてきた。

「これで、『柴門志穂は殺人者』といつて事実が明確になつてしまつた……。」

志穂さんの動機は、果たして『木泊兄さんを不幸にした首田宗志教への復讐』なのかしら？ どうも違つような気がする。さつきの志穂さんと木泊さんのやりとりからして、志穂さんと木泊さんの間にそれほど強い愛情が存在しているとは思えないとし。

それを真紗耶さんに訊こうとしたけれど……

……！？
ちょっと待つた！

志穂さんが首田を殺した少女なら、志穂さんは首田の子供を妊娠していたことにならないかしらー？

嗚呼いけない、いけない！ そのままこの話を続けたら、とてつもなく陰惨な事実を掘り起しちゃうー。

逃げるわけじゃないけど それより時間がない。話をしているうちに船はシーバスをいくつも見送っている。

そして真紗耶は今、陸から離れたくてこんな船に乗っていると言つた。たぶん、この人が船に乗る機会なんて、今後滅多に訪れることはないのに……

なのに、こんな暗い顔をさせてていいわけがないじゃない！

あたしはガツガツと、『ラムと牛フィレ』を食べ始める。

「あんたも早く食べるのッ！ やつさと平らげて、デッキに行くわよっ！」

「あ、うん……」

真紗耶はデジタルチックに、表情も姿勢も変えず、ソースが美味しそうな『舌鰆のパイ包み』を食す動作だけを速めた。

『アメリカンチエリーフランと季節のフルーツ添え』の甘美さで辛氣臭い宗教の話を忘れると、あたしたちは席を立つ。

茶縁の地面に白い柵が落ち着いた雰囲気のスカイデッキ。
野生的な突風に細めた瞳を開けると、船はちょうど横浜ベイブリッジの下をくぐるところだつた。

「やつた！ ベイブリッジを真下から見れるなんて！」
「すごい……」

無表情ながら、真上にのぞむ壯麗な白い橋に感嘆している様子の真紗耶。

たぶんこの人はあたしの倍以上の時を生きている。けれど、こういう景色を見る機会というのは、いつたいどれくらいあつたのかしら？

ベイブリッジの下。大きな日影の冷たい暗さが、あたしのなかにあつた深刻な疑問を呼び覚ます……

あなたと志穂さんって、どういう生活をしているの？ 訊こうとして、やっぱり言葉を飲み込んだ。

後ろめたくない生き方をしているのなら、もうこの人はとっくに

自己紹介をしてくるはず。それをしないんだから、よっぽど。

橋を抜けて眩しい海原をのぞむと、あたしは明るい口調で、

「どう? 陸から離れて、リフレッシュできたかしら?」と訊いてみせる。

真紗耶は笑いはしなかつたけど、海面の煌めきを慈しむように見下ろしていた。

「戻りたくない」

そしてこの穏やかでない言葉。一人して海に浮かんでいたいとも言つのかしら? そりや心中よ、と突っ込もうとして、やつぱりやめた。

けど、あたしはなぜかその言葉によつて、そんなに暗い気分にはならない。

船の先まで移動すると、柵に手をかけてもつすぐ着く陸を眺める。「あたしだつて戻りたくない。うちに戻れば、うんこみたいな義理の両親が待ってるんだから。でもさ、」と、ここであたしは「テツキの真ん中で俯く真紗耶に振り向く。「でも、とせどせいやつて会いましょ? そうすればきっと」

真紗耶は首を横に振つて、その言葉を遮る。

「いいの。できない約束はしないで……。きっとミサヒには、私のことなんか忘れるときがくる」

またムカツ腹が立つた。

あたしはドンドンと船全体を沈ませるような勢いで真紗耶に駆け寄ると、びんた、じゃなく、ツインテール越しに口づけをお見舞いした。強い風のせいでしょうか、しつぽが顔の前に来るのを見計らつて……その頬に。

やっぱり、この人の頬は蝶のように硬く艶やかで、不思議な冷たい温もりがあつた。

「み……ミサヒつ!?

ただでさえ円らな、けれども少し尖った形の瞳を大きく見開き、あたふたする真紗耶。

「へへーん　これでもあたしがあなたを忘れるつてー!？」

「…………」

そのまま沈黙して俯いてしまつ真紗耶。けれどあたしの気持ちは、
ちゃんと伝わったと思つ。

出航のときも見た氷川丸が、今度は温かい笑顔であたしを迎えて
くれているように見えた。氷川丸横の桟橋に戻れば、ランチクルー
ズコースの終了。

どこか誇らしい気分で船を下りるあたし。……あたしのほうから
生み出したこの尊い絆が、近い将来、野蛮な惨劇によつて打ち壊さ
れることになるとも知らずに。

Missa meets Masaya (後書き)

もちろん首田宗志は架空の小説家であり、当然首田宗志教も架空の宗教団体ですが、これに似たことはいくらでも現実で起こっています。六章、七章あたりで、そのことを深く掘り下げたいと思っています。

確かに希望（前書き）

第一章の最後のパート『ややかな希望』と対になるサブタイトルです
ね。

確かに希望

Sweet Seasonに戻つてカウンターに並んで座ると、真紗耶さんはカツラを被つて軽く化粧を施し、元の姿（どっちを元の姿と言えばいいんだか……）に戻る。

その間なんと十秒以内！　この早業にはプロ根性さえ感じた。そして……

「巫彩さん、今日は楽しかったです。どうもありがとうございました。あら、でもまだお昼過ぎじゃないですか。まだ、何か訊きたいことがあります？」

『真紗耶』より1オクターブは高い、流麗な口調で言葉を紡ぐ『真紗耶さん』。この調子だとさつきの『あたふた』ぶりも忘れてしまってるんじゃないかしら……。実に腑に落ちない。

それにあたしは、この『真紗耶さん』に関しては、『真紗耶』に感じたような特別な感情をいだくことができなかつた。綺麗だ、とは思つただけれど。

それはそうと、『訊きたいこと』。

「ねえ真紗耶さん、兄さんの自殺未遂の原因は、大まかには理解できたわ。でも首田宗志教が今でも存続しているなら、機会さえあればまた兄さんを攻撃してくるんじゃないかつて、それが心配」

すると真紗耶さんは氷の音を鳴らしながら、ラム酒の梨ジユース割りをやや乱暴に飲むと、苦渋と悲哀の入り混じつた目でシーリングランプを見上げた。

「そもそも、木泊さんを攻撃だなんて……何て馬鹿馬鹿しいんじょう？　団体を結成してまで立ち向かわなければならないのは、『権力を持つた悪』でしょう！？　木泊さんのように、ただでさえ傷つき疲れ果てた、心優しい人間を攻撃することに、何の意味があるのです……？」

「正義の名の元に、弱い者にじめをする宗教団体……か。いいじ身

分だわねえッ」

梅酒の飲むヨーグルト割を一気飲みし、ドンとテーブルにコップを叩きつけるあたし。真紗耶さんが『母萌さんにはナイショですよ』と用意してくれたものだけれど、梅酒と飲むヨーグルトの割合は一対九くらい。バチは当たらんでしょう。

その音で我に返ったのか、真紗耶さんは慌てた様子であたしに頭を下げる。

「あつ、『じめんなさい』 首田宗志教は、滅びました」

「滅んだ……つて？」

「首田宗志が殺されたことによる集団自殺です……」

「つつけばつづくほど、『こと』とく重くてキツい内容の話が出てくる、出てくる。

「教祖が死んで集団自殺、か。よくある話ね」

「ああ、巫彩さん、何か誤解なさってるようですがけど、あの宗教の教祖は首田自身ではありませんよ。あくまでもあの宗教は、首田宗志の名を冠しているだけでして、教祖は別なんです」

「やだ。首田宗志の名前がまんま使われてるから、てっきり教祖は首田自身なんだと思つたわ。じゃあ、その教祖っていうのは集団自殺のときに一緒に？」

「いいえ……」

消極的に首を横に振る真紗耶さんを見て、あたしの背筋に悪寒が走った。

「じゃあ！ 教祖って奴は生きてるってこと…？」

「いいえ。死にました。けれども……集団自殺とは別の件で」

真紗耶さんの瞳はもはや、今この瞬間を見つめてはいなかつた。

この人は完全に、首田宗志教との確執を繰り広げただろう過去に戻つている。

これ以上の詮索はお互いの精神衛生上よろしくない、と思つた。

兄さんの自殺未遂の原因は知ることはできたわけで、あたしの当初の目的は達成されることになるんだから。

「 他には何か？」

と訊いてくる うら寂しげな美顔に、

「 もついいわ。ありがとう。あとは」ひちが、どう兄さんを守つていけばいいか、考えるだけだから。……それより、ひちこそりがとう。真紗耶さんに会いに来なきや、あんな船になんか乗ることなんかなかつたわ、あたし」

最大限の優しさを込めてそう告げると、真紗耶さんも穏やかな笑顔を取り戻してくれた。

「 こちらこそ、貴女が居なければ決して訪れる」とのない貴重な体験でした。夢みたいな時間をありがとう……」

けれど、この笑顔は心からのもののかしら？ 思えばこの人は、『真紗耶』のときには一度たりとも笑顔を見せなかつた。けれどもこの『真紗耶さん』は割りと頻繁に笑顔を見せる。これはつまり……

その緩やかな時間は、乱れ鳴るウインドチャイムの音によつて打ち切られた。

「 ン、アレ？」

営業中だと勘違いしてドアを開けたのは、太つたオタクふうの男。母萌さんの名誉のため、あたしは感じよく説明する。

「 あーごめんなさいね。今日はあたしたちの貸切なの。ママも居ないわ。ドアの札、見てみて下さい。『休業中』ってなつてるはずです」

「 ン♪、『ゴメーン。ホントダ。テナオシテキマース』

「 申し訳ありませんです」

困ったような笑みで男に挨拶する真紗耶さん。

そのときだつた。男が実に厭らしい笑みを浮かべてこちらへ入つてくるではないの！

真紗耶さんは震えながら立ち上がり、ガタガタと震えだす。

「 ……しまつた……サングラスをかけ忘れ……」なんて口走りな

がら。

まさか！　こいつって真紗耶さんたちを追つている連中の一人！？

男はどんどん近づいて来、やがて真紗耶さんに接近する。

「ネエキミ、キミツテサ、ネットデ　イマ　ワダイノ、アノDVD
ニ　デテル　オンナノコ　ノ　カタホウ　ダヨネ？　オレ、キミノ
ファンデネ、ゼヒ　イチド、アイタイナンテ　オモッ……グヴァ
！」

あたしは思いつきり男を蹴り飛ばしてやつた！

「巫彩さん！？」

何が起つたか判らないふうな真紗耶さんと、地面に叩きつけられる男。

「ナ、ナンダ、オマエハ！？　オマエノ　ヨウナ　ボウリョク　オ
ンナニ　ヨウハナイ。オレノ　メアテハ　コノコダ！」

そこであたしは、倒れた男の腕をギュウと捻つてやつた。

「地味な女で悪かつたわねえ！　つたぐどいつもこいつも！　色と
欲しか頭にないイカレポンチばつか！　ああ！？　いいのよ！？
このまんま、その腕を使いもんにならなくしてやつたってね！」

得意気に男を見下しつつ、地面にへタれた彼の腕を威圧的に蹴
飛ばし続けるあたし。

「ヒ、ヒィー————！」

男は白皿を剥き、一皿散に逃げ去つて行つた。

数十秒後……

「あの、ありがとうござります」

「なによつー？」

しまつた。興奮のあまり、真紗耶さんにまで罵声を浴びせてしま
つた！

「ひいっ！」弾け飛ぶ真紗耶さん。

「ごめんっ！　あんまり腹が立つたもんだから、つい

空気が和んだところでちょうど、ブリキの柱時計が十一回、莊厳

でどこか鄙びた鐘の音を打ち鳴らした。

あたしはペ「リと頭を下げる。

「じゃ、今日はこれで失礼するわ。母萌さんにお礼を、そして……木泊兄さんには《お幸せに》って、言っておいてくれると嬉しいわ」「あ、もうお別れですか？」

「ああ。うん。このくらいにしといたほうがほら、次もまた会おつって気になるじゃない？」

「テレビ番組みたいですね……。では、また今度」

「今日は本当にありがとうございます……」

あたしが真紗耶さんに再び軽く会釈をすると、ちょいと志穂さんが店へ戻ってきた。

「そろそろ戻ってる頃だと思つたわ。どう? ランチクルーズは楽しかった?」

あたしは笑顔で志穂さんにペ「リ。

「おかげさまで。いい経験ができたわ」

「そ? 私たちに感謝しなさいよ~。私と真紗耶の金を半分ずつ出したんだから」

「さ、柴門さんつ！」

真紗耶はあたふたしたけど、あたしは素直に一人に感謝したかった。立ち上がると、一人に軽く会釈する。

「一人ともありがとう。また来るわね……。それと、木泊兄さんのこと、よろしく」

「わかってる。真紗耶の大事な人を不幸にはしないって」

これでハッキリした。やつぱり志穂さんと兄さんにはそれほど深い絆はないらしい。とすると、志穂さんが首田を殺した動機はやっぱり、ネット百科事典に志穂さんの名前を伏せて書かれていた、あの記事の内容が正しいのかしら?

「バイバイ。またね~」

あたしは店を出ると即座に、店内の会話に耳を傾ける。

「柴門さん」めんなさい、無理言ひて、一人で営業をさせてしまつて

「いいわいいわ。気にすんな真紗耶。今日のブツは上物じょうぶだつたんだから、いつもに引けを取らない売り上げになつたわよ」

「ふふふ、『苦勞様です』

それを聞くと、あたしは心にあつたある疑念を確信に変え、やや急ぎ足で駅へ向かつた。

実はもつと、《真紗耶さん》……といつか《真紗耶》と一緒に居るつもりでいたけど、さつきのクズ男が言つた《ネットで話題のDVD》という言葉、あれが引っかかつてこる。

早く一人になってネットで調べたいという気持ちがあつたし、それに、早く戻れば眞子の部活を覗けるんじゃないかという気持ちもある。

あたしはテニス部で行きづまつてゐる。そして眞子もバレー部で行きづまつてゐるといつ。……眞子とダブルスを組めたら なんて、西原先輩に言われたことを実は本氣で考へてゐるあたしだつた。

列車を乗り継ぎ、学園のある江ノ電の駅で降りると、ワラワラーと、変な罪悪感がこの全身を包み込んだ。病氣でもないのに学校を休んじゃつて……と。

初めての地だつた横浜での、現実離れした志穂さんや真紗耶との出逢い。そこから一気に見慣れた古都へ戻ると、いやが上にも肩身が狭くなつてしまつ。

桜吹雪の舞う見慣れた道を、普段歩くことのない時間にゆくと、なんだかパラレルワールドに来た気分になる。

「おーい中里みさー！ サボりかあ！？」罵声を浴びせてくる八百屋のオバサンに、

「あたしはみさえ！ いいかげん覚えれ！ それからこのこと両親にバラしたりしたらシバくわよっ！」

なんて突つかつたりして。そう。彼女はこの間あたしにオレン

チをパクられた人。

「へつ！ バラすもんか！ そもそもあんな頭のイカれた夫婦に会う気なんかサラサラないねえ！ ……まったく、あんな両親のもとで、可哀想に。ほらよ！ 持っていきな！」

そう言つてオレンヂを投げてくれるオバサン。あたしはそれをキヤツチすると、きょとんと「ありがと……」とだけ呟いて、新鮮なオレンヂにかぶりつきながら学校へ向かつた。
この店の果物は有機栽培だから、本当に皮ごとイケるし、とても甘い。

オレンヂを食べ廻す頃には、学校の堀が見えてきた。
さすがに授業中らしく、白い校舎は無人みたいに静まり返つている。

今のうちにケータイでロボロのことを調べちゃおつ……そつ思つて堀に面したベンチに座るけど、手が動かない。
少なくともこんな真つ昼間、壁に耳あり障子に耳ありな状況で調べることではないと。

結局、あたしは二口二口動画へアクセス。現実逃避するようにゲームの実況プレイ動画を観覧してしまった。時間を忘れて延々と。

大げさじやなく、この実況プレイ動画とこのには観る者の時を早く進める効果がある。三十分が一分くらいに思えてくるから不思議なもの。

それに対して、昼間の学校前で実況プレイ動画を見る少女　どんな状況よ。

「昼間の学校前で実況プレイ動画を見る少女　どんな状況よ」
思つていたことがそのままナレーションみたくして上空から降ってきて、「ひやつ！」とすくみ上がるあたし。

見上げると、堀から身を乗り出した眞子の太陽みたいな顔が、興味深そうな笑みを浮かべてこちらを見下ろしていた。

「眞子！」

「どうしたの？ カレシにフラれでもした？ それで学校が恋しくなって、一人寂しく実況動画観覧？ 」Jの「」厨め…」

「だーから、カレシじやないってのよ」

「えーっと、あんまり長話してらんないのよね。私これから部活だから。じゃあね」

もうそんな時間になっていたわけね。けれど田辺のものを見ることはできそう……。

「頑張つて」

「じゃあね」

眞子が居なくなつたのを見計らうと、あたしは塀沿いに体育館前まで移動。周囲に人気がないのを確認して校内へ侵入！

なあに、あたしにとつてこれしきの塀、水たまりを飛び越えるようなもの。

力も氣も強い割りに、背はちつちやくて体重は軽いあたし。音も立てずに体育館の前まで移動すると、這いつぶばつて下窓から中の様子を伺う。

目を輝かせてバレー ボールに興じる部員たちを前に、普段の眞子からは想像もつかないボンヤリとした表情で、体育館の隅に座つていた。そして時々、部員たちに指示を出す……という感じ。

これはたぶん、有能すぎて『監督』に近い立場になつてしまつたんだと、あたしは解釈した。体を動かすのが好きな眞子にとつて、これはキツツイ時間だろうと……。下手をすると体が鈍なまつてしまふかもしれない。

眞子に想いを馳せつつ、いつもの帰り道をぼんやり歩く。

空が赤から紫に変わる頃、あたしは自分の家の前に着いていた。

PTAはまだ、居るかしら？ まあ、家のそばまで行って様子を見て、まだPTAが居るようだつたら街をふらつけば良いだけの話

ね。

玄関に耳を寄せるといふ声が聞こえた。畜生。まだ居るらしい。
「本当にあなたという人は……！ それが娘さんの教育にどんなプラ
スになるというのです！？」

聞いたことのない声だった。そして次に、義母の弱々しい声。
「なんザマスの……？ 会長ならワタクシの気持ち、解つて下せる
と思っておりましたのに」

会長が義母を怒っている……？

「ここのところずーっと、巫彩さん、一人のお友達との付き合いが
途絶えてらしたでしょ？ おかしいと思つてたんですよ。そした
らこの前、娘から事情を聞きまして。 奥様あなた、娘さんの付
き合つ相手にいちいち口を出していくらしきですね！ 長らくのお
付き合いながら、あなたの馬鹿馬鹿しい行ないに気づけなかつた自
分に腹が立ちました！」

ここでやつと状況が読めた。

先日、テニス部の先輩である西原さんとラリーしたとき、あたし
の愚痴を聞いた西原さんは、

「うわ、貴女の親つてそんなことやつてるの……？
とショックを受けて、調子を失くしていた。

その西原さんの母親がPTAの会長だったということね。

「馬鹿馬鹿しいだなんて……そんなア！」

義母はいつも自信満々な口調がウソみたいに、その声を涙に潤
ませてすらいる。

さつきの痴漢とおんなじ。

弱い者に対して高圧的になる人ほど、自分より目上の人間にはめ
つきり弱いんだから。

西原会長はなおも義母を追いつめる。

「馬鹿馬鹿しいことを馬鹿馬鹿しいと言つて何が悪いのです？ 友
達というのは、子供たちが自分で選んで決めるべきものです。それ

でもし、それが自分に合わない友達だったら、自分から距離を置くようになる……人はそうやって成長するんです！」

「す、すみませんザマス

「奥様、私はね、副会長たる者

「……めでまいりましたが……今後もそれが続くとは限らないのですよ。では失礼いたします」

「まつ、まつまつ待つて下さいザマス、会長！ ワタクシメを

「P-TA副会長であり続けたいのでしたら、会長たる私の方針に従

一三九

泣き叫ぶ義母の顔と、口々に「おめでたさん」と喜びあふれる原舎の足音。

「あ、巫彩さん！」

玄関から出た西原さんが私を見て硬直。チラリと垣間見える玄関。靴はぼくなっているから、パーティは終わったんでしょう。

西原さんのお母さんは初対面だったけど、その厭託のないカテ
リとした明るい人となり、娘さんと本当によく似ている。

「お嬢さん、はじおまして。娘ちゃん」はこつむ、船でお世話になつ

あたしたちの間で頭を下げる。

とりあえず、会長は玄関を閉め、あたしの元へ駆け寄つて來た。

天下無敵の勇者様も、PTA会長の前では低姿勢なのねえ

「だつてそうでしょ？」
狭山朱音さんを守つて、眞子さんや紗那さ

んを気にかけて、……ねえ貴女、自分のことなんか一の次つてタイ

確かに。今日はそれに加え、痴漢に苦しめられる少女を救い、真

紗耶さんをキモ面から守つてしまつた。

「会長……けどそれは、あたしのエゴです。あたし、大人とか男とか、そういう力のある人が、子供とか少女とか、力のない人を捻じ伏せるようなことがイヤでイヤでたまらないの！」

「それを言うなら、勇者が魔王を倒しに行くのだって、それだって結局はエゴでしょ？ 何が正義で何が偽善かなんて、そんなの人間には判らないわよ。でもね！ 少なくとも私は、強気を挫き弱きを守ろうとする、巫彩さん、貴女つて素敵だと思うわ！」

「ありがとう……」

思いがけない賛辞に戸惑いつつもお礼を言つと、会長は一転、明るい顔をシリアルスな鋭さに染めて、あたしに歩み寄ってきた。

「私の娘だけじゃないのよ。多岐川眞子さんも、貴女のこと気にしているわ」

「眞子が……どうして」

「巫彩さん、貴女が、自分と同じことになりはしないかつて……。言いたくないけど、彼女、実の父親に強姦された過去があるでしょう？」

そう。眞子はあの明るさの裏に、一生癒えないような傷を……そして、あたしの義父はいつも、あたしに厭らしい視線を向けてくる。この間の、

それより巫彩、お前ももう中学一年生か。ハツハツハツ、なかなか女らしい体格になつてきたものだな。ぐびれも、健康的な肌の色も、実に綺麗だよ

なんて言葉が良い例。

「眞子……」

「だから巫彩さん、いつでも私の家に来なさい。それなら転校しなくて済むわ。朱音さんを守り続けられるわよ

「でも……」

「一の足を踏むあたし。」の両肩をがつしつと、会長はつかんできた。

「なんなら、今日からでもいいのよ。やつ……何かあつてからじゅ
遅いの！ 真子さん、貴女が自分と同じ田に遭つたりしたら、どん
なに悲しむか！」

あたしはそのまますぐな表情に、ありつたけの誠意を込めて頭を
下げた。

「ありがとうございます。でも、もう少し考えさせて下さー。それ
に、自分の身は自分で守れますし」

あたしは自信満々でそう告げた。この《先送り》が、どんなにもな
い悲劇を生み出すとも知らずに。

「やう……。できれば早く返事をしてほしいわ。じゃあね」

心配そうにあたしの瞳を覗き込む会長に、あたしは深い感謝の意
を込めて深々と頭を下げた。

他人の家にお世話になるといつのは、やつぱり申し訳ないし、今
は木泊兄さんのこととか真紗耶さんたちのことを考えたい。ことに
DVDの件、あれはすぐにでも調べたいもの。西原さんと暮らせた
ら、それは幸せなんだろ？けど。

それにもしても、会長が義母を捻じ伏せてくれたおかげで、あたし
の行動範囲は広がるはず。さつきは朱音が真子・紗那と仲良くなっ
たことだし……久しぶりに訪れたいくつかの幸運に、胸を高鳴らせ
ているあたしだった。

確かに希望（後書き）

三章はこれで終わりです。
いやあ、こんなに時間がかかった章は初めてでしたよ（笑）。

【シナリオ・ビュー・ポイント】薄紫の校舎跡にて（前書き）

果音様の怖さとか、校舎跡の不気味さとか……
そういうのが読者の方にきちんと伝わっているのか。
それが甚だ心配です。

【Shuhos viewpoint】薄紫の校舎跡にて

それは、うら寂しき薄紫を描く夜明けの出来事であつた。

透き通つた春の光は、校舎跡を満たす埃や蜘蛛の巣をなんとも皮肉に輝かせ、北からの風によつて恐ろしいほど澄んだ空氣は、私の悲哀をいつそう浮き彫りにする。

「志穂！ 貴女も手伝うのよ！」

「果音様！ 果音様！ お願ひよ堪忍して！」

北棟へと続く渡り廊下。壁は安っぽいガラス張りであるため、物寂しい空の色がじかに感じられる。

……私は果音に引きずられ、今まさに轟音の響き渡る『開かずの間』へと連れられそうになつていた。力の差は歴然であり、一尺、また一尺と、開かずの間の仰々しい扉が迫りくる。

通路を半分ほど引きずられたところで、

「いやあーーっ！ ああああーーっ！」

とうとう私は得体の知れぬ恐怖に耐え切れなくなり、大口を開け、喉が千切れるほど嗚咽した。

果音は立ち止まり、そんな私に羅刹の『とき凄まじい眼光を浴びせると、私の左肩を右手で齧づかみにし、左手で私の背を百叩きにしてきた。肺が激しく刺激され、赤い飛沫の混じった咳が次から次へと出てくる。

私が咳き込みつつ地面に崩れ落ちると、果音は剥がれかかった床の板をバリバリと剥ぎ取り、それを武器にして蹲つた私の背を次々に鞭打つた。服の上から、私の体に木の棘が何本も突き刺さつてゆくのが分かる。

そしてそして、果音がどごめの一撃を打とうとするのと、私が起き上がるのとするのが同時だった。

果音はバランスを崩し、自分が剥がした床の穴に足をとられそうになる。そしてバランスを保つためガラスに手を着くも、老朽化し

たガラスはいとも容易く割れ、果音の上半身が建物からみ出した状態となつた。

ガラス片があちこちに刺さり、果音の体は半ば血だるまの「」とき有様になつてゐる。

「果音様！ 果音様つ！ 今、救急車を！」

私が携帯電話を出すと、果音はそれまで以上に憤慨。

「そんなもの呼んじやだめえーつ！！」

ズタズタになりながらも凄まじき執念をみせて起き上がり、私を思い切り突き飛ばし、時おり倒れそうになりながらも未だ轟音の響きやまぬ開かずの間へと向かつていつた。

果音は《騒ぎ》が収集したら、いつものごとくアロンナルファーで傷を塞ぐつもりに違いない。事実、果音の体には十数ヶ所も、接着剤で繋ぎ合させた痕がある。

それでも全く生きるか死ぬかの状態にならないのは、恐らくは若かりし頃の体の鍛え方が尋常ではなかつたからだろう。

私のほうも今回、細かい棘が刺さつただけで目立つた外傷もなかつた。喉の傷とて、普段からハスキーボイスな私には何ら問題はない。まあかけよつ……。

【シナリオ・スクリプト】薄紫の校舎跡にて（後書き）

果音様が鬼畜過ぎて、

皆さん話題にすら出したくない……のかな?
ともかく、果音様に注目して読むのが、
この物語を一番楽しめる方法だと思います。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】汚水と聖水（前書き）

何度も言いますが、首田宗志教は架空の宗教です。

ただし、これとよく似た思想の集団は実在しました。まあ首田宗志教のような過激な行動は起こしませんでしたし、そもそも宗教ですらなかつた。

しかし、私は思つたんです。

「この集団が宗教に発展して力を付けてしまつたら、恐ろしいことになるのではないか」と。

この物語の首田宗志教のプロットは、そのよつてして生まれたものです。

【Miss a - s viewpoint】汚水と聖水

「ハツハツハツ、飯をこしらえろー！」

「それどこのじやないザマス……会長様……ああ……会長様……」「腹がすいているんだ！ 飯をこしらえなさい！」

「……どうすれば会長様はワタクシをお許しに……ふひー……」「ハツハツハツ！ 何があつたか知らんが不様なものだな！ ハツ

ハツハツ！ もう良い！ 外で食う！」

ドアの向こうから聞こえる、フヌケになつた義母と、それを気遣いもしない義父の声。けれど……あたしの心は今それどこのじやなかつた。

なんていう愚かしい世界！

昨日、真紗耶さんとの会話に《諸悪の根源》として出て来た小説家・アニメ評論家《首田宗志》 諸悪の根源であると考えたのはあたし自身だけれど、真紗耶さんと志穂さんの転落は、まさに木泊兄さんの自殺未遂に端を発している気がしてならない。

そして、兄さんの自殺の原因となつたのが《首田宗志教》。

あたしは登校前のこの時間、首田宗志教についてネットで色々調べていたわけだけど……この宗教のあまりの卑劣さ・横暴さに度胆を抜かれて、不吉な両親の声さえとともに耳には入らなくなつていた

一つ。小説・アニメ・漫画は一人で楽しむためのものではなく、他者と関わるためにものである。作品を語り合いつ仲間を持たぬ者に、首田宗志を愛好する資格はない。但しその仲間がオタクであつてはならない。会社員・公務員をはじめ、将来の夢をきちんと持ちつつ勉学にはげむ学生、および自営業などが特に好みしい。

一つ。美少女文化を愛好する者に、首田宗志を愛好する資格はない

い。不買活動、デモ、アニメ製作会社への製作反対運動などに於いて、そうした文化への攻撃を行なうのも我が首田宗志教の使命である。

一つ。首田宗志の作品を普及する氣のないものに首田宗志を愛好する資格はない。少なくとも十人の友人に作品を薦め、その友人にも普及活動に参加するよう呼びかけねばならない。友人が十人に満たないなどというのは論外である。

一つ。小説という文化を守ることこそ、首田宗志教最大の使命であり、これを穢す者への攻撃を行なうのが我が宗教の使命である。小説を書く資格を有するのは社会経験豊富な高学歴者のみであり、一流大学卒の元サラリーマンたる我が首田宗志こそが、小説家の鑑に他ならない。どれほど魅力ある小説であろうと、それが低学歴かつ社会経験の不足した者が書いたものであれば、それは社会に害をなす悪魔の小説に他ならない。

以上、四つのルールを守らぬファンに対する攻撃を行なうのも我が首田宗志教の使命である。ルールを守らぬ者がファンとして首田宗志に纏わりつかぬよう、常に攻撃態勢に入つてることが望ましい。それを怠る者に、首田宗志を愛好する資格はない。

以上が、『首田宗志教ホームページ』の残骸に記されていた、『首田宗志ファンの心得』。

首田宗志教は見ての通り、惡意のないファン、誰を傷つけるわけでもない美少女文化、ひいては何の罪もない小説家たちすらも攻撃の対称にしている。……もう呆れを通り越して、この愚かさを的確に表現する言葉すら見当たりはない。

ホームページの最終更新は一九九四年の初頭。首田が殺される直前まで更新されていったことになる。

そしてこの年はちょうど、『ときめきメモリアル』の第一作が発売されたのをはじめ、今まで云々『萌え文化』のはしりともいえる兆候が見られだした頃。

H口い女の子が表紙になつたゲームなんかが売られ始め、可愛い女の子が変身して悪と戦うアニメなんかが流行りだした頃……のかしら？ もつと昔から、そういうものはあつた気がするけど。

しかし昨日の痴漢も話していたけど、首田宗志は美少女が暴行されたり甚振り殺されたりする話を書く小説家。そんな彼の傘下に生まれた宗教が、どうして美少女文化を攻撃しようとしてたのか……解らない。

さて、『ホームページの残骸』といつのは、既にそのページが『跡地』となつてゐるから。つまり、ここ十数年間はずつと更新されず、webの海底に難破船みたくして存在してゐること。

集団自殺という衝撃的な最期を遂げた首田宗志教。モニタに映し出されるホームページはいかにもネット初期といった感じの、原色をベタ塗りしたような素つ氣ない質感だけど、それが逆に当時の世界にあたしを引き戻すようで、どうにも空恐ろしくなる。

首田宗志のことを調べていたら汚水を浴びたような気分になつてしまつた。

まだ調べ足りないけど 時間もちょっとだけのことだし、出かけてしまおう。すぐにも朱音の顔が見たい。今日は北からの空気が入つて涼しいし、すがすがしい登校になりそう。

家を出て春の北風に吹かれるべく、少し前までのあたしに戻つた気分になる。

南風が吹きすさぶなか、あの一人に出逢つた昨日が夢のよつ。

……といふか、あたしはまだ夢を見ているのかしら？

「オツス巫彩！ 今日はサボんなよ～」

「おはよ～」

春風に吹かれるタンポポのように手を振つて、朝の挨拶をする眞子と紗那 これは数ヶ月前の日常。そして……

その後ろ……紗那と眞子を両前に携えるようにして、少し俯いた

朱音の姿。

「ちょっと……！　みんな、あたしが出でてくるの待つてくれたの？　つていうか」

あたしが訊く前に、朱音が前に歩み出てきた。

「昨日は、この三人で下校したの。……一人とも、なんだか巫彩に似てて、私なんかと仲良くしてくれて」

朱音の言葉を引き継ぐように、眞子、続いて紗那が甘く囁く。

「なんか三人で居るのが当たり前だつた気分」

「巫彩が守りたくなる気持ち……解るよ」

昨日は眞子の様子を見て、そのまま帰つてしまつたあたし。あれは、帰り道の痴漢騒動があつて以来、朱音のガードが固くなつたらだつた。朱音があたしに気を遣つて、

護身用の武器とか持つようにしてゐるから大丈夫。帰り時間が合わない日は、早いほうが先に帰ることにしよう。なんて提案してくれて。

そして例の「」とく、あたしをからかつてくる紗那。

「それが巫彩つたら昨日、カレシにフラれたんだつてえ？　堀の前で一人寂しく二コ二コ観てたつて、眞子から聞いたよ」

「そうそう。だから三人で出迎えて、励ましてやろうつてね、朱音が言い出しても」

眞子が得意気に朱音を見ると、朱音はビクッとするみ上がる。

「ま、眞子つ！　それは言わないつて約束したでしょ！？」

朱音は恩着せがましくなるのが嫌で、眞子にそれを言わないでと頼んだんだと思う。

けどあたしは、いつやつて早々にバラしてくれた眞子に感謝していた。

だって、嬉しいから。

「あははははっ　そつかそつか。じゃ、四人して行きましょ！」

あたしが三人のなかへ飛び込むように合流すると、なんの違和感もなく、季節の戻つた路地を四人で歩き出した。

花たちも新緑たちも、にわかに戻つた冷たい空氣に寂しげな表情をしていたけど、あたしの心はそれさえも風流な見物に感じてしまうほど明るく浮き立つていた。

首田宗志教が汚水なら、彼女たちは聖水ね。

ただ……あたしが先頭、朱音がその後ろ辺り、で、紗那・眞子が両脇をゆく、この菱型の陣形

紗那と眞子の間にぽつかりと空いた空間に、冷えきつた植物たちの香りが漂つ。

……元々、紗那と眞子は大の仲良しで、あたしがそこに割つて入る形で仲良し三人組になつたわけだけど。

最初の頃はあたしが先頭を歩くか後ろを歩くかしてて、紗那と眞子はいつもくつづいて歩いてたし、ときには手を繋いだりもしてた。それがいつからか、あたしが中央を歩くのがデフォルトになつて……それはそう

「もう、彼つたらね、付き合つて半年も経つのに、手も繋がないんだから」

ちょうど紗那がこんなふつて、彼とのノロケ話をあたしたちの前でするようになつてから。

「ほらほら、巫彩は昨日失恋したばつかなんだから、そういう話はやめときなつて」

こんなふうに、どうこうわけか眞子はそれにさり気なく突つ込む。これまでは何気なく見流していたこの光景だけど、朱音というフイルターを通して、初めてそれが違和感としてあたしの心をつづいた。

「ねえ、眞子つてさ、好きな子とか、居るの？」

さり気なく訊いてみると、眞子はズサッと靴を鳴らして立ち止まる。

ちょうどそのとき、春の侘しい北風が、ひととき家々の庭木をざわめかせていった。

「居るわけないじゃん……。ばっかじゃないの？」

眞子の吐き捨てるような屈折した声。俯いたその瞳は、風によつてバラバラと舞い落ちてしまつ新縁を映していた。

あたしは朱音と目を見合させる。

あたしと朱音の考えは同じだと思つつまり、眞子が好きだつた彼を、紗那が奪い取つてしまつたんぢやないかしら……と。

【Massaya-s viewpoint】愛のとおれっこ（前書き）

「あたりからやつと、恋愛ものらしくなってきますね。

「そういえばジャンルを『恋愛』にしたんだった！」

なんて、意識しなければ自分でもこれが恋愛ものであることを忘
れてしまふ。そんな内容ではありますが、ジャンルを『恋愛』にした
ことは後悔していません。

なぜなら、後半は恋愛模様がメインになりますし、それに、大き
な意味での『愛』というのが、物語全体の最大テーマですので。

【Massaya - s view point】愛のとれぬこと

「おーしー、今日もいーのが撮れたね！」

「はい！ そろそろ売りに行きましょつか？」

「おーおー真紗耶、良かつたよ……何にも変わんなくつて
こつもの屋上でやりとりの中、ふいと私に不穏な言葉を吐いて
くる柴門さん。

無性に腸はらわたが煮え返った私は、彼女の呑氣な笑顔を搔き消さんばかりに、いやらしく縋るような目で見つめてやりました。

「どうこいつです？ なんですかそれは？ 私が柴門さんを裏切ることでも！？ 柴門さんは、柴門さんは、私をそんな人間だと思つていたんですか！？ 心外ですっ！ 私はっ、私はただの一度だけ、貴女を蔑ろに考えた事などありません……！」

私は感情的になり、柴門さんを乱暴に押し倒しましたが、彼女は怒りもせず、惚けたように私を直視します。

「あ、ちょっと、撮影時以外にそういうことになると困るじゃない。……あのねー真紗耶、私はね、巫彩さんに会つたら、あんたの心がそっちのほうに行つちゃうんじゃないかなって、それを気にしてたのよ」

さすが、付き合ひが長いだけあり、柴門さんは私のどんな態度も柳に吹く風の」とく交わしていきます。私はその体にのしかかり、胸に顔をうずめました。

「何があのつとも私は……私は、柴門さん、貴女との生活を続けます」

わざわざそれを口にするのが億劫でした。こんなふうに声に出さなくたつて、何があのつとも私たちほこの生活を続けやれるをえないわけで……。

ところが柴門さんは全くテリカシーのないことを言つてゐるのです……

「ユーさんのお…………私と同じ」と続けてひや、巫彩さんと付
れんばかりなことへ。」

「柴門さん、私が巫彩さんに対していだく感情は、少なくとも恋愛感情ではありません。もちろん柴門さん、貴女に対していだく感情も、恋愛感情とは違いますが。そもそも、恋愛って何ですか？」

そののです。私は今まで、恋愛といつものに全く縁がない
じいわか、恋というものを小馬鹿にして生きてきたのです。しかし、
それとも、ずっといだいてきた私のこの柴門さんに対する想いには
が、恋愛感情なのでしょうか……。

柴門さんは不満そうに私を手で突き放すよつにして立ち上がりました。自らも憂鬱に起き上がりました。

「何つて？」

「私たちの関係よ。長い付き合いだし、デートもしないから『恋人』じゃないでしょ？　かといって、こんなブツを撮つてるわけだから、ただの『友達』とも『幼馴染』ともいえない。それから、血が繋がっていないし結婚もしていないから『家族』とも違う。でも、ただの『仕事仲間』にしちゃ、お互い骨の髄まで知り尽くしちゃつてるし……」

……恐らく、巫彩さんの登場が柴門さんを混乱させていたのでしょ。これは少し話し合ったほうが良さそうだと思い、私は少し改まつたふうに態度を変えました。

柴門さん……愛たの恋たのの下りなさは貴女が一番よく知るで

それを言われると柴門さん、喜劇の「じとく」画面にふんぞり返ります。

「あーそうだった！ 私には昔、常に付き合つてゐる男が居た時期があつたんだつたわねー。本当、愛だの恋だのは下らないよ。恋焦がれて、愛に燃えて、そんでもつて最後はカスになる、そんだけ。け

ども、けど、不意、と立ち止まって、『私たちって何なんだらう』つて考えたら、もーワケ分かなくなっちゃつて……』

私は冗談を言おうとして微笑んだ後、

「では、籍を入れますか？ 性転換したとはいえ、私は戸籍上は男性ですので」

と口にすると、自分が意外にも眞面目に柴門さんの顔を見下ろして、慈しむようにその言葉を呴いたことに自分で驚きました。これには柴門さんも少し凍りつきます。

「あ……あ？ ……で、でも、それに何の意味がある？ 私たちが『夫婦』になる理由、どこにあるかなあ？ 結婚しようがしまいが、私たちは今この生きかたしか出来ない。そうすると本当に『書類の上だけでの夫婦』になっちゃう」

「だつて、ハツキリさせたいんでしょう？ 私たちの関係を『いやいや、別に私たちの関係を発展させたいわけじゃないの。だから、いいんだけどねー別に。じゃあ、売りに行こつか？』

実際に明るい立ち上がりかたをする柴門さんに、私は呪いと怨念に満ち満ちた眼光を放ちました。

「柴門さん、今の私は、貴女が居るからこいつして心を壊さずに生きていらるるんです。何か私に不満がおありなら仰つて下さいな。私が気に入らないからといって、いきなり私を見限つたりしたら殺しますよ……？」

後姿の柴門さんが振り向くと、そこには怒りに燃えし女怪の顔がありました。

「たわけたことぬかしてんじゃないよ！ 私だつてねえ！ あんたに見捨てられたら、もうあの校舎の跡に籠つたまんま餓死するしかないのよー？ あんたが巫彩さんに会つて聞いて、私がどれほど不安だつたか解る！？ 必死で私が不安を隠して明るく振舞つてた気持ちが分かんないかよー？ どんだけ極楽なの、あんたは！？」

砂漠の廃墟ドムドーラの「」とく、乾いた風に晒され朽ちゆくこの地帶に、女怪一人の罵声が虚しく響きます。

たつたこれだけの短いやりとりの内に、《裏切る》《裏う》《殺す》《餓死》《不安》……いろんなにも数多くの不穏な言葉が顔を出すのです。

いつからでしょ？ いんなふうに、私たちが女怪になってしまつたのは……。私は自問自答を始めます。

最初から？ 出逢った時点で既に、私たちは女怪になってしまつたのでしょうか？ いいえ、いいえ、少なくとも、柴門さんが《恋》というものに目覚める前は、私たちは女怪どころか、逆に誰よりも純粋な一人だった……今思えば、あの頃が一番、幸せだったかもしれません。

では、柴門さんが《あの事件》を起こしてから？ いいえ、いいえ、あの事件は柴門さんだけの問題ではなく、私が裏で手を引いて

私が女怪と化して あんなことをした原因は……何あら？ 木泊さんの自殺未遂です。

するとやはり、諸悪の根源は首田宗志教！

私はモーツアルトのイ短調ソナタよろしく《疾駆する悲しみ》にとらわれ、柴門さんの腕を驚撃みにしました。

「柴門さん、来て！」

「でも販売しないと！」

「これでどうですか！？ 今日一日ぐらーサボって何が悪いんです！？」

私は柴門さんに万札を幾枚か手渡しました。

「な、なにこの金！」

「柴門さん、私は分け前を使つてしまわず、五分の四ほどは溜めているのです」

「あんたはいいよね！ 稼いだ金を溜める余裕があんだからさつ！ 増まれ口を叩く柴門さんが私の業火に油を注ぎ、その腕を引く力

を強めます。

「とにかく来て！」

「ちよつとちよつと……」

【M i s a e - s v i e w p o i n t】交わされる次元へソックリパッチ

放課後。今日は紗那も眞子も部活が休みだったから、三人して朱音が練習を行なう音楽室へと赴いていた。

『お堅い』女学校だけあって、それなりに育ちの良い娘たちの息吹が満たす純白の校舎。茜色の空気に染まるこの時間はことわら、色づきだす乙女たちの息吹が艶めかしく輝く。

そして音楽室が近づくにつれ、その清楚で秘密めいた息吹をそのまま音にしたような聖歌が、その音量を大きくしてゆく。

マッシュータスの合唱部は時々協会なんかに招かれるくらい水準が高いらしい。確かにこつやつて聴いていても、子供の合唱特有の小便臭さが皆無なだけで凄いと思つし、ときには大人の女を凌ぐような色氣さえも感じさせる。

取り上げる曲題にしても、日本特有のせせこましい教育臭ブンブンな合唱曲はやらず、グレゴリオ聖歌とか、ルネッサンスやクラシックの合唱曲から歌いややすいものを選んでいるとか。

それだけに、英語やラテン語なんかを通り一遍は覚えなきゃいけないわけで、それが甚だ大変だつて、朱音がよくこぼしている。

いつぽつ眞子は、どこかソワソワして落ち着かない様子。

「あーあ。じゅうじゅうの聴くと心の臓しんのぞうが痛むんだよな。奨学金制度に目玉つけて入った口としては……育ちの違いが身に沁みてね」

そうそう。眞子は女手一つで自分を育てるイルームマスターを喜ばせようと、せつせと勉強に励んだという。結果、お嬢様でもないのにこの学園に入ることができたとか。

また、紗那は単純に歌に聴き惚れている。

「そんな難しいこと考えなくつていいよ。私なんて親が世間体のために、こんないい学校に入れたようなものなんだから~」

親が世間体のために。それはあたしも同じことだった。

正直、幼稚園・小学校と、女ガキ大将だつたあたしが、こんな『お堅い』学校でやつていけるのか不安だつたけど、いざ入つてみたらここには意外とインティメートな空間で。

『いかにも』なお嬢様がそんなに居ないほか、逆にみんながみんな育ちがいいことで、下らん流行や不毛な馴れ合いがなくつて、爽やかな学園生活を送れることにすがすがしい驚きを感じた。

「じゃあ、今日はこの辺にしましよう。皆さんお疲れ様」
たおやかな雰囲気の顧問教師が、タクトを置いて声をかける。
すると、昨日あたしがした提案を早速律儀に実践しようと、朱音が消極的に手を上げた。

「先生……あの」

「狭山さん、なにか？」

「そのピアノを、弾かせてもらえませんか？」

音楽室の隅にあるグランドピアノを指差す朱音。

「貴女ピアノ弾けるの？」

「私は……、自分の腕なんて趣味の範囲だつて思つていて……、でも昨日、友達が私のピアノを壊してくれたんです……。だから一度、先生に聴いてもらいたくて……」

顧問教師はピアノの前へ移動すると、蓋を開ける。

「いいわよ。……ああ、他のみんなは帰つてもいいわ」とは言つものの、少女たちは一人として帰るそぶりを見せなかつた。その代わり……

「狭山さんに友達なんて居たんだ？ ふふふふ」

そんながらかいを口火に、軽いさざめきが起つる。やつぱり朱音は部活に於いても、相当地味な存在だつたらし。

ピアノへ移動する朱音が、ぎつと一同を『心の中で睨む』のが、あたしにだけは伝わってきた。

ピアノの前に座ろうとして、ドアのほうを向くと、朱音はあたちがドアの窓から覗いていることに気づく。

その瞬間、あたしは朱音に烈しい眼光を送りつつ、首を横に振つた。

そんな心で弾いちゃダメよ！ と、そんな想いを込めて。

「…………！」

それが伝わったのか、朱音はピアノの前に座ると深く目を閉じ、祈るように瞑想した。

そして女神が目覚めるようにゆっくりと目蓋を上げると、またあのこの世とは思えない調べが音楽室を満たします。

曲はいつもと同じ、アルフレード・ショニトケのピアノ・ソナタ

第一番。

イルームマスターの『ショニトケの一一番』という言葉が気になつて今朝ネットで調べてみたら、これは僅か十八年前（一九九一年）に生み出された音楽で、海外amazonで試聴したところ、朱音がいつも弾いているのはその第一樂章だということが判つた。

同時にショニトケ晩年の作品であること、それから彼が妻のイリーナに贈つた作品であることも知つた。

「綺麗なんだか不気味なんだか……ねえ」

「やつぱり寒気がするよ……」

眞子と紗那はやつぱりこの曲に感ひを見せる。そつそつ、イルームの森で朱音がピアノを弾くのを、あのとき彼女たちは店の外から聴いていたといつ。

七分ほど、ただ朱音のピアノの音が響くだけの時間が続いた後、ふつと音が途切れる（現代音楽らしいハンパン終わり方！）と、音楽室を満たすのはただ拍手。

顧問の教師は放心したように聞き入つていたけれど、拍手によつて目を覚ますと朱音の元へ駆け寄つて行つた。

「狭山さん！ 貴女、才能あるわよ！」

「そうでしょうか……？」

「」の喝采の渦においても、朱音はいつものポーカーフェイス。

まあ、これじゃ学校で浮いてしまつても仕方ない。

「ええ。……そうだわ。つちは今まで、無伴奏をモットーにやってきたけど、これほどのピアノに合わせれば、それなりの芸術品が生まれそう。狭山さん！ 貴女、我が合唱部の部員兼ピアノ担当になつてくれないかしら？」

「私……小学校の頃は聖歌隊でオルガンを弾いてました。でも、それは和音をベタベタ弾くだけの作業で……。ピアノの腕はどうか……」

「だから、その腕が確かに」とが今、ヒーリド証明されたの。それとも私の耳では不満かしら？」

「い、え！ 先生がピアニストとして、どのくらいの活躍をしていますかは、私も知っていますし……」

すると、部員たちも「やつてみたら？」とか、「またとないチャンスかもよ」なんて朱音に声をかけだす。

朱音の緩やかな台形を描く瞳がほんの少し潤んだかと思つと、その華奢な体はきつぱりとそこに居る全員に頭を下げていた。

「……よろしくお願ひします」

見守るあたしたちは三人で抱きしめ合つて喜んだ。ただし、場所が場所だけに声は出さずには。

そのとき、まるで水を差すように、あたしのケータイがスカートのポケットでブルブル震えた。あたしは基本、放課後になるとすぐケータイの電源を入れている。

「つたく……」

開いてみると、それは真紗耶さんからのメッセージ。

「ミサエ、さよなら。私はやつぱり……ソッチへは行けない。ごめん、なんだか眠くなつてきた」

これは……《真紗耶さん》というより、《真紗耶》の言葉だった。はしゃぐ紗那と眞子。歓声に沸く音楽室。そのそばであたしは、一人凍りついてしまつ。

さよなら

なんて、どうして突然別れの言葉が出てくるの！？

ソッチ

つていうのはつまり　これのこと？　この、朱音の才能が開花して、それが認められた感激に満ちる音楽室のこと？　友達の幸せを心から喜んで、抱きしめ合つて喜ぶ三人組のこと？

というか、メールを送つてきた真紗耶にあしたちの状況が分からわけはないんだけれど、あまりにも

あまりにも、一人寂しくあたしにこんなメールを送つてくる真紗耶と、新鮮な喜びに沸くこの場所の温度差が凄まじすぎて、あたしは笑うこと止められてしまった。

そう……そう。いつもいつも、この人のメールは長文だった。『これこれこういうことがあって、こういうことがあるから、こうなんです』なんて、順を追つて丁寧に文章を組み立てるのが、あたしの知つてる《真紗耶さん》のメール。

ところが、これは何？　ボソッと、まるで《真紗耶》に戻つたみたいに、自分の心うちをあたしに……。

おまけに、

眠くなつてきた

これはどういうこと…？　まさか……まさかこの人、木泊兄さんと同じことを…？

あたしは戦慄した。兄さんの心の闇が再発しないかつて心配し続けて、それで真紗耶さんと会うことにしたあたし。

けど当の木泊兄さんは意外とのほほんと暮らしていく、ヤバいのは真紗耶さんのほうだった……ということ…？

いてもたつてもいられなくなつたあたし。

「紗那！　眞子！　朱音をお願い！」

とだけ言つと、早足ですすたと長い廊下を歩き出するにやら紗那と眞子が話しているけど、構わなかつた。

「あー、巫彩つたらまたカレシからお呼びがかかつたんだあ

」

「ちよつとちよつと、どう見たってそんな雰囲気じゃないでしょ？
が！」

「もう、あのマジメ顔は恋に燃える女の顔よ。あーああ、私の
彼もあんなふう」「

「カレカレカレカレいつるさいんだよ！ いつつもいつつも！」

眞子が紗那の言葉を遮つて怒鳴るのが聞こえたけど、あたしはそ
のまま廊下の角を曲がつてゆく。

気づけばあたしは江ノ電の中。そうだ。横浜に着くまでに、電車
内でDVDのことを調べてしまおう、と思った。ラッシュアワーの
時間には程遠いから乗客も少ないし、いいでしょう。

な、何が起こったと……」これは一体……私は木の床に正座し、椅子に座つた女性の膝に肩から上をゆだねて眠つていたようなのです。膝から離れ、女性の顔を見上げると、そこには柴門さんのようすでいて、少し今の柴門さんは違つような気もする女性が……私の頭を膝に乗せたまま何かをこじらえていたらしい柴門さんは、テーブルに一旦それを置き、私の頭に手を乗せて慈しむように手を閉じました。

「おはよう真紗耶。旦が覚めた？ 長いうたた寝だつたわね～……」

「そう！ この感じは、『あの事件』が起こる前……」

いえ、いえ、それよりもっと前に……恋に染まる前の幼い柴門さんです。その純真さのまま、年齢だけは今の姿になつており……その透明な美しさたるや、母の薔子さんすら色褪せて見えるほど。

「あの、柴門さん……？」

「ちょっと真紗耶～、なにヨンヨソシイ呼び方してのよお～？」

柴門さんに訝しがられ、ふと近くに置かれた棚のガラスを見てみると……

なんと、性転換する前の、『男とも女ともつかぬ女の格好をした若者』としての私が映つてありました！ 思えば、柴門さんはこの姿を酷く気に入つておられたのです。

けれども、次第に髪が多くなり始め、顔つきもゴツゴツしてくると、私は気が狂い、その解決策として性転換に至つたのであります。しかし今ガラスに映つているのは、髪が生え始めるよりずっと前の、高らかな美しさを持つた私でした。

「やだ！ 私、男に戻つてしまつたのですか？」

とりあえず慌てる私に、柴門さんはとんでもない返事を……

「馬鹿じゃないの？ あなたは女の子でしょ～。それとも真紗耶、性転換して男にでもなりたいの？ ふふふふふ」

本当に明るく、優しく、そして微塵の諧謔性も見せずに笑う柴門さん。長年の苦しみが溶けていく想いでした。

私は、告白龜になる前のボソッとした口調に戻ります。

「おしほ、あの事件の心の傷、完全に癒えたんだ？」

「ちょっとちょっと、事件つてなにね（・・へへ）事件つて。おー

い！ 目を覚ませー！」

私の頭を両手でグリグリする柴門さん。

夢！？今までのあの、私と柴門さんの呪われし青春は全て夢だったとー？

ふと、時計を確認すると、時刻はもう暁！

「おしほ、早くDVD、売りに行かないと……」

「あーもう！ その年でボケ！？ 私らが売ってるのはDVDじゃなくって造花よ？ ほら、あんたが寝てる間にもこんなにこじられたんだからっ！」

改めてテーブルを見てみると、そこには見事なプラスチック造花の数々……柴門さんの好きな、《ありえない形の花》が並んでおります。

「おしほ……」

「ほら、売りにこくお（^_^）」立ち上がる柴門さん。

よく見渡せば、ここは見覚えのあるレトロな木造校舎……窓の外は、少なくとも日本ではありません。のどかな田園風景が広がっており、土と木と海の匂いを乗せた懐かしい風がこの建物中を満たしております。

「おしほ、いじりて……」

「相当、重症みたいね。ここは私たちのお家よ。ほら、お花を見ながら街まで歩けば嫌な夢のことなんか完全に忘れちゃうって！ 行こう～。」

「ワタシ、お花見、嫌い。人いっぱい、居るから……」

「ちょっととちょっと、お花見つてなによ、お花見つて。街の行事？ いつも一人で造花製作の参考に、お花を見に出かけるでしょう？」

あまりにも、優しく、温かく、平穏で、ちょっとびり儂げな、そんな私たちの生活。そうだった。私は柴門さんと籍を入れ、山奥に在ったこの校舎跡で暮らし始めていたのでした。

おかしな夢のせいで、危うく記憶すら失うところ。

……長い、本当に長い夢でした。復讐、殺人、転落、そして行き着いたところが、追っ手に怯えながら如何わしいDVDを販売するという生活。どうして私はこんな夢を見てしまったのでしょうか？

「おしほつ！ ああっ！ おしほおしほおしほ！」

私は跪き、柴門さんの胸に縋りつきました。草花の息吹を宿したようなその温もり。涙が止まりません。柴門さんは少し首を傾げながらも、ひしと私を抱きしめ返してくれました。

「大丈夫だから。ね？ 私たちの生活、誰にも邪魔は出来ないから。そもそも、こんな山奥に人なんか来ないし 何があつても、一緒に守ろう？ 二人の国を」

「うん……」

黙つてそのまままでいると、木々のそよぐ音と、柴門さんの生命の鼓動しか耳には入ってきません。この平安を邪魔する存在など何もないと思うと、悲しいまでに幸福でした。そんな優しい沈黙を、柴門さんの笑い声が遮ります。

「はははは！ ほら、メソメソしないっ！ 売りに行くよーっ！」

私から離れ、表へ出ようとすると柴門さんをウツカリ引き止めてしまします。

「おしほ、ダメ。サングラス、かけないまま外出したら、追っ手が……」

すると柴門さんは私を強引に跪かせ、私の両頬を手で包んで女神様のように見下ろし、そして……

「よっぽど怖い夢だつたのね？ 可哀想に……。お姫様のkiss

で皿を見おせ…… つかつ……

【Massaya - s viewpoint】この日の遊び

「起 ケ ル …… ちゅ つ。」

「お、おしほ、なにするの? 急に……」

「きえーっ、真紗耶ーっ、どうしたの? 私のこと《おしほ》なんて呼ぶの何年ぶり! ?」

怯えるように私を突き飛ばし、皿らも砂利の上で恐れあののく柴門さん。

ここは房総半島・南半部に存在する渓谷。房総半島は低い山や丘陵の連なりからなる土地。

休耕した田んぼの脇から湧水が流れ込み、あたかも尾瀬のような湿地帯を形成しています。私と柴門さんは靴にヒル除けを塗り、草深い山々をかき分けここまできました。

しばらくおののき合った後、元に座っていた岩に再び腰かけ直す私たち。歩くたび、ピチャピチャと水遊びをするような音がします。鬱蒼とした木々を纏いし低い丘に四方を囲まれ、地面よりも水溜りのほうが多くを占めるこの地帯。普段は春の湿氣の溜まり場なのでしょうけれど、今日は珍しく北からの空気が訪れたためか、春の光を宿した水面を爽やかな微風が煌くように流れてゆきます。

「寝ちゃってたんだ……」おっと、告白龜に戻らなければ。「あ、眠つてしまつたんですね私」

「そーよー、『疲れましたあ』なんて言つちやつてさー、巫彩ちゃんにメール送ったかと思つたら、一時間も寝てやんのー、だから言わんこつちやない! もつと他にいい場所なかつたん! ?」

柴門さんは手近な石を、巨大な水溜りに小島のごとく点在する地面に命中させて楽しんでおります。比較的大きな小島に命中したところで、私は柴門さんに頭を下げました。

「『』めんなさい……。でも、ここしか思いつかなかつたんです。』

『廃墟以外で私たちが羽根を伸ばせる場所』って』

「んー……確かに、誰にも邪魔されなくつて、しかも日帰りできる
よつな場所つていえ、そりや限られてるけどあー」

柴門さんの石投げゲームは次第に難易度を上げ、今度は中くらい
の小島に、……命中！ 小島に生えた草がフサツと鳴り、名も知ら
ぬ昆虫が逃げてゆきます。

「でもほら、ここなら追つ手が来てしまつ可能性は極めて低いです
よみ？」

『追つ手』といつワードを出せば、

よつほど怖い夢だつたのね？ 可哀想に……

などと言つてくれるのではと期待したものの、柴門さんは最も狭
い小島を狙つて見事に外した後、首を縦に振りました。

「まあ、ね。わざわざビル除け塗らないと血だるまになるし、特に
絶景つてワケでもないから人も居らんし、……こんな所に、あんな
DVDを食つてる連中が来るわけないつて寸法か」

「そうなんです。東京や、東京を囲む県なら、日帰りは出来るでし
ょうけど、どこも観光地みたいな場所になつてしまつて、それに、
山へ入るとなると日帰りは無理ですし。といつか、ここしか知らな
かつただけですけど」

「ねー真紗耶、私たち、被害妄想に囚われてるのかなあ？ 追つ手
なんて、ホントはそんなに居ないんじや……」

サングラスをして歩いてしまえば、誰にも追われることのな
い私たち。

よつて私たちはときどき、《自分たちが被害妄想にとらわれている
のではないかという妄想》に陥ることがあります。が、つい昨日に、
それが《二重の妄想》であることが証明されてしまつたわけで……
「いいえいいえ！ ちよつと昨日！ 巫彩さんとSweet Se
asonに居たとき、休業中の札に気づかないで入ってきた男が、
私のことに気づいて。……サングラスをかけ忘れてたんですよウツ

カリ。そしたら早速擦り寄つてきましたよ」

柴門さんは手を停め、私に戦慄の目線を送りました。

「で、どうした！？」

「巫彩さんが懲らしめてくれましたよ」

それを聞くと柴門さん、もう手当たり次第に石を最も狭い小島に向かつて連投しました。それでも一度も当たらないと、自らが水飛沫をあげながらその小島へ走り行き、その上に仁王立ちをして見せました。そして手でメガホンをこしらえ、大空に向かつて叫びます。「だあああーっ！ 私の名前はなあ！ 前科者でも少女Aでもないのよお！ 私にはなあ！ 柴門志穂つていう立派な名前があんだけーっ！ 私は生きてんだよーっ！ 人間なんだよーっ！ 分かつてんのか（。。。）ゴルアーッ！！」

その姿を前に座つたまま見つめていた私は、ただただ哀しくて泣いておりましたが、やがて無性にいてもたつてもいられなくなり、柴門さんの隣の小島へ駆けて行き、同じように手でメガホンをこしらえ、山の上めがけて叫びます。

「河東真紗耶！ 私は、生きていまーす！ 身分証明もない！ 肩書きもない！ けどーっ！ 母に貰つた真紗耶の名！ この他に何が必要だというんですかあーっ！ 私は！ ここにある木々や！ 水や！ 草花と同じに！ 生きていまあーすっ！」

そんな私に、柴門さんは田舎をびしょびしょに塗らしたまま笑顔を見せてくれました。

《生きている》と呼ばなければ生きている実感が湧かず、《私は人間だ》と叫ばなければ自分がヒト科であることすら忘れてしまいうる私たち。

嗚呼それでも、ケータイで恋の四方山話を語り合つ若者たちよりは、じうして大袈裟に叫び合える私たちの魂のほうが輝いていると、強く、強く、そう信じたい私たちでした。

「また、来ようね、いい。今度は、もっと明るい気分のときこそ」

「そうですね……」

隣り合つ小島に立つた私たちは、何気なく、そう約束したのでした。

それから一人は、とぼとぼと元来た道を戻りました。

「何だか、足取りが軽くなつてますよ柴門さん」

「あんたこそ……」

と、そんな会話を交わしながら。

サングラスをかけて街に戻り、やがて総武本線の音が聞こえてくると、私はふと、あることに気づきました。

「ねえ柴門さん、」JJで腕時計を確認。「まだ夕方ですね。今日も、Sweet Seasonに行つてみませんか？」

「ん、なんで？」

「私ね、先週末、巫彩さんに 来週は毎日Sweet Season付近をうろついている という趣旨のメールを送つたんですよ。そして昨日、実際にお会いして以降は、せつて一度しかメールしていないので、もしかしたら……」

「なーるほど。今日も御出でなすつてる可能性がゼロではないってことか

「そうなんですよ」

と、そこで、『ドーラゴンクエスト?』のHレジーが流れ出しました。アツテムト鉱山で流れる絶望的な旋律。

「真紗耶……あんた、なんつー曲、着メロにしてんのよ……」

「は、ははは。……（？）もしもし、あ、お母様？」

電話の相手は袴里であり、《相談したいことがあるから出来るだけ早く帰つて欲しい》とのことでした。私がそれを柴門さんに話すと、彼女はドンと胸に手を当てました。

「しようがない。私が一人で行つてやるわ」

「よろしいんですか？」

「あなたは鎌倉の外れ在住。私は横浜の外れ在住なんだから。私が行つたほうが合理的でしょ？ それに……」

柴門さんは私が渡した万札の入ったバッグを軽く叩きます。

「それに、これのお礼よ。おかげで今日は何年かぶりにのんびりできたわ」

この程度で のんびりできた とは……柴門さんがどれだけ追いつめられた生活を送つておられるかが痛切に伝わつてくる発言です。私は柴門さんに深く深く頭を下げました。

「柴門さん、よろしくお願ひいたします。そして……どうか今日もご無事で……」

「はいはい、じゃあね」

いつもして私たちは別れました。いつものように。さう。明日また会つ約束など、することもなく。

さて、私は無意識の中に公衆トイレへ急ぐと、わけもなく《あの女性》の姿に変装しました。

そう、こつもDVDを販売する際に変装する、あの紅茶色の髪をした香上理奈子という女性です。

「えへへへ、志穂ちゃんつてホント優しいな……。私の代わりにSweet Seasonまで行つてくれるなんて」

鏡の中で微笑む告五箇でない私 やはり心が明るくなります。

『あれほど色々な事』があつては、私はもう、このような純粋な人間にはなれぬでしょう。けれども姿だけでもこの優しく純真な少女になると、心に溜まつていた毒素が放出される想いがします。

昨日は巫彩さんと会つたため、そして今日は販売をしなかつたために、この姿になる機会がなかつたので、いまこの機会を利用して変装しようと思つたのです。

そして、この姿のまま家へ帰り、

「お母さん、ただいまー」などと甘い声で挨拶しました。

頭を押さえながらフラフラと玄関へ歩いてくる母。

「おかえり。あら、今日は そつちの姿？」

と、この姿だと母は異様に素っ気なくなります。それは恐らく、告汚鷦が元の私の面影を残しているのに対し、理奈子さんの姿はあまりにも元の私とかけ離れているからでしょう。

私は母にすら、先日巫彩さんに見せた本来の姿を晒しておりません。

プチ整形が済んだ後、既に告汚鷦の姿となつて母の前に現れた私。《プチ整形の効果があまりにも大きかった》と事情を説明し、以来、私は柴門さんの前だけでなく、母の前ですら、告汚鷦か、あるいは理奈子さんの姿しか見せていないのです。

それは、巫彩さんに説明した、この人生をパロディ感覚で送るため……という理由だけでなく、姿が変われば、ともすれば泥沼化しかねない母や柴門さんとの関係に、常にある種の客觀性を生じさせることができると考えたからでもあります。

「うん で、話って、なにかな」

普通ならばここで、中に入るよう促し、お茶を入れてから話すでしょうが、それはドラマの中だけの話なのではないでしょうか？重大な話というのは、《今から私は重大な話をします》と宣言してから始めるものではない、と。

というわけで、母はその場に崩れ込みました。

「私、なんだか疲れちゃった」

「お人形、こしらえるのが？」

私の問いに、母は「シクリと頷きます。

「うん。考えてもみて。朝から晩まで、何も考えずに機械みたいに人形制作よ？ 頭脳を使う作業なら耐えられるけど、人形つてほら、ほとんど何も考えなくてこしらえられてしまうから。私の脳、退化してる気がする。本を読む暇もないのよ」

「そつかあ、元々は趣味だった人形制作を、ビジネスにしちゃったのがいけなかつたのかもね。時々休んで、本でも読んでたら、どう

かなあ？」

「そうしたいけど、本を読む暇があつたらむつと人形こしらえたいつて思つちゃつて結局……」

すると私の脳裏にはある案が。

「ねえ、志穂ちゃん、雇つてみない？ 志穂ちゃんはね、昔、造花をこしらえるのが上手だつたんだよ？」 だからきっとお人形だつて

……」

私の淡い希望を、母の哀しくシビアな声が遮りました。

「この家でアルバイトする儲けなんて、たかがしれてるわよ？ それじゃあ志穂ちゃん、ダメでしょ？」

「あ……そつだつた」

そうなのです。柴門さんは『前科者』としてどこへ行つても雇つてもうえず、かといつて、『儲けこそ薄いけれど人を選ばない職業』に落ち着くことも許されていないのです。柴門さんの前科を知っている者が客として現れたらそれで終わりであるねえ。

とすると、常に儲けの荒いあのDVD販売しか、今は生きる方法がないのです。

「真紗耶と志穂ちゃんが、あんな物を売つて生きてるつて聞いた時は、真紗耶を一生、家に閉じ込めてでも辞めさせよつて思つた。でも、『志穂ちゃんの事情』を知つたらとても……」

そう。母は知つています。何もかも。

それでも柴門さんへの同情ゆえ、あのDVD業を許している、と、本人は言つています。

……が、私はそうではないと思うのです。恐らく母は、私を自由に泳がせておくことで、逆に私の自分への愛情をやつれたものにしないようにしようとした策略しているのだと、そう確信しています。

身体だけの女なんて怖くないわっ！

怖くないどころか、この母は柴門さんを、食品に入つているような防腐剤として利用しているのでは……と。

「…………」

シユンとなつた私を、母は俯いたまま目だけを上へ動かし、決然たる眼光を送りました。

「真紗耶、アナタがウチで雇う人、見つけて来なさい」

「え、私があ！？」

「そうよ。下手に私が見つけてきて、変に嫉妬されたら嫌だもの……。いつまでに、とは言わないから」

「そうそう、私は告互匐に匹敵するほど粘着質であると同時に、オセロ王に匹敵するほど嫉妬深くもあるのです。私は、はにかみながらもペコッと頭を下げました。

「うー……わかつたよお」

【Shinō - s viewpoint】女怪の火花（前書き）

うーん、イマイチ迫力不足ですね。
もっと、内館牧子女史みたいな、ドロドロした女のバトルが描ける
ようになりたいです。

でも、巫彩と志穂のバトルが物語のメインというわけではないので、
まあ大目に見ていただけると嬉しいかと。

【Shiho - s viewpoint】女怪の火花

真紗耶から貰つた札束が重い。私はこの間ゲーセンで摩つてしまい、酷い目に遭つた。今日はSweet Seasonの様子を見たら真っ直ぐに帰らなければ。

北からの空気に支配された日には夕焼けがなく、あの橋が見えてくる頃には、空は深海のごとき濃い水色を描いていた。こんなにも澄んだ夕暮れを秋以外に見るのは久しぶりである。

橋の前に着くと、角のよ^うなツインテールを頭に飾り、鬼のよ^うな情緒を宿した少女の影が見えた。

そして次の瞬間！ 橋と、橋の下の店が一斉にライトアップされ、少女の姿が明らかになる。

誰であろう、中里巫彩であった。

点灯したのは、橋の柵を飾る丸い電灯、店へ下りる階段の始まりに付けられたアーチを飾るネオン、そして店自体の細長いネオンだけれど、最も目を惹くのは、一階の店のネオン上部で天の川のごとく煌く、四階から垂らされた網に付された無数の電球だろう。

巫彩さんは突然目前に広がつた、この早春のクリスマスともいふべき美しい情景に一瞬だけ感動の色を見せたけれど、私を見つけると何か威圧的な視線をぶつけてきた。

とりあえず歩み寄り、挨拶するしかない。

「巫彩さん、こんばんわ。今日も真紗耶に何か用？」

「ええ……来たのは、貴女だけ？」

意外にも昨日と同じフツーな態度。私は少し脱力した。

「うん。そうだけど。何か真紗耶に伝えたい事でもあるなら私が代わりに……」

と、そこまで言つたところで、巫彩さんは私のほうへ一歩、踏み出した。

「貴女だけのほうが良かったわ。突然だけど志穂さん、たった今、貴女たちがどんなDVDを売つて生きてるのか、それで、そのDVDがネットでどれだけウケているのかも、全部調べてきたわ」

「あつそう」

「それでね志穂さん、真紗耶さんが貴女とDVDを売る人生から抜け出したいと思ってる限り、あたしは貴女たちの関係を許すわけにはいかないから」

……これはまた実に単刀直入に切り出したものだ。この年齢の娘なら普通、こんなことはモジモジして言えない筈。そのことに敬意を感じつつも、私は厳しく切り返す。

「真紗耶はね、今日、私に、はつきりと、自分の巫彩さんに対する想いは少なくとも恋愛感情ではないって、そう明言したわ」「なら訊くけど、真紗耶の貴女に対する想いは恋愛感情なの？」

答えられない　けれども無性に腹が立ってきた！

「ちょっと！　なに呼び捨てにしてんのよ！？　貴女が私たちの前に現れたのは昨日よ　昨日！　突然割り込んできた貴女に、私たちの何が解るつていうの！？　あ！？」

私がどんなに激しても、この小娘は微動だにせず私を真っ直ぐ睨んでいた。

「解るわよ。昨日、真紗耶さんがあたしに何て言つたと思つ？地上から離れたいって、そう言つたのよ…」

「そんなのただの気まぐ」「志穂さん…」

私の抵抗を呆氣なく遮断する巫彩！

「志穂さん、人の話は最後まで聞いて。真紗耶は自分と母親意外とはまともに口を利いたこともないって、貴女言つたわよね？」

「……ああ、言つたよ」

「確かにあたしは真紗耶には昨日の一回しか会つたことがない。でもね！　真紗耶にとつてその一回は、すごく特別なものだったのよ、

きっと。ふらふらーつて、虫みたいに外から飛来してきたわたしに希望を感じて、それで助けを求めてこんなメールを送ってきたのよ！

「あたし、そんな真紗耶の気持ちがたまんないの…」

あたしにケータイを突きつける巫彩。そこには……

「ミサエ、さよなら。私はやつぱり……ソッチへは行けない。『めん、なんだか眠くなつてきた』」

整形して女性ホルモンを飲み始める前の、中性的な魅力を持つていた頃の真紗耶の言葉があつた。そう、私を《おしほ》なんて呼んでた頃の。

しばしの沈黙。

このメールは……、あの湿地帯で眠りにつく前の真紗耶が書いたことになる。呑気に居眠りしようとするその裏で、こんな意味深なメールを巫彩に送つっていたなんて……。

これは、どう受け取ればいいといつの？

見ようこよつては、私への想いを再確認したゆえ、巫彩に別れを告げているようにも思えるし、逆に巫彩の居る ソッチ とやらに行きたないと、子供のように駄々をこねているようにも見えてしまう。私は前者の意味を持つメールであつてほしいし、さつき一人あんな《いのちの叫び》をした身としては、そうとしか思えない。けれども巫彩は当然、このメールが後者の意味を持っていると解釈しているわけで。

あたしが戦慄しているのをいいことに、巫彩はなおも私を追い詰めてくる。それも、汚らしく罵倒していくならまだ良かつた。なぜなら、慣れているから。

ところがこの女ときたら、普段はじゅじゅ馬なクセに、今ばかりはまるで有能なカウンセラーみたいに、淡々と冷静に私と真紗耶の闇に切り込んでくる……

「AV女優や風俗嬢なんかとはワケが違うのよ。だつて貴女たちの

場合、相手が決まってるんだから。真紗耶はきっと、貴女との深すぎる関係に、身動きできなくなってるのよ。だって、生活と貴女との関係とが直結してるんだもの」

私は背筋の辺りがムズムズと刺激されるのを感じた。

「つてそれって私への嫌味！？ 私は真紗耶の身体しか知らないとでも！？」

「違う？ 少なくとも今は、そうなつちやつてるんじゃないの！」

試すよついに訊き返していく巫彩。

なんとこう恐ろしい女！ 私の口調はこよによ内的な狂氣を帶びてきた。

「……巫彩さんよ、どうやら貴女には本当の事を語らなければならないようねえ。真紗耶は女性ホルモンの副作用で情緒不安定でね。ときどき赤ん坊が夜鳴きするみたいに、悲しくなると突然的に私にしがみついてくるのよ？ そのたびそのたびに、私は真紗耶をあやしてるので。貴女にその苦難が出来る？ 真紗耶は精神病患者同然なのよ」

「真紗耶が精神病なら、木泊兄さんだって、それから朱音つていうあたしの友達だって、精神病つてことになっちゃうわよ……そうでしょう？」

そして真紗耶と木泊さんが精神病なら、私や果音も精神病ということになろう。

……私は次なる切り札を出す。

「ふう、私はね、真紗耶のお母さんと条約を結んだのよ。真紗耶を金稼ぎに利用しちゃう代わりに、真紗耶が取り乱したときは私が慰めるつて」

「それが？ そのことと、あたしのことと、何の関係があるのかしら？」

「だからね、私と真紗耶の間には、そういう複雑な事情がたくさんあるの！ 中途半端な同情だけで、私たちの仲に茶々を入れること

なんて出来ないのよ！」

私がとつとう激情を露にしてしまつと、巫彩は厳格な自信に満ち満ちた上からの目線を送ってきた。年下の分際で……実に腹立たしい。

「言つておくけど志穂さん、これは同情なんかじゃないわ。あたし、真紗耶には幸せでいてほしいのよ」

そこまで言われると、怒りを大きく通り越して不思議な気分になつてきた。

「あんた、なにゆえそんなに真紗耶にこだわるのよ？ 今的话で判つたでしよう？ 真紗耶と付き合つたって、貴女には微塵の利益もないのよ！？ 私には理解できない……貴女が、どうして自ら進んでこの呪いの地に分け入ろうとするのかがね！」

この言葉には微塵の誇張も含んではない。

この女は『じゃじゃ馬』ということを除けば本当に清廉潔白な娘であり、そんな女がわざわざ私と真紗耶が居るこの呪われし青春の渦中に入りろうとする、その神経が信じられなかつた。

巫彩は少し表情を和らげてくる。

「あの人……木泊兄さんや朱音と同じ田をしてた……。あたし許せないのよ……純粋な人間が痛い目に遭つのが！」

そこへきて初めて、私は巫彩に『勝つた』想いがして、得意氣にほくそ笑んだ。

「真紗耶が？ 純粋な人間 だつて？ はははは！ ちゃんちゃら可笑しいつたらないわ。真紗耶が私に何したか解つてるの？ あいつがどれだけ意地汚いか知つたら、あんたのほうから逃げてくれよ！ そら、逃げるなら今のうちよ？ 今なら真紗耶とのこと、綺麗な思い出として忘れられるわ」

「あの人気がどれだけ意地汚いかなんて知らない……でも、あの人があ意地汚いことをするようになつたのつて、女性ホルモンを飲むようになつてから……違うかしら？」

これにはハツとさせられた。確かに、真紗耶があんな妖しく黒光

りする粘着質な性格になってしまったのは、女性ホルモンを飲み始めてからのことだ。

「つ……！」

「貴女のことを《おしほ》って呼んでた頃の真紗耶は、誰よりも純真で透明だった……。あたし、戻つてほしいのよ、その頃のあの人には」

「けつ！ なによ知つたような顔して！ なにが《戻つてほしい》よ!? 昔の真紗耶も知らない分際で！」

「知つてるわよ！」

「知つてるってどういうことよー?」

「あの人あたしの前で変装を解いたのよ！」

そのとき、大きな船の雄たけびが横浜中の空気を震わせた。

『変装を解いた』その言葉を呑み込めず、顔面蒼白と化する私。「ちょ、ちょっと……、変装を解いたってどういうことよ?」「真紗耶はね、整形したって、貴女に嘘をついたんですけど。ホントはプチ整形しただけなのよ」

「じゃあ、戻るうとすればいつだつて元の姿に戻れるつてこと!?.「そうよ志穂。貴女には見せなくなつた本当の姿を、あたしには見せたのよあの人！ それでもあたしを外野だつて言つの!?.」

ただでさえ鋭い形のその瞳を、勇敢な自信にぎらぎらと輝かせて私を睨みつけてくる巫彩。

私は怖くなつて、ただただ怖くなつて、首を横に振りながら巫彩の両肩をつかんで揺さぶつた。

「出でつて……私と真紗耶の世界から出てつてえ！ あんたさえ……あんたさえ来なけりやなんにも変わらなかつたものをおつ…」私がどれだけ取り乱しても、巫彩は微動だにせず、ただそのツイントールだけを潮風に揺らしながら力強く答える……

「いいえ、出て行かないわ！」

そこまで言い切る巫彩の気持ちを量りかね、怒る力を失くして

その場に崩れる私。

「なんで……なんですよ……」

巫彩も少しだけ声の色を曇らせる。

「あたし、首田宗志教のホームページを見たのよ！ あたしね、日本社会のああいう感じが嫌で嫌で仕方ないの！ 例えば日本人にランドムで声かけて、首田宗志教の思想を教えたら、悔しいけど、十人中五人は『これは正論だ』って言うだろ？」

「だから……なによ？」

「木泊兄さんも、それから朱音も、そういう日本人の陰湿な気質が生み出した被害者でしょ？ それから真紗耶も。だから放つておけないのよ！ 志穂……貴女だつて」

「うるさい！」私は巫彩のそばから飛ぶように逃げた。

罵られるならまだいい！ まさか巫彩の同情の矛先が私にまで向いてくるなんて！

私は、私の心の闇の発端ともいえる『ある出来事』を思い出していくと深く関わるこのお尻を、わけもなく手で搔きむしる。

そう、何があろうとも真紗耶が絶対に触つてこない、このお尻を。

「あたしには志穂が悪い人だなんて思えない！」

「うすくまつた私に一步近づく巫彩。私はただ、

「うるさい！」と拒絕する。

「だってそうじやなきや真紗耶が貴女と一緒に生きるはずがないもの……」

「うるさい……」

「話してみなさいよ！ 志穂……貴女一体、何を抱えてるっていうの……？」

とうとう私のそばまでたどり着いた巫彩を、思い切り突き飛ばす。

「うるさいこいつのところにいるとい！ うるさい！ うるさいとい！」

「…………」

けれども巫彩を突き飛ばすどころか、像のように微動だにしない

巫彩のせいで、逆に私が跳ね飛ばされてしまつ。

とうとう橋の隅まで追いやられた私は、例の階段に付されたアーチ状ネオンにしがみつき、ただ震えていた。

田のすぐ前で輝く電球が、まるである童話の少女を温めるマッシュ棒のよつ。

巫彩は無様な私のこの姿を見て何か感じたのか、妙に高らかな声でとんでもないことを言つてきた。

「あたしだつてねえ、あの義両親が思うとおりの生き方をするつもりはないわ！ だつてあの両親の思考は、首田宗志教と同じだもの！ それならいつそのこと、貴女たちの居る地獄へ墮ちたほうが幸せよ！」

その告白 자체に怒りは感じなかつた。……けど、今この女が放つたある一言が、私をむくつと立ち上がらせる。

バシン！ あたしは巫彩に駆け寄ると、そのツルリとした頬に平手打ちを喰らわせていた。

「地獄だつて……！？ 私たちの居る場所はねえ、地獄であると同時に聖域なのよ！」

「聖域……！？」

「ああそうよ！ 私と真紗耶が何年も何年も、色んな者に笑われて！ 馬鹿にされて！ 叩かれて！ 踏みにじられて！ 嫌悪されて！ 嘲られて！ 罷られて！ 羔まれて！ 痛めつけられて！ 苦しめられて！ 足蹴にされて！ 殺されかけて！ その果てに辿り着いた聖域もあるのよ！ 気が楽だあ！？ そんな生半可な気持ちで入つてきて欲しくないわねえ！！」

パンツ！ 巫彩は殴り返してきた。果音に殴られるのは全く違つた痛み！

果音に往復ビンタを喰らうより、板で殴られるより、巫彩の小さな手で一発引っぱたかれるほうがずっと痛かった。

「言つとくけど、これは貴女の言つてることに対する反抗じゃない

から！ 年下の女に手を上げるなんていう野蛮な行為に出た貴女への教育よ！ 貴女、誰からも教えてもらえなかつたんでしょう！？ 人としての最小限の礼節を

何度も思つけれど、一方的に罵られるのは慣れてこむ。

ところがこの女の言葉には常に、望んだことすらなかつた同情が流れてい……それが無性に、私を激昂させてゆく。

「つ……！ どっちにしたつてね、小娘に説教されるほど落ちぶれちゃいないわよ！」

「…………。ともかく今度、真紗耶に会つて気持ちを確認させてもらうか？」

「だから言つたでしようが！ 真紗耶はわざと、自分の巫彩さんに対する感情は愛だの恋だのではないって、私にそう明言したんだつてば！」

熱情に囚われてゆく私をたしなめるよつと、巫彩は深刻な顔でため息をつく。

「ふう……貴女、真紗耶に上手く誤魔化されてるのよ」

「な、なんだつて！？」

「だつて可笑しいでしょ？ 《柴門さんに対する想いは恋愛感情ではない》《巫彩さんに対する想いも恋愛感情ではない》……真紗耶一流の裏技なのよ。あの人は女の姿をしているから、あたしたちは簡単に誤魔化されてしまうの！ 表面では《ビジネス》とか称してたつて、心の底では志穂のことを見つけるかもよ！？」

「そ、それは……」

「志穂、貴女がどう思つておられるかは知らないけど、少なくともあたしは、この関係をハツキリさせたいと思つてるから」

「ああどうぞ！？ 《巫彩さん、さよなら》でジ・エンドよー！ 所詮真紗耶は私とのこの生活を捨てられないのー！」

「どうしてよ！？」

「だからー。その理由なら散々喋くりまくつたでしょうが！ 喉が痛いわよー。もうつー！」

「確かにそうだけど、どの理由も何だか胸に響かないわ。志穂、貴女、それっぽい理由つけて色々言い逃れてるみたいだけど。ホントは、前科者だってことでどこでも生きていけないから、真紗耶さんを利用してあんな生き方を」

「違うッ！」

「なら言いなさいよ！ 貴女たち一人があんなもの売つて生きなきゃなんない理由、やつぱり他にあるんでしょ！？ なら今ここでそれを言つて！ なんなら、あたしが助けてやるわよ！」

「うつさいなああーっ！ 私たちは誰にも助けられたりなんかしないわよ！ 助けてもらう必要すらないので助ける助けるってヒーロー気取りも甚だしい！」

……その一言で、巫彩は形相を変えた。

どうやら逆鱗に触れてしまったらしく、彼女の言葉には憎しみや怒りらしいものが含まれるようになる……

「貴女なんかに何が解んのよ！？ 木泊兄さんみたいな人を一度と出したくないっ……そんなあたしの気持ちが解るつていうの！？ 大事な……、それも怖いくらい無垢で透明な人が、汚らしい者によつて不幸になるつらさが解る！？」

「知るか！ あなたの気持ちなんて私と真紗耶には関係のないことよー！」

「そうやつて真紗耶を巻き込んでトーチカに閉じこもつて、人を傷つけたり罵つたりしてばっかりいる貴女には一生解らないでしょうねえ！」

言つだけ言つてブンと背を向け、勝手に去ろうとする巫彩に、殺意を込めた歩調で駆け寄る私。

「殺してやる！ 少しでも私たちの世界を荒らしたら、あなたも殺してやる！」

「その前に、あんたがあたしに殺されなければの話だけどねえ！」

巫彩は顔だけ振り向いて、また歩き出す。

「なんだってえーーー？」

思い余つた私は巫彩の肩を鷺掴みにした。

「なにか？ こんな所であたしを殺すつもりかしら？」

それでもなお涼しげな巫彩に対し、私は真紗耶から貰つた万札を

バッグから数枚出して突き出す！

「巫彩、これで真紗耶と縁を切つて頂戴！」

「…………」

意外にも素直に受け取り、そのまま背を向けて橋の隅を歩き、
帰る素振りを見せる巫彩。

ところが……巫彩は何の前触れもなく、左手を豪快に柵から放り
出して私の大事な大事な万札を川へ投げ捨ててみせた！

イルミネーションの中、雪のように舞う万札 早春のホワイト
クリスマスといったところか。

そして巫彩は一瞬だけ私に向き直り、

「いかがわしいＤＶＤってよっぽど儲かるのね！？」

という捨て台詞を残してそそくさと去つて行く。

「ただじやおかないと！」

一人残された私は、吐き捨てるようにそう呟ぶしかなかつた。

けれどもその数十秒後のこと。実に情けない話 私は柵から身
を乗り出し、札束の状態を確認していた。……あれは、取れそうも
ない。巫彩は私が回収できぬよう、わざと川の中央に投げ捨てたと
いうのか？

帰り道、私はどうやつて巫彩をしとめようか、そればかりを考え
ていた。私や真紗耶の今までの経験からいふと、人は簡単
に破滅する。

そうだ、あの時におあして使つたあの機材を使い、巫彩の入浴シ
ンか何かを撮影して、それを巫彩の学校にバラ撒くというのはど
うだろう？ 我ながら素晴らしいアイディアだ。そのためには、巫
彩の家の場所を知らねばならないけれど、それも簡単な話。次に巫

彩に会つたときにでも尾行すればいいのだ。色々あつて私は、そういう行為には慣れている。

だがその前に、もっと簡単な方法がある。私が、私と真紗耶の過去を話すという方法だ。今、巫彩は私たちの抱える問題がどれだけ陰惨にして不潔なものかを知りもせずに、大いに軽い気持ちで私たちの仲に茶々を入れている。

けれども、私たちの事情を熟知すれば、向こうからそそくさと逃げ出してゆくはずだ。

……そういう思案をめぐらせている内に、私は校舎跡に戻っていた。
さつき見た夢とはなんという違うだろう！？

実はさつき、房総で真紗耶が居眠りしていたとき、私もウトウトしていたのだった。そして、私は夢を見た。

真紗耶と一人、山奥の校舎跡で造花をこしらえて生活している夢だ。造花をこしらえている私の膝の上で、真紗耶がうたた寝をしている。真紗耶は目を覚ますと不安に怯えだし、それを私が、お姫様のkissで目を覚ませ

とか言つて慰める。……というような夢。

そう、夢の中で真紗耶は女性ホルモンを飲む前の真紗耶をしていて、なおかつ元から女だということになつていた。

そしてその夢の舞台である校舎跡は、紛れもなく、いま私が住んでいるこの校舎跡と全く同じ建物。けれども現実のこの校舎と夢の中のこの校舎とでは、あまりにも違うことは改めて述べるまでもないだろ？

工場跡の前でしばし手を合わせた後、重い足取りで怯えるように校舎跡へ入る

悲しいかな、今日は直ちに果音がお出迎えだ。果音は私の身体からバッグを引っ張ると、即座に財布の中身を確認し出し……その金額を見るとやはり平手を飛ばしてきた。

痛くない。やつき巫彩にやられた痛みのほうが勝っているからだ
る。

私が痛がらないことを不服に思つたのか、果音は私の髪を鷲掴みにして容赦なく地面に叩きつけると、私のバッグを武器にして倒れた私の体を打ちのめしてきた。何度も何度も！

鈍重な衝撃がこの体を震わすたび、がらくたをひっくり返すような音を立て、バッグに入っていた物が朽ちた床に散乱してゆく。やがてバッグが空になり武器として利用できなくなると、果音はハシタ金を手にして音楽室へ去つて行つた。

ようよると起き上がり、化粧品やら飴玉やらを拾い集める私の姿は、恐らく日本一惨めつたらしいに違いない。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】彼女に似ている彼女

柴門志穂……なんていう女怪！　あの女に殴られた頬がじんじんと痛む。

けれども、あの程度の雑魚女怪なら怖くはない。思い返せば実際に弱そうな女。フラフラと浮ついて締りのない物腰といい、すぐにキレる子供臭さといい、弱点をつかんで何とかすれば簡単に破滅させることが出来るでしょう。

そして真紗耶を、志穂の生み出した『精神的トーチカ』から救い出す。

そういう思案をめぐらせている内に、あたしは自分家の近辺に戻つていた。早朝や夕暮れに歩くのとはなんていう違いかしら？
群青の帳じょばが降りた古都に寂しく燈る外灯は、この見慣れた路地を冥府への道に変える。

家にたどり着ける気がしないし、たどり着けたとしたつて、あの冷たい義両親が居るだけ。……どんどん暗くなつてゆくあたしの思考を、外灯に照らされる夜桜だけが甘く慰めてくれた。

この垣根を右に回れば紗那の家。紗那がこんな暗い時間にも一人で家に居ると思うと、もう心配で心配で仕方なくなる。

……けど、例えば痴漢を撃墜するとか、キモラタを捻じ伏せるとか、そういうことをして人助けはできるけど、さすがに夜一人ぼつちになる少女に安全な住処を提供してあげることはできない。
情けない想いで角を曲がると、あたしは思わず紗那の家の木戸めがけて駆け出す。

「眞子……！？　どうしたのよ…？」

そこには、この闇夜と一体化してしまいそうな面持ちをした眞子が、生きる力を全て奪われたようにしゃがみ込んでいた。

妙な『デジャヴ』にとらわれ、しばし硬直するあたし。考えたくもないことだけ……

それは……目の前でしゃがみ込む眞子の姿が、あのSweet Seasonのアーチ状ネオンにしがみついて震える柴門志穂に、怖いくらい似ているからだった。

眞子は実の父親から淫行を受けた少女……。そして柴門志穂はあのとき、自分のお尻を搔きむしっていた。まさか……まさか、志穂も眞子と似たような経験を……

「……あ、巫彩……、遅い帰りね……。あんたも彼氏と逢引してたの……？」

そう話す声にはもう、いつもの張りも元気も全くなくて、指で一押しすれば奈落の底へでも落ちてしまいそうな雰囲気を放っている眞子。

「どうしたっていうのよ眞子！？　こんな所に一人で……」

「…………」

その問いには答えようとしない眞子。

思い出されるのは、あたしが真紗耶からのメールを読んで、校舎を後にする直前耳に入つた、あの紗那を怒鳴りつける眞子の声。ほんとならあのとき、あたしは引き返すべきだったのかもしれない。横浜へ行かないで、眞子と紗那の問題に対処するまではいかないでも、ちょっと様子を見る必要はあったと思う。

なのにあたしきたら、真紗耶への憐れみでいっぱいになってしまって、大事な親友一人を半ば無視してしまった……。

「…………」

自責の念にとらわれてただ硬直するしかないあたしの鼓膜を、眞子の諦めきったような吐息まがいの声が揺らす。

「紗那つてさあ、一人暮らしだつたんだね……」

「紗那はね、自分の事情を眞子が知つたら、きっと眞子はお母さん
に頼んで多岐川家で自分を引き取ることにするつて……母一人娘一
人、女一人の生活で大変なのに、このうえ自分が負担になるわけに
はいかないつて。それで、そのことを隠してたのよ」
なぜ眞子が落ち込んでいるのか全く判らないままのあたしのフオ
ロー。

眞子はどういうわけか力なく笑いだす。

「ははははは……そつかあ。確かに、私の家に引き取られたんじゃ
れ、彼氏を家に泊めることなんかできないもんね」

といふことは……眞子が好きだつた彼を、とうとう紗那は自分の
家に……それとも、もつと昔から紗那は彼を……？

「ねえ眞子、その彼と貴女とは、……付き合つてたの？」

それとも、眞子の片想いだつたのかしら？　といふ意味合いを込
めて訊いてみる。

ところが返つてきたのはただ、

「は？」の一文字。

本当に、あたしが何を言つてゐるのか判らないといつた様子で、
こちらを見上げている。

「眞子？」

「うわ……そつかあ。はははははー。そつかそつか。そうだよね。
そう思うよねえ普通は」

しゃがんだまま、表情をこじりこじりと変える眞子がとても痛ましい。

「普通はつて、どういうこと……？」

「わかんない……。普通つて……、何なんぞうねえ……うつ

一思いにダムが決壊したよつて、その健康的なはずの瞳から涙を
流しだす眞子。

「眞子……？」

あたしもただ悲しくなつて、眞子の前にしゃがむとそつとその肩
を包んであげた。

眞子特有の、木漏れ日をいつぱいに浴びた草のよつや香り。それが、眞子自身が落ち込んでいても普段どおりに漂っているのが逆に痛々しい。

「巫彩え……私さ……、ビーカーの中の冷やつこになりたいよ……。紗那にだけ好かれる、そんな存在になりたい……」

嗚呼、なんてこと！

あたしは自分の愚鈍さを心の底から呪つた。

「ごめんっ！　ごめん眞子！　あたし肝心などひるで鈍くつて……謝ることしかできないあたし。

この体にはとても弱々しい笑いの振動が伝わってくる。

「はははは、仕方ないよ……。変だもん、女なのに女が好きだなんてさ……。キモチワルイよね……。紗那に知れたら絶交もんだ……」「そんなことないっ！　人を好きになるのに性別なんか関係あるもんですか！　それをキモチワルイとか云うよつやな奴らのほうがキモチワルイのよつ！」

そう、例えば首田宗志教とか。ああいう連中は同性愛撲滅運動とかしそう。

「でも世の中に、巫彩みたいに寛大な人がどれくらい居るか……」「寛大だから貴女を肯定してるわけじゃないわ。あたしが気になつてる相手だつて……」

「女……？」

元男で、しかもマイクによつて別人になることも可能な変な人なのよ。……なんて、混乱してゐる眞子に言つわけにはいかない。

「つていうか……まあね」

「??？」

ともかく、一人してこんな所に居続。

あたしは立ち上がると、眞子に手を差し出す。

「眞子……、家まで送るわ」

この手によろよろと腕を伸ばし、そつとつかんでくる眞子。

ぎゅっと、その手を強く握って、ゆっくり歩き出すと、優しい春の夜風と神秘的な夜桜が眞子の心を幾らか癒したのか、少し落ち着いたふうに言葉を紡いできた。

「紗那つたら、あんまりカレカレカレカレついのもんだから、学校で怒鳴っちゃつて。そのまま大喧嘩して、……でも朱音を送れるここまで送んなきやつて思つてたから、音楽室から出てきた朱音を引っ張つて学校から出ちやつたのよね……」

「朱音のこと、ありがとう……」

眞子は軽く《気にしないで》とばかりに首を横に振りつつ、話を続けた……

「ちょうど朱音の腕をつかんだとき、紗那のケータイに彼から連絡があつてさ。紗那つたら、私を追いかけるより彼と話すほうが大事だつたみたい……追いかけてもくれなかつた」

「眞子……」

「でもさすがに、どう考へてもさ、突然取り乱した私が悪いじゃない？ 家に帰つてからすごい後悔して、悲しくなつて。紗那に謝ろうと思つてここまで来たら……」

紗那に謝ろうと思つてここまで来たら、紗那が彼氏を家に招き入れるのを見てしまつたと、そういうことなんでしょう。

「…………

その気持ちを想つと、どんな慰めの言葉も安っぽいものになつてしまいそうで、何も言えなかつた。

代わりに、手の力をぐつと強くするくらいしか……。

「明日から……明日からどうしよう？」

また涙にうるみだす眞子の声。

あたしは握つた手を離して、ドンと、眞子の肩を抱く。

「心配すんなつて！ この中里巫彩様がついてるでしょーがあ！」

紗那と眞子が離れて登校するにしたつて、貴女を一人にはさせないわよ。朱音つて味方も居るんだから、紗那と朱音、眞子とあたしつて、分裂するのもいいしね。ほら、ハイファイセットと紙ふうせん

みたいに

「巫彩が仲間に加わってくれてて良かった。紗那との二人組みだつたらさ、私、どうにかなっちゃつてたかも」

「いいのよ、その代わり思う存分パシリにさせてもらつからあつ眞子に擦り寄り、ぬるぬる~と嫌らしい視線を投げるあたし。

「つざつ~！」

眞子はにわかに元気になつて、跳ねるよつにあたしから離れる。
……やつといつもの眞子を見れた気がした。

「こらこら~、仲良く行こうぜ~」

「なんなのさ！ 見損なつたよ！ もう！」

お互に何かとても重いものを抱えさせられた今日。その晴れない思いを忘れるように仲良くケンカするあたしたちを、古都を吹く静謐な夜風が見守るよつに撫で続けていた。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 彼女に似ている彼女（後書き）

四章はこれで終わりです。

「彼女に似ている彼女」とは、もちろん、眞子と志穂のことではあるのですが、もう一組、「彼女に似ている彼女」が存在します。前のパートの志穂の地の文と、このパートの巫彩の地の文に、酷似した部分があるのは、実は志穂と巫彩は似ていることを暗示するためなんです。

【Miss a - s viewpoint】仲間割れとこの名の試練

さあて、どうしましょつか？

ゆうべ眞子を送り届けてからというもの、これからは四人のことを考えて、とうとう一睡もできないあたしだった。

眠れない夜というのは、どうしてこんなにも長いのかしら？

ベッドの中で色々と考えながら、寝返りをうつたりパジャマのオレンヂを弄つたりしてゐるうちに、時刻は五時半（またかよ）を過ぎていた。

そろそろ決断を出さないと。

あたしは寝返りをうつついでに電気スタンドの隣に置いたケータイを取り、朱音にかける。

「あ、もしもし、おとといに引き続いて朝早くから『メンね。あのさ、今日は紗那と一緒に登校してほしいのよ。あんたと紗那は同じクラスなんだし、やりよいでしょう？』

そこまで言つただけで、朱音は事情を理解してくれたらしい。

まあ無理もないでしょ。昨日学校で、あたしも見ていない紗那と眞子の修羅場を目の当たりにした朱音なんだから。

とこづわけで話は決まった。

朱音が紗那を誘つて、一足先に登校してくれるという。

「…………ありがとう朱音。あたしたち三人が朱音を助けなきやならないはずだったのに、すっかり朱音に助けてもらつちゃつて……うん……うん……じゃあね」

ケータイを切つたのを皮切りに、微かな罪悪感がジワリと心に広がる。

これは、仲間割れを自ら推し進める行為だから。

けど、眞子にとつて紗那と一緒に登校することは、もう今は針の筵むしゆでしかないはず。

……大丈夫。

自分に言い聞かせる。あたしたち四人が本当の友達なら、愛だの恋だのなんか簡単に乗り越えて、いつか何事もなかつたように元通りになれるつて。あたしたちは今、きっと試されているときなんだつて。

あたしを意を決して、眞子にも連絡をする

眞子と色々打ち合わせして、今日の方針が決まるやいなや、どつと眠気が押し寄せてきて、あたしは一時間近く熟睡してしまった。

ところで、あたしは家では朝食を摂らない。義母の料理は化学調味料でんこ盛りでカラダに悪そつだし、気を許してもいない義両親と顔をつき合わせて食べたつて、消化不良になりそうだから。

あたしはいつも『イルームの森』で眞子ママの料理を頂いているわけだけど、義母がフヌケになつた最近では、義父まで外食するようになつた。なんていう終わつた家！

そして今日はいつも以上に暗い気分で玄関までの道のりを歩く。道のり なんていえるほど広い家ではないけど、冷め切つたこの家庭ではトイレでさえ駄々広い空間に感じるし、特に今朝は友達の明るい笑顔が出迎えてはくれない。だろうから、余計に気が重かつた。いつもより遅い玄関。ドアを開けると、それでも眞子の笑顔があたしを迎えてくれた。とはいっても……

「オツス巫彩……えへへへ」

なんてフザケるその表情にはいつもの力強さがなくつて、無理しているのが明々白々。それでも、一日の始まりに友達の笑顔を見れたことに変わりはない。あたしは無理にでも笑つてくれた眞子に感謝しつつ、その力ない立ち姿めがけて駆けた。

「眞子おはよ！ ねえ、あたしとダブルス組もう！」

敢えて唐突に切り出すあたし。少しでも色んなことを考えさせて、恋の痛手を紛らわさせてあげたかった。

人間にとって『紛らわし』はとても重要。気分を紛らわして

明るく振舞つてこゐひひ、ホントに照るくなれることだつて少な
くないわけだから。

「でも私バレー部、つ……は、もういこか。私なんかあの部じやほ
とんじ空氣だからわ」

「ね？ もう今日にでも退部届けと入部届け、出しちやいなセコよ
「巫彩……強引だよ」

苦い声を発しつつ歩き出す眞子にハツとすみあたし。慌てて眞子
の隣を歩き始める。

「あ、ごめんつ！ 嫌だつた？ 一番大事なのは眞子の気持ちなん
だから、嫌なら別にいいのよ？」

すると、眞子の横顔が二ンマツヒヨクそ笑んだ。

「ふつ……、あんたの強引さが何よつの救いよ」

「眞子……」

しばし、そこはかとなくセンチメンタルな靴音が路地に響くと、
やがて眞子がやるせないような明るいこみつな、緩やかな溜息をつく。
「ふう……テニス部があ。バレーよつたらヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ
よね。少しあらしくなつてやつか」

「女らしく……？」

「そ。私さ、紗那に好かれたくつて……、その一心で、こんなふう
に男女やり始めたんだ。紗那に好かれる望みが消えたんなら、思う
存分女らしくならせてもらいますわ。ほつほつほつ」

残念（？）だけれど、眞子の ますわ は怖いくらい様になつて
いた。

この少女からこの男氣を抜いたら、とんでもない絶世の美女がこ
の世に光臨するはず。

「よしてよ。綺麗過ぎて近寄りがたくなひやうわ

「またまた～」

「いや、マジでやめて。宇宙の法則が乱れる」

「それなら乱してやるひじやないのさ」

話していくうちに明るくなつていってしまつ。それがあたしたち。紗那と朱音も、そつだといいんだけど……。

ちなみに、うちの学校の転部は『ドラゴンクエスト3』のダーマ神殿みたいな方式で、ある程度までその職業というか部活動を極めさえすれば、好きなように変更できるというもの。要するに、生半可な状態で転部しようつとすれば、みじゅくもののがんばいで もう ぶかつを かえたいとはなにじ」とじや！

なんて怒られてしまつといつわけ。

朱音と紗那が同じクラスなのを除けば、あたしたちのクラスがバラバラだったことをこんなにありがたく思う日が来るとは思わなかつた。

思えばそう……あたしが朱音に田をつけたのだって、クラスで浮いている朱音の話題を紗那が出してきたことがキッカケなわけで。

このマッシュュータス女学園の外観は、《お堅い》だけあってとても壯麗なもの。とにかくペンキの再塗装を怠らないからシミ一つ見つけるのにも苦労するし、その落ち着いた白さは清廉な少女以外を拒むように高い。

三角錐形の時計塔が頂に優雅なアクセントを与えていたりして、ここは校舎というよりほとんどフランスの城といった趣がある。

ちなみに今更ながら《マッシュュータス》というのは、どこぞの神話に出てぐる謙虚誠実を絵に描いたような武神の名前らしい。

ホテルみたいな大理石の階段をのぼつて見慣れきつた三階の廊下に着くと、重い気分で、けれども最大限の笑みを浮かべて眞子と別れた。

そして見慣れた面々が集うクラスに足を踏み入れる。

右から、左から、前から、「巫彩おはよう」「おはよう」や「ま
す」甘い囁きが耳に飛び込む。それなりに居心地のいい空間。

「おはよー」「ハロー！ 今日も綺麗ね貴女」「グッモーニン

」
こんな感じで挨拶するあたし。この人当たりの良さからアンチが
発生することはないんだろうけど、反面、親友と呼べる少女もまた、
このクラス内には居ない。

やつぱり、良家の娘たちとは根本的に何かが違うんだと思う。
そしてそれは眞子も紗那も同じことのようで。それがあたしたち三
人が仲良くなるキッカケともなった。

席に着くと、お嬢様方の発する甘くて高貴な息吹のなか、あたし
は頬杖をつき、虚ろな曇り空をぼんやり眺めていた。

必ず晴れるときが来る……それは本当なんだろうけど、いつもやつ
て漠然と曇りの空を眺めていると、この晴れない状態が永遠に続く
ように思えてきてしまうものだなあと。

そして、そんなふうに思っている人に対して、《必ず晴れるとき
が来る》そんな言葉は何の役にも立たないんだろうと。

【Suehiro - s viewpoint】疑惑まみれの愛

「ねえ柴門さん、日に日に、身体の癌が増えていってますよ？」

『撮影後』、真紗耶が気にせんで良いことを訊いてきなさる。

訊きたいことが山のようにあるのはこちらのほうだといつに

情けない話 結局、いつもと何ら変わりない告白龜の姿で真紗

耶が現れると、いつもどおりに撮影をしてしまったのだった。

「最近、よく暴れるから。まあ、不安定な時期はね、私も怪我すること多いのよ」

私はこいつ言えれば見事に身を交わせるこじて氣づいた。嘘を言わずして真紗耶を騙せるからだ。

「あの人……良くなる見込みは、あるんですか？」

「さあ……」

「そうですか……」

あーめんどこー！

私がこんなことをしなければならないハメになつたのはこの癌のせい。そして、このいつになく生々しい癌が出来たのは巫彩のせいだ！ 巫彩が、せつかく真紗耶がくれた札束を川にぶん投げやがつたから！

「ねえ真紗耶、巫彩ちゃんの家の場所、知つてる？」「さり気なく、奴の居場所を訊いてみる。

「知るわけがないでしょ？ 住所を言つよつうな仲ではありますせんよ」

「だよねー」

「柴門さん、どうして巫彩さんの家の場所なんて……」

始まった。真紗耶の尋問だ。

「い、いやあ、なんか、いい子だからさあ、好きな時にこいつちから会いに行きたいなーなんて」

私の適当なはぐらかしに、またピキッと怪訝な顔で反応する真紗

耶。

「なんですか、それ。他に理由があるんじゃないですか？」
「り、理由つてなによー？」私に他意があるのは図星なだけに、声が震える。

真紗耶は例の如く、女よりも女の厭な部分を凝縮したような、実際に挑戦的な薄笑いを浮かべていた。姿が告白画だけに、本当に淫らな嫌らしさの極みだ。

「柴門さん、貴女もしかして、巫彩さんをお気に入ったのではありますか？　あーなるほど。貴女も巫彩さんも、外向的で明るくて、そのくせ何があると、ぐっと深く深く悩み込んでしまうタイプですもんねえ。巫彩さんに『自分と似た匂いを感じて、惚れてしまつたのでしょー！？　違いますか！？　ナルシストも甚だしいです！』なんという素つ頓狂な解釈！　私は思わず真紗耶の前に仁王立ちした。

「やい真紗耶！　そういうアンタはめどりなのよー！？　え！？　巫彩に会つて、私のことが震んで見えてるんじゃないのー？　あーそうだそーだ、今の『撮影時』もなんか、ビジネスだから仕方なくやつてまーす、みたいな感じだつたしー……！」

私の暴言に真紗耶は立ち上がり、私の全身を滅茶苦茶に愛撫してきた。

「柴門さんー！？　昨日私が言つたこと、もつ忘れてしまいましたのん……？　うふふふふふ」

「つ……」

……咄嗟に手を伸ばしてカメラの録画ボタンを押す私が居た。いつしか私もビジネス志向になつてゐるのだろうか？

【シナリオ・スクリプト】疑惑あみれの愛（後書き）

「貴女も巫彩さんも、外向的で明るく、そのくせ何があると、ぐつと深く深く悩み込んでしまうタイプですもんねえ。巫彩さんは」「自分と似た匂いを感じて、惚れてしまったのでしょうか？」
真紗耶のこの言葉をよく覚えておこして下さい（笑）。

【Miss a - s viewpoint】哀しき昼休み

「えー、なにいじ。」この学校にこんな場所があつたなんて……」「巫彩に気に入つてもらえて嬉しい。いい場所でしょ？ 私もつい最近、見つけたのよ」

昼休み。あたしは朱音に連れられ、校舎の裏側を訪れていた。驚いた事に……そこはまさに別世界で新縁に色づいた木々がサラサラと音をたて、校内のざざめきを中心するこの爽やかな空氣ときたら、ここが学校であることを忘れるほど。

あたしたちはちょづびー一つだけ存在していた切り株に腰掛け、朱音がこしらえた弁当を食べることにした。

「朱音、ありがとうね、あたしの分まで揃えてくれて」「そのくらいのことして当然よ。巫彩、私のために色々頑張つてくれて……。私のことが一段落したと思つたら、今度は紗那と眞子が……。それに、ねえ、お母さんとそんなに上手くいってないの？」

そつ。弁当は普通、母親がこしらえるもの。ところがあたしは毎日、自分で自分の弁当をこしらえている。

ぐだんの化学調味料云々はもとより、学校でまでの義母を思い出したくないというのが本音だった。

そして寝坊した今日は朱音にこしらえてくれと頼んだわけだけど、……何も知らない朱音はそれを訝しく思つていんでしょう。

あたしは溜息を一つ。けれども一人でつぶ溜息とは明らかに何かが違つていて、吐いた息が草木を揺らす風に溶け込んでいくようだつた。

「そうなのよ朱音……あたしん家、かなりドロドロしてさ。母のこしらえた弁当なんか食べたくないわけよ。だからいつもは自分で

「じゅうてんなんだけじね。今日は寝坊しちゃつてえ。はははは」

「そり……」

「けど、おかげでこんな立派な昼食が食べられて予は大満足じゃつ！」

「ふふふふふ」

プチトマトと、サラダと、タコのワインナーと、玉子焼きと、ピラフとかが、きちんとレタスで区切つてある朱音のお弁当……そこには彼女の温もりがいっぽいに詰まつていて、ヘタをすると泣きだしそうだった。

「なにそれ……古い言葉……クヌツ……」

……強烈だつた。あたしにさえポーカーフェイスを突き通し続ける朱音が、そつと、その堅牢な顔を緩やかに微笑ませたんだから。

「あー、朱音が笑つた！」

「え、私、笑つた……？」

「うん。笑つてたほうが可愛いわよ！ んもー、嬉しいからタマセんワインナー分けちゃうつ」

自分のワインナーを朱音に分けてあげるあたし。

紗那と眞子を抜いた昼食なんて気が重かつたけど、朱音と二人の食事といつのも、どこか静穩な安らぎがあつて楽しい。

それに、朱音の料理の腕は半端ではなく、とても美味しかった。

昼食を終え、「こちそうさまを言おうとした瞬間、背後から聞き慣れた少女の甘い声と、聞き慣れない青年のけばけばしい声

「ちょっと……、こんな所まで来ちゃマズいよ」

「だつて今朝急に親に言われたんだよね。それに毎晩お前んち泊まつたりしてたらマズいじゃん？」

？

あたしと朱音は手近な木の陰に隠れ、様子を伺う……すると、軽薄そうなイケメンが塀の上から顔を覗かせていて、それを紗那が見上げているという図だった。

紗那がケータイを片手に持つていてるとから、たぶん紗那はケー

タイでここまで誘導されたんだと思われる（紗那は授業中以外は常に電源を入れているというし）。

「俺さ、紗那のこと孤児だと思ってたんだよね。でも両親居るんじやん」

「……うん」

「で、昨日お前の両親と俺の両親がさ、かなり近くに住んでることが判つたらしいんだよね。これって奇跡じゃん？　俺たちの親同士が、仲良くしてたなんてさ」

「仲良くって？」

「お前の両親と、俺の父親つてさ、昔から仕事で親しかったんだつてさ。提携企業同士の付き合いつてやつで。それで俺の両親が紗那を嫁にもらいたいって大ノリ気なんだよね」

その言葉に、紗那は一瞬だけ瞳を輝かせるも……

「そうなの！？」　またすぐ暗い瞳に戻る。「それで……？」

きっと紗那は、彼の話の内容を察しているのではないかしら？　事実、彼が続けた言葉というのは、紗那にとつて心の傷を抉られるようなものだった……

「紗那さ、なんでお前、あんな所で一人暮らしてんの？」

「……」

「転校したくないから？　……ダイジョブだつて。友達なんてどこの学校だつてすぐ出来るつて」

軽薄な笑顔で紗那を見下ろして軽口を叩く彼。対して、祈るように彼を見上げる紗那がなぜかとても痛ましかつた。

「……話つて、何なの？」

「お前の両親もさ、お前が十六んなつたらすぐにでも俺んちに嫁にやりたいって言つててさ、そん流れで娘の一人暮らしは親として心配だから、君からこちらへ来るようにな説得してくれないか　なんて説得頼まれちゃつてさ」

「そんな……っ」

「なんだよ？　友達より俺のほうが大事だつたら来れるよな？」

「そんな急に……」

「話が出たのは急だけど、お前は春休みまでに決めればいいことだよ。じゃ、話はそれだけだから」

無責任に引っ込む彼。戸惑った顔のまま残される紗那……。

そして、折り重なるような格好で木陰からそれを見ていたあたしたち……

「聞いた……」

朱音がひそひそ声で話しかけてきた。あたしも同じくらいの声量で話す。

「ええ、聞いたわね……」

「紗那って確かに、都会でノイローゼに……」

「そうよ朱音。紗那は都会の空気とか建物とか生活に馴染めなくつて、とうとう気が狂つて……。紗那の両親は『娘より仕事』って人たちだから、紗那を鎌倉に一人残したのよ。一種のネグレクトよね」と、そこでとぼとぼと、紗那が校舎へ戻つて行つた。

朱音は木陰から離れ、紗那が消えていった方角を心配そうに見つめる。

「あの感じだと紗那、彼にそういう事情、話してないみたいだし……どうするんだろう？ 私たちに何か出来ること、ないかな？」

「うーん……」

あたしは腕を組み、色々と思案をめぐらす。……けど、あたしも朱音も所詮中学生。

いい手立てなんて見つかるはずがない。

「やだ、昼休み終わっちゃうよ巫彩！」

ほら、こんなふうに考えている暇すらないし。

仲間割れ以上の試練が四人に訪れているのを感じているあたしと朱音だった。

【Shinō-s viewpoint】女怪のせめを今に

「グッヘヘヘヘ、儲かつちゃつたねー」

「今日は一回分も撮影してしまいましたからねー」 柴門さんが愚かな発言をしてくれたからですよ。あれで私に火がつきましたから

「わっははははは！ たまにやあバカ発言もしてみるもんね！」

夕刻。私と真紗耶は上機嫌で、料理の匂いが無造作に漂いだす裏町を歩いていた。

「あ、柴門さん、今日は私もSweet Season行きます」「マズイ。昨日あんな事があつたのに、真紗耶・巫彩・私の三人で会つたら修羅場は免れない。

「ここはいつそのこと、嫉妬する少女を演じるとしよ。

「真紗耶、私、今日も一人で行く。真紗耶を巫彩さんに会わせたくないの、もう。真紗耶は、私だけの者なんだから。メールだけの関係に戻つてよ」

それを聞いた真紗耶は、戸惑つた反面、どこか嬉しそうだ。

「柴門さん、そうなんですか？ うふふん、ヤキモチやいてるんですか。私みたいですね。ふふふ。ではでは失礼いたします。あでも、巫彩さんに冷たく当たらないで下さいね」

「わかつてるつて。第一、私が巫彩さんを憎んでたら、わざわざう

weet Seasonまで様子を見に行つたりしないでしょ？」

「そうですね。では、今日もよろしくお願ひします」

というわけで上手く真紗耶を撒くことに成功した私は、心の底に烈火を迸らせながら『表の横浜』へ向かう。

Sweet Season前の橋に着いたが、巫彩は居ないようだ。仕方ない、木泊さんの顔でも見て帰るかな、と思い、あのアーチをぐぐろうとすると……階段の下に不吉な影。

巫彩がSweet Seasonの中を覗いていた。あれは奥の

部屋の窓……とにかく？　ふつ、数時間後に自分が同じことをされるとも知らずに！　けっけっけっ！

「ちよいとそこのお嬢さん！　覗き見はいけないね！」
私の階段を下りながらの大声に驚きもせず、巫彩は当たり前のことのよに振り向いた。

「志穂さん、木泊兄さんって、料理を勉強してるのね。こんなに何かに打ち込んでる兄さんの顔、久しぶりに見たわ」

「そうなのよ。母萌さんが拵えた料理よりね、木泊さんの拵えたのを店で出したほうがウケが良かつたんだってさ。それにねえ……」

「それに？」

「…………」

その先を言ひこなす、ちよいと田の前の小娘が憎らしそぎた。《二
れ》は、仲の悪い相手とする話ではない……。

私が黙つているのをしばりと見ると、巫彩は何と私に頭を下げて
きた。

「志穂さん、昨日は『めんなさいね』ついつい、度の過ぎたことを
言つてしまつて」

「あつそ。別にいいのよ。私と、真紗耶……あんた程度の弱小女怪
に壊される程度の関係なら、もう何年も前にとっくにブシ壊れてた
と思つし」

表面では軽くあしらつたけれど　許してなるものか。キサマの
せいで、ゆづ私は果音から烈しい罰を受けたんだから！
私の軽い毒に、巫彩も軽く反応したようだ。

「志穂さん、『いかがわしいDVD』は発言撤回するわ。その代わ
り『嘆かわしいDVD』と呼ばせて頂くわね」

こうしてまた、軽い毒吐きが猛毒的な口論へ発展してゆく。

「嘆かわしいだって！？　あんた、私と真紗耶がどんな経緯であん
なDVDを撮るよつになつたか知りもしないで！　あんた、どっち

側の人間なのよ！？」

「どういう意味？」

「だからね　あんたの兄さんだつて不登校経験者でしょ！？　私
らに楯突くべき立場なの！？　あ！？」

「それは存じ上げてるわよ。前に真紗耶がサラッとメールで話して
たけど、志穂さん、たかだか失恋くらいで不登校とは、いいじ身分
ね。貴女みたいな愚者が居るから、不登校児のイメージが悪くなる
のよ。そのせいでどれだけ苦しんでいる子たちが居るか」

真紗耶ときたら！　メールでそんなことを話してたなんて！

…まあ大方、木泊君や真紗耶自身のことを話している流れで、《柴

門さんも　》なんていう話題になつたんだろうけれど。

「貴女何様！？　自分はどんな偉いのよ！？」

またしても、激情を露にした私に対し、巫彩が淡々と毒を吐くと
いう図式。

「木泊兄さんや真紗耶がどんな想いで学校へ行けなくなつたか、貴
女みたいな薄っぺらな人間には理解できないと言つてるわけよ。ま
あ真紗耶は迷信深い人だから、理由はどうであれ、貴女が不登校に
なつたという事実のみに共感して、貴女への想いを強くしたみたい
だけど……こうやって貴女に会つて確信したわ、真紗耶は貴女に騙
されてるつてね」

「騙す！？　何のために！？　真紗耶を騙す事で、私に何のメリッ
トがあるって言つのよ！？」

「貴女にとつて真紗耶って、いわゆる《キープ君》つてやつだつた
んじやない？　貴女は一時期、恋に溺れた時期があつたと聞くわ。
空中ブランコみたいな数々の恋。でも真紗耶つていう《セーフティ
ネット》があれば、貴女は縦横無尽に空中ブランコを楽しむことが
出来る……違うかしら？」

まさかメールでこんな話までしていたとはー

「真紗耶め！　言わんでいい事をペラッペラペラッペラ！」

「“言わんでいい事”ってことは、やはり図星なわけね？」　真紗耶

を責めるのは筋違いよ志穂さん。さあて、じゃ、昨日の謝

罪も出来たし。あたしはこれで失礼するわ

……何はともあれこれにて作戦遂行決定である。

「また今度ね」「私は朗らかに挨拶した。

そして巫彩が階段を上りきつてアーチをくぐった瞬間、私は咄嗟に例の変装をして尾行を開始。

運良くお着替えシーンを撮影できる事を祈りつつ……

【M i s a e - s v i e w p o i n t】仮面家族の崩壊（前書き）

改訂前の別ヒロインが担っていた役割を巫彩に背負わせているため、随所に矛盾が発生していると思いますが、隨時、手直ししていくつもりです。ご了承下さい。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】仮面家族の崩壊

そこはかとなく、誰かに後をつけられているような、そんな気配がしないでもないけれど

志穂への謝罪を済ませたあたしは、やや誇らしい気分で家に戻った。

ところが……家の門をくぐつたあたしには、志穂との確執以上の針の筵が待ち受けていた。

「巫彩ーっ！ おかれりザマスー！ 狹山朱音さんの噂、聞いたわよー！」

玄関の前に立つた義母が、まるでフェスティバルかカーーバルでも始まるかのような声で私を迎えてきた。

「…………」

「うふふふふふふ、これでお友達の三人が三人とも立派な人になつたわけザマス！」

ちなみに眞子がバレー部へ移つたことは義母は知らない。

「P T Aの会長に言わしたこと、忘れたの……？」

「忘れてなどいなイザマス！ しかし、巫彩が選んだ友達が全員立派になつたこの状況ならば、会長の言葉にワタクシは従事したまま、なおかつ、ワタクシの理に適うお友達関係を巫彩が築いていくことができるザマス！ こんなにメデタイことはないザマス！」

……呆れて言葉も出なかつた。

とりあえず、母に促され、暗澹たる気分で家に入る。

そして台所に足を踏み入れた瞬間！ あたしはテーブルの上を睨まずにはいられなかつた。

「お母さんッ！？ これ、なにッ！？」

「うふふふ、今日ほど御めでたい日はなかなかないザマスゆえ。腕

によりをかけてこしらえたザマス」

テーブルの上には、中央の大きなケーキをはじめ、うちにこんな物があつたのかと思うような豪華な食器に入れられたオードブルやスープの数々。

「ねえお母さん、あたしたち四人はね、そんなお祝いするような気分じゃないのよ。紗那は彼氏に親元へ帰れってせがまれて悩んでるし、眞子はね、失恋の痛手から立ち直れないでいるの。朱音だつて……お母さん、あなたがそういう人だから、無理してピアノを頑張つてるのよ」

あたしが母に、心の内を話すのは初めてのこと。

こうやってきちんと話せば、もしかしたら理解してくれるのではないかしら？ なんていう、甘い期待もあつた。ところが、義母はそれまでになくあたしの心を傷つけてくるのだった。

「そんなことはどうでもいいザマス。ワタクシは、巫彩の友達が全員立派なステータスを得た、そのことが嬉しくてたまらないザマス！ もう食べましょう！ 座つて座つて」

義母は一足先に席に着いたけれど、あたしは座るつもりなど毛頭ない。

「どうでもいい！？ 娘が友達の話をしてるのよ！？ それがお母さんにとってはどうでもいいことなの！？」

「巫彩え、こんな御めでたい日にそんな面倒なこと言わないでちょうだい……」

あたしはこんな女を母だと思ったことは、たぶん一度もない。けど、あたしは小さい頃からこの人の手によつて育てられたわけで。それに、この人が木泊兄さんの実の母親といつのは、変えることができない事実。

木泊兄さんのことを実の兄のように……いいえ、それ以上に強く想い、慕つているあたしは、時々、この人が自分の母親に見えてくることもあつた。

それなのに……駄目。もう何を話しても駄目！

そう思つとあたしの心を激烈な悔しさが遅い……、テープルに歩み寄つてケーキを素手でグチャリと驚づかみにし、母の手前に置かれた小皿にベタッとこびりつけた。

「さあ召し上がり、お母さん」

これは、あたしの最大にして最後のSOS……。

それなのに……義母は何と微笑んでケーキを食べだす。

「まあ、汚い盛り付けかたザマスわねえ」

罵る力すら萎えてゆき、あたしは打ちひしがれたように流しの前まで移動すると、放心したように手を洗つて、とぼとぼと浴室へ歩いて行つた。

「あらー、巫彩は食べないザマスの一？」と、義母が言つたような気がする。

そして、ガチャンとドアの鍵を閉め切り、その場に崩れ込むあたしだつた。

【Shinō-s viewpoint】愛は突然に

へつへつへつ！ と「うとう居城を突き止めたぜ巫彩さんよ！」私は田をギラギラ輝かせながら巫彩の家の前に佇んでいた。

それにしても……、いい町だと思う。海の残り香をまとった微風が、細い路地を舞うように吹き抜けてゆくを感じると、危うく軽妙な復讐心を忘れてしまいそうになるほど。

ところが……当の巫彩の家ときたら、この古雅な町並みにいちやもんをつけるかのように現代的で素つ氣ない、薄い灰色の四角い箱。これを思つたら……私の住むあの校舎跡のほうが、どれだけ人間的か知れない。

私は中里宅の門をくぐり、巫彩の物らしき一階の部屋の下へサササッと移動することが出来た。

あのオレンヂ色のカーテン……ほぼ間違いなかろつ。真紗耶がいつか、

巫彩さんってえ、オレンヂが大好きらしいんですよ。服装も部屋もオレンヂか赤で統一してるんですけど

などと話していたのを聞いていたからだ。あいつが実は滅茶苦茶に口の軽い人間だったという新事実を、今ばかりはありがたく思う私なのだつた。

さてと、私は耳なき青猫の「ごとくポケットから、

「超極細カメラ」
と、秘密道具を出した。

あんなDVDを売つている身。撮影機材という物には深く精通している私なのである。カメラの先は爪楊枝とストローの中間くらいに細く、うまくいけば、網戸の隙間からでも入るスタイル。

まあ、今日は単なる《下見》に終わるだろう。とりあえず、家の

構造や、巫彩の窓はどんな形状で、巫彩はどういう窓の開け方をするか、そうしたことを下調べできれば御の字といいくらいの気持ちで丁度いい。

ところが、その必要はなかつたようだ。巫彩の部屋の窓は少し開いており、しかもカーテンと窓枠の端の間には一センチ程度の隙間が！

これは即刻撮影開始か！？と思ひ、五分の一程度に縮む折りたたみ梯子をバッグから出すと、スタスターと窓に近寄り、その隙間から中を覗いた。

そしてその瞬間こそ、女怪としての私が死を迎える時なのだつた。

「巫彩え！ ワタクシ一人じゃ食べきれないザマス！ 降りてきて一緒に食べるザマス！ お父様がお帰りになつたら三人でパーティというのもいいザマスね！」

「あたしのことはもう放つておいて！」

「もーう、なんザマスのお？ 友達三人が立派に巫彩の、ひいてはワタクシたち夫婦の名譽を高めてくれる存在になつたと知れば、お父様も大喜びなさるザマスわよお？ 久しぶりに三人の笑顔が揃」「お願ひ！ 今日は気分が悪いのッ！ 放つておいてえつ！」

「もーう、つれない子ザマスね～。いいザマス お父様と夫婦水入らずでお祝いするザマスから」

奥から響くババアの声は、なにやら實に理不尽な言葉を並び立てている。

子供に理不尽な注文をする世間と、耳を塞ぐことでしか自分を守ることが出来ない子供。

巫彩も、そうなのか。彼女もまた、真紗耶や私と同じ闇を……！ いつたん、梯子を下りた私。どういうわけか涙が滝のように頬を伝う。

涙でメイクがぐちゃぐちゃになつた顔がみつともないだろうから、私はハンカチを出して顔を拭う。けれどもその後も次から次へと涙が流れで止まらない。

涙を止めることは諦めて、もう一度登り、覗いてみる。

曇つた夕方の鈍い光のみによつて、うつすらと部屋のドアの前に浮かび上がる、耳を塞いで膝を抱えたその影は、やはり……

私 そ の も の だ つ た 。

それは……失恋する度に部屋に籠つて膝を抱え、真紗耶や母に大迷惑をかけた、あの私であり……あの校舎跡で、果音がどんなことになつても何も出来ず、ドアの前で耳を塞いで膝を抱えている、あの私である。

今、私は悲しい。今、私は感動している。今、私は共感している。……そういつた端的な言葉にすることが出来ない、この複雑な感情！

とにかくにも、いてもたつてもいられなくなり、私は玄関へと急いで正々堂々とチャイムを鳴らした。

「はーい　あら、どちらさま？」

明るい声で現れたこの女が、巫彩の母だろう。あのリタリンを巫彩の親友に打とうとしたとかいう……！

「あの、巫彩さんにお会いしたいのですが。私は、もう一人の巫彩さんです。……と言いたいくらい、巫彩さんに似たものを持った、巫彩さんの友人です」

私はこの母親への怒りを抑えて淡々と語る。すると、母親は家中へ向かって、

「巫彩！？　お友達が来たわよー！」と叫んだ。

「朱音！？　紗那！？　眞子！？」巫彩は叫びながら階段を下りて来たけれど、来たのが私だと知ると一瞬にして冷たい顔になつた。

「……あ、あんた！ 何なのよ家まで押しかけてきて！ 尾行してたのね！？ なんて女なの！？」

そうやって取り乱す姿さえ愛しく……私は咄嗟に靴を脱いで巫彩に駆け寄り、強く抱き締めてしまった。

「巫彩ー！ うああーつ！」

「ちょっと！ なんなのよ！？」

巫彩は私を振り払おうとしたけれど、私は決してその小さくて神秘的な温もりを手放そうとはしなかった。

そもそも、元々の力の強さでは、私より巫彩のほうがずっと上だろう。けれども今私には得体の知れない火事場の底力のようなものが沸いており、巫彩に抵抗することを許さなかつた。ところが、面白いのは何秒かすると巫彩が私に抵抗しなくなつたことだ。

しばらくして、ゆっくりと巫彩を手放す私。

「巫彩、貴女と一人で、話がしたい……」

「別に、いいけど」 台所を出る巫彩を追うと、階段を何段か上つて

私に振り向く。「来れば？」

「ありがとう……」 私は部屋に向かうことにした。

その間！ あの母親は何事もなかつたかのように食事に戻つて行つた。なんという娘への関心の薄さ！ ある意味、果音よりも無慈悲といえるだろう。それがまた、私の涙をしぼるのだった。

ともあれ、私はアツサリ巫彩の部屋に入れてもらえた。

女の子の部屋にしては、ぬいぐるみとか細々（こまごま）した置物とか、そういう甘たるいものがなくつて。けれど赤やオレンジで統一された空間いっぱいに少女の息吹が宿つている。ここは私の部屋だと思った。

今暮らしている（といつより寝に帰つて）あの校舎跡の私の部屋は教室だから、この巫彩の部屋とはかなり形相が違うけれど……あの実家、即ちクウチユーカ一階の私の部屋とはどこか似たもの

がある。

私は、さつきの巫彩のようこ、そしてこいつもの私のようこ、ドアの前に膝を抱えて座った。

「巫彩、よく私を入れてくれたね。さつき、あんな憎み合つてた私たちなのに」

「あたしにはね、友達が三人居るのよ。……貴女、彼女たちと同じ温もりをしてた」

回転椅子に座り、勉強机に伏したまま話す巫彩の憂鬱な美しさ。でもそれを指摘する前に、私は、「どんな、温もり?」と訊いてみる。

「あたしね、小学生の頃、同級生の女子にふざけて抱き付かれたことがあったの。……女の子の、匂いがしたわけよ。この先、普通に学生生活を満喫して、結婚して、子供を産んで、何の疑いもなく生きていきます、みたいな匂いが。でも、貴女や彼女たちは、何かが違う」

それを聞いて、やっと私は納得したのである。

「そう……。あんたを好きになつた真紗耶の気持ち、やっと解つた。こうこう、ことだったのね」

「どうこうこと?」

巫彩が机に伏したまま顔を少しむけながら、私も膝にうづめた顔を巫彩に向ける。

「やつぱり、いつもと働き蟻はコミコニケーションすうといつてことよ

「私もそう思う。真紗耶とも昔、メールで話したことだけど『馴れ合い』っていうものが、褒められたものじゃないことは解る。でも、少しでも似たところのある人間同士じゃないと、そもそも相手の言葉すら理解できない……」

「…………」

はてさて、なんだつて巫彩はこんなにも落ち込みきつているのか。

「ねえ巫彩、大丈夫?」

「見れば、わかるでしょ?」

「わかるお(へへ)さつき部屋で膝抱えてたし、なんか言い争つてたし、今はそんなふうに机に伏せつちゃつてるし。……けど、あの貴女がそこまで暗く塞ぎ込むなんて意外よ。ねえ、貴女に何があつたの?」

私がそう問うと、巫彩はやつぱり机に伏したまま……

義両親が自分の友達を『鑑定』していること。そんなとき、朱音とこう子にピアノの才能があることを見抜いたこと。最近、紗那と眞子という二人の間に亀裂が入ったこと。そして紗那が彼氏に都会へ連れ出されそうになつていることを教えてくれた。

「…………というわけでね、せつかく朱音が仲間になつてくれたと思つたら、そのとたん、あたしたちを試すみたいに、紗那と眞子の間に溝が出来ちゃつて。朱音だつて、もしかしたらホントは普通に合唱だけやってたかったかもしれないのに、あの義両親のせいにピアノまで」

「そつか……」

と、そこで巫彩は急に立ち上がり、私を見下ろすと訴えるような口調に変わつた。

「そしたら! 朱音がピアノのことで有名になつたのを知つたあの母が大喜びよ! あたしたちがどんな想いで学校生活してるかなんて、母にとつては『どうでもいいこと』なんですって! ただ、『娘の友達が輝かしいステータスを得た』つて事実だけにしか、目が行つてない」

変な母親だと思うと同時に私は、首を傾げてもいた。

「ねえ、あの母親つてさ、木泊君の実母なのよね?」

「ええ」

「どーしてまた、あんなワカラんチンから木泊君みたいな純真な人が生まれるかね?」

呆れ口調で言うと、巫彩も軽くため息をつく。

「親子なんてそんなものよ。心から理解して、愛し合える親子なんて、万に一つじゃないかしら？ 紗那だってネグレクト同然の仕打ちに遭つてゐるし、つづく子供つて損だわ」

……《理不尽な正論》を押し付けられ続けた幼い自分を、私は思い出した。

「そうね。けど貴女は偉いわ。理不尽な苦しみを受ける子供を、必死で救おうとしてる……自分でつて子供なのに。 真紗耶から聞いたんだけどさ、貴女、真紗耶へのメールで木泊君のことばっかり書いてたらしきじやない？ 木泊君の心の闇を再発させたくないつて」

「えーっ！？ 真紗耶つて貴女にそんなことまで話してたのー！？」

「ね！ なんたる口の軽さつて、私も思つお（^ ^）でもさ、でも、それつて逆に、真紗耶がきちんとケジメつてもんを持つてる証拠だと思わない？」

「ケジメ……」巫彩も《なるほど》と思つたよつて、私の真ん前に座り込んだ。「そうか。真紗耶さんは私が《リタリンの話》を出すまでは、私に直に会うつもりなんて全くなかつたつてことかしら？」
「その通り。だからこそ、貴女のことを私に喋つたり、私のことを貴女に喋つても、現実の人間関係じやないから何の影響もない、つて思つたんじょーね。……ねえ巫彩、真紗耶とのメール、私に見せられるのだけでいいから、見せてくれないかな？」

ただただ見てみたかった。巫彩の努力の跡を。

すると巫彩は無言のまま、私に携帯を差し出す。

「巫彩、いいの？」

私が問うと、巫彩はこれまた黙つたまま頷いた。

私がメールを読んでいる間、巫彩は地べたに仰向けになり、目を閉じていた。

恐らく色んなことに疲れきっているんだろうけれど……柩に入つ

た王女の亡骸を想わせる、その気高い美しさは、携帯をいじる手が止まりそうになるほど異常である。

巫彩が私にメールを見せたのは、どんな気持ちからだろう？ 私に助けを求めている？ それとも《別に読まれても構わない》とう投げやりな想い？

それはどうであれ、読むにつれてどんどん、私の心が紅蓮の炎かげろひで焼き尽くされてゆくのを感じた。

「春ね。木泊兄さんが日覚めたのも、こんな季節だったわ。」

「真紗耶さん、あたしね、木泊兄さんに一度と眠り姫になつてほしくないの。」

「話したくない気持ちは解るわ。でも、木泊兄さんが船から飛び降りた原因……それが話したくないような理由なら、なおさらあたしはそれを知つておかぬきやならないのよ。」

「ねえ真紗耶さん、今日こそは教えてもらひわよ。兄さんのこと。」

毎日毎日、肝心なところでは口の堅い真紗耶に問いかける巫彩。その一字一句から、兄を想う少女の心をひしひしと感じると、いよいよ携帯を握るこの手がガタガタと震えだした。

そして最後まで読みきる頃には、私はもはや、いてもたつてもいられなくなつていた。さつきとは全く違つた涙が流れる。

けれども泣いている場合ではない！

私は涙を拭うと、携帯を持ったまま、巫彩の部屋を出て台所へと急いだ。

「お母さん貴女、巫彩をどれだけ苦しめれば気が済むんですか……？」

？」

私の静かな問いに、母親は御馳走を食べながら答える。

「苦しめる？ やーねー。巫彩の苦しみは終つたザマス。友達三人が立派な人間になつてくれたならもう万々歳ザマス」

「付き合つてゐる友達全員が社会的地位を手に入れれば何もかも万事
めでたし、無問題ですか。そんなに簡単なものですか？」貴女、巫
彩さんがどんな想いで友達三人や木泊さんを守るうとしているか、
お解かりですか？」

「なにそれ？」

「巫彩さんが今、帰つて來たときによつたでしようー？ 友達の一
人は失恋し、一人は不本意な土地へ連れて行かれそうになり、もう
一人はお母さん、他でもない貴女のためにピアノを頑張つていると
！ 巫彩はその一人一人の問題を全て一人で抱え込んで、解決しよ
うと頑張つているんです！ いまどき居ませんよ、こんな優しい心
を持つた女の子！」

「そんなこと言つたザマしうか？ でも、とにかくワタクシは巫
彩がワタクシども夫婦の理に適つ友達を得てくれたことが嬉しくて
たまらないザマス。貴女も食べるザマスか？」ほほほほ

その瞬間、私の心は地獄の釜戸へ投げ入れられ、心臓が煮えたぎ
るように波打つのが判つた。

こんな凄まじい殺意を感じるのは……

そう、奴を刺し殺したとき以来かもしれない。

とうとう声を荒げるしかない私。

「娘が……こんな小さい体した娘が！ 自分のことなんか二の次に
して友達や兄さんのために必死で戦おうとしてんだよー！ それな
のに、それなのに……こんな御馳走カツ喰らつて、お祭り気分味わ
つてんじゃないよッ！－！」

ガシャーン！

私は御馳走を豪快に床にぶちまけてやつた。

当然、母は立ち上がり激怒する。

「ちょっと貴女！ 突然家に入り込んで来て何してゐるザマス！？」

これ以上なにかしたら、出るところに出るザマスよー！－！」

「ああ！ 出たけりや出ればいいでしょーが！ 何にもしなくたつてタダメシ喰わせてくれる所にブチ込んでくれるならねえ、こっちから土下座でもして頼み込みたいくらいだわ！」

「な、なんザマスの貴女は！？」

「でもねえ、私はタダじやあブタ箱には入らないよ！？」 巫彩が、あんたの捨てた息子のことをどれだけ想つてるか、それをおんたに思い知らせてから入つてやる！ 見な！！」

私は料理が落とされて空っぽになつたテーブルの上に、巫彩の携帯を乱暴に置いた。

「巫彩の、携帯……？」

「ああそうですよ！ 巫彩が『真紗耶』つて奴に書いたメールを、一字一句とばさずに、丁寧に丁寧に読んでみなさいっ！」

「これがあれば、巫彩が何を考えていたのかが解るザマス！ ワタクシずっと、あの子の気持ちが解らなくつてどれだけ苦しんだか！ まるで芸能人のスキャンダルが載つた週刊誌に喰いつくかのように、眼を光らせて娘の携帯を手に取る母。

……ずれている。普通母親というのは、娘が考えていることが解らなかつたら、何としても娘の心と向き合つて、何とか理解したいと願うはず。多分、それすらも面倒くさくてやらなかつたんでしょう。

けれども今は、そのことを突つ込むより、この母に娘のメールを読ませるほうが先だ。

……メールを読む母の顔は、何の感銘も受けていないようにも見えるし、読むのに必死で表情を変える余裕もないよつにも見えた。やがて読み終えると、母は携帯をそつとテーブルに置いて俯く。

「…………」

「巫彩が毎回毎回メールに書いていた貴女の息子さんへの心配！ それは本来、貴女がすべきことだったのではありませんか！？」

「…………」

「実の母親が塵芥ぢりあくたのように捨て放つた木泊君を！ 義理の妹の巫彩は一日も忘れることなく心配しているんです！ 貴女が息子を想うよりずっと強く、巫彩は木泊君を想っているんだ！ 貴女は巫彩を教育しておられるつもりかもせんがねえ、貴女がた夫婦のしていることは教育でも育児でもない！ ただのファッショングだ！」

私の熱弁に、流石の母の声もとうとう震えだす……

「ファッショング……ですって？」

「ああそうだ！ 貴女がたは自分たちのステータスのために子供を生んで、その第一子が思い通りに育たなかつたものだから、まるで時代遅れの服から流行りの服へ着替えるように木泊君を捨てて巫彩を引き取つた！ そして巫彩がいい子に育つたなら、今度は巫彩の友達にまでいちゃもんを！ 一体どこまで、あんな小さな子供にワガママを押し付ければ気が済むおつもりですか！？」

「ワタクシはそんなつもりは……」

この期に及んでまだ戯けた事を！ 私は自分の顔が鬼のような形相になつていいくのを感じた。

「お母さん！ 貴女は木泊君を自分たちの『失敗作』だと思つておられる。そしてその汚名を返上するために巫彩を取り、『この家の見栄えを浴して頂戴』『ワタクシたちの誇りになつて頂戴』と頼んでばかりいる！ いい年をした大人一人が！ 一体いつまで十四歳の小さな女子に甘えているつもりですか！？」

「くつ……」

「兄や親友たちの悩みだけでなく、親のエゴにまで付き合わされて、巫彩は四六時中、心の休まる暇がないんです！ このままでは倒れておしまいになりますよ！？」

「そもそも木泊がちゃんと学校に通つていってくれたら、ワタクシとてエゴを子供に突きつけるようなことはしなかつたザマス！ ビうしてなのザマス！？ 学校、楽しい場所でしょう！？」

……もう憤慨を通り越して逆に冷静になる私。

「ふう、お母さん、近現代の学校がどれだけ腐敗しているか、貴女

は解つておられないようだ。誰にも言つまいと思つていたことです
けど、私は中学時代、付き合つていた彼と体育倉庫で男子と、まあ、
けしからんことをしていきました。そしたら、あらうことかその倉庫
には隠しカメラが仕掛けあって、それを高校の映画上映会で、ア
ニメ映画の代わりに垂れ流されましたよ。まあ下らん幼児向け映画
よりは私の濡れ場のほうが見ごたえはあるでしょうが……なぜ生徒
らがそんなことをしたか、理由は『面白いから』ただそれだけだっ
た。これが平成の高校です。木泊さんの学校も、似たようなものだ
ったんじゃないですか？」

話したくないことだらけの私の人生、その中でも特に後ろめたい
出来事を、実に淡々と流暢に告白してしまった。

「そんな…………」

それでも煮え切らない態度の母に、再び私の口調は熱を帯び始め
る。

「木泊君はねえ、腐敗した学校でイジメに遭い、首田宗志教からは
理不尽に攻撃され、おまけに両親まで自分を失敗作だと罵つてくる
！ 三重の地獄にたつた一人で落とされてしまったんですよ！ そ
りやあ、生きていられなくなりますって！ 両親のため、一生懸命
これ以上の迷惑をかけぬよう、一度は自ら消える道を選んだんです
！ そんな息子の気持ちも考えず、貴女がたは厄介払いをするよう
に、意識を取り戻した木泊君を母萌さんに預けた！ 木泊君がどれ
ほど想いで居るか、想像したことはありますか！？」

「…………」

「これを！」覧下さい！」

私は呆然とする母の前に今度は自分の携帯を叩きつけ、木泊さん
がSweet Seasonの厨房で料理の腕を磨いている姿を写
した写メを見せてやつた。

いつか厨房を訪ねたときに、あんまりにも凛々しくて健気な表情
をしているものだから、一ひとそり撮らせて頂いたもの。

「…………こは…………く…………」

「ああそうですよ！ これはあんたがお腹を痛めて産んで、それで気に入らないからといって勝手に捨てた子供だ！ 木泊君がどうして、こんなふうに料理を頑張っているかお解りですか！？」

「…………？」

「貴女に許してもらうためですよ！ ボクがイチニンマエの料理人になれたら、お母さんだつてきっと、ゆるしてくれるよね ってねえっ！ それなのに貴女がたはなんですか！？ 木泊君が貴女のために健気に努力しているときに、巫彩さんの友達に下らないイヤモンを！ 情けなくはありませんかあつ！？」

私は木泊さんの透明な愛に想いを馳せ、とうとう泣き崩れた。

このことこそが、私がさつき巫彩に言いそびれた、

母萌さんが拵えた料理よりね、木泊さんの拵えたのを店で出したほうがウケが良かつたんだつてさ。それにねえ……

といつ言葉に続く事情に他ならない。

言つべきことは全て言つた私は、散らばつた食器の破片や料理の残骸を一人で片付け、十数分かけてそれを終えると、母親に頭を下げながら万札を何枚か差し出した。

「手荒なことをして申し訳ありませんでした。これ、わざやかですが弁償代です」

「結構ザマス。若い人からお金を受け取るほどワタクシ、落ちぶれておりませんゆえ」

その棘のある台詞と氣高い口調が、どことなく義理の娘の巫彩を想わせるのだった。

最後に、巫彩の顔を見て帰ろつ。そう思い、一階へ赴いて巫彩のドアを開けると……

「志穂！ 志穂お！」

なんと今度は巫彩が私に駆けてきた。柄にもなく、ドア付近の壁際に置かれた観葉植物につまづきながら。

「巫彩？ どうしたのよ貴女らしくもない！ セツを私を罵つたときみたいに、しゃんとしなさいよ！」

「だつて、ううつ、あたしのために、誰かがこんなふうに必死になつてくれたのつて、生まれて初めてだつたからあつ……！」

その言葉がガラス片のように私の心に突き刺さる。

親身になつてくれる人が誰も居ない世界で育つってきたこの少女。

普通なら、グレるか歪むかするところ。それが、首田宗志教の連中のように、他者を貶めることで自分の価値を保とうとする人間になるか……。

それなのにこの巫彩ときたら、……恐らく自分と同じ想いをする人を出したくないからだろう、大切な人を体当たりで守り、助ける！ そんな少女に成長したわけで。

それを思つと、私は愛しさといじらしさで胸がいっぱいになつた。「巫彩、貴女今までよく頑張つた！ ほんとに凄いわよ！ グレも歪みもしないで、それどころか、人助けばっかする女の子に育つってさ！ つくて、こんなちっちゃな体で！」

「志穂……」

「そうよ、これからは天下の柴門志穂様がついてるんだから！ なにか困つたら私に相談してよつていうかあのコードは何？」

私はとつさに巫彩から離れて、倒れた観葉植物の鉢から延びるコードの前に立つた。

コードは観葉植物にまとう薦^{つた}のよう、葉々の隙間から垣間見えていて、倒れた衝撃で植物から浮き出てしまつたことが、私に見つけられる原因になつっていた。

コードを辿ると、片方の先は葉っぱの裏にセロテープで付けられていて、それはファイバースコープみたいな形をしている。そしてもう片方は……鉢の土の中に埋まつた、四角い機材につながつていた。

「巫彩、貴女、自分で自分を盗撮して楽しむ癖とかあつたりする…

…？

「なにそれ、慰めてくれたかと思つたら、今度はあたしを変態扱い？」

憎まれ口を叩きながら部屋に入った巫彩は、私の手に持つたものを見て震えだした。

私は観葉植物から機材を剥ぎ取ると、母親の元へ走る。

再び台所。

呆然と座りつくす母の前に、私は機材を叩きつけた。

「今度はなんザマスの？」

「これは、巫彩の部屋の観葉植物に括りつけてあつた物です。心当たりは……？」

「なんザマスのこれは？ カメラと……？ 発信機！？ ……まさか、まさか主人が！ ……そ、そういえばあの人、最近、巫彩に妙な視線を投げかけたり、色づいてきた巫彩の体を褒めることが多くなつたザマス！」

母は立ち上がると、慌てて台所を出る。

私はそれを追つた。

廊下へ向かうと、母はそこに設えられた物置を漁つていた。

「お母さん、それは……」

「主人のコレクションとやらザマス！」

母の漁るのは、『映像で見る動物図鑑』といつ類の白いプラスチック・パッケージ。

「コレクション……」

「おかしいと思つたザマス！ 動物の『ビ』の字にも興味のなかつたあの人、突然こういったビデオを集めだしたザマスから…」

そして漁つたビデオを、リビングのテレビで再生……

思つたとおりのものが、そこには記録されていた。巫彩のプライヴェートな生活の姿が、リアルタイムで実に鮮明に……。

「何があつたのよ？」

軽い歩調でリビングを訪れた巫彩に、母は問答無用で土下座をする。

「巫彩！ 巫彩え！ 申し訳ないザマス！ ワタクシがついていながら、あの人につとめ物を撮らせるとはー！」

「お母さん？」

そこからなトントン拍子で話が進んだ。

母は早速、夫の長期に亘る悪事を通報。夫は外食先の飲食店から出たところを御用となつたらし。

そして……、母は夫や警察と話し合つとかで、

「朝には戻ると思つザマス。くれぐれも巫彩をよろしく頼むザマス」私に深々と頭を下げる、母は警察へと向かつた。

そう……夜に娘を一人で残すとなると、母親ならば知り合いに娘を頼むくらいの安全策はとるはず。

それなのに紗那とかいう娘の両親ときたら……呆れ果ててものも言えない。

そこへゆくと、このザマス母は日常生活における最小限の常識は持つているのだと、ほんの少し安心した。

馴染みない家に残された私。今日はここへ泊まることになつてしまつた。

母が去つて一時間。私はずっと廊下とリビングの狭間に座り、悪夢から目覚めた子供のように泣き続ける巫彩を抱き締めていた。

義父にあんなことをされたのがショックだから泣いているのか、それとも私の母への演説が嬉しかつたから泣いているのか、それは判らなかつたけれど……。

そういうえば私は、《あの夢》の中でも、真紗耶をこんなふうに抱き締めていたつ。

やがて、巫彩は私からそつと離れた。

「ありがとう、志穂。さつきは、《失恋程度で不登校になつた薄っぺらな人間》とか、実に的外れな中傷してごめんなさいね。そんな事情があるなんて知らなくて……」

「そ？　じゃあ昨日あんたが、私からカツサばつて川に投げ捨てた銭こ、耳そろえて返して頂戴！」

巫彩に手を差し出す私。半ば本気である。
巫彩は拒むのかと思ったら、立ち上がりてそそくさと皿室へ消えた。

そして白い袋を持つて帰つてくる巫彩。

「これ、昨日、あたしが投げ捨てた金額の三倍は入つてゐるわ……。あたしも、小さい頃にお年玉とか色々貰つたけど、欲しい物がないから使わないでいたら、こんなに溜まっちゃつた

「じゃあ、ありがたく頂戴するね」

私はアッサリと巫彩から袋を受け取り、中身を確認した。……これで例えいいDVDが撮れなくとも、一週間は果音に殴られなくて済む。

真紗耶に連絡してここへ来てもらつて、札束をあの校舎跡へ届けてもらえばいい。

そんなことを考えていると、まさに巫彩が、

「ねえ志穂、貴女は、どうなの？」

などと訊いてきた。あつさりと金を受け取つた私を不審に思ったのだろう。

「あ？」質問の意図は解つていたけれど、敢えて私は「どうなのつて？」と訊き返す。

巫彩は私の隣に無造作に座る。

「志穂、貴女どうして、そんなにお金が必要なの……？　ねえ、さつきはあたしを徹底的に罵つて、今はあたしを助けようとしてくれた。貴女がそんなに複雑な人間なのって、貴女が凄く複雑な事情を

抱えてるからなんじやないの！？」

……！！ 相も変わらず鋭い女だ。仕方がない

「昨日は、私と真紗耶の間に貴女なんかに入ってきて欲しくなくつて、それで貴女に私たちから離れろって言つたけど……今は、貴女のために言つね 私と真紗耶には、深く関わらないほうがいい！」

……！」

私は恐らく生まれて初めて、《心の底からの真剣な顔》というのをして、巫彩にそう告げた。

けれども巫彩は、軽い溜息で受け流す。

「はあ……ねえ志穂、よくドラマなんかでも、事件に首を突っ込もうとする天真爛漫な主人公に、陰のあるもう一人の主役が《この事件には関わるな。お前に死んで欲しくない。》って諭す場面を見かけるけど、あたしは《関わるな》って言われた時点で、その人はもう、事件に大いに関わってると思う」

「確かにそうだけど！ でも巫彩、貴女に覚悟はあるの！？ 私と真紗耶がどんな人間で、どんな人生を送ってきたかを知つてもたじろがない自信がある！？ 私と真紗耶はね、深い深い地底に居る。地下鉄の階段を下りるような感覚で首を突っ込んだら、とんでもない深淵に足をさらわれるよ！？」

すると巫彩は、戸棚のガラスに映つた自分を見つめた。

「でも、あたしだつて既に、地底に足をすくわれてるわよ」

巫彩の甘さに、今度は私が溜息。

「はあ、地底つたつて貴女の場合は、義理の両親が変な奴らで、お兄さんが不幸な目に遭つて、友達が全員複雑な問題を抱えてるつて、それだけでしょ？ もう、そういう次元じゃないのよ、私と真紗耶の居る場所は。巫彩、貴女は地球の表舞台で生きていける可能性を充分持つて。その大事な可能性を奪うようなこと、私も真紗耶も、したくない……出来ないよ」

ところが巫彩は驚くというよりは、《それは承知してるわ、でも……》と言わんばかりの清^{しん}とした決意を感じさせる顔をしていた。

「志穂……あたしね、ずっとずっと、自分が誰かを助けることはあっても、誰かが自分に手を差し伸べてくれることはないって思つてたし、それで充分幸せだつて思つてた。けど志穂、貴女はそんなあたしのために必死になつてくれた、最初の人なのよ。だからあたしは……」

その気持ちは解らないでもない……私は最終確認をする。

「じゃあ、何を聞いても、絶つつつ対に私たちからは身を引かないと誓いなさい。今ならまだ引き返せると、それだけ言つておくわ。私たちの事情を勝手に聞いておいて、それで今度は怖くなつたから自分は去りますなんて、そんなことはこの私が絶対、死んでも許さないから」

これは実社会でもネットでもよくある話（特に顔の見えないネットに多い）だけれど、最初のうちはいい顔をして付き合つて、でも、いざ相手の抱える事情を知ると徹底無視！ そういうパターンを何度も見てきたことか！ 本当に虫唾が走る！

ところが巫彩は得意気に挑むような表情で、実にすがすがしい宣言をしてくるのだった……

「そのときは遠慮なく、あたしのこと も 刺し殺すといいわ」

この娘、私がレッドラムであることも知つてゐる。半分はニュー
スやネットによつて、もう半分は真紗耶によつて、だらう。

真紗耶にここへ来るよう連絡して、時刻を見ると、まだ十八時半。刺し殺されても構わないといつながら、私も、この女に何もかも話してしまいたいという気持ちが、なぜかどこからか湧き出てくるのだった。その理由は、今は分からなかつたけれど。

「巫彩……何がいい？」

「え？」

「何から聞きたい？」

「最初から……」

「わかつた……」

私は、この台所と廊下の狭間という中途半端な場所で、誰にも話したことのない過去を語りだすのだった……

【Shihō - viewpoint】愛は突然に（後書き）

3ね～んBぐみ～サイモン先生～～

【Recollection of Shiori】宿命の出逢い

あれは私が、恋というものに身を染めるずっと前……小学四年生になつたばかりの、ある日の下校途中のこと。

友達と別れ、一人になると私は、小さな林を歩くことになる。赤いランドセルを背負つた私には、その林がいつも少し恐ろしげに思えたものである。

そしてそして……その口は、ただでさえ少し怯えて歩く私をあつと驚かせるかのように、足元から猫のような幼女の声が響いてきたのだった。

「アホ毛！ 一人で帰るの？ 危ないね」

見下ろすとそこには、大きな目と座敷わらしのよつな肌が印象的なガキが、土の地面上にしゃがんで居たのだった。

いたるところがフリルやリボンで飾られた、パフスリーブのワンピースがよく似合つと思つた。（ちなみにこの時点で既に私の頭のてつぺんには『アホ毛』が発生していた。）

その美麗で、どこか常人とは違つ雰囲気 よく見ればこの現実の風景に全く溶け込んでいいのではないか？
私を見上げるその表情は、まるで異次元に迷い込んだ幼子が助けを求めているように見える。

とはいひものの、その言動からして私は、實に生意氣なガキだと思つた。じついうのとは関わりたくない。

私が無視して通り過ぎようとすると、ガキは私の背に声をかけてきた。

「無視？」

声をかけられたのでは仕方がない。

「一人で帰る？ この天下の柴門志穂様が？ おいガキ！ 素つ頓狂なことを言つちゃいけないよ？ 友達とは向こうの曲がり角で別

れたんだよ！」

「そう。なら君に用はない」

ガキはそう言つて林の中へ消えようとした。慌ててガキのフリルをつかむ私。

「おいガキつ！　あんた何者！？　前から私を見ていたらしいけど！？」

「君だつてガキ」

私はコイツをガキと言つてしまつたけれど、確かにこいつの言うとおり、私もそのときガキであった。しかししかし、コイツにはどうも甘つたるい『口利』っぽさがあり、どうしても上からの目線で見てしまうのだった。

「ああ悪かつたねお嬢ちゃん！　あんた一体……」
私が言い終わる前に、ガキが言葉を遮つてくる。

「お嬢ちゃん！？　に見える？　本当？」

ガキはしつこくそう問いかながら、私の周りをウロウロ。さすがに笑うしかなくなる私。

「ははははは！　面白いガキね！　名前は？」
「ま・さ・や」

名札を見せてくる真紗耶。

「ひやー、なんなの、その男みたいな名前！」

今度は私が真紗耶の周りをウロウロ。

「しつれーな……私、れつきとした男」

「あひやひやひや、冗談言つちや……」

私はこいつが男か女かを『確認』した。まあ、子供だから出来ることだ。

「……あら、冗談じやなかつたのね。すまん」「わかれればいい」

「ところで　真紗耶とかいつたね？　ガキがこんなところで何してるので？」

私が何気に問うと、真紗耶は林の中へ入つて行つた。

「ウサ晴らし。暗い顔じゃ家へは帰られないから」

とつさに真紗耶の後を追う。

「ちょっとちよっと、危ないじやないのよ一人で入って行っちゃー」

「ここはいい場所」

「……ウサ晴らしつて、なんのウサ晴らしなのよ？」

その問いに、走っていた真紗耶は暗示にでもかけられたようにハタリとしゃがみ込んだ。

「学校。どこもかしこもウルサイ子供ばかり……。けど、母に暗い顔は見せられないし」

「それで毎日ここで一人遊び？」

「そう……」

……恐ろしいと思つていた林の道。しかしこうして林そのものの中に入つていると、意外にも心が落ち着くものだ。

それに私も、学校で少々嫌な目に遭つていたといふのもあって、この寡黙な女装少年に感情移入してしまつていった。

「おい真紗耶。そんなにつらいんならさ、私と毎日、ここで遊ぶ？」

「同情なら要らない」

ツン、と、そっぽを向く真紗耶。けれども私は、なぜだか知らないけどこのガキに興味を引かれて仕方なかつたのだった。

「まあ、つんけんすんな。じゃあ、なんで私に声かけたのよ？ 私が、あんたに似てたからでしょ？」

「そう。そここの角で友達と別れたのかもしれない……。でも、一人で歩く君、いつも顔が暗かつた」

すると私は、非常にマセたことを言いたくなつた。

「暗い者が明るい者と付き合つても明るくなれないけど、暗い者同士が仲良くすれば、互いに明るくなれる、そう思うよ。私はね」

私の名言に真紗耶は目を輝かせ、ニコ一ツと、極上の笑顔を見せる。

「あ、ありがとう。……そうだ。君、名前は？」

「柴門志穂だよ。」

名前を言つと、真紗耶は立ち止まつて首を傾げた。

「なんだ、『ふみ』じゃないんだ」

またドラマネタが飛び出す。

「ドラマの見すきよあんた！ どうせ今やつてゐる『回・級・生』にハマつてゐるんでしょ？」

「図星」

「あのねー真紗耶、図星つて言葉は自分で言つてもさじやなこのよー

「つるねー」

「なんだつてえー？」

「やるか」ボソッとケンカを売つてくる真紗耶。

「望むところよー！」袖をまくる私。

これが、私たち一人にとつて最初の『仲の良いケンカ』だった…。

と、そこで巫彩が口を挟んでくる。

「うわ。『同・級・生』なんて、あたし再放送で観たけど、ずいぶん古い感じのドラマだったわよ？ そんな頃からの知り合いなのね、貴女たち。けど、そうやってその時代に流行ったものを出してくれると話が解りやすいわ。 で、そうして出逢った貴女たちは、それからすぐに仲良しに？」

「うん、まあね。学校は違つたけど、それからは毎日、一緒に登下校したのよ。一人とも、全く別の意味で学校へ行くのが億劫だったけど、一人で歩く時間だけは平和だった……。中二くらいまでは、そういう日が続いたわ」

私が昔を思い出して遠い目をすると、巫彩はお茶をコップに注いで氷を入れて持つて来、投げ出された私の足の前に置いた。

「喉カラカラでしょう？ お母さんのこと怒鳴つたり、過去を話したり」

「ありがとー。そつのよ。ちつカラカラ」

私はお茶を一気に飲みほすと、今度は出逢いの日から四年後、即ち一人が中一になつた頃の話を始めた。

【Recollection of Oshiro】哀しきふたり

「おーい真紗耶、最近元気ないお(、ヽ、ヽ)」

「そう言つてゐるおしほだつて、ローテンションだと、思ひ」

二人で歩く学校への道。私たちの朝はいつも早かつた。《学校に着くまではオアシス・学校に着いてからは別の意味で拷問》という毎日だったから、オアシスのほうを長くしたいと子供ながらに話し合つた結果である。

そして、この頃からだ、真紗耶が私を呼ぶ《おしほ》のイントネーションが決まったのは。

学校での苦労がたたつたのか、出逢つた頃の無邪気さは私も真紗耶も失つてしまつたわけだけれど、ことに真紗耶は、出逢つた頃より遙かに、寡黙でミステリアスな子供になつていたのだった。

私と真紗耶の外面向的なスタイルが決まったのもまた、この頃からである。私はセミロングを愛好するようになつたし、真紗耶はそんな私に対抗してか、前髪だけ洋風にギザギザに下ろし、後ろ髪は完全な御河童にするという、独自の髪型を編み出していた。

しかししかし、そんな真紗耶のお洒落心を素直に褒めてあげていたのは、母親と、この私だけなのだつた。

「あ、おしほ、ほら、春女苑」

「あ、ホント。ねえ姫女苑と春女苑つてどう違うの?」

「春紫苑は薔のとき、下を向いてくる。姫女苑は薔のとき、上を向いている」

「へえ~」

そんな他愛のないことをしながら、出来るだけ長い」と一緒に居たい私たちなのだった。せめて学校が同じだったらと、何度もそう思つたことか。

私はその場にしゃがみ、春女苑を憂鬱な眼差しで見下ろしていた。

「春女苑の花言葉は『追憶の愛』だつて」

「ねえおしほ、愛は追憶になんてならない。つていつより、想い出に変えられないのが本当の愛だと思う」

私の隣にしゃがみ込む真紗耶を見て、私は地べたに「ロノ。

「あちやー。そんなこと言つてるから、村八分にされるのよ、あんた。最近、どんどん状況が悪化してるんじゃないの？」

真紗耶はその問には答えず、私の瞳を覗き込んできた。

「おしほだつて、最近、暗い。私たちが出逢つた頃も、少し暗かつたけど、私と、仲良くなつてからは、少し、元気になつた。それから、ずっと、元気だつた。でも、一年になつたら、また、暗くなつた。クラス替えで、何かあつた？」

私は立ち上がり、線路と道路を隔てる灰色の柵を掴む。

「私の小学校、生徒の道徳のためとかいつて、一クラスに一人ずつ、知的障害者の子を置いてたの。……あんたと出逢つた小四の頃よ、あの子が、私に、ちよつかい出してき始めたのは……嫌らしい意味でね。それで、その子の親の希望で、中学も普通の所へ行かせたいとかで。……中学も私と同じ学校になつたの。それでどうとう、この一年生で同じクラスに」

告白したとたん、私の悔しさ音で表すかのように電車が通過。

真紗耶がDVD撮影の際、私のお尻だけは触つてこないのは、まさにそんな私のトラウマを配慮してくれてのことだ。

「そ、そんな……っ！」真紗耶も立ち上がり、電車を眺める私を真横から直視する。

「小学でも中学でも、クラスメイトや教師たちの『いじ』とは同じ……『障害者なんだから仕方がない』その一点張りよ」

「そんなこと言つたら、おしほはどうなるの？『障害者なんだから仕方がない』つていつたつて、その子のせいでおしほが苦しんでることには変わりないのに……」

「真紗耶、ありがと。そういうふうに言つてくれる君が居てくれるだけで、私は救われるよ。ホント、同じ学校だったら救われたの

「お、私ら

「おしほ 私も さう思ひ 私 学校では 誰からも人間扱いされてない あそこに居ると 自分が何なのか 判らなくなつてくる」ここにおしほが居たらどんなにいいだろ」つて いつも思つてる……」

「そつか。私は少なくとも、人間扱いはされてるからなあ…… 但し、『障害者差別をする最低な女』としてね」

「おしほは 悪くない……」

なぜかその言葉が、きゅんと、この胸を絞るようだった。

「……いいなあ それ。もう一回 言つてよ……」

「おしほは、悪くない」

「もう一回……」

私がその場に崩れ落ち、柵にしがみついて嗚咽しだすと、真紗耶はこの肩を抱きながら……

「おしほは、悪くない」

何度も何度も、その言葉を聞かせてくれたのだった。

そのまま電車を何本か見送った後、再び歩き出す私たち。

「でもさ、小五、小六の頃に、私のクラスに来た障害者の子たちは、いい子たちだつた。五年の時の子は、凄く優しい女の子。クラスのみんなが、その子と話すだけで幸せになるような。それで、六年の時の子は、絵を描くのもオブジェをこしらえるのも楽器を演奏するのも超一流な天才少年でね、いつもみんながその子を囲んで、感激の声が絶えなくて、クラス全体が明るかつた……」

「そう……」

「……でも今は、また小四の頃に逆戻りよ。授業中だらうが休み時間だらうが、クラスみんなでその子にピクピクしながら暮らして。暴行を受けて、救急車沙汰になつた子も居る。なんでこんな想いしながらやならないのよ?」

「まあ、いい。戦場に行くと思えば」

その一言に私は無性に悔しくなつた。

「どうしてよ真紗耶！？　どうして平和な世の中だつてのに私たちが戦場気分を味わわなきやならないの！？　どうして……、あの子は障害者つてだけでみんなに庇われて守られて、それでどうして誰を傷つけるわけでもない真紗耶は村八分なのよ！？」

「おしほ、ありがとう。でも、もう、私のために怒らないで」

「真紗耶あ……」

「おしほ……」

私と真紗耶は強く抱き締め合つた。

といろがその舌の根も乾かぬ内に　　再び歩き出した私たち、ふと私は、線路の向こうを歩く少年に目が行つた。

「ムムツ、あの人素敵ね！」目を開けてその少年を見つめる私と、

「また始まつた。まあ好きにすれば」そんな私を冷めた目で見つめる真紗耶。

ああ、真紗耶は私の心を理解してくれている、と思つたのだった。

「え？ 理解してくれてるってどうこう」と？

「また巫彩が口を挟んでくるけれど、まあ無理もない。

「巫彩……私はね、小四と中一の頃そういう日に遭つてたわけだから、学校中で、その障害者の子と私との噂が耐えなくてね。大変だつたわけよ」

「酷い……。大方、貴女が『彼が一方的に猥褻な行為をしてくる』って訴えても、教師にも生徒にも、『相手は障害者なんだから御手柔らかに云々』みたいに跳ね返されたんでしょう？」

さすがに学校で色々な想いをしている巫彩だけあって鋭い、と思つた。

「そうよ？ だからね、とにかく別の男と付き合つて、彼との噂を搔き消したいっていうのが、中一の私の想いだった。素直にさあ、真紗耶と付き合つちやえれば良かったのよ。でも真紗耶は女の姿だから、妙にそういう関係になるのは敬遠しちゃつてさ」

「それが、のちに大きな悲劇を生んだ……違う？」

「巫彩、あんた本当に鋭すぎるよ。……そうなの。なりふり構わず、真紗耶とさ、子供の頃からラブラブしちゃつてれば、もしかしたら、私たちはこんなにも墮ちずに済んだかもしれないね。はあ」

ため息をつきながら時計を見ると、なんとまだ話を始めてから三十分しか経つていなかつた。結構、長話をしたつもりだったんだけどれど。

「で、その続きを？」

急かす巫彩を、私は少し睨む。

「お茶！ もう一杯！ あんたの母さんの淹れたお茶、美味しい」
すると巫彩は冷蔵庫に向かいながら、実に迷惑そうな困り顔をした。

「あーもう、あの母がそんな気の利いたことするわけないでしょ

！？あたしが淹れてるの！」

「ひやあつまい」

ともあれ、これにて、真紗耶、私、そして巫彩。この三人が、この日本社会の暗部を舐め尽して生きている人間だといふことが今、巫彩と話したことで一層、浮き彫りになつていた。

ちょうど真紗耶の鳴らすチャイムの音が、このだだつ広い家に響く。

玄関へ急ぐと、私は真紗耶に札束を渡した。

「これ、お願ひね」

「あそこへ行くのは久しぶりです。緊張しますね」

「まあ頼むよ。私は今日、ここを離れられないからさ」

「大変なことになりましたね、巫彩さん」

真紗耶は家の奥のほうを気にしている。……たぶん巫彩の顔が見たいんだろう。

けれど巫彩は茶を淹れていて出てこない。

「心配すんな真紗耶。あの母親も少しばかり替えるみたいだし。大丈夫よ」

「そうだといいですけど……では、私はこれで」

名残惜しそうにドアに手をかける真紗耶。

「気をつけよ？ あそこいら辺は変な輩やかみがウロツいてるからわ」

「はい……。では」

「また明日～」

明るく手を振るその裏で、私は強く強く願っていた……この真紗耶が、あの校舎跡で今起つていてる惨劇を突き止めたりしないように。

【Shinō - s viewpoint】後奏（後書き）

五章はこれで終わりです。

今一つ盛り上がりに欠けるといつが、クライマックスへ辿り着いた
いのになかなか辿り着けない……そんな作者のイライラを感じさせ
てしまう章になってしまったと思います。

「志穂、あたしの淹れたお茶、美味しいって言つてくれて嬉しいわ
「そーよねー。あの母さんじゅ、美味しいなんて言つてくれなさそうだもの」

すっかり打ち解けた二人。

真紗耶を見送った後はきちんとテーブルに向き合つて座り、私は巫彩が淹れたお茶を、今度は一氣ではなく丁寧に味わいながら飲んでいた。

ところが巫彩は私の過去漸の続きが気になつて仕方ないらしく、「それでさ…………」などと急かしてくる。

「ああ分かつてゐるつて。ん、どこまで話したつけ？」

「中学一年生。障害者による貴女への猥亵行為。悪しき尊。恋を以つて愚かな噂を搔き消す」
巫彩が無造作にキーワードだけを挙げると、私は簡単に思い出すことができ、お茶を半分ほど残したままコップをテーブルに置き、漸を再開した。

「その線路の向こうを歩いていた少年だけと、私は彼をすぐにモノにした。そしたら私と彼は、たちまち一年生中の噂になつて、私はほつと胸を撫で下ろしたものよ。けど…………」

【Recollection of Oshino】精神崩壊

登校途中、真紗耶に「おはよー! お先に!」と声をかけて駆けて行く少女が居た。

「ち、ちょっと真紗耶、あの子、誰よ?」

「ただ、私を村八分にしてないだけの子」

「仲いいの!?」

少し慌てる私を憂鬱に見つめて、投げ捨てるように首を横に振る真紗耶。

「まさか。ただ、私なんかどうでもいいだけ。だから挨拶する。みんな、私を嫌うか、私に無関心か、そのどっちか」

「ねえ真紗耶、君が村八分にされるのって、君がそんな気持ちでいるからなんじやないの?」

たまには気まぐれに平凡な言葉を吐いてみた私を、真紗耶は試すような目で見つめ……

「私が そんな気持ちでいる 人間でも、おしほ、君とは仲良くなれたけど?」と鋭い指摘をしてきた。

「あ、まあ、それはそうだけど。真紗耶の志が間違っているなら、どうしてこんな素晴らしい美少女と友達になれたのか、って、そういうことか」

「うん。……で、おしほのほうはどう? 嫌な噂、もう消えた?」

「消えたよ。噂なんて無責任なもんね。今じゃもう、一年全体が私と新しい彼との噂で持ちきりよ。私とあの障害者の子を結び付けて考える奴なんかもう一人も居やしない。でもね、機会さえあればあの子、私の尻を触つてくるし、それに、彼と別れるようなことにでもなつたら、また……」

私の表情に陰が差す。すると真紗耶の声が背中に突き刺さった。
俯き歩く内、真紗耶を知らぬ間に追い抜いてしまっていたらしい。

「おしほ、きっと大丈夫。いざとなつたら、私と噂になるといい

その救いに満ちた言葉に、私は引き返して真紗耶を抱き締めた。

「ま、さや、ーつー！ 頼むわよー？ 私、最後には真紗耶しか居ないんだからー！」

「わかってる。わかってるよ、おしほ」

真紗耶はそう言つてくれたけれど、私は心中に立ち込める、言いつのない不安の霧を払い除けることが出来なかつた。

実は私は、彼とは上手くいっていなかつたのであり、春休みになる頃には、ついに破局を迎えた。けれども時期が春休みだけあって、私は《今で良かった》という想いだつた。

三年生になればクラス替えがあり、さすれば障害者の子とも縁が切れるであらう、と。

といふが、である。

中学生三年生の一学期が始まつた日から、私と真紗耶は《笑う》といふことを忘れてしまつ。

一学期・一田田の登校日……

「おしほ……災難だつたね。まだおしほの地獄が続くなんて……」

そう、私はなんと、一年連続での障害者の子と付き合わねばならなくなつたのである。

「うん。昨日もさ、一田田早々、あの子、私の尻を揉みしだいてきたし……、しかも噂を消すために付合つた彼とも別れて久しいから、また学校は私の針の筵と化しちやつたわよ」

「そう……」

「けど、真紗耶こな、そろそろ限界なんじやないの？ 唇、青いし、春なのに、真紗耶の近くに居ると寒くなつてへる」

「…………」

「ねえ、やつぱつお母さんこ……」

そのワードを出すと、真紗耶は逆鱗に触れられた龍の如くいきり

立つのだつた。

「言わないで！　お母様には言わないで！　学校中に私の噂が広まつてることとか、今度は教師まで私を村八分にする勢力に加わつてることとか、お母様には知られたくないっ！」

真紗耶はクラス中どころか、もはや学校中の笑い者になつてゐるらしく、しかも三年になつたら教師までもが真紗耶を弾圧する勢力に積極的に加わつたらしい。真紗耶はとうとつ、地獄を見せられてしまつたのである。

真紗耶を心配しながらも教室に着き、ふと黒板に目をやると私は
私は……

「あ、あつ、あ、あ、あああーっ！！」とまず、奇声をあげた。

足がガタガタと震え、眩暈が起きたかのよつに景色が揺れ動く！
やがてその場に崩れ込むと、べちゃり、と足に温い水が触れた。

「ぎゃああああーーー！　きつたねーーー！」

「中二にもなつて『ちびり』かよーーー？」

クラス全体から湧く下品な歓声！

私は黒板を再び見る。夢であつて欲しいといつ哀しき願いを込めながら！　ところが、ところが、嗚呼っ！　私は口から麻酔なしで異物を飲み込まれたかのような不快感を覚え……

「うつ、うつ、フバツ、おええーっ！！」

ビチャビチャ、ヒ、排泄物の上に吐しゃ物を派手に撒き散らした。

黒板には、相合傘が大きく描かれており、左側には私の名前、そして、右側には……もはや言つまでもなかろう。

「グフエッ、ど、どつ、し、て……？」

やつとの想いで誰にともなくそう問うと、死んだ目をしたデブ少年が私のこじらえた水溜りの前に立ち、蔑むように私を見つめた。

「どうしてつて、お前、あの彼氏と別れたのつて、『デブは障害者の子を指差す「あの子とのことが原因だつたんだろ？　みんな知つ

てんだぞ？」

「ち、ちが、わ、わたし、は、そん、な……」
すると教室中からブーイング！

「差別だ差別だ！」

「おい！ 障害者差別はするなつてどの先生も言つてるだろ？！？
障害を持つて生まれてきた子が可哀想だと思わないのか…？ そ
れに！ こんな所でシッコ漏らしてゲロ吐いて！ 柴門のほうがよ
っぽど知恵遅れだろ？！？」

「そうだ～ そうだ～！」

「僕なんかその子に蹴られて殴られて、救急車で運ばれたよ… そ
れでも僕はその子と仲良くなろうって頑張ってるよ…」

ああ、障害者の子にボコボコにされて救急車沙汰になつた生徒ま
で、私を責めてくる！

あんなに頑張つて、好きでもない男と付き合つてまで、変な噂を
搔き消そうと必死で生きてきたというのに！ 私の努力はなんだつ
たの…？ 恐らく、その圧倒的な虚しさからくる脱力感によつて失
禁し、その絶望的な悔しさによつて嘔吐してしまつたのだろう。

と、そこで担任が登場。

障害者の子が騒ぎに怯え、自席で泣きながら震え続けているのを
見ると、担任は彼の肩を力強く撫でる。

「泣かせてごめんね。柴門さん、何も解つてないよね！ 君は悪気
があつて柴門さんのお尻を触つてるわけじゃないのに、ひどいよね
！」

すると教室内がまた沸く。

「そうだ！ 先生よく言つた！」

「柴門クソ喰らえ～！」

「障害者差別を遂行する柴門志穂に裁きの鉄槌を！」
「ウオオオオ～！」

そして騒ぎを搔き分けるように、担任が崩れ込んだままの私の真

ん前にやつて来たかと思つと、吐しゃ物でビハビハになつたこの頬に平手を飛ばしてきた。

「柴門さん、どうして殴られたか解るわね？……お尻を触られてつらこのは解るよ。でもね、あの子は君とは違う。みんなと違つて、とっても純粹なの！ 純粹だからね、そういうこともしちゃうのよ！ どうしてそういうことを解つてあげないの！？ あの子がお尻を触つてきたて、笑つて許してあげるべきなの！ あの子はね、無条件に赦され、守られ、愛されなければならぬ存在なんだよ！」

「…………あああー…………つ…………うわああああーあああああー……」

叫びだす私を教師は蹴飛ばして廊下へ追いやると、ドアを乱暴に閉めて授業を始める。

生ぬるい沼の上に倒れる私。その場にはただ、この世の終わりを告げるよつた私の絶叫が響き渡つていた。

【Reconnection of Osanthon】精神崩壊（後書き）

やり過ぎかとは思いましたが、このくらいやらないと志穂の歪んだ性格に説得力がなくなってしまいますし、次の章で回想する事件（プロローグのあれ）にも真実味がなくなってしまつ。よって容赦ないタッチで描かせていただきました。

「いやああーっ……」

巫彩は身を切り裂くような叫び声をあげたかと思つと、私に土下座をしてきた。

「あ、巫彩!? どうしたのよ急に……」

「志穂!! あたしを許してーっ!!」

巫彩は、ついさっき私に言つたことを気にしてこらへじ。

「巫彩……よしよしお(< >)」

私は椅子から下りると、巫彩を優しく抱き締め、その利発なツイントールを撫でてあげた。

やがて、真紗耶からメールが届いた。私は巫彩を抱いたままそれを読む。

「柴門さん、お金、果音さんへ届けてきました。今、家に着いたところです。ところで、なんだか果音さん、以前にも増して疲弊なさつた様子で、柴門さん以上に傷だらけで、おいたわしゃ「ひざれこました。」

私が涙をこらえつつケータイを開じると、巫彩は私の腕の中で話しだした。

「志穂、それで、どうしたの……?」

「はつはは、そりゃあもうね、私の中だとつとつ、何かがブチ切れたわよ。新しい恋人をこしらえて、そいつとの噂で三年中を満たせばいいつていつたつて、『ちびりゲロ女』として、私は全校中の笑い者になっちゃったからね。付き合つてくれる男なんて誰も居なくなつて」

「志穂……」

「その次の日から私と真紗耶は、ひとと手を繋いで登校するよつとなつたの……」

巫彩を抱いたまま、再び話を再開する私。

【Recollection of Oshiro】狂氣の日々（前書き）

『昔の私』の激烈な作風に、戸惑いすら感じる『今の私』が居ます。

【Recollection of Oshiro】狂氣の日々

「わー真紗耶だ真紗耶だー！」

下品な女子が真紗耶に体当たりしながら駆けて行く。しかし私は状況が全く判らなくなっていた。

「私の真紗耶に触るなっ！ 私から真紗耶を奪おうつたつてそうはいきませんよ！？ この泥棒猫つ！ あああああーつ！！」

私はその女子を追いかけてぶん殴り、再び戻つて真紗耶と手を繋いだ。

「…………

真紗耶は話す力もなくなっていたのだと思つけれど、このときの私はそんなことにすら気が回らなかつた。

「真紗耶ッ！ あの女子とはどういう関係なのよッー？」

「…………

「黙つてないで何とか言え！！ あんたが別の女とくつついたりしたら、私はもう死ぬしかないんだ！」

「…………

「ああーっ！ あー！ あーあーあー！ あああああーああああ

つ！ 「…………

蝙蝠のように甲高い奇声をあげながらの登校である。

いつも真紗耶と別れる分岐点に来ると、その日の私は絶叫した！

「真紗耶！ 私の学校に来な！」

「私も……そうしたい……でも……無理……」

「きえええーっ！ 私よりさつきの女のほうが好きなんだりうー・

？ 私を裏切らないでつて言つたじゃない！？ うわああああああああああああああああああーっ！！」

振り切るように真紗耶から離れて駆け出すると、やがて私は道路の隅に春女苑が咲いているのを見つけ、あまりの懐かしさに駆け寄り、

しゃがみ込んで叫んだ。

「あーああああんつ！ はあああーつ！ あーあーあー！ きああ
あーつ！」

すると、私は変な物を見つけた。春女苑の隣に、恋愛指南書のような本の切れ端が落ちており、上に乗った小さいけれど重い石ころが、その紙が風で飛んで行くのを防いでいたのである。あからさまに怪しいけれど

何気なく、私はそれを手に取っていた。そこににはこうう書かれている。

「世界中の人間が敵に回つても、あなただけは自分の味方だ」
そう相手に思わせることこそが、相手を独占し得る極意である。
必要とあらば、自らが陰で糸を引きて相手を窮地に陥れ、それを自らが救い、相手を慰める
そういう方法も非常に効果的である。

読み終えると、私は高らかに笑つた。

「あーつはつはつはつはつはつ！ 真紗耶を私だけの者にしてやる
！！ あえーつほつほつほつほつほつ！！」

こうして私はその日から、遅刻覚悟で《通学路を歩く真紗耶のクラスマイト》を狙つた。

手頃な生徒を見いだすと、私はそいつに金品を手渡す。私の家は母も祖父母も私に大甘だったため、お小遣いやらお年玉やらをたくさん貰つたけれど、巫彩同様、何も欲しい物がなくて、そうして金品が溜まっていたからだ。

「ねー君ー。これあげるからさあ、君のクラスの河東真紗耶って子をもつと過激に虐めてくれないかな？ まあ今日は手始めに、廊下で待ち伏せして真紗耶を殴る、とか」

「は……？」

と叫ぶものの生徒の田は既に、私が手に持つた金に行っていた。これは簡単に落とせそつだとばかりに、私は調子よく要求を出し続ける。

「あとそれから、岩塚とかいう子のことも廻められたら廻めて頂戴。こつけは岩塚が自殺するほど惨たらしくね。私に依頼されたことを一言でもチクつたら、金は返してもうりうよ。こづして録音してあるんだ」

「ひ、は、はい」

私は生徒に、レコーディング機能つきの万年筆を出し、そこにこうした契約を交わした記録が克明に残っていることを見せつけた。

また、岩塚とは、さつき真紗耶に体当たりしていった女子であり、その子が身につけていた名札を、私はきちんと見ていたのである。

今思えば、岩塚も真紗耶迫害に参加する側の者だったんだろうけど、そのときの私には、岩塚が真紗耶に気があるとしか思えなかつた。そのくらい、この時期の私は気が触れていたのだろう。

そして、その結果はこうだ。帰り道で落ち合ひ際、真紗耶が私に、「おしほー、あいつが廊下で殴りかかってきた！」と叫ぶ。

真紗耶に殴りかかったのは無論、私が金品を手渡した生徒である。そして私が、真紗耶を女神のように抱き締めるという寸法。

「真紗耶、可哀想にね。私だけは君の味方よ。こぞとなつたら私が、君を虐めてる奴を全員ぬつ殺してやるからっ！」

「うううつ！ おしほーっ！！」

真紗耶ってこんなに私に甘えるタイプの子供だったかしら……一抹の不審を感じつつも、こじて私と真紗耶はいよいよ一心同体と化していくのである。

「志穂、貴女、悪女ね^{わる}」

巫彩が私から離れ、蔑みとも卑れともつかぬ異様な目を向けてくるけれど、私はそれに構わず言葉を続ける。

「そして次の日も、また次の日も、岩塚は登校のとき真紗耶に体当たりして行つて 私は真紗耶への虐め依頼と同じくらい、岩塚への虐め依頼も徹底していった。当然ぬかりなく、真紗耶のほうへの虐めは『陰湿に、かつ真紗耶が自殺しない程度に』、そして岩塚への虐めのほうは『岩塚を自殺に追い込むほど凄惨に』 つてお願いしたのよ」

「でも、よく生徒たちが貴女の言つことを素直に聞いたわね。いかに金品に目が眩んだとはいえ」

「元々、真紗耶を村八分にして楽しんでた生徒たちだつたつてこともあるし。それに、この時代は学校つてものが、サバイバルゲーム化し始めてた時代でや、みんながみんな、自分の地位が転落しないかつてビクビクして生きてたよ。けど、金さえあれば、大抵の問題には太刀打ち出来るでしょ？ 流行りの服やゲームだつて買えるし。私はそういう子供の心理を利用して頂いたのよ。えつへん」

得意気に腕を組む私を、もはや薄笑いすら浮かべて見つめる巫彩。
「なるほどね。それで、一番気になるのは、その『恋愛指南書の切れ端』なんだけど」

「そうだ。あれは今でも不思議でならない。よくもまあ、春女苑の隣に。しかも文鎮代わりの石まで置かれて。

「あれは私も本当に不思議。あの場所にあの本の切れ端が落ちてなかつたら、また違つた未来が私には待つてたのかもしけないけど」「切れ端が、春女苑の隣に落ちてた……それも、重要だった気がする」

「かもね。あんな状況下で春女苑を見て、楽しかった頃を想い出し

て泣き叫んでさ、それで、その隣にあんな切れ端が落ちてりや、ね

え、余計に切れ端に書かれてることに洗脳されりやつよ

「うーん。で、結果的にはどうなったの?」

「結果的には、か……」

【Suzhou - S viewpoint】 開奏2（後書き）

「憑女」と書いて「わる」と読む。
懐かしいなあ。

【Recollection of Oshino】造花（前書き）

この物語最大のキーワード「造花」を冠した章の「造花」を冠したpartです。

内面的には特に重要な部分ですね。

【Recollection of Oshino】造花

私が真紗耶を虐めさせ、傷ついた真紗耶を私が慰める そんな日々が数週間続いた。そんなある日の下校時のこと、意外にも真紗耶が傷ついていない様子で私との合流場所に現れた。

「おしほ、うちのクラスの岩塚って子が自殺未遂した。先頭きつて私を虐げてた奴」

私は鈍器で頭を殴られたような気分だった。

「ちょっと！ なにそれ！ 岩塚って、真紗耶に氣があるんじゃなかつたのっー？」

「まさか。あいつほど私を嫌つてた奴はいない」

その事実に一瞬だけ呆然とした私だけれど、すぐに明るい笑顔を取り戻した。

「……まあ、どうみち、不幸になつてくれて良かつたね。めでたしめでたしだ。岩塚、虐められてたんでしょう？ バチが当たつたのよイイ氣味だわ」

「おしほ、どうして岩塚が虐められるようになつたこと、知つてるので？」

やばい！

「え、あ、あー、だつてほら、自殺するほど生徒が苦しむことっていつたら、虐めくらいしかないじゃない？ は、はは。ねえ、そんなことより真紗耶、大丈夫なの？」

「…………

真紗耶の顔色は毒を飲まされたかのように青紫色に染まり、少し前までは瘦せても太つてもいなかつた筈のその体は、拒食症患者の如き惨めさを放っていた。

真紗耶と私は強く強く結びついた。けれども、これにて万事めでたしなつたか否か……その答えは否である。

万が一、私よりも更に真紗耶を守りつゝする奴が現れでもしたら、私の株は一気に落ちてしまうわけで。さて、どうするか……？

……実は、私が拾つた『恋愛指南書の切れ端』には続きがあつたのである。

では最後に、相手を一生、完全に我が者にする、その方法をお教えしよう。

それは、社会から完全に疎外され責め苛まれた相手に、
「もはや、現世にて自分を人間扱いしてくれる人間はあなたしか居ない」

そう思わせることである。

相手が社会に適応しているのなら、

自らの手で相手を社会から疎外されるように仕組むのも一つの方法である。

なぜならば、愛の妨げになつるもの、それは、
「自分を受け入れてくれる場所は他にもあるだろ？
とこう甘い希望だからである。

むむ、真紗耶を完全に疎外させる方法……もつ策士と化した私は実に簡単なことだつた。

「そろそろ、いいかな？」

「うん……？　どうしたの……おしほ……？」

そう弱々しく尋ねる真紗耶。そう、これは私の野望のためだけでなく、真紗耶の命の問題もあるのだ。

それは即ち、真紗耶がこんな状態になつていて、「それを、
に話す」ということである。

あくる日、私は学校をサボり、真紗耶の家へ向かつた。

「禱里さん！　お志穂どーす！」

仰々しき門の前で叫ぶと、慌てたように禱里さんが駆けて来、門

を開けた。

この命を吹き込まれた人形のような人となり、近くで見るとやっぱり少し不気味だ。

「志穂ちゃん、どうしたのこんな時間に！？」

「禱里さんに話があるんです」

「そうでしょうね。だからわざわざ学校をサボつて真紗耶の居ない時間に……まあ、お上がりなさい」

「はい……」

剛毅・勇壮・屈強を絵に描いたような私（なに醒めた日で見てるのよ巫彩？）だけれど、なぜかこの日本屋敷の厳かな雰囲気と、禱里さんの怪美な佇まいの前に於いては、すっかり萎縮してしまって素直な少女になってしまつ。

けれども、今日はそもそも言つていられない。莊重な板張りの台所に案内され、お茶を出された私は早速話を切り出すが……

「禱里さん、ここだけの話なんですけど……真紗耶君は、学校で村八分にされて、」

と言いかけたところで禱里さんが、立つたまま涼しい顔で意外なことを言つてくるのだった。

「ええ。もう私も我慢の限界だわ。そもそも真紗耶はね、『平成の学校』つていうものと関わらせてはいけない子だつたの。小学校の校長はね、もう頭の固い人で手を焼いたけれど、今度の校長はそこそこ話の出来る人。もう、校長との交渉はついているの」

「じゃあ……」私の目がギラリと閃光を放つ。

「ええ。もう明日からは、真紗耶はあの学校へは行かせないわ。といふわけで志穂ちゃん、これからも真紗耶をよろしく」「はいっ！」

私は心中でガツッポーズ。真紗耶が不登校になるのが確実なら、後はもう簡単だ。

あくる土曜日の放課後、私は学校が終わると早速、行きつけの柄

の悪い八百屋のオバサンと交渉しに行つた。

「オバサーン、この人参ちょうだいな」

私が未成りっぱい人参を指差すと、豚を潰して黒い毛を生やした
ような汚らしい顔をしたオバサンが現れる。

「あ、志穂ちゃんんじゃないの？ 久しぶりだねえ。今日は一人かね
？ あの変ちくりんなガキとは別れたんだね。良かった良かつた」
こいつは簡単に利用できそうだ。と思つた。そう、このオバサン
は真紗耶のことを嫌悪している。即ち、真紗耶を村八分にしてた学
校の生徒と精神年齢が同じということだ。

「今日はね、オバサンに頼みがあつて来たの」

「なんだね？」

「実は真紗耶がね

」

そして日曜日、私は真紗耶と散歩をしていた。

「はあー、こんな明るい気分で散歩したのは久しぶりねー！」

真紗耶も一応、なにから解き放たれた顔はしているけれど、常
に私のことを心配しているのが分かる。

「おしほ……、おしほは大丈夫なの？ 変な噂、今はどうなつてる
の？」

「ああ、私ね、明日から隣の学校に転校するから。ほら、あんたは
学校そのものがダメだつだけど、私の場合はさ、あの噂だけが地獄
の原因だつたんだから」

「そつか……」

と、そこで

私たちは、八百屋の前を通りかかる。
私は、心の底でほくそ笑む。

オバサンは、真紗耶を睨めつける。

「こら！ その不登校児！ 学校へも行かないで！ それで人間
まともに育てるとでも思つてんのか！？ 志穂ちゃんを守るために
も！ 明日からちゃんと学校行け！！ お前みたいな人間が日本を

ダメにするんだ!!」「

「…………」

真紗耶は確かに、『相合傘事件』の際の私のように足をガタガタ震わせてはいたけれど、つい数日前までは学校で似たような目にずっと遭っていたためか、それほど特別な衝撃に見舞われた顔はしておらず……それが余計に痛々しかった。

「真紗耶、真紗耶、あそこに行こつ。ほら、私たちが出逢ったあの林」私の甘い声に、

「おしほ……」少し声を震わす真紗耶。

私は真紗耶の手を強く強く握り締めた。

「死んでも私の手を離すな。いいね?」

「うんっ……」

懐かしい懐かしい林の中。思えばそう、この林に入るのは、私たちが出逢ったとき以来のこと。

私と真紗耶は、木々の隙間に挟まって、強く抱き締め合っていた。

「ううう、おしほ……」「

ずっと泣き止まない真紗耶の頭を白々しく撫で続ける私。

「真紗耶……我だけは真紗耶の味方だから。世界中の人間が真紗耶の敵に回って、真紗耶の居る世界がなくなつたら、この柴門志穂が真紗耶の世界になつてあげる。君は幸せ者なのよ? こんな美少女に味方になつてもらえて」

「私も……そう思う」

「ふふふふ。分かればよろし」

かくして真紗耶は、完全に我だけの者になつたのである。

【Recollection of Oshinō】造花(後書き)

御折しまくつてますねえ

「なんだか、造花みたいな愛ね」

またまたまた、巫彩が鋭い御指摘。《造花のよくな愛》……この前、私が感じていたのと同じことを言ひている。

「てひつ、言われちゃつた」

「花の美しい部分を人工的に増幅して、それを売り物にする造花。そして……真紗耶にとつて、社会を《絶対悪》、自らを《唯一の光》としていることで、真紗耶からの愛情をより強固なものにした貴女」再び呆れとも感心ともつかぬ謎の表情をする巫彩と、少し顔を歪めて誤魔化し笑いをする私。

「あー、けど私のせいじゃないのよ。全ては、あの《恋愛指南書の切れ端》のせい」

「ああ、あれね……。ねえ、凄い奇跡だと思わない？ 貴女に影響を与える本の、特に重要なページが、貴女と真紗耶の想い出の花である春女苑の横に落ちてるなんて」

何度も思つけれど、これは本当に運命の悪戯としか解釈できない。私は身震いした。

「ああ恐ろしい恐ろしい。私は、科学で解明できないことは信じない性質^{たち}だけど、あれはもう本当、こうやって思い出しただけでも寒気がする」

「そうね。私も怖くなってきた。で……真紗耶は学校とは縁を切つた。貴女も転校して愚かな噂と縁を切つた。その後はどうなつたの？」

「ひつして真紗耶を我が物にした私は、自由奔放に恋を楽しむようになつていつた」

「どうして！？」

「また巫彩の声に火炎が帶びると、私も少し感情的になつてきた。障害者の彼との噂を消すために付き合つた彼との恋……その失恋

の痛手を、どうしても埋めることができなかつた！」

病的な私の振る舞いに巫彩は何かを感じたようで、表情が少し和らぎだ。

「確かに……小学校四年生で猥褻行為をされて、しかも、相手が障害者だつてことで誰も助けてくれなくて。更に変な噂まで立てられて、噂を否定すると『障害者差別だ』の一言で弾かれる。そんな状況に立たされたら、誰だつて、『性的に狂つてしまつ』かもしけない」

さすがに巫彩の中立的意見には懐の深さを感じる。『ううう子が、私のクラスに一人でも居てくれたら……まあ、考えても仕方のないことを考えるのはよそう。虚しくなるだけだ』

「でしょ？」

「でも、だつたら、あんな卑怯な手を使つてまで真紗耶さんを我が者にしなくたつて、とつかえひつかえに男を手玉にとつて噂をこしらえるとか、それか、堂々と真紗耶と噂になつてしまつか」

「じゃあ訊くけど、巫彩、女の貴女は真紗耶を恋愛対象として見れる？」

「…………」

俯いてしまう巫彩に構わず、私は淡々と告白を続ける。

「『高校時代のある出来事』をきつかけに真紗耶が完全な恋愛対象になるまでは、私も普通の女同様、『完全な男』しか愛せなかつたのよ。でも、最初の彼に捨てられて、しかも、彼に捨てられたのはあの障害者の彼とのことが原因だなんて噂が立つて……どうかしてた、あの頃の私は」

すると突然いきり立つ巫彩。

「あー！　じゃあやつぱり真紗耶はさつきあたしが言つたとおり『キープ君』だつたの！？」

私は力なく照れ笑いをした。

「そーなのよ。あまりに図星すぎて、ついつい過剰反応しちやつたけどね。それから、中学一年の残り、そして中学三年、つて、私は

はとつかえひつかえに男子生徒との噂を学校に流すことと、あの凹まわしい過去を忘れようとした

「色情狂……」

「そう。まさにそれ。でも、どの男も私には相応しくなくてね。私のちょっととしたワガママに腹を立てて、私から去つていいくへタレ男が殆どだったわ」

遠い目の私を、巫彩は少し好戦的に見つめる。

「でも真紗耶というキープ君が居るから、安心して自由奔放に恋を楽しめたわけね？」

「そーーー。もう好き勝手やっちゃった。でも私はね、タダじゃあ失恋はしないよ」

さつき巫彩の義母に言つた タダじゃあブタ箱には入らないよ を踏襲した私。

巫彩はそれが面白かったらしく、感じよく鼻で笑つた。

「クス……そりなの？ どんなふうに？」

「私から去つた男への中傷を噂として流すのよ。彼らの実名で、『各々の彼がキヤラ的にやりそなこと』をFAXで学校に送りつけたりね」

そう。当時はパソコン通信（古い）の時代。ネットなんて一般人はほとんど利用していなくって、当然、《学校裏サイト》なんてものも存在しなかつた。存在していたなら、私は当然利用したんだろうけれど。

得意氣な私に巫彩は、今度はハッキリとした呆れの感情を露にする。

「はあ……火のない所にも煙が立つちやうのが、学校つて場所だものね」

学生たちが噂というものを過信してしまつ理由……それを考察したら一冊の本が出来上がつてしまつので、ここでは考えないようにしておこう。

「そうよ。その結果あらぬ噂が立てさ……一番目の彼は《万引き

犯》、三番目のは《SMクラブ通い》、四番目のは《実はホモ》なんてレッテルを貼られて村八分になつた。もちろん全部、私が捏造した真っ赤な嘘だけね

「楽しそうね」

すっかり友達気分になつた巫彩に、そんな無理解なことを言われた私は非常に悔しくなり、どん、と立ち上がつた。

「いいえ！ あれは復讐よ！ 噂つてもに散々引っ搔き回された私の、噂に容易く左右される学校に対する復讐だつたのよ！ そのくらいしたつてバチ当たらんでしょうが！」

「志穂、じめん……」

巫彩は素直に謝つたけれど、私の炎は消えなかつた。

「それなのにな！ バチが当たつちゃうのよ私に！ しかも、しかも、なんにも悪いことしてない真紗耶にまで！」

「どういうこと……？」

哀しい田で私を見上げる巫彩から一田田を逸らして、少し溶けかかつた氷の入つたコップを持つて冷蔵庫へ向かい、あの美味しいお茶を自分でコップに注ぐ。

そして再び巫彩と向かい合つてテーブルに座り、それを一思いに飲みほすと、私は話を再開した。

「あれは、私が転校してしばらく経つた夏休みのこと…………」

【Recollection of Oshino】愛の密林

私と真紗耶は、あの日（真紗耶が私の依頼を受けたオバサンに罵倒され、それを私が慰めた日）以来、初めて出逢つたあの林の中で会つようになつていった。

「真紗耶～！　どこに居んの～！？」

待ち合わせの時間になつても真紗耶は林に訪れないけれど、不意と立ち止まつてみると、ぴちや、ぴちやぴちや、と、水の音が聞こえる。さては……

私は林の中に存在する、小さな池へと赴いた。この林は面積的にはそんなに大規模なものではないけれど、本当に人工物が皆無であり、本当に私と真紗耶だけの場所という気がしていたものだ。

案の定、真紗耶は池で孤独に水遊びをしていた。そして私に気づくと申し訳なさそうに、左手で前髪を拭い、右手で半透明なキャミワンピのスカートをつかみながら、やや不器用に池から上がって来た。

「おしほ、ごめん。水浴びしてた」

「真紗耶……」

私は死にたくなつた……透明な服が水に濡れて真っ白な肌に張り付き、真紗耶のなだらかな体のラインを浮き彫りにする、その天国的な妖しさに。

思えばこの時期の真紗耶が最美であつたと、私は今でもそう感じてならない。そりや、告恋痴真紗耶を美しくないと言えば私は大ぼら吹きになるけれど、それはあくまでも女性的に美しいのであって……。

この時期の真紗耶の、男とも女ともつかない顔立ちや体形には、白く柔らかな肌が上手い具合にマッチであり、それが余計に魅力を増幅させていた。

学校という、人を良くも悪くも俗界の空氣に染めようとする場所と完全に縁を切れば、人はこんなにも透明になるのだろうか？

（ちなみに、真紗耶の髪型は引き続き《洋風な前髪+オカツバ》であつた。）

私は見惚れてボンヤリしてしまったが心を振り払つようと、無理に怒つた顔をする。

「もう！ 風邪ひいたらどうすんの！？ 全く暑がりなんだから！」

そう、まだ男と女の間を彷徨つっていた頃の真紗耶は、今の真逆で、本当に暑がりだった。

「大丈夫。おしほも入つて」

真紗耶は表情一つ変えず、左足以外は微動だにもせず足払い！

私は池ボチャである。

「がああーっ！ なにすんのよーこのドリガー！」

「面白い」

「きいいーつ！」

私はとつたに池から出ると真紗耶の首を腕で鷲掴みにし、頭から池に突き落としてやううとした。が！

ザッパーン！ 真紗耶による再びの足払いにより、今度は共倒れ！

「ドジだね。おしほ」

腰まで漬かつた真紗耶が、やつとの想いで水面から顔を出した私にボソと呟く。

「…………」

私は黙つたまま、前触れなしに手水鉄砲を真紗耶の顔に命中させた。

「うわ、なにするのやめて……」

水飛沫を浴びた顔で困った表情をするのが妙に艶めかしい。

「容赦せんよー！ はははははつ」

ビショビショになつてはしゃいだ私たちは、普段あまり体を動か

さない（特に真紗耶は）疲労から、地面にへタつてハアハア言つていた。

「ふう、おしほ、私、疲れた」

「じゃあ真紗耶、木のてっぺんで休も。気持ちいいよ
「うん……」

木登りなんて興味すらなかつた真紗耶だけれど、私がこうして先導するとスルスルと登つてくるのだつた。

というわけで私たちは高い高い木の上に登り、太い枝に腰掛けた。
述べることが何もない。

これが三昔前の時代だつたら、《木の上に登つた私と真紗耶はその絶景にひととき言葉を失つた。街、湖、山、それらが一枚の絵の如く一度に視界に入つて来、云々……》などと私は感じたのだろうけれど、ここから見渡すことが出来るのは、本当にコンクリの街や人工的な公園くらいなのである。

「ひやーあ！ 高い高い！ 巨人になった気分！ ねえねえ、こうやつて見てるとさ、ああやつて公園にグチャーつて集まつて騒いでる人間ども、ぎゅーつて、踏み潰したくならない！？」

「なる」

「でしょでしょーーー？」

十代前半にして既に、《気持ちいいねー》とか《奇麗な眺めー》

といった言葉を発することすら許されていない私たち。

それだけ、私たちは取り返しのつかぬ深い深い闇を心に抱えてしまつていたのである。

「ああ、なのに……」

「…………」

二人の沈黙は、火照つて濡れた体で感じる優しい風の快さのせい。確かに、この世は地獄よりも陰惨な場所なのかもしない。嗚呼、それでも時々、この世は美しいのである。そのまま何十分か、私た

ちは黙つて座つていた。

そうして少し優しい気分になつたのか、真紗耶が私のほうを向き、カクツと頭を下げた。こいついう動作は、母の禱里ゆずりだと思つ。

「おしほ、ありがと」

「どーしたのよ急に」

「私、うるさくて汚い普通の子供とだったら、こんなふうに遊べなかつたし……おしほが居なかつたら、私の人生、暗かつたと思う。だから、ありがとう」「

あまりにも純粹な感謝の意に、私も素直にならざるをえなかつた。「私こそ。ありがと。きつたないことだらけの小中学生活だつたけどさ、あんたが居たから、何とか無事に中三生活も残り半分よ。今彼は誠実な人だから、やつと落ち着けそうだし」

「そつか。それ、きっと、私を助け続けてくれたおしほへの」褒美だと思つ」「

「いいや、真紗耶のお陰よー。君が居ると思つから、私はこんな奔放に生きられるのよ」

「……なに褒め合つてるんだろ」

「ああ、ほんと。とこりでさ、」

「なに?」

「微妙」に、地面が近くなつてない?」

「氣のせい」

「そつかなー」

と、そこで木の下のほうから透明な声が響いた。

「おーい、アブナイですよ、お一人さん!」

声に誘われ、とつさに幹に移ると、私たちの乗つていた枝の根元には亀裂が入つていた! 危うく『天使羽根リュック鯛焼きダッフルコート少女』と同じことになるところだったのである。うぐう!

木から降りると、私は自らの心が得体の知れない哀しみに覆われ

ていくのを止めることが出来なかつた。

私たちに声をかけてくれた女の子　日本人とは思えぬような細い髪、疑うということを知らないような円らな瞳、そして全身から否応なしに漂い続ける不思議な悲しみの帳……それらが泣けてくるほど透明で儂げだつたものだから。

私は泣きそうになりながらも、ぺこっと頭を下げた。

「ありがとー。貴女が居なかつたら私たち、こんな煮え切らない状況の中で死んでたかも」

素直に感謝する私に対し、真紗耶はどこか不機嫌そうであり、「ここは、私と、おしほの国……」とボソリ。

「ちょっと真紗耶！」真紗耶を睨んだ後、とっさに女の子に視線を移し、申し訳ない顔をする私。「ごめんねー、コイツ、小学校で散々ゲテモノ扱いされて人間不信になつてんのよ」

「そう。おしほだけが味方」

おうつ、真紗耶は完全に私を信じ切つている。実は私が真紗耶を苦しめた悪を陰で操つていたとも知らずに……

すると女の子は、嫌な顔もせずに私たちに一步近づいて來た。

「ボクもね、今、にえきらないジヨウキヨウだし、ちょっとヒトが」

「わいいかも……」

「あ……まさか」

「おしほ……もしかして」

私と真紗耶は同じ予感を抱いたのか、顔を見合せた。そして私が女の子に接近し、

「ちょっと、ボク　つて何よ？　あなた、まさか……」

と導音を奏でると、女の子は握つた手を顔の前に寄せて、実にコケティッシュに　はにかみ笑い。

「えへへ、ボク、オトコノコ、なんだ……。おどろかせて、ゴメンなさい」

そういうえば声が普通の女よりかなり爽やかだ。

「ぎやーっ！ 似たようなのが一人も…」 //のたくる私と、

「…………！」一転、感慨深げな表情を見せる真紗耶。

「あ、ちょっと、今は夏休みだけど？」

私は彼女……じゃなくて、彼の着ている巨大なリボンの付いたセーラーワンピースに目をやつた。襟の濃紺とリボンの紫、それに薄水色の地が涼やかでとても素敵。

「あ、これ私服ですっ。いつしょに暮らしてるギリの妹が『兄さんには海が似合つ』って、言つてくれて。それで海っぽいカツコウがしたくて。ふふ、ボク……海に行きたいんです……。『ワイものがなんにもない、海のまんなかに。なんて、ね』」

彼が悲しげな微笑みを浮かべて湖水を見つめていると、真紗耶も彼に接近した。

「そつか。アナタ、名前は？」

真紗耶に問われると、彼は両手をスカートの前で組んでおさましあし……

「中里木泊です。よろしくね 木にシユクハクつて書くんですよー。えへへ、変わってるでしょ？」

と告げた。

それが私たちと木泊さんとの出逢いなのだった。真紗耶も深々と木泊さんに頭を下げた。

「実は私も、ホントは男」

「えーっ！」

「ねえ木泊さん、なにか、つらいことが……」

真紗耶は木泊さんを真つすぐに見つめながら、涙声になっていた。確かに木泊さんは見た者の心を哀しくさせる何かを抱えている。それは真紗耶も私も同じ気持ちだったようだ。

その仄暗い沈黙を破ろうと、私はジトーッと一人を交互に見つめた。

「『真紗耶』といい『木泊』といい、男でも女でも特に違和感のない名前で良かつたね、お二人さん。『源五郎』とか『嘉右衛門』とかいう名前だつたら、どうしたのさ……」

私のネタふりにより、一旦は次なる沈黙に包まれた三人。けれどもすぐに、穏やかな笑いが起き、私たちは自然と打ち解けていつたのだった。

【Recollection of Oshino】愛の密林（後書き）

志穂・真紗耶のじす黒さに対する木沢の純真さが、書いていてとても苦しいです……。

【Sヒューロー・ス ビューポイント】鰯茶漬（前書き）

そんな呪わしい話をやつておいて、突然サブタイが「鰯茶漬」これが離陸羅田クオリティ。

「へえ。意外」

ここでまたまた巫彩が口を挟んでくる。

しかししかし、その先は話したくないことだらけだったのと、私は胸を撫で下ろしてもいた。

「ふう……何が？」

「真紗耶が『ここは自分とおしほの国だから入ってくるな』みたいなことを言うなんて。あたし、貴女のほうがそういうことを言う人だと思つてたから」

「まあ、今と逆よね。どこで立場が逆転したんだか」

「まあ……それが……、木泊兄との出逢いだつたと……」

巫彩も義兄のことになると、その利発な顔を薄からぬセンチメンタリズムに染める。

「うん……。でも、木泊さんが酷い目に遭つたくだけは……つらすぎるつらすぎる、詳しく話せないよ私。木泊さん大変だつたの、

首田宗志教のせい……」

とつとう、話に出でしまつた……『首田宗志』の名が！ 巫彩は私の手を握つてくる。

「それでいいのよ志穂。そのぐだりは、私も聞きたくなかったからちょうど良かつた。その時点で既に、木泊兄さんは虐められていて、しかも家族の誰にも心を理解してもらえてなかつた！ その木泊兄さんが更に、首田宗志教によつて酷い目に遭つた話なんて、詳しくは聞きたくないつ……」

しばし、私の手を巫彩が握つている状態で私たちは硬直していた。私と真紗耶は、心の底に黒々としたものを持つてゐる人間だ。ゆえに、つらい過去の話であつても、深刻さが幾ばくか和らぐもの。しかししかし、木泊さんのような純粹な人ともなると、さすがに

語るほうも言葉に詰まつてしまつし、聞くほうもそれだけは聞きたくないという気持ちになつてしまふのだな。

「その沈黙を破つたのは私だつた。

「私も詳しく話したくないから、簡単に端折つて説明するけどある日、林に来た木泊さんがね、 真紗耶さん、志穂さん、これ、よんでもみて。ボクのかいたショウセツだよ つて……「うううつ！」ここだけでもう、涙が流れ出てしまつた。木泊さんの口調を真似たら、変に深く想い出してしまつて……

巫彩も私の手を握る力を強くする。

「志穂、いいのよ？ 話したくなれば、もう

そういわれると逆に、すんなりと話し出してしまつ私。

「それを知つたあの母親がさ、『不登校児が小説を書いたとなればセンセーショナルな話題を呼ぶザマス』って欲に目を眩ませて、自費出版にこぎつけたの」

「その小説が……ああっ！」

声を荒げる巫彩と、それに輪をかけたように激昂する私。テープルを叩いて立ち上がつた。

「そうとも畜生！ その小説が、木泊さんの自殺未遂の原因になつたのよ！ ねえ巫彩！ 首田宗志教の奴らが、大体どんな連中かは知つてるわよね！？」

「…………」

巫彩は私を見上げ、実に沈痛な面持ちでハッキリと頷いた。

それを確認すると、私は火のような勢いで悔しさをぶちまける。

「首田宗志教の奴ら！ 木泊さんの小説を叩きやがつたのよ！ いいえ、いいえ、正確には、『木泊さんが不登校の分際で小説を出版した』っていう、その事実を徹底的に批判した！」

「いやつ！ 聞きたくない！」

テーブルに伏す巫彩に構わず、私は大声で続けた。

「しかもしかも、ああつ、木泊さんの住所まで調べ上げて、家に石

を投げ込んだり悪戯電話までかける始末！　ねえ巫彩、この家にそういう痕跡は残つてない！？」

「残つてるわよ！　外の壁に！　落書きの跡が所々ねッ！」

「壁に落書きまでしゃがったのね……奴ら！　ああ憎らしげ！　ねえ巫彩、木泊さんが首田宗志教にどんな中傷を受けたか、それは首田宗志教ホームページにログが残つているから一度見てみたらどう！？」

「見たくないっ！　木泊兄さんの妹として、そんなものだけは死んでも見たくないわあっ！　どうせ『小説という文化を穢すな』とか、『小説を書く』ことを現実逃避の手段にするな』とか、『学歴のある者しか小説を書く資格はない』とか、そういうことじょ！？」

さすがの巫彩もこの事実を前にしては大きく取り乱したのだった。

「ああその通りよ！　よく分かるわねえ！」

「ああいつ層の思考回路なんてお見通しだわよッ！」

自分の義両親に、紗那つていう子の両親……　ああいつ層　を何度も見てきた巫彩にとっては、首田宗志教の書いたことが手に取るように分かるんでしょう。

あたしね、日本社会のああいつ感じが嫌で嫌で仕方ないの！

橋の上で私に放つた彼女の言葉が、この胸をいよいよ重く深く締めつけてくる。

やがて、はたり、と、私は椅子に崩れ込む。

「……でもね巫彩、その時点では私、知らなかつたのよ、木泊さんが首田宗志教のせいでそんな目に遭つていたつていうことを、リアルタイムにはね」

「どうじうこと？」

「木泊さんは当然、私なんかよりずっと自分に近い魂を持つてゐる真紗耶のほうに、色んな相談をしてたし。まあ、それと同時に、私と真紗耶には色々な事件が起つたからね」

「どんな？」

私は少し戸惑つた後、やつぱり諦めたように首を横に振つた。

「そこから先は真紗耶に聞いて……」

そう呟いて振り切るように立ち上がつて巫彩から視線を逸らし、時計を確認する。なんと十一時半になつていた。そろそろ眠つたほうがいい時間。というか空腹感がハンパではない。

巫彩も色々あつて疲れたのか、びたーっとテーブルに伏している。

「あーあ、腹減つたわ……」

「そうよ……、巫彩、晩飯どうすんの？ けど、時間が時間がだけにあんまり重いものは食べられないわ」

「あたしだつて、貴女たちの過去を聞いた後でコツテリしたもんは食べたくないわよ」

巫彩は立ち上がり、冷蔵庫を開けると、「いいブツがあるわね」と私と真紗耶みたいなことを言い、調理を始めた。

何分かして、私と巫彩の前に置かれたのは、爽やかな青で縁取られた白い茶碗に盛られた、品の良い鯛茶漬け。
緑の葉っぱが飾られたりして、見た目にも癒されるようだつた。

「料理上手いのね」

口に運ぶと、侘び寂びに装われた出汁の味が口に広がる。

いいブツ すなわち鯛が生のまま、胡麻味噌和えにされて乗つているのも気が利いていると思った。

「義母の料理が化学調味料でんこ盛りで体に悪いから。知らず知らずのうちに自分でこしらえることを覚えちゃつたわよ」

「巫彩つていくつだっけ？」

「哀しきフォーティーンよ」

ぱとつ、と箸を落とす私。

「どうしたの？」

「い、いや……、なんかその言い方が！ 昔のオールディーズみたいで面白かつただけよ」

「『昔のオールディーズ』って、『真夜中のミッドナイト』と同じ

よつなダブリ言葉よ

「つっさいわねー。早く食べて寝るわよー。」

風田もトレイルも歯磨きも済ませ、リビングのソファででも寝ようかと思つていた私の袖を、巫彩がひしぐつかんできた。

「そんなお腹出した格好で寝たら、いくら春だつて体壊すわよ」
私は確かに、黒いミニタイトスカートとおへその上までのタンクトップの上に、灰色のジャケットを羽織つた格好。これがいつもの私服なわけで、あの校舎跡で「口寝しても風邪をひいたためしないのだけれど……」

「ははーん、巫彩さ、あんな話聞いた後で、……一人で寝たくなん
でしょ」

「ち、違つわよつー」

頬を赤らめてそっぽを向くところを見ると、やつぱり図星いらしく。
「はははは。話聞いて、それで私たちから離れてぐどこりか、近づ
いてくるなんて面白い子ね」

「つるさいわねえ」

「こいつわけ

私たちは巫彩のベッドで一人、眠ることにした。……こつだつて南国に生る柑橘果実の香りを漂わせる巫彩。こつして部屋に居るとそれが余計に強く感じられて、どうにもむせそうになる。

寝息を立てる巫彩の髪を撫でながら、私は小さな声で語りかけた

「ねえ巫彩……私……中絶したのよ……。生まれてりやうじよ、巫彩、あんたと同じ年……」

「…………」

しかし、これははどうにうシチュエーションなんだろ？
三十間近の女といえば、普通は〇〇か主婦だ。そんな女が 哀しきフォーティーンを抱いている。よほど仲の良い姉妹でもない限

り、こんなシチュエーションはないだろう。

翌朝。疲弊した表情で帰ってきた母に、「巫彩を見守つてくれて助かつたザマス」と頭を下されると、私は隣で母を出迎えた巫彩に、「巫彩ありがとう。何だか久しぶりに楽しかった」とだけ告げ、逃げるよう~~に~~巫彩の家を後にした。そう……ここに居続けたら、私の口から『あの過去』を話さなければならなくなるかも知れないから……。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】客観的な彼女

巫彩ありがとうございます。何だか久しぶりに楽しかった

その言葉を残して志穂が逃げるようになってしまった一時間後、あたしは土曜の学校でその久しぶりに意味をずっと考えていた。

つまり、真紗耶と居る時間というのは、志穂にとって楽しい時間ではないの？

それとも、真紗耶との楽しい時間は志穂にとって当たり前のことがすぎて、楽しいという実感が湧かないだけなのかしら？

ともあれ、過去噺の続きを真紗耶に聞いて欲しいと言つた志穂の言葉のため、あたしは放課後、真紗耶の元へ向かおうと思つた。

しかしよくよく考えてみると、Sweet Seasonへ向かうことは真紗耶の元へ向かうことにはならない。あたしは結局、真紗耶と志穂が毎日同じで会つてどんな時間割で撮影をしているのか、それを知らないから。

そういうえばあたしは、なぜあの一人があんなDVDを撮影する生活をせざるをえなくなつたのか、その辺りの詳しい事情もまだ知らない。

土曜日は正午下校。

眞子にはこれから出かけることを言わず、彼女を多岐川家に送り届けてからあたしは横浜へ向かう。

眞子に外出することを告げたら、

私に気を使わないでその足で行きなよ

と言つてくるだろうから。そんなことはしたくなかった。

だって、下校途中に紗那やその彼氏に会くわしでもしたら……と心配だから。

はあ……こつまでこんな異常事態が続くのかしら？

あたしは真紗耶に会えないかもと思いつつもSweet Seasonへ向かい、木泊兄さんの顔を見ようと思つた。あんな話を聞かされた後、『今は』幸せな木泊さんの顔がどうしても見たかったから。

以前にも増して、Sweet Seasonまで行き着く時間が短くなっている。思えば、PTAが家に来たあの水曜日からの三日間、たたみかけるかのように様々な出来事があたしに襲いかつた。

閑話休題。例の橋に着くと、紅茶色の長髪を持つ見知らぬ美少女が立つており、あたしに気づくと彼女はペコッと頭を下げてきた。

「巫彩ちゃん、おはよっ」声が異常に甘々しい。

「……どなた？」

「えつと……はじめまして。香上理奈子です」かがみ・りな

「あの、全く聞いたことのない名前なんですねけど。ついにとかどうしてあたしを知っているんです？」

「ちょっと来て」

色々あって感覚が麻痺しているあたし。もづくでもなれ、といつ氣分で理奈子とやらについて行こうとするが、なんと理奈子はSweet Seasonに入つてゆく。

営業日にここに入るのは初めてだつたけれど、やはり貸切のときは別の場所のよう。

外国人で賑わうワインカラーのバーに、日本の酒場特有の嫌なムードは皆無で、軽い逃避気分すら味わえる。

理奈子はカウンターで客の相手をする母萌さん（英語ペラペラ）に軽く頭を下げるが、私がトイレかと思っていたドアを開けた。そこには地下へ下りる階段……

階段を下りると、そこは見事なワイナリーだった。

古い木の匂いが立ち込める、ちょっとびり埃っぽい空気のなか、図書館の」とく立ち並ぶ棚に大切そうに入っているワインを見ていると、法律違反しても飲みたくなつてくれる。

さて理奈子は、ワイナリーの隅に申し訳程度に設置された水道で顔を洗うと、なにやらメイクを始めた。

人を誘つておいて何のまじないか、と思つていたら、振り返つたその人は告五飼の顔だった。

「あら真紗耶さんだつたの？」

もう色んなことがありすぎて、何を見せられても冷静なあたしが居る。

真紗耶さんは申し訳なさそうに照れ笑いをした。

「……そなんですか（、）、（） 水曜日はこの顔で居て、『追っ手』に絡まれて、貴女に迷惑をおかけしましたからね」

なるほど、と思った。

「志穂が氣を回して真紗耶さんとあたしを会わそうとしてくれたわけね？……でも、大丈夫なの？ 撮影、休んだりして」

「ええ。大金が入ったから数日はサボつても平氣、とのことでした」あたしがあげたあの金か。

「そう。それで……」

「柴門さんの話の続き、ですね？」

真紗耶さんが的確に言いつづると、あたしは何だか萎縮してしまう。

「そのことなんだけど　ここまでアナタたちの過去を聞いておいて、今更こんなことを言つのもなんだけど、本当に、あたしなんかに話しかやつていいの？」

「ここ数年間とこつもの、ず一つとこんな同道巡りをしている私たち　柴門さんは、巫彩さんならもしかしたら、私たち一人のことを『客観的に評価』してくれるのでは……そんな期待を抱いて、それで、貴女に過去を話すことを決めたのではないでしょうか？」

「客観的評価が欲しいなら、あたしなんかより……」

消極的に俯くあたしの前に、真紗耶さんは切なそうに駆けて来た。
「いいえ。いいえ。貴女でなければ《客観的には》評価が出来ない
んです逆に。まあ一般的な社会人からしたら、私たちなんて謎の物
体にしか見えないでしょうし、逆に私たちとそつくりな立場の人間
だと、私たちに共感してしまって正当な評価をしてくれない。その
点、貴女なら、私たちの心を理解できるだけの闇を抱えておられる
反面、社会で強く生きてゆける力も持つておられる。だから……」

「そう……」

「では、座りましようか」

私たちは、これもまた申し訳程度にポツリポツリと置かれた小さな椅子に腰掛ける。

「それで真紗耶さん、志穂は昨日、『木泊さんが首田宗志教によつ
て酷い目に遭つていることをリアルタイムには知らなかつた』と告
げた後、その続きは真紗耶さんに聞けつて……」

すると真紗耶さん、深く深く腰を曲げて俯いてしまつた。

「はあー……それは仕方のないことですね。とてもではあります
が、柴門さん自身の口から告げられるような内容ではございません
ので」

「何があつたわけ……？」

「巫彩さん、何を聞いても、柴門さんを嫌わないで差し上げて下さ
いね」

「もちろんよ」

あたしの確認をとると、真紗耶さんはよつやく話を始めた……

【M i s a e - s v i e w p o i n t】客観的な彼女（後書き）

一見無駄に見える「真紗耶の理奈子への変化」ですが、このネタは実は終盤で重要になつてくるんです。

【Recollection of Masaya】 柴門志穂…その狂氣

その頃の私は、自分だけは特に凄まじい不幸を抱えているわけではありませんでしたが、二人の重要人物である柴門さんと木泊さんの問題に頭を痛めておりました。

ある日、いつもの林へ赴くと、私は実に奇妙奇天烈な光景を目にしてしまったのです。

柴門さんが 鼠の屍骸を食しておられる。

「おしほ、何してるの……？」

「ングング、ん、真紗耶、あんた動物愛護団体？ モグモグ、食べりやあ罪にはならんでしょう？ ムシャムシャ……」

柴門さんは鼠の血によつて、呪われたような形相になつていました。

「おしほ、最近おかしい」

率直に指摘すると、柴門さんは残つた尻尾を麺のよつにすすります。

「ズルズル、チュルッ、ねえ真紗耶……ゴクッ、あの男、他に女が居るみたいなのよ」

「だつておしほ、今度の彼は誠実そうだつて……」

すると柴門さんの表情が、笑いながら涙を流すといつ、非常に得体の知れぬものに……

「ふつ、ふあーっ！ ははつはつはつはあーっ！」

「おしほ……？」

「ぎいーっ！ 次の男、探してやる！」

柴門さんは今度はあの池に浮かぶ蓮の葉に乗つたカエルを見て目を光らせ、どちらがカエルか判らないような早業でカエルを仕留め、それも丸呑みして見せました。

そう、柴門さんにとつて男探しとは、このよつに血眼になつて獲物を探すのと同感覚だったのでしょうか。

やがて満腹すると、柴門さんは湖水で顔を洗い、無機的かつ無表情な顔で私に向きました。

「真紗耶、お腹が痛いの。家まで連れてつて

「おしほ……？」

「お腹が痛いの。家まで連れてつて

「変なものを食べるから。病院に……」

「私は病気なんかじゃないつ！ こんな家の寝れば治るー。お腹が痛いの。家まで連れてつて」

「おしほ……」

「お腹が痛いの。家まで連れてつて」

「店には出られない？ もづくウチュー力の夏休みは昨日から終つてるけど？」

「お腹が痛いの。家まで連れてつて」

「おしほ、蓉子さんの気持ちも少しは……」

「お腹が痛いの。家まで連れてつて」

「分かった」

クウチュー力なわち柴門家に着くと、柴門さんは一階へと急いでバタン、とドアを閉め切つてしましました。

ちなみに私は蓉子さんに合鍵を貰つていたため、柴門家への出入りは自由だったのです。

「おしほ。今おしほが休んだら、蓉子さん、大変なことになる

「別にいいでしょ？ そんなことより真紗耶、私の気持ちを考えてよー！」

柴門さんの尖った声がドアを突き破つて私の心に刺さります。

実は、柴門さんは今の『誠実そうな彼』と付き合つてからは非常に精神状態が良く、クウチュー力で雇われていたバイトを強引に辞めさせて自らが働くようになったのです。

「ほら、私が働けば人件費かからないでしょ などと書いて。

やがて昼休みを迎えた薔子さんが上つてきました。

「志穂！ お願いだから、代わりの人が見つかるまではお店に出て頂戴！ お母さん、疲労で倒れちゃうわよ！」

すると部屋の中から、今度は陰気な声……

「あつそ。でもさあ、大体、実の娘をタダ働きさせるなんて、お母さんどうかしてよ。とにかく私は店に出る氣も学校に行く氣も、もうないから」

「なに言つてるのよ志穂！？ 貴女が働きたいって言つから私、バイトの人に無理を言つて辞めて頂いたのよ？ 良く働いてくれるいい人だつたのに！」

当然、薔子さんの想いなど柴門さんは届きません。

「あー、そんなこと言つたつけて？ 記憶はない！ 私、お腹が痛いの。そんな私に下らない話しそこないでよ！ 痛みが酷くなる！」

「お薬は飲んだの？」

薔子さんが試すよつて呟くと、柴門さんはしばしの沈黙の後、

「…………飲んだ！」と告げました。

薔子さんは困り顔で私を見つめます。

「仮病ね。志穂の部屋には薬も水もないもの。志穂の色情狂にも困つたものだわ。やっぱり一度お医者さんに……」

困り果てる薔子さんでしたが、それを言われてはさすがの私も薔子さんを睨まざるをえません。

「薔子さんつ！ おしほは病気じゃないつ！ おしほがあんなふうになつたの、みんな、おしほが痴漢行為に遭つても『障害者差別をする柴門が悪い』の一点張りだつた学校の奴らのせい！ おしほだつて好きであの障害者の子を避けてたわけじゃないのに……」

「いいえ。学校のせいじゃないわ。幼い志穂の苦しみに気がつけなかつた私が一番いけないのよ……」

薔子さんは廊下に崩れ込んでしまいました。

そして志穂さんの部屋からは、カチカチとワープロを打つ音。恐らく学校へFAXで送る文面を書いているのでしょうか。

今度は『誠実そうな彼』の誹謗中傷に違いありません。そこまでならば、いつもの柴門さんのパターンです。

ところがその直後、バシッ、バギッ、ドンッ、ど、まるでロボが行なわれているかのような凄まじい打撃音も響いたのです。まさか自傷行為……！？

「志穂！ 何してるので……！？」もうズタズタといった感じの素振りでドアを叩く薔子さんと、

「おしほ！ 馬鹿なこと考えないで！」その横で必死に声をかける私。

しかし、その音はしばらくすると止み、やがてカシャリ、カシャリ、と、写真を撮影するような音が……

その数日後、クウチューカへ向かつた私は、一瞬、薔子さんが借金をしていて、その取立てが来ているのかと思いました。

それは、店から響いてくる図太い男性の罵声。

「おい！ 娘を出せって何回言つたら解るんだ！？ この額を見ろ！ 学校で昼寝してたら、クラスメイトに油性ペンで書かれたんだよ……柴門志穂のせいだ俺は酷い目に遭つてんだ！」

思わず店に入ると、

「真紗耶ちゃん！ 入つて来ちゃダメ！」薔子さんが叫びました。店内は植木や椅子が滅茶苦茶に倒されており……お客さんたちは怯えきり、店から出ることすら出来ないようです。

男が振り向くと、その額には、なんと『DV男』の三文字。これで私は全ての事情を理解しました。

すなわちこれは柴門さんが、学校に『彼からDVを受けていた』と、ありもしないことを、『体に傷を負った自らの写真』を添えてFAXしたがゆえのイジメなのでしょう。

私はとつさに店の入口付近に置かれていたメガホンを手に取り、外へ出ました。

「レストラン・クウチヨーカにて、営業妨害が行なわれております！」

その言葉を何度も繰り返すと、私の声を聞いた人々が店の前に集結。じつい体系をしたオジサンたちが店に押し入り、男を取り押さえ、警察へ引つ張つて行きました。客たちは安堵の溜息を漏らします。

「薔子さん、大丈夫？」

店の中央で崩れ込む薔子さんに駆け寄ると、薔子さんは私に抱きついてきました。

「怖かつたあつ！ ありがとー 真紗耶ちゃん素敵っ」

「ワー！ ヒューヒュー！」店の人からは大拍手。

その騒ぎの間じゅう、柴門さんは結局、部屋に籠つたまま全く顔を出さなかつたのでした。

閉店後、私と薔子さんは暗い気分でテーブルを囲んでいました。薔子さんの淹れる紅茶の湯気が、私たちの暗い気分を少し中和しています。

「薔子さん、このままじゃおしほが……」

「でも、どうすればいいのか……」

「おしほ、常に付き合つてる人が居ないとダメみたい。薔子さん、薔子さんの昔の知り合いの子供に、おしほと合いそうな男の人、居ない？」

「……分かつた。当たつてみるわ」

「そうしてくれると助かる」

私の献身ぶりに、紅茶を飲もつとした手を止める薔子さん。

「ねえ真紗耶ちゃん、あなた、どうして志穂のためにそこまでしてくれるので？」

「私がおしほに、造花をこしらえさせた……」

意味深な私の言葉に薔子さんは、

「え？」と聞き返してきますが、

「い、いや、なんでもない」私はとつさに誤魔化したのでした。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】造花の愛、…その真相

「ま、真紗耶さんっ！ 造花 つて、あつ、アナタ、まさか…！？ 志穂が道端で見つけた『春女苑』の隣にあつた恋愛指南書の切れ端》って……」

最後まで続けて聞くつもりが、ついつい口を挟んでしまつた。あたしは先日、小学生の志穂が真紗耶さんにしたことを『造花のよつな愛』だつて言つた。

そして今、真紗耶さんの口から 造花 といつ言葉…… 真紗耶さんは本当に本当にゆつくりと、噛み締めるよつに頭を下げた。

「いかにも。あの指南書の切れ端は 」この私が仕組んだものです。古びた本の、空白のページを切り取つて、そこに私自身が書いた文章を印刷する。そうしたら、本物の本の切れ端のように見えるものなんですね」

あたしは衝撃を受けると同時に、実に不可解でもあつた。

「だつて真紗耶さん！ そんなことをしてアナタに何のメリットがあるつていうのよー？」

恐らくこれは、真紗耶さんの最も深い部分を抉る質問だつたんでしょう。

真紗耶さんはしばし沈黙した後、鉄格子のよつに重い口をゆつくりと開いた。

「造花でもいいから、この田で見てみたかったのです……」この私を守り慰める美少女というものを

そういうことだったのね……。あたしは哀しくて哀しくてたまらなかつた。

「そんなことをしてまで… 柴門志穂を自分の望む少女に仕立て上げたかったの！？」

半ば取り乱すあたしの問いに、今度は涼しげに頷く真紗耶さん。

「はい。私、耐えられなかつたんです、私を村八分にした生徒たちの、鼻糞がこびりついた顔や、乱暴に扱つて産廃みたいにしたランセルが。だからあの頃の私は、造花でもいいから、そいつらは間逆の存在、即ち、『私を守る美しい女の子』を、この目で見てみたかつたのです。事実、柴門さんは面白いほど私の思い通りに動いてくれた……」

もうこの話は続けたくない。

なんていう愚かさ！

なんていう哀れさ！

真紗耶さんのこの、サスペンスドラマの犯人が悲しい動機を告白

するような口調が耐えられなかつた。

「真紗耶さん！ 続きを！ 過去噺の続きを聞かせて！」

あたしは涙を堪えながらそう叫んだ。

「はい……」

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 造花の愛...その真相（後書き）

真紗耶の求めた造花の愛を、病的なものと見るか、みじめなものと見るか、それとも哀れなものと見るか、それは読者の方の自由です。ちなみに私は（自分で言つのも変ですが）、病的でみじめでありながらも、とてもいじらしくと、書いていて感じました。

【Recollection of Masaya】哀しき慕情

薔子さんは、店を休んでも柴門さんの彼氏を《あれでもないこれでもない》と探し出し、その結果……

「いらっしゃいませーつー クウチューーかへようじやー……あ、なんだ真紗耶か」

柴門さんはこのように店に出来るようになり、学校へも戻りました。

「なんだとはなんだ」

「へへへ、失礼失礼」

「おしほ、元気になつてくれて良かつた」

すると柴門さんは実に現金に照れ笑い。

「私つてほら、寂しがり屋だから、常に付き合つてる男が居なきゃ嫌なのよ」

そんな柴門さんを見て、私と薔子さんは笑顔を見合わせました。

平和が戻ったかのように思えましたが、私は木泊さんのことが気がかりで仕方がなかつたのです。

あの林はもはや、私と木泊さんの場所になつておりました。

私は先日、柴門さんと気晴らしに自然に触れに行きましたが、あの林へ行かず、わざわざ房総へ行つたのです。それは木泊さんの悲しい出来事を思い出したくなかったからで……。

それにも木泊さん……私などと話しても大して幸せではないと思うのですが、追いつめられた木泊さんにとっては、私の時間が唯一の救いだつたようで。

一人、水遊びをする木泊さんに、私はその日も優しく声をかけました。

「コハク、おはよう」

私に気づくと、木泊さんは笑ってくれます。笑ってはくれるのですが、その優げな笑みが、私の心を哀しくするのです。

「真紗耶さん！ おはよづ。今日も来ててくれたんだね」

私は胸の苦しさに耐え切れず、ハネをあげながら木泊さんに全速力で駆け寄ります。

「コハク！ 大丈夫なの！？」

「…………」

「ごめんっ！ 大丈夫なわけないよね。うううつ……ねえコハク、私に、なにが出来る？」

私の涙ながらの問いには答えず、木泊さんは虚ろに空を見上げます。

「ねえ真紗耶さん、ボク、このセカイに居ないほうが、いいのかな？」

「そんなことないっ！ 私は君に会えて良かった！」

私が木泊さんの両肩を掴んで揺さぶると、木泊さんは力ない笑顔を私に向けます……

「ありがとう。でも……、昨日なんてね、家の窓がガシャーンって割れて、石がコロコロ一つ入つてきたりし、毎日毎日、イタズラでんわが絶えないし」

「ねえコハク！ 私……君が居なくなつたら嘆き悲しむ！ それを解つて！」

「真紗耶さん……」

そこで、ふと私は、ある疑問に打ち当たりました。

「コハク、悪戯電話とか、石を投げ込まれるとか……それも、君を虐めてる学校の連中がやつてるの？」

「…………」

真紗耶さんの口調は、じじで回想的なものから詠嘆的なものに変わった。

「巫彩さん！ そのとき、私が一番悔しかったのは、そんな薄っぺらな言葉しか木泊さんにかけることが出来ない自分自身だったのです！」

「それで結局……木泊兄さんの家、つまりあたしのあの家へ攻撃してたのは、首田宗志教だったのよね？」

「ええ。私の問いには、木泊さんは答えてはくれませんでしたが、木泊さんがあんなことになつたのは、じ自分、自分が小説を出版して、しばらく経つてからのことでしたので」

「それで怪しいと思つてネットで木泊兄さんの本のことを調べたら、首田宗志教の連中が木泊さんを熾烈に批判してた、と」

「やうなのです。もう酷いものでしたよ？ ネットで木泊さんの悪口を言うだけでは物足りなくなつた首田宗志教は、一致団結して木泊さんの住所まで調べ上げ……」

話がそこに差しかかる瞬間を、実はあたしは待つていた。じじでよつやく、あの疑問が訊ける。

「ちよつと待つて真紗耶さん。前々から疑問に思つてたんだけど、首田宗志の代表作つて、虐めを受けた少女が復讐として人間狩りをする話でしょ？ 可愛い女の子なんかもバラバラにされたりして」

「まあ、大まかに言えばそうですね。 そんな小説を崇拜している首田宗志教が、なぜ自ら弱者への攻撃を行なう宗教になつていつたか、という疑問ですか」

実際に的確に言い当てる真紗耶さん。あたしは少し照れながら頭を下げた。

「やうなのよ。そこがどうしても腑に落ちなくて」

すると真紗耶さんは立ち上がり、ワインの棚と棚の間を縫つようと

に歩きながら語りだした。

「そうですか。腑に落ちませんか。でも私はね、イジメや差別を糾弾する小説のファンたちだからこそ、自らが弱い者虐めをする宗教と化していった気がしますよ？ 実際、首田宗志教は『元イジメられつ子』の集まりでしたが……『弱い者が無意識の内に更に弱い者を攻撃して安心感を得る』これは日本人の性です」

「酷い……」

「首田宗志教の連中はいつもいつも、重箱の隅を楊枝でほじくるよう、ある特定のカテゴリーに入る人たちを探し回って、その人たちを『自分よりも劣っている者』を決め付けて、そしてネットで晒して、自らが差別を興じる。そんなことをしておりましたよ？」

「ある特定のカテゴリーって？」

座つたままのあたしは少し声を大きくする。

真紗耶さんは歩いたまま話を続けた。

「その代表的な例が『オタク』や『不登校児』などです」

「真紗耶さん、首田宗志の代表作は虐めを糾弾する漫画なんでしょう？ だったら、虐めによつて不登校になつた人に優しい手を差し伸べるのが、そういう宗教家といつものでしょ？」

「よく考えてみても下さいな。首田宗志の代表作は、虐められた少女が人間狩りをする物語ですよ？」

こうなるとさすがに首田宗志教への恨みが募ってきて、あたしもドンと立ち上がつた。

「じ、じゃあ何よっ！？ 首田宗志教の連中は、『虐められて不登校になる』より『虐めた奴らを片つ端から殺す』ほうが褒められたことだと考える宗教つてこと！？」

「その通りです。現に首田宗志教は、不登校になつた少女の登場する小説やアニメのことは『不登校を推奨する許し難き作品』として、熾烈に攻撃していましたし。まあ別に、大半の作品は不登校を推薦してはいないんですがね、『不登校』というワード 자체が、首田宗志教的にはNGだったようで」

「馬鹿馬鹿しい！」

あたしは棚に納められたワインを一気飲みしたい気分になつた。

「ねー。馬鹿馬鹿しい……その一言に尽きますよね」

真紗耶さんも首田宗志教の愚かさに想いを馳せ、暗い気分になつてゐるよつ。

やがてあたしが力なく椅子にへたれ込むと、真紗耶さんも沈痛な面持ちで隣に座り直して話を再開した。

「それでね、私、木泊さんを何とか助けてあげられる方法はないかと思って、その帰り道、『母や姫子さんに懇願して木泊さんを引き取ってくれそうな人を探してもらう』という方法を思いつきました。しかししかし、運命とは、実に残酷なものですね」

「誰も見つからなかつたの？ それとも、見つかつたとたんに木泊兄さんが自殺未遂を……？」

すると真紗耶さんはコンパクトを取り出し、自分の顔を見つめた。「いいえ、その帰り道、ショーウィンドウに映つた私の腕からはおびただしい量の毛が生え、この顔は男臭さに満ち溢れていたのです！ その頃は色々あつて、鏡を見る暇もないございませんでしたから……そのときの私の衝撃、憤慨、絶望！ まあご想像下さいませ！」

「それでアナタは、気が狂つてしまつたと？」

「はい。私は狂気に囚われ、柴門家へ向かいました……」

【M i s a e - s v i e w p o i n t】批判宗教（後書き）

実際にこういう宗教がありそうで怖い……。

ちなみに四章の頃にも書きましたが、首田宗志教は架空の宗教です。ただし、これによく似た集団は実在しました。その集団を見て、「これが宗教になつて力をつけてしまつたら悲劇が起ころうな」と感じたのが、この物語にこういう宗教を取り入れることになったキッカケですね。

志穂も真紗耶もよく叫びますねえ

「ああああーああああーあーあつー..」
「真紗耶ひやんつー！ びつじたつてこつのー..」慌てふためく姫子
さん。

「おしほほどこ」だあああーっ！　おしほを出せえーっ！！！」

それを體くひとには私は殊の如きの話題の前へ向かいあつた

「誰…？ …… 真紗耶？ 真紗耶なの？ どうしたっていうの…？」

「やだ。私、もうダメ」

柴門さんの消極的な声が私をカツと発狂させ.....

和は休んでいた所を蹴破り部屋に侵入

のガラス片を鮮血を滴らせながらもぎ取つて柴門さんの首に当てま

した。

「心中しおしょ、つや紫門さん…… あああああー あああああー ああ

思えば私が柴門さんのことを《柴門さん》と呼んだのは、これが初めてでした。このときの私は鬼の如き形相だったと、柴門さんも簪子さんも仰います。

「真紗耶ちやーんつーーー」

蓉子さんが、かなり体を鍛えていると思われる男性客を連れてやって来、その場は収束しました。

【Miss a - s viewpoint】哀しき復讐心

「そして性転換・整形騒ぎになつたわけね？」

「その通りです巫彩さん。そして私はこの告白箇の姿になつた……」

「それはそうと、今の回想で気になることが一つあつた。

「志穂が また部屋に籠っちゃつて、なにがあつたわけ？」

「ここであたしは不意に、志穂が母を説教する際に言つていたことを思い出した。『……まさか！ 濡れ場上映会事件！？』

「そうです。アニメ映画の代わりに、柴門さんと彼との濡れ場が流されてしまつたという、あれです（苦笑）」

「またしても志穂の恋は成就しなかつたと……。でもその件に限つては、彼は何も悪くないわけよね？ なんたつて母親の蕃子さんが見つけてきた人だし」

あたしの考えは甘い、と言わんばかりの虚ろな笑みを浮かべる真紗耶さん。

「ええ、当然、彼は何も悪くないわけですが……あらう」とか柴門さんは、例の「とく何も悪くない彼への誹謗中傷をFAXで送り続け、彼は虐められて、転校までさせられる騒ぎになりました

「…………」

しばしの沈黙の後、あたしは最も苦しい質問をすることに決めた。

「それで、その真紗耶さんの騒ぎの内に、木泊兄さんは……」

これには真紗耶さんも大きく腰を曲げ、自らの太股に顔をづめてしまう。

「はい。私があんなつまらないことで発狂したばかりに、木泊さんの里親探しが大幅に遅れてしまい、蕃子さんが学生時代の親友であつた母萌さんをやつと見つけた、その日に……『船旅をさせてくれたら学校へ行く』という条件で一人旅をなさつておられた木泊さんは、船から飛び降りて……」

「そ、う……。でも、木泊兄さんは今、ICUのSweet Seasonで幸せに暮らしているわけだから」

本当にそれだけが大きな救い。それでも真紗耶さんは明るい顔を見せてはくれない。

「ですがその日、報せを聞いて病院まで駆けつけた私がガラス越しに見たのは、変わり果てた木泊さんの姿でした。ICUの治療台の上で、何本もの管を付けられ……」

「やめて真紗耶さ」

遮ろうとした私の言葉を逆に遮りてくれる真紗耶さん。

「その時！ 私は見たのです！ 木泊さんの傷ついた顔の、閉われた瞳から、一筋の涙が伝うのを！」

「聞きたくないわそんな話……」

止めるけれど、真紗耶さんにはもうあたしの言葉なんて耳に入らず……

「その涙で……その涙で私は……私は心に決めたのです……首田宗志教への復讐を！」

まるで騎士が高らかに指令を出すように、そつ氣高く宣言したのだった。

ところが、その数十秒後……

「フクシユウなんかしてほしくなかつたよおつ……。そりやあ、ううううう、おかしなシユウキョウウに攻撃されたのはショックだつたよつ……。でも、ボクのために真紗耶さんと志穂さんにギセイになつてほしくなかつたあ……」

いつしかそこには、涙で顔をびしょびしょにした木泊兄さんが佇んでいた。

「木泊兄さん？」

「木泊さんっ！」

あたしも真紗耶さんも、思わず木泊兄さんに駆け寄り、彼を同時に抱き締めた。

「あわわわわつ、苦しい、苦しい。なにするおーー?」

慌てふためく兄さんがいとおしい。

まずは真紗耶さんが大袈裟に心中を吐露。

「確かに復讐ほど無意味なことはないのかもしません。けれどもけれども、あんな連中が木泊さんを地獄に叩き落しておいて、何の罰も受けずにのうのうと生きているのが耐えられなかつたのです私は!」

続いて、あたしが号泣しながら訴えかける……

「木泊さん、お願ひです! 日本で一番、幸せな人間になつて! 本当の幸せをつかむべきなのは、あなたみたいな人なの! あたしに出来ることならなんでもするからつ!」

「えへへ。ありがとづふたりと。あはつ ボクつてシアワセものだね……!」

木泊兄さんにしては意外な、どこか力強い笑顔が、あたしと真紗耶さんの心をにわかに明るくしたのだった。

そうして安心したあたしと真紗耶さんが木泊兄さんから離れると、兄さんは柄にもなく難しい顔で腕を組んだ。その不釣合いな感覚がまた、実に可愛らしい。

「うーん。お二人は、ボクのこと想つて泣いてくれたんですね。でも、ボクはもう、ダイジヨーブですよ?」

「兄さん……」

「木泊さん……つ」

そこで木泊兄さんは小さくガツッポーズ。

「ん、わかりましたつ。巫彩の言つとおり、ボクは日本いち、ううん、セカイでいちばんシアワセせな人になつてみせますからつ。ほら、ゆびきり、しましょつ」

差し出された華奢な小指に、自分の小指を絡ませる。指先に弱々しくも温かい愛を感じたとき、あたしは復讐に至つた真紗耶さんの心を徹底理解した。

こんな純粹無垢な木泊兄さんが工事で涙を流しているのを見た

ら、誰だって復讐をしたくなるだろう、と……。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 哀しき復讐心（後書き）

第六章はこれで終わりです。お疲れ様でした……。

「巫彩。おかえり。お母さん明日はね、お父さんのことで、遠出して夕方から弁護士さんなんかと徹底的に話し合わなければいけないザマスから。民宿に泊まることになるかもしないザマス。くれぐれも戸締りには気をつけて。またあの志穂さんとかいう人が来てくれるとき安心なんザマスけど」

「お母さんただいま。明日は志穂さんの女友達に来てもらうから大丈夫よ」

あたしが家に帰つて、義母ときちんと挨拶する……これって実は初めてのことなんぢやないかと思つ。

そしてなぜかその声には薄つすらと人間味が感じられるし、化粧も薄い。こうして見ると意外と素朴な顔をしている義母に、あたしは少し驚いた。

木泊さんを真紗耶さんと一緒に抱き締めた後、母萌さんを交えて四人で、料理修行中の木泊兄さんがこしらえた料理を食べた。あれは驚いたもので、いまどき一流を自負するレストランでも、あんなに口当たりが良くてバタ臭くない料理は出せないだろうと、そう思わせるほど腕前でビックリ。

ただし、そんなこんなで真紗耶さんと志穂の過去噺に關しては、全く続きが聞けなかつた。

そして翌日 今にも泣き出しそうな灰色に染まつた日曜の昼下がり、あたしは真紗耶さんにこの家へ来てもらつていた（真紗耶さんはこの家を知らなかつたけれど、志穂がここを知つてゐるから伝たちが簡単に済んだ）。

「お邪魔します」

真紗耶さんが挨拶すると、母は安心そうに微笑む。

「あなたが志穂さんの女友達という人ザマスのね？ これで安心し

て出かけられるザマス」

ドアを出て行つた義母と入れ替わるよつこ、「お邪魔します」と家に上がつた真紗耶さんから、早速鋭い指摘が……

「なんだか、思つたとおりの家です。せつかくこんな素敵な鎌倉という場所に建つてゐるのに、これじゃ東京の気取つた住宅街にある家と変わりませんね」

「でしょ？ 義母も義父もプラスチックみたいに非人間的だから、家も自然とこんな感じになつてしまふのかも……」

「そうですね……」

これで真紗耶さんが学校で村八分にされた理由がますます解つた。この人は本当のことしか言わないし、言つた後に『失礼なことを言つてしましましたね』などと取り繕つづりうることもしないんだから。

「真紗耶さん、とにかく、好きなところに腰掛けて」

「はい。失礼します」

台所へ移動して椅子に座ると早速、真紗耶さんは現場検証でもするようによつうに台所を見回し……「巫彩さん、あれはなんですか？」棚の上に置かれて埃を被つた写真立てを指差した。

「あれは、あたしが小学の頃に一日も欠席しなかつた賞を貰つたときに、友人たちと撮つた記念写真よ」

友人、といふ言葉が出ると、穏やかだつた真紗耶さんの顔が、青天の霹靂のように怪訝なものに変わつた。

怪訝顔で斜め下に視線を落とすその仕草は、いかにも女から嫌われそうな女といった感じ。

「そんなのを置いていて何になると？」

「やつぱりこんな奴の相手ができるのは志穂しか居ない！ なんて思つてしまつた。

「べつ、べつにいいじゃない？ いい想い出なんだからつ！ 嫉妬してるのー？」

さすがにフランス力するあたし。けれども真紗耶さんは口調を微塵も変えたりはしない。

「Jの家には、木泊さんを攻撃する首田宗志教によつて、落書きされたり、いたずら電話されたり、石が投げ入れられたりしたんですね。そんなことがあつた家に、小学時代の楽しい想い出だなんて……神経を疑います」

「……カンケイないでしょ?」

「木泊さんにとつて、小学時代は地獄だつたんですよ?」

度が過ぎてこるとはいえ、これは真紗耶さんなりの自粲なんでしょう。

確かにあたしは、管を何本も繋がれて涙を流す兄さんの姿を見てはいられない。あたしがこの家に引き取られた頃には、兄さんは日当たりのいい部屋へ移されて、平和な顔で眠つていたから。

もしも、あたしも真紗耶さんと同じ情景を見ていたら……

そう考へると、真紗耶さんが横暴なことを言つているように思えなくなつて、あたしは棚から写真立てを下ろして写真を出し、それをビリビリと破いてみせた後、流し台まで移動して生ゴミの入った三角ゴーナーにポイと捨て放つた。

「これでいいかしら? ……正直言つて、小学校の頃の友達とはそんなに深い付き合いじゃなかつたし」

「そうですか」

満足そうな真紗耶さんを見てホッと胸を撫で下ろし、志穂の氣に入つたあのお茶を出してあたしも腰掛けた。

「真紗耶さん、昨日は木泊さんや母萌さんの手前、『復讐』を誓つた真紗耶さん』以降の話が出来なかつたわね」

「そうですねー。と言ひますか、」真紗耶さんはあたしのお茶を一口飲んで一コリ。「美味しいですね」

「そりゃどーも」

そして真紗耶さんは、コップを両手で大切そつに持つたまま真顔に戻る。

「それで……復讐を誓った私は、仲間として首田宗志教に接近しました。ただ、この告五箇は首田宗志教の忌み嫌っているアイドルコニット『晩壓不~~堪~~』の一人ですから、適度に変装をしてね」

「そのときはどんな顔に変装を?」

「まあ、貴禄ある熟女に」

「そう。……それにしても、味方として敵に近づくだの変装だの、何だかスパイ映画みたいね」

あ、また怒られる、と思つたけれど、真紗耶さんは意外にも怒らず、逆に暖かく微笑んできた。

「やだ。巫彩さんもそう思いますか？ 私も何だか、あの頃のこと

は、現実感を伴つて思い出せないんですよね。ふふふ」

……判らない。本当に、沸点がどこにあるのか見当のつかない人だと思う。

「……。そうでしょう」

「はい。……まず、ネット掲示板上で集会の案内をしていたのを見かけた私は、下見感覚でその集会へ赴きました……」

「えー、掲示板上で！？ 首田宗志教も危険なことをするものね！」

「ああ、当時……一九九三年はインターネットが商用化されたばかりでして、当時のネットなんて、ほとんどパソコン通信に毛が生えたようなものでしたから」

「なるほど」

「あれは、一九九三年も、初夏の南風が街を吹きぬけるよ^リになつた頃のこと

」

【Recollection of Masaya】スパイ大作戦

首田宗志教が集合場所に選んだのは、町外れのみすぼらしい公民館。その前に集まっていたのは、それに輪をかけたように貧相な感じの青年たちでした。

せつかく告白団の顔になれたのに、すぐさま熟女に変装というのは気が引けましたが、まあ仕方ありません。

私は連中のそのようなでたちを少し疑問に思いながらも、

「あの、首田宗志教の方々でいらっしゃいますか?」と低く重みのある声をかけました。

「ソウデスガ? ナニカ?」メンバーの一人が実に弱々しい返事。他の面々も明らかに、私のこの異常に貫禄のある姿にたじろいでおります。

公民館の中。安っぽい白のプラスチック・テーブルを囲んでの座談会が始まりました。

首田宗志教のことですから、どんな殺伐とした話を始めるのかと思つたら……あらうことか彼らは、ロボットのプラモデル云々、世界的有名な某アニメ団体の作品のどれが最高傑作か云々、といった『旧世代のオタクたち』ならではの話を始めたのです。

それで私は、なぜ首田宗志教が美少女文化や、それを愛好する新世代のオタクたち、ひいては社会に積極的でない不登校児といったものを攻撃するのかが理解できました。

『旧世代のオタク』というのには、一部、マッチョイズムに毒されている層があるのです。早い話が、正論ならば人を傷つけても構わない、というガサツな思想。

すなわち首田宗志教とは、マッチョイズムを掲げる旧世代オタクの集合であったのです。

それが収まるど、私は早速、こいつらに氣に入られそうな発言をします。

「本当に許し難いですよね」

「ウヒツ、コルシガタイツテ、ナニガテスカ?」

「アナタ方も仰っているでしきう。最近の美少女ブームですよ。これはアニメという文化を破壊する悪しき存在ですからね。我が日本国が築き上げてきた偉大なるアニメーションという財産! これに泥を塗る存在を叩き潰すためならば、私はテロ行為も辞さない考えであります!」

私が、しゃあしゃあと心にもなすこと口にすると当然、拍手と歓声が起こるわけです。

「オオオオオー!」

「ソノトオリー! チカラヲ アワセテ、ニホンカラ ビショウジヨブンカラ マッショウ シマショウ!」

「アナタハ カミサマダーバー!」

たかが『美少女文化』などという毒にも薬にもならない存在に、ここまで腹を立て、ここまで必死になる首田宗志教。まさに『旧世代のオタク』の持つ傍若無人な面を象徴する存在と申せましょう。これはこれはいい塩梅だと思い、私は更に心にもない発言を続けます。

「最近、私はアナタ方のお陰でスッキリしたことがあるんですよ。不登校の分際で小説を出版した中里木泊とかいう少年への見事な攻撃です! ああいう子供が日本をダメにすると思うんですね。ふふつ、奴、船から飛び降りて自殺を図ったとか。いい気味ですよー。いつそのこと、くたばつてくれたたらもつとせいせいしたのに。ともあれ、アナタ方は勇敢でした!」

「ワアアアアアー!」

「ワタシタチノ オモイヲ、テツテイテキニ リカイシテクレテ、

アリガトー!」

「アナタハ セカイイサンダー!」

「まあつ 光栄でござります。それにしても、よく、アナタ方はあのクズ少年の住所を突き止められましたね？」

「アノ ショウネンガ ホンヲ ハツバイシタ シュッパンシャー、ワガ シュダシユウジキヨウ ノ シンジャヲ、アルバイト トシテ オクリコンダノテス」

「そこまでなさるとは……お見事です！ 心より尊敬いたします！」
かくして、私はいとも容易く首田宗志教に気に入られたわけです。
が……まさか、こんなにも簡単にいくとは思つてもみませんでした。
ネットで傍若無人に振舞う奴らほど、実社会ではこんなものですね。

と、そこでその日の田玉である。ご本人登場コーナーです。

首田宗志……どんなエキセントリックな人となりなのかと思つたら、公民館に入ってきたのは、シミだらけの顔や焦点の定まらぬ瞳が特徴的な、瘦せ細つた青年でした。

「どうもこんばんは～首田宗志です。こんな素晴らしい宗教を僕のために作ってくれてありがとうございます！ 皆さんの熱い応援のおかげで、僕は小説を書き続けることができます！」

馬鹿馬鹿しい！ と思いました。

首田宗志教のせいで何人ものファンが嫌な想いをしているという事実に、首田宗志自身は微塵も気づいておらず、ただ自分の宗教が出来ているという事実のみに田玉を向けて、馬鹿みたいに喜んでいるのですから。

ともあれ、ご本人登場を田玉でに、今回はこんなにも多くの信者が集まっているのでしょうか。私の発言によるものと同じくらい大きな歓声があがります。

それが鎮まるのを見計らつて、私は流麗な笑顔を浮かべて堂々と首田宗志に対して発言を始めました。

「首田宗志様！ あなた様の小説や、それを原作にしたアニメによ

つて私たちはどれだけ心を慰められ、救われ、そして感動したかもしれません。おお、あなた様のためならば私は、どんなお礼でも致します。なにか、欲しい物はありますか?」

すると首田宗志は、照れ臭そうに俯きました。

「今、欲しいものは彼女ですね。彼女居ない曆が相当なことになつていまして(苦笑)。随时、彼女募集中です」

「彼女が欲しい……」この言葉を首田宗志から引き出したかったのです。

かねてから首田宗志は、ネットで連日《彼女が欲しい》と言いまくつていたので、まあ思い通りになつたという感じですね。

「『紹介致します 私の友人に、ちょうど失恋中で傷心の美少女が居るんですよ』

「おおっ! それはそれは!」

というわけで首田宗志教および首田宗志自身をモノにした私は、首田宗志とポケットベル(笑)のやりとりをするようになります。

そして柴門家へ向かいます。柴門さんが働いたり休んだりを繰り返したために運営のバランスが崩れ、《人を雇う》という概念が滅茶苦茶(人を雇うと柴門さんが《働きたい》と言い出した時に困るために)になつたクウチューカは休業中でした。

レジの向こうに愕然と座る百合子さんを軽くハグして慰めた後、二階へ急ぎ、籠つたままの柴門さんにドアの前から声をかけます。

「柴門さん、私、見つけました。貴女の彼になつてくれそうな人を「すると、つれない声が……

「私、もう嫌。もう、誰も信じない」

「ですがね、私が見つけた人というのは、あの首田宗志ですよ」

当然、この時点では柴門さんは、木泊さんの自殺未遂は学校での虐めのみが原因と思っておられましたし、また首田宗志教の存在すら知らなかつたため、首田宗志を単に《有能な人気小説家》と思つて

おつます。

「えー？ 首田宗志って、あの小説家の首田宗志！？」

と、柴門さんの声が明るくなりました。

「わいですよ。あの、首田宗志です」

「私を部屋から出すわいとして、それで嘘を語つてるんじゃないでしょーね？」

「いえいえ、ポケベルで打ち合わせをすれば、こいつでも首田宗志と貴女は会える状態にあるんですよ？」

するとドアが開きました。

そして数日後、首田宗志と初めて会合した柴門さんは、上機嫌で帰つて参りました。

「真紗耶ーっ！ ありがとー！ 宗志となら私、未来を誓い合えそうー！ 宗志つたらね、君、『晩壓不堪』の廉坦紡弊順に似てるね！ 素敵だなあ…… だつて！ アハハッ！ も母さん！ 私、明日から店出るからー！」

【Recollection of Masaya】スパイ大作戦（後書き）

志穂の色情狂ぶりは、『週末婚』の陽子（松下由樹）がモデルになっています。

【Miss a - s viewpoint】 矛盾だらけの宗教

……これには真紗耶さんの回想を遮らざるをえないあたし。

「ちょっと待つて真紗耶さん！ 首田宗志は志穂を見て、《廉培紡弊順に似ていて素敵だ》って言ったわけ！？ おかしくない！？ だって弊順は『晩壓不堪』のメンバーよ！？ バーチャルアイドルユニットなんて、首田宗志教の忌み嫌ってる美少女文化の産物ですよ！」

「実は、首田宗志自身は、美少女文化を憎んでいるわけでも木泊さんを批判したわけでもなく、むしろ、美少女系のアニメや漫画を愛好しているのです。首田宗志の生み出すキャラクターには明らかに、美少女文化からの影響が色濃く見られますし」

「ちよつとちよつと、どうこうことよ？ そうだとしたら、首田宗志自身と首田宗志教が上手くいく道理がないじゃない」

あたしが混乱していると、真紗耶さんはお茶を一口飲んでコップをテーブルに置き、呆れと軽蔑に満ち満ちた溜息をついた。

「ふう……首田宗志教の連中はね、首田宗志自身の思想などどうでも良く……また首田宗志自身も、首田宗志教が何をしても全く感心を持たず……お互い、ただつるんでいたのです」

「はー……」

はー、としか声が出なかつた。そんな滑稽な人間関係もあるものなのか、って。

そんなあたしに気を遣つてか、真紗耶さんはより具体的な解説を始める。

「大体、首田宗志教のしてくることは矛盾だらけなんですよ。ネットで色々ものを批判する一方でパソコンに依存する若者の悪口を言い、アニメ好きであるにもかかわらずアニメを《子供をダメにする文化》として批判し、自殺を《命を冒涜する行為》と位置づけながらも自分たちは集団自殺をし、そして、現代社会を批判する割に

は、社会に傷つけられた不登校の少年を攻撃し……」

「…………」

「これはもうノーコメントで。

さて、と。《なぜ首田宗志と志穂を逢わせる事が首田宗志教への復讐になるのか》

……実はあたしは、真紗耶さんの真意に薄々感じていた。

「真紗耶さん、あなた頭いいわね。志穂と恋に墮ちた男性は、必ず志穂によって不幸にされてるものね」

「そうなんです。柴門さんは失恋すると、例え相手が悪くなくとも、相手の男を地獄に突き落とさなければ気の済まない人……そのことは、今までの私と柴門さんによる過去噺でお解り頂けると思います。でも私は、ただ首田宗志に不幸になってくれるだけで良かった」ついて、ついて、過去噺が《あの事件》に繋がる時が来てしまつた！

「ところが、志穂は首田宗志を刺し殺してしまつた……」

私の脳裏に、昔見たニースの映像と音声が鮮明に浮かび上がつてきた。

首田宗志の別荘が画面に映り、十五歳の少女が逮捕されたといふ事実を無表情に告げるキャスターの声がそれに被さる。

「はい……」

真紗耶さんも《ついにその事を話す時が来てしまつたか》といった面持ち。

「ねえ真紗耶さん、あたしはニースでしか知らないんだけど、」

……その先を言つのが心苦しかつたけれど、あたしは絞り出すように、「……志穂は首田宗志の子を妊娠していたのよね」と告げた。

「そうです」

「そして、志穂を流産させようとした首田宗志。お腹の子を守るために志穂は首田宗志を刺し殺した。……そう理解していいわけよね

？」

理解していいわけよね。そつ咳いたあたしの心は、ほほ懇願に近いものだった。

これ以上、どす黒い話は聞きたくない……けれども真紗耶さんは、そんなあたしの心を察してか、実際に申し訳なそつて首を横に振つた。

「いいえ、いいえ。巫彩さん……壁に耳あり障子に耳あり、です。私の隣に来て下さい」

「ええ……」

あたしが真紗耶さんのすぐ隣の椅子に座ると、真紗耶さんはヒン

ヒソ声で嘰を再開した……

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 矛盾だらけの宗教（後書き）

一九九三年の時点ではたぶん、バーチャルアイドルなんて存在しませんでしたよね。

出来る限り『時代に忠実に』をモットーに書いてきましたが、ここへきてとうとう綻びが……。

しかし物語の進行上、ここばかりは妥協して『ごめん承下さい』と言うしかないのが悔しいです。

【Recollection of Masaya】 いのち族、血の海へ（前）

いよいよプロローグの事件に繋がります。

【Recollection of Masaya】 いづもり族、血の海へ

それは、一九九三年もいよいよ、クリスマスのイルミネーションが街を輝かせ始めた頃……

ある日、街角の広場に飾られた大きなツリーの煌きの下、私と柴門さんは辛氣臭い言い争いをしておりました。

「柴門さんっ、それなら墮ろせばいいじゃないですか！？」

「だめ！ 私は産みたいの！ この子、時々私のお腹を蹴るのよ…？」

「だつて育てるつもり、ないんでしょう！？」

「うん。私まだ、遊びたいし。なのにね真紗耶！ 宗志つたら『二人で育てよう』とか言つてくるのよ…？ 重すぎて、責任の半分なんて背負えないよ私！ 宗志が責任もつて、一人で何とかするのが筋つてもんでしょうが！ 助けて真紗耶！」

柴門さんが妊娠してからといつもの、私と柴門さんは毎日毎日、そんなふうに同じ言い争いをしておりました。

こんな非人道的な発言も、柴門さんの魅力で 私がほんやりと見惚れないと……

「…！」

柴門さんはピキッと何かを思い立つたのか、石畳の広場の隅まで移動し、子供が手に持った風船をバーン！ と割つてみせました。

「うわあああーん！」「な、なにするぞます…！」

当然、号泣を始める子供と慌てる母親。そしてそれを見て、実に満足そうな柴門さん。

「ふふ、いいきみ」

「うえええーん！」「どうしてくれれるぞます…！」

「金でケリつけましようや！ ほりー。」

泣きじやぐる子供のオーディに柴門さんは一万円札を押し付けると、そのままそそくさと走り去りました。

そんなある日のこと。

一九九四年も寒さのなかに春の息吹を感じられるようになつた頃
……霧深い深夜に、私のポケベルが鳴つたのです。

画面には一言、

「マサヤ タスケテ」とだけ。

「サイモンサン、ドウシタノデス?」

とつさにそう送り返すと、

「ショウシノ ベ、ツソウ ハヤク」

と返つてきました。

『ショウジ』の『シ』に濁点を打つのを忘れていたり、逆に『ベ
ツソウ』の『ベ』には濁点を一つ打つてしまつていたり、かなり緊
張というか興奮している様子。

私は慌てて、もの凄い勢いで電車を乗り継ぎ、何度も柴門さんと
首田宗志と三人で会つたことのある、その別荘へ向かいました。

そして、むせるような霧深い空氣の中、鬱蒼とした林を抜け、人
里離れた別荘に着くと、なぜかドアが開いていたのです。

私は中に入り、内側から鍵をかけます。そしてリビングへ向かう
と……

「柴門さん大丈夫ですか!? !? え..... 柴門さん、貴女ま
さか、まさかその人を殺し..... つ!」

私の目に入ったのは、変わり果てた首田宗志の屍骸しがいと、その前で
ナイフを持ったまま硬直して立ちすくむ柴門さんの姿。

殺してから時間が経つていたらしく、柴門さんの顔や制服に付いた血は赤黒く変色しておりました。

私に気づくと、柴門さんは硬直したまま、やつとの想いで声を出
します。

「ま、真紗耶つ! わ、わ、わた、し、あ、あの、こ、こ、これ、
どう、う、すれ、ば」

血まみれになつてオドオドする柴門さん。

その姿を見たとき、私は心の底から思いました……この人を守りたい。

「柴門さん落ち着いて！ 貴女は悪くありません！」

女神のよな私の一言で、急に饒舌になる柴門さん。

「だつた、だよね、ははつ、そうよね!? 真紗耶だつて
そう思うよね!? 全部全部、こいつが悪いのよ! 今だつて、私が『責任とつて一人で育てる』つて頼んだら、『そんなに育てるのが嫌なら堕ろせ』だつてー! はつははは! 自分勝手にこんな清純な女子高生を妊娠させておいて! なによその言い分は冗談じやないわよはははははー! もう面倒臭いから殺しちやつた」

柴門さんのお言葉がスローアイングナイフのことくグサグサと私の心に突き刺さると、とうとう、とうとう、長年に渡つて私の心の底で噴火を免れていた海底火山が大爆発を起こしたのです。

ああ柴門さん！ 柴門さん！ 私もへ、我慢できません！」私は血に染まつた柴門さんを強烈に抱き締めました。

……………!! 挑 真継耶!! ? 危ない!! 棘物ねえで!!

柴門さんの体に、なにか衝撃的な電光が走るのを私はひしひしと感じたのでした。

白いカーティガントを鮮血のアラベスクで飾った私は、この世でも絶美なる妖気を放つていたことでしょう。

「あ、あ、あ、真紗耶……私…………その…………つ」

「宗志！ 生きていたの！？」

驚愕する柴門さんの頬に血を塗りたくる私。

「柴門ちゃん？ その男と私と、どちらが魅力的ですか？」

そのまま柴門さんの体を愛撫し続けると、柴門さんは半ば白目を剥くほどの誘惑を受け、私の服のボタンを外しながら、洗脳されたような口調でもの凄いことを言い出したのです。

「は、ははははあ……、いやだなあ真紗耶つたら、すっかり厭らしい身体になっちゃってえ……。綺麗よ真紗耶、うん、宗志なんかよりずっと素敵。真紗耶の胸が最高級のマシユマロなら、宗志の胸なんか干からびた煎餅よ。こんな茹で卵みたいな肌と触れ合つたら、宗志の脂まみれの体なんか吐き気がする。宗志なんて力で女を悦ばすことしかできない醜男よ。^{ぶおじよ} 真紗耶を手に入れられれば私は……」

……柴門さんの氣の触れた長台詞に、ニンマリとぼくそえむ私と、血を吐きながら断末魔の奇声をあげる首田宗志。

「あああーっ！ お前たちは何と禍々しい女なのだらー？」
……祟つてやる！ 崇つて祟つて

悪態をつく首田宗志の真ん前に私は「王立ちし、蔑みと恨みを込めた眼差しで首田宗志を見下ろしました……

「祟れるものなら、祟つてみるが良い……。^{それまでの}ときいかれぽんち、虫けら一匹祟る力すらあるものか」

「真紗耶？ あなた……」

柴門さんはただただ呆然。そこで……

「実はね柴門さん」

私は柴門さんに、首田宗志教がしてきたことを全て告白しました。すると柴門さん、自らが刺した男を蔑むように見下します。

「なによー？ 木泊君が自殺未遂したのって、ここにからせいでたんだー！」

「ぐおおーっ！ あれはあの宗教が勝手にやったことだ！ 僕には

関係ないっ！」

この期に及んで何も理解していない首田宗志！

「……でもしも……」

もしも首田宗志が、たとえたつた一言でも、たとえ真つ赤な嘘でも、木泊さんを憐れむよつた言葉を口にしてくれていたら……。……そつしたら私は或いは、首田宗志を助けようとしたかもしません。けれどもこの有様では、首田宗志に蜘蛛の糸を垂らすわけにはいかなかつたのです。

私の怒りは頂点に達し、再び柴門さんを抱き締めて、顔だけは首田宗志を見下るします。

「おお、汚らわしき首田宗志よ……木泊さんの受けた痛み、苦しみ、絶望、孤独……その総てを百倍にしてお前に与えてやるッ！ その救いなき断末魔にて、眞の屈辱を味わうが良い！」

私の呪いの言葉が面白かつたのか、柴門さんも思い切りよく私を抱き締め返してきます。

「やじ宗志！ 崇められたのはお前やんのはづじやーーー！ もやーーーほつほつほつ！」

ひつして私たちは、断末魔の首田宗志の前にて、初めて深い契を交わしたのです。

首田宗志は、《自分の恋人》が《自分の信者たちが地獄へ突き落とした少年の友人》に抱かれるさまを見ながら、無惨に果てて逝きました。

数十分後、完全に屍骸と化した首田宗志の前で、服を着ながら私は、

「ときに柴門さん、その子を産みたいですか？」と語りました。

「うん……」

「では質問を変えましょ。お腹の子を産み、母親となつて育ててゆく覚悟がありますか？」

母親、といふ重々しい響きに、血を抜かれたかの「ごとく顔面を蒼

白にして後ずさりする柴門さん。

「母親……！？」む、むむ無理よ無理よ無理よ！　私、まだ誰にも縛られない！　は、はは、私、子供こしらえたくて首田宗志と付き合つてたわけじゃないし、この子が勝手に私のお腹に居ただけ！　そ、そ、うよ、悪いのは全部宗志！　私は可哀想な被害者なのっ！」

……母親がこんな女では、かえつてこの子は産まれてきたら不幸になるだけだろう、と思いました。

せいぜい柴門さんに『あなたのせいで自由を奪われた』と逆恨みされ、虐待されて無残な最期を迎えるのが闇の山だと。その時この子は思うでしよう、『自分は何のために生まれてきたのか』と。

それならば、この腐敗した現代社会に産まれてくるより、柴門さんの奇麗な胎内しか知らぬまま逝かせてあげたほうが、誰がどう考へても幸せでしょう。

私は、柴門さんのため、そして、『不幸なだけの命』をこれ以上この世に誕生させぬため……

……柴門さんのお腹を強打しました。

「ぐわあーっ！　な、なにするの真紗耶ーっ！？」

お腹を押さえて崩れ込む柴門さんが痛々しかつたですが、私は冷静に電話に向かいました。

「はい、捜査一課！」

すると私は『友達が人を殺した現場に訪ねて来てしまった人物』を装います。

「けつ、警察ですか？　あ、あのあのっ、親友がつ、わ、私の親友がつ、ああ、あ、あのっ、付き合つてる、か、彼つ、を、刺しつ、刺し刺しつ、刺し、殺つ、殺ししししまつ、まし、たつ」

「そうですか！　とにかく落ち着いて下さい！　それでその、彼を殺したという親友は今！？」

「ぼつ、呆然、と……。かつ、彼女、彼の子を、にんつ、妊娠してつ、いたんですね！　彼が、流産させようつ、と、してきて、お腹

の子をつ、守りつとした、彼女が、彼女がああーっ！

「解りました！　すぐに向かうので住所を教えて下さい！　それから、その親友を絶対に逃がさないように！　殺人直後の人間というの非常に不安定です！　大変でしょうが、我々警察が着くまでの人間、あなたが心を支えてあげていて下さい！」

「はつ、はいっ！」そして私は住所を告げ、電話を切ります。

すると柴門さんがお腹を押さえて苦しみながらも、確かな笑みを見せるではありませんか！

「へ、へえっ、あ、あんた、頭、いいね……」

「ふふふ、そう言って頂けて光榮です。愛してますよ

、柴門さん

」

ひつして共犯者たちの艶夜は深けていったのでした。

【Recollection of Masaya】 いづもり族、血の海へ（後

15禁な「」まで書いても大丈夫なんでしょうか？ 詳しいマニュアルがないため、よく判りません。

ただ、『そういう場面』を描くことが目的で書いた物語なのではないことは、きちんと読んで下さった方には理解して頂けると思います。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】日本の穴

ひそひそ声による回想を終え、普通の声に戻る真紗耶さん。

「巫彩さん、これが、私と柴門さんが抱える秘密の全てです。柴門さんには実は、まだ産むか産まないかの選択肢が残されました。でも柴門さんは、中絶を選んだ……」

……覚悟はしていたけれど、想像を遙かに超える内容だった。

「……それで、志穂は『お腹の子を守ろうと果敢に戦つて男を刺し殺した少女』ということで、無罪に?」

「ええ。しかも、当時はまだまだ、国が青少年の犯罪に甘い時代でしたしね」

「ああ、そうよね……」

運の良い一人なのか、運の悪い一人なのか、こうなると判らなくなつてくる。

「でもね巫彩さん、柴門さんが無罪になつた最大の要因は、実はそれらのことではないんですよ」

「どういうこと??」

まだ何か凄い事情があるのかと怯えまくる私に対し、真紗耶さんは実に穏やかに指を立て、

「首田宗志の小説ですよ」と告げた。

ぴん、とくる私。

「そうか。首田宗志作品のスプラッター描写ね? そのおかげで、『首田宗志の変態ぶりが柴門志穂という少女を狂わせた』という偽の事実をでっち上げることができた……」

「その通りです。しかも首田宗志は小説掲載誌上にて、作者アンケートのお題が『理想の死に方』だつた際、『ネコミミの生えた可愛い女の子に惨殺される』という最期がいいと冗談めかして書いておりましたし、首田の代表作には何と、『妊娠した女が中絶しようとして自らの腹を割いて死んでいく』というヒソードもあるのです

……！ これにより、首田宗志が柴門さんに中絶を強いていたという『偽の事実』が、見事に裏付けられたというわけです

もはや素晴らしい、とさえ思い、新鮮な笑みを浮かべる私。

「なるほど……マッチョイズムに毒された連中が青少年の犯罪を何でもかんでも出版物とかアニメなんかと結びつけて、残酷な描写のある作品を批判してくれてたおかげで、あなたたちは大いに救われたわけね」

「そうです。首田宗志自身にとつては、『自分の描いた小説が自分を殺した女を無罪にする』という皮肉な結果に、そして、首田宗志教にとつては、『自分たちが掲げていたマッチョイズムが、崇拜する小説家を殺した女の罪を軽くする』という、実に滑稽な結果になりましたね。最高の復讐でした」

「凄いわね」

「ええ。この国に生まれて本当に良かつたと思いましたよ（笑）。

法治国家とは、まさに犯罪者の楽園です」

勝ち誇ったような真紗耶さんの物言いが、妙にあたしを不安にさせる。

「でも、もしもよ？ 何かキッカケがあつたりして、警察が捜査をやり直したりしたら……」

あたしの言いたいことを逸早く理解してくれたのか、真紗耶さんは軽く笑いながら答える。ただし、またヒソヒソ声で。

「ふふふ、ええ、そうですよ。柴門さんのお腹を蹴ったのが私で、首田宗志は実は何も悪くないという真実は、私の他には、果音様、あるいは理奈子様くらいしか知りません。つまり私が警察に暴露すれば、あるいは柴門さんは捕まってしまうかもしれませんね」

理奈子とは、真紗耶さんがさつき化けていた女性の名前。じゃあ、果音というのは……？

それも気になつたけど、あたしは敢えて口を挟まず、話の続きをすることにした。

「えつと……事件があつたのは一九九四年の春でしょう？」

「ええ」

カレンダーを見てツインテールを跳ねさせるあたし。

「ちょっと！ もうすぐ時効なんじゃないのー？」

殺人事件の時効は、『事件発覚から十五年』。先日、それが十五年から二十年に引き伸ばされたようだけれど、それはその改正後に起こった事件が対象。

一〇〇九年の春を迎えている今、志穂の時効も訪れているのではないかしら！？

「そうですよ。巫彩さんが春休みを迎える頃には、もう成立です。時効が成立してしまえばこちらのもの。誰かが不審に思おうが、調べ直そうが、柴門さんを起訴することは完全に不可能となります」「そんな重要なこと、どうして話題にのぼらないの？」

「ちょっとちょっと、壁に耳あり障子に目あり、ですよ。それに……、追っ手に追われる毎日ですから。そんなことを考えている余裕もなく、気がつけば時効間近になっていたと、そんな感じです」
そのヒソヒソ声には若干の寂しさが感じられた。

無罪だの時効間近だの言つたって、結局この二人は自由の身になつていないし、時効が過ぎたつて『追っ手』が一人を追いかけるのでやめてくれるわけじゃない。

そう……この二人は全く別の意味で、『追われる生活』を送つているわけで。

あたしが思うに、人が一生のうちに受けける苦悩の量はあらかじめ決まっていて、ある苦しみから逃れれば、別の苦しみに襲われることになるような気がしてならない。

これが、無罪になつた志穂、そして何の罪もない志穂の子を流した真紗耶さん……一人が改めて受けた罰ということなのかしら？

語り続けながらお茶を頻繁に飲んでいた真紗耶さん。あたしは立ち上がりお茶を持って来、解けかかった氷の入ったコップに注ぐ

と、今度は真紗耶さんの対面に座った。

「それで、首田宗志教の面々は相次いで集団自殺を……」

その問いに、お茶を飲もうとしていた真紗耶さんはにわかに手を止める。

「はい。自分たちにとつては首田宗志が全てだ、と考える連中でしたからね。ところが、ところが、集団自殺をする前に、奴らは実に愚かなことをして逝つたのです！」

そして再び回想へ……

【Recollection of Masaya】 いの世の終わり

それは、じぶとい残暑もよしやく力を失い、肌を撫でるそよ風がサラサラと快くなつてきた頃のこと……

「かんぱーい！ 柴門さんおめでとう… ひやあ長い裁判でしたねー」

「かんぱあい！ けど無罪で良かつたあ……あんなヤサ男の一人や二人ぶつ殺したくらいでブタ箱に入つてたまるかつての！」

私と柴門さんは、私の家の台所で祝杯をあげおりました。ちなみに母は柴門さんが苦手らしいのでその場には居ません。どこへ行つても疎まれてばかりの柴門さんが可哀想になり、私は声のトーンを落としました。

「柴門さん、退学は残念でしたね。でも、これで明日からクウチュ一力で働けますよ。だつて、無罪になれば前科は付かないわけですからね」

暗い私に輪をかけたような憂鬱な溜息をつく柴門さん。

「はあ、クウチューカはさあ、今、バイトが雇われててね。私の出る幕じやないわけよ。だから、明日から色んなバイトを探してみるつもり。私、試してみたいのよ。あんな事件を起こした私が、どれだけ『やり直せる』のか」

柴門さんの健気な想いに泣きそうになりましたが、ijiは涙を堪え、明るくグラスを掲げます。

「柴門さん！ 今日は飲みましよう！ ……て言つてもジース同然の缶カクテルですけどね」

「ふふ、構わん構わん！ 飲むわよーー」

その数日後、クウチューカ閉店後の空席で柴門さんの帰りを待つ

私と蓉子さん。

「遅いですね。もう二十二時ですよ？」

「おかしいわねえ。今日、志穂がバイトに行つた店つて、『二十一時閉店』って、チラシにも書かれているのに」

「面接にはすんなり合格したのに……何かあつたんでしょうか？」

「真紗耶ちゃん、もう帰つたほうが。お母さん、心ぱ

と、そこで自動ドアが開き、柴門さんがその場にバッタリ。

渡辺徹の「じとく、かくん、かくんと自動ドアに何度も挟まれると、だるそうに店に入り、私たちが居るのとは違つてテーブルに伏しました。

「うあーっ！　ふざけるなーっ！　日本はどこも腐つてゐ！　大人はみんなクズばっか！　ナメやがつて糞店長め！　やつぱり前科者は首ちよんですか！」

前科者　という柴門さんの言葉が信じられず、私は柴門さんの前まで駆け寄り、テーブルにドンと両手を着きました。

「柴門さん！　貴女は前科者ではありません！　前科が付くのは、刑が確定した場合のみです。無罪になれば履歴書に逮捕歴を書く必要もないわけですし。しかも貴女は未成年です。未成年者は例え刑が確定した場合でも前科は残らないはず！　柴門さん、貴女まさか、自分で自分の犯罪を履歴書に書いたんじゃないでしょうねー？」

「なんことするわけないでしょー？」

「だつて、そうとしか考えられないでしょー？……？」　薔子さんの沈痛な声。

柴門さんは、「ネットをあさつてみればー？」とだけ、ぶつきりぽうに言い放ちました。

嗚呼つ！　私は薔子さんが居る事も忘れ、柴門さんの体の上にのしかかりました。

「柴門さんつ！　ああーっ！　ネットに顔写真を晒されてしまつたのですね！？　『首田宗志を殺した犯人』として！」

「真紗耶……きっと首田宗志教の奴らよ。奴らしか、私と首田宗志のこと知つてる奴は居ないもん。奴らの内の誰かが、くたばる前に私への復讐をして逝つたのよ……！　最後の最後まで、醜悪な連

中だつたわねえっ！」

「柴門さんっ！」私は心底、自分たちの悲運を呪いました。

「」の一九九四年というのは、日本でインターネットが飛躍的に普及し始めた頃。さらに翌年の『Windows 95』の発売によりて、ネットはより一般的なものへとなつてゆくのでした。

私たちの嘆きようを見るに見かねたのか、薔子さんがとても穏やかな歩調で歩み寄ってきます……

「志穂、もう一度だけ、貴女にチャンスをあげる。……このクウチユーカで働きなさい。ただし、条件があるわ。もう一度と、勝手に辞めるとか休むとかは言わないこと。今度、勝手なことをしたりしたら、一度どうちの敷居はまたがせないわ。いい？」

これは当然、薔子さんの娘に対する愛情からくる言葉以外の何者でもありません。

しかし、その言葉がのちに柴門さんを追いつめることになるのです。

「……いいの！？」

「ええ。ただし条件は厳守してもらひわよ？」

「ありがとうお母さん！ 私、真紗耶と付き合つてしまつになつてからは、男が気持ち悪くなつちゃつて。おかげで真紗耶一筋になれたよ。だからきっと、失恋してヒッキーになることもないと思うから大丈夫！」

とこゝで、娘に気を遣つた薔子さんがクウチユーカのバイトさんを辞めさせ、柴門さんを雇つたのです。

柴門さんはよく働きました。彼女の「ケティッシュな明るさはお客様さんに評判が良く、『イマドキのロボットみたいな若いバイトと違い、人間的な温かさに満ちている。』などと評されたもので、私も良くて、密としてクウチユーカへ向かいました。

ちょうど木泊さんの両親が、孤児になつてしまつた親戚の赤ん坊を、半ば卖名行為のために引き取つたという話を聞いたのも、この

時期のことです……。

さて、ある日も私は密として、柴門さんにパフェを注文いたしました。そのパフェが、私が柴門さんにする、最後の注文になることも知らずに。

「苺パフェですね！？ かしこまりました一つ！」

パフスリーブの白いブラウスに同色のカチューシャ、そして下着がギリギリ隠れる程度の赤いエプロンスカートを身にまとった柴門さんが、星々の煌きを宿したかのような笑顔を振りまいていると、ちょうど私の隣のテーブルに、実に嫌らしい顔をした男性が座ったのです。

「……？」男は柴門さんの横顔を見て目を変えていました。

「こりつしゃいませつ！」

柴門さんが挨拶すると、男は柴門さんの顔を見て嘲笑。

「うはつ！ あー君、まさかまさか、漫画家の首田宗志を殺した子？ ネットで見たよ。よく呑気に働くね」

「あ、あ……ああつ、わ、私つ……」

銀のトレイを落とし、ウェイトレス服のまま、ものすごい勢いで店を飛び出す柴門さん。私も慌てて後を追います。

これが、柴門さんがクウチュー力もとい柴門家を去った日となつたのでした。

そして柴門さんを追いかけて追いかけて、私はいつしか電車に乗つていました。

平日の真昼だつたため、至極ガラリとした車内。ロングシートの隅の手すりを両腕で抱くように蹲る柴門さん。その隣に、私は消極的に腰掛けました。

活気ある電車の騒音が、落ち込みきつた私たちと皮肉な対比の妙を生み出します。

「柴門さん……どこへ行くんです……？」

すると柴門さんは姿勢を正し、追いつめられたような顔で真つすぐ前を向きます。

「分かんないつ……！　でも、どこか遠く。誰も、私のこと知らない場所に行きたいよお」

「柴門さん……」

柴門さんの気持ちが手に取るよつて理解できるから」いや、私は何も言えませんでした。

再び柴門さんは手すりに蹲ります。

「私もう、家には帰れない。木泊君も、家族に迷惑をかけないために死のうとしたんだつけ……。今はなんか、木泊君の気持ちが痛いほど解る気がする」

明らかに自殺をほのめかす柴門さんの発言に、私は慌てて、

「とりあえず、うちに来ませんか？」と付け加えます。

「ダメだよ。私、禱里さんに嫌われてるし」

「そんなこと言つている場合じやないでしょ」つー？

「でも……」

とにかくにも、今田中には柴門さんを慰めなければ、何が起こるか判りません。

そう思つた私は、とつとに『ある場所』を思い出したのです。ちなみに、私たちが出逢つた林には行きたくありませんでした。木泊さんの哀しい記憶が甦るゆえ。

「柴門さん、いい場所があるんですよ。乗り換えが二回必要ですけど、来て頂けますか？」

「うん。もう、どこへでも連れてつてよ」

数十分後、私と柴門さんは京浜急行の快速特急・一千形のクロスシートに向き合つて座つていました。

一千形の窓は基本的には開きません。もしかしたら、柴門さんが窓を開けて飛び降りるのでは……そんな想いが、私にこの列車を選

ばせたことを付け加えておきます。

「私、以前から京浜急行が好きでね、何度も乗ったことがあるんですけど、ずいぶん、車窓から緑が多く見えるので。いつかあの緑の中に入つてみたい、って思つてたんですよ。」

「今の私とそこに入つたら、一度と生きてやりあ出でられなくなるかもよ?」

こんな時でもブラックコーモアを欠かさない柴門さんと、ほんの少しだけ胸を撫で下ろす私。

「まあそれはそれでいいんじゃないですか?」

「(、ー、ヽ、)ふつ……」

いつもして私たちは、郊外すらからも外れた場所へ足を踏み入れました。

柴門さんも私も黙つたまま、湿つた土の感触を靴底に感じる森道を歩き出します。

私は……柴門さんの手をてる力の全てを出し切つて握つております。手を離したなら即、柴門さんが冥府への旅に出かけてしまふと思わんばかりに。

車窓から森のように見えていた場所は実は、いわば巨大な城壁のような存在で、その向こうには田んぼの跡地が連なる、のどかな自然地帯が広がつておりました。秋もいよいよ更け、鬱蒼たる木々の間を澄み切つた風が踊るよう駆け抜けてゆきます。

「広いのこ、誰も居ない」柴門さんは半ば愕然。

柴門さんが呟いた 広いのこ、誰も居ない……それは、現代日本の一問題点の一つではないでしょうか? そういう場所が、今 日本には少な過ぎるのでしよう。

「柴門さん、そうですね」

私が俯きがてらに立ち止まると、柴門さんは私に手を握られたまま、石ころだらけの地べたにへたつてしまいします。

「私、もうダメだ」

「私なんか、最初からダメですよ 」

「なあにそれ」呆れたように私を見上げる柴門さん。

私も柴門さんの隣に崩れ込みます。

「もう私、とにかく《現代日本社会に」とく適応しないように出来ている人間》で」

「私は違うよ！？ 私は社会から賞賛されるだけの魅力と能力を持つてる！ なのに首田宗志のせいだ！ …… 真紗耶のせいでもあるのよ？ あんたが私に、首田宗志を紹介したりするから」

その言葉を聞いて私は内心、含み笑いを致しました。柴門さんは、私が復讐に柴門さんを利用するため、柴門さんを首田宗志に近づけた事を知らないのだ、と。

私と柴門さんが、しばらくその場で呆然としていると（ただし末だに私は柴門さんの手を握る力を緩めぬまま）、遠くの道に、実に美しいシルエット

それは、私よりもずっと艶美な黒髪に、胸は大きくはあるけれど実にスレンダーな身体を持つ、大人の女性……

女性は私たちに気づくと、地面に崩れこんでいることを不審に思つたのか、悠然とした歩調はそのままに、私たちに近寄つて来ました。

近づくにつれ、この女性のダガーのように鋭い瞳や、見事にカットされたダイヤのように利発な表情が身に迫ります。

そして私たちの前に立つと…… その第一声は、

「貴女、人を殺しているわね？」と、柴門さんを見下ろしての一言。氷の剣のごとき、怜俐かつ透明な声です。

私は向こうのほうからおでましだ！ と思いました。実は私はまさに、この女性に当てでここへ来たのです。

無論、柴門さんは穏やかではいられず、立ち上がりて女性の顔を指差しました。

「あ、あんたまで！　あんたまでネットで私のことを………」

「柴門さん柴門さん」私は柴門さんを宥めつつ、「…………」。初めまして」女性に会釈をしました。

「こんにちは」女性も私に軽く頭を下げた後、柴門さんに少し厳しめな視線を送ります。「ネット？　そんなもの、私は持っていないわ。人を殺した人というのは、顔を見れば判るのよ私は」

「あ、貴女何者！？」

とうとう私の手を振り払い、女性の手前まで移動する柴門さん。私は改めて、女性に挨拶をします。

「どうも、河東真紗耶と申します。こちらは、柴門志穂。私、京浜急行が好きで、ある風の強い日、千形に乗つておりました。すると偶然、本当に神の導きの「ごとく」、風で剥がされたと思われる一枚のチラシが、開け放たれた窓から舞い入ったのです」

ここまで言つと、女性は私の意図を理解したようです。

「それが、『うち』のチラシだったのね？　私に、何か用あります？」

「たるもので」

「そう……」

「なんなのよ！？」

一人、納得のいかない柴門さんを一人で連行し、私たちはかなりの時間をかけ、ある場所へ向かいました。

着いたのは……古びた木造校舎。そしてその隣には、立派な工場が建つておられます。

私たちが仰々しき門を開ける音を聞くと……

「のんちゃーん！　おかえりーーー！」

紅茶色の髪をした女性が、嬉しそうに駆けて参りました。

【Miss a - s viewpoint】のんと理奈子

「ちょっと待って真紗耶さん！ その 紅茶色の髪をした女性 つて、まさか、昨日の……」

またしても思わず口を挟んでしまうあたし。真紗耶さんは戸棚のガラスのほうを向き、今は告白団の姿をした自分を見つめた。

「はい。私が昨日変装していた、あの女性です。名前は……香上理奈子。告白団と顔の構造が似ているから、変装がし易いんですよね」

「……で、その校舎って何なの？ 校舎の隣に工場つて、想像がつかないんだけど」

あたしは淡々と質問するけれど、どうもこのくだりに話が差しかつたとたん、真紗耶さんの口調は自分たちの凄惨な過去を話すときよりも沈痛なものになっている。

「その時、理奈子さんに『のんちゃん』と呼ばれた、その女性彼女こそが、その校舎と工場がある地帯を統べる女王様なのです」「『のん』って、ずいぶん変わった名前なのね。あ、もしかして…ツクネーム？」

「そうです、理奈子様特有のね。本名は 立原果音。『果実』に『音』と書いて『かおん』と読みますが、理奈子様は最初に彼女と出会ったとき、『かのん』と呼び間違つてしまわれたそうですね以来ずっと、『のんちゃんのんちゃん』と……」

真紗耶さんの顔に、ほんの少しの微笑が宿つた。

微笑ましい過去のエピソードが、暗澹たる過去を振り返つてすっかり暗くなつたその心を、幾ばくか慰めてくれたんでしょう。あたしも饒舌さを失い、

「それで……」とだけ訊く。

けれども真紗耶さんの温かな微笑は消えなかつた。

「列車に舞い込んだチラシを見た私は、果音様のなさつておられる行き場所のない子供たちを無条件で引き取つて住み込みで造花工

場で働く》といふ立派な生き方に感動して……」

「そう……。それで志穂があんなことになつて、そのチラシのこと

を思い出した、と?」

「はい……」

七章の肝となる部分です。

【Recollection of Masaya】造花の愛

校舎に案内された私たち。

校舎内は非常にレトロでロマンティックでさえある女学院といった趣で、かなり古い建物ではありますが、果音様たちがきちんと手入れをしているのでしょうか、木の温もりで優しく濾過された陽光が肌に快く触れました。

ガラス張りの通路を抜けて北棟へ向かい、音楽室に着くと、私、柴門さん、果音様、そして理奈子様……四人で木のテーブルを囲んで相談を始めました。

まあ、なんと言いますか、首田宗志教のみすぼらしい座談会とは豪い違いだなあと、感じましたね。

首田宗志教の座談会ではお茶すり出しあらせんでした（まあ連中の淹れたお茶なんて飲めませんけど）が、果音様が淹れて来てくれた紅茶の薫り高さは、おそらくアールグレイでしょう。優雅なバロック装飾の施されたカップが、ここが安心できる場所なのだとということを証明してくれているようでした。

さて、果音様の部屋でもあるとここの音楽室は、格調高いベーゼントルファー＝インペリアルのピアノが何よりも印象的で、教室というよりはお嬢様の部屋といった趣でした。

まず果音様が意外にも気さくな笑顔で、私と柴門さんに手を向けます。

ここの氷像のような女性が時折見せる、春の陽光を宿す湖面のような笑顔は格別に美しい……そう思いました。

「河東真紗耶さんに、柴門志穂さんね？ ねえ志穂さん、真紗耶さんが貴女をここに連れて来た理由、貴女もう、解っているわよね？ ここはね、行き場のない子たちを無条件で受け入れて、住み込み

で造花をこじらえてもらひつ……まあ、施設とでも言えればいいのかしらね？ 理奈子」

話を振られた理奈子様はビクン！ 完全なる、か弱き乙女ですね。とても大人の女性には見えません。

「え！？ エーツと……私に言われてもなあ……。何て言つたらいいんだろつ……。ねえのんちゃん、私、よく判らないけど……ここ、施設じやないと思つなか……。施設つていうと、なんて言つたらいいんだろうつ……。」

私は申し訳ないと思いつつも、消極的に声を発します。

「あの……お言葉ですが理奈子様、そんなことを言つたら施設で育つた人たちに失礼ではないでしょうか？ 私の母は施設から一歩も出ぬ青春を送りましたが、それでもきちんとした人間に育ちましたよ？ まあ多少、不安定な面はありますが、それは生まれ持つての性格に他なりませんし」

「そうよ理奈子。なにににおいても偏見は良くないわ」

果音様に軽く諭され、シュンとする理奈子様。

「ううつー！ 「めんつ……」

その様子を見て居たたまれなくなつたのか、柴門さんが初めて本格的に話し出します。

「ん、まあまあ、とにかく、アットホームな場所つてことね。でも果音様、よくこんな大それたことが出来ますね。学校を丸ごと買収して住居にしたり、校庭だつた場所にあんな工場を建てたり」

それを問われると果音様、手に持つたカップを優雅な仕草で受け皿に置きます。チャリン、と、奇麗な音がし……果音様は愛しげに自分の部屋を見回しました。

「この学校はね、私と理奈子が出逢つて、愛を育んだ場所なの」

あまりにもストレートな果音様の言葉に、思わず立ち上がりつてあたふたする理奈子様。ただでさえ赤みがかつた頬は、更に真っ赤に染まっています。

「あつ！ のつ、のんちゃんつ……そんなつ、みんなの前でつ！」

おろおろする理奈子様を、優しく窘めるように見上げる果音様。

「理奈子、こそそする必要は全くないのよ。私たち、もう二十五過ぎなんだから堂々としましょうよ。私たちの仲は認められているんだから。私たちの仲を認めてくれた世の中へのお礼に、こうして私たちは……」ここで果音様、視線を私と柴門さんに戻します。「……まあ、そういうことなのよ」

柴門さんは《私と自分》と《果音様と理奈子様》を見比べました。「まあ私と真紗耶も、どつちかつていうとレズですかね。それでも誰も文句言つてこないし。……果音様がこの場所を生み出した、その心は何となく理解できました。でもこんな大それたこと、よく出来ましたね」

柴門さんは明らかに、金銭的なことを知りたいのでしょうかが、果音様は嫌な顔一つしませんでした。

「私のフルネームはね、立原果音。ええそうよ。立原銀行の社長である、立原佐兵衛翁の孫娘なの。知っているだらうけれど、十年前にその祖父が亡くなつて、まあ私には母も父も兄弟も居ないから、祖父に一番近い血縁者として私は、財産を一人で相続した。そして大学を出次第、祖父の後を継いで、銀行の社長になるはずだったの。でも、何だか虚しかつた」

その言葉の続きを理奈子様が、

「そんな時に、ちょうど私たちが出逢つた、この学校が閉校になるつて聞いて……」と補完。

果音様は理奈子様を、本当に愛しそうに見つめました。

「そう。そうなの。どうせ閉校になつてこの校舎が取り壊されたなら、下らないビルかマンションが私たちの想い出の場所を潰すのは時間の問題。だから私は、全ての財産を放つて、この学校を買い占めるこことを考えたの。銀行なんて、直接的には人を助けられないし、幸せにも出来ない。私は社長の権利を適当な人に譲ると、生まれ育つた大邸宅や世界各地に点在する別荘、何台もの外車、家にあつた無数の宝物、ひいては自家用飛行機やヘリコプターの類まで、何も

かも……総て総て売り放つて、理奈子と共にこの校舎に移り住んだのよ」

大人物、といった逸話ではあるのですが、あまりにも凄すぎて私はやや不安を感じました……

「でも、よくそんな思い切つたことをなさいましたね。もし造花が売れなかつたら……」

その疑問には、理奈子様が答えてくれるのでした。

「のんちゃん、凄いんだよ。のんちゃんにはね、『ピアニスト』とか『テニスプレイヤー』とか、色んな肩書きがあつて、その肩書きの中に、『造花アーティスト』もあつたから……」

私は、果音様と自分たちとのあまりの桁違いぶりに少々畏れつつも、一応納得して紅茶を飲みほします。

……その味は高貴でありながらどこまでもインティメートで優しく、『決して自分たちとあなたたちとの間に壁は存在しない』という果音様のメッセージが込められているようでした。

「なるほど。アーティスト扱いになつていてるから、確実に成功できるという確信があつたわけですか。それで人を増やして、大きな造花製造会社にしたと、そう解釈していいんですね」

すると、こんな凄い人が……私ごときに向かつて實に気さくに微笑み、頷きました。

「そうよ。一人では本格的には色々なことは出来ないものね。出来たとしても時間がかかるし。ただね、ただ造花をこしらえるだけでは、私の自己満足に始終してしまう。それはもちろん、私の造花が人の心を癒すことはあるかもしれない。でも、それで苦しんでいる人が救われるわけではない……」

果音様の仰つたことは、非常に重要な問題だと思いました。

最近の芸術家の多くは、自らの芸術で誰かを救つた気になつてい る人が多いのです。しかし芸術というのは本来、自分のために追求するものであつて……

私は深遠な面持ちで頷きました。

「なるほど。それで、行き場のない子供たちを引き取る、いわゆる駆け込み寺のような場所にしたかつたと」

「そう。私はメンタルではなく、フィジカルに人を救いたかったのよ」

果音様の大名言、と思いました。

今まさに親から虐待されたり、学校でイジメられたりしている人たちにとっては、どんな芸術も救いにはならないのです。その人たちにとって最も救いとなるのはまず『危険のない生活が送れる場所』でしょう。果音様はそのことを熟知しておられるのです。

私は果音様と柴門さんを交互に見つめました。

「では果音様、この柴門さんも快く受け入れて下さいますか？」

「ええ」

果音様は一つ返事でしたが、柴門さんは少し慌てて面々の顔を見回します。

「でも私、造花なんて、こしらえたことないし」

すると果音様は『無問題』と言わんばかりに含み笑い。

「それでもいいのよ？ それなら工場のほうで男の子たちと力仕事をしてくれればいいんだから。工場には、色々な形状のプラスチックを精製する設備があつてね、その機械を管理する力仕事が男の子たちの役割。それで女はこの校舎で、私と理奈子も含めて、造花そのものをこしらえていたんだけれど、……実はね、困ったのよ」

再び果音様の言葉を理奈子様が受け継ぎます。

「そななんだあ。とつても頼りになる女の子が最近出ていらっしゃつてえ」

すると柴門さんは突然立ち上がり、果音様の隣へ駆け寄つたのです。

「そういうことなら果音様！ 私、工場よりも、果音様たちとこの校舎で色とりどりの造花を生み出したいです！ 私には、

とても造花が似合いますので……」

「そう。解つたわ。ただ私、厳しいわよ？」

「果音様、厳しかろうと怖からうと、私は男という者とは関わりたくないんです、もう。私に男を近づけてはダメです！ 惨劇が起ります！」

「ふふふふふ

果音様は柴門さんが「冗談を言つたと思ったのか、温かい笑いを見せてくれましたが、私は……言つておいたほうがいい、と思いまし
た。

「果音様。今の柴門さんのお言葉、誇大表現でもなんでもございません。実は……」

私が果音様に、柴門さんの過去の事を搔い摘んで説明すると、果音様の温かい笑みが憂いに満ちた笑みに変換されました。

そしてあら「ひとか、柴門さんの犯した犯罪のことには触れず、まず柴門さんの心の闇の発端となつた出来事について語つてきます

……
「そり。知的障害者から猥褻行為を……。知的障害者は確かに生ま
れながらに不本意なハンデを背負つてゐるわ。でも、そのハンデを
神格化するような社会のままでは差別も偏見もなくならないと思つ
のよ。ああ、まあ、よろしくね」

手を差し伸べられると柴門さんは、感涙と共に果音様の細く白い
手を握り返しました。

「果音様っ！」

こうして、柴門さんはこの造花工場の一員となつたのです。

当然、私は毎日様子を見に行つたわけですが、なんといいますか……日に日に、それまでの柴門さんを覆つていた邪氣のようなものが
薄らいでゆくのを私は感じたのです。

最初の数日は、柴門さんが仕事中に行つてしまつたため、廊下から教室の様子を覗く事になりましたが……

……果音様や理奈子様の手つきを真剣に見つめるお姿や、手に持つた未完成の造花を流麗な手つきで完成に近づけるお姿は、私の知

る柴門さんのものではなく、花を愛する一人の乙女のものでありました。

した。

そして数日後、やつと柴門さんが休み時間のときに、私は校舎跡に来ることができました。

「お邪魔します」

果音様、理奈子様、そして柴門さんが造花をじっと見る部屋である理科室に、私が初めて足を踏み入れると……

「あ！ 真紗耶！ おはようつ！ たつた四日くらい会わなかつただけなのに、久しぶりな気がするね！」

テーブルに置かれた幾つもの造花を満足そうに見つめていた柴門さんが、こちらを振り向いたのですが……その笑顔の輝きは目が潰されるほど眩しいものでした。

私は感激に打ち震え、椅子に座つた柴門さんを上から抱き締めました。その温もりには、今までの柴門さんはなかった、光の息吹が感じられたのです。

「柴門さんっ！」

「ち、ちょっと、果音様たちが来たらどーすんの！」

「いいじゃないですかあ……それなら見せてあげれば。あちらの二人だつてラブラブなんですからあ。あら、」

そこで私は柴門さんの前に置かれた無数の造花に目をやつしました。

「柴門さん、これ、全て貴女が……？」

「そうよ！ 驚いた！？」

柴門さんの生み出した造花は、架空の花であることが一目で判ります。

青いタンポポや緑色の薔薇をはじめ、ありえない花々がひとつずつ。それらはまさに、柴門さんらしい美しさに満ち溢れておりました。

「柴門さん、幸せですか？」

私が柴門さんから離れ、顔を真つすぐに見つめて問つと柴門さんは……

……恐らくその人生で最上のものであらう幸福な笑顔を見せてくれました。

「うんっ……！ とっても！ 真紗耶、私をここに連れてきてくれて、ほんとありがとうね！」

「いえいえ、どういたしまして……！」

【M i s a e - s v i e w p o i n t】憎むべき者たち

……そこで真紗耶さんは祈るように深く深く目を閉じた。

「今でも、そのときの柴門さんの笑顔が、残像となつて私のまぶたの裏に焼きついてあります。思えば、あの頃の柴門さんが一番、お幸せそうでした」

……けれどもあたしは、そうやつて人の気持ちを他者が決めつけるのが好きじゃない。

「そんなふうに決めちゃつていいわけ？」

「ええ。確信できます。もちろん、何年も私と生きてきた中で、柴門さんは何度も明るい笑顔を見せてはくれましたよ？ ですが、その笑顔の裏には常にどす黒い情念が渦巻いて……。でも、あの造花工場で働いていた頃の柴門さんの笑顔は、本当に本当に、心の底からの明るい幸福に満ち満ちていたのです」

あたしはまた、紗那によつて土の地面に移されたあのボリジを想い出した。柴門志穂という人間にとつては、その造花工場こそが『土の地面』だつたんだろう、と。

「やっぱり、果音さんとか、理奈子さんの人柄のせいなのかしらね？」

「ええ。私もそう解釈しています。あれは明らかに、果音様たちの『真摯な愛』の影響でしょう。確かに薺子さんはお優しい方ではあります、が、薺子さんは私の母と違い、決して娘の精神に深く寄り添うタイプの母親ではないのです。娘が姿を消していても明るく仕事が出来る人ですからね」

「ええ。話を聞いていて思つた。薺子さんって現代的で能天氣な人なんだろうなあって」

「そうですね。思えば、柴門さんの周りには子供の頃からずっと、真摯な愛を持った人間が一人も居なかつたのです。この私の愛も、かなりドロドロしていますし……柴門さんが、のように歪んだ人

になつていつてしまつたのは、そうした周囲の人間たちの責です「でも、果音さんたちは違つた……」

「ええ。……ですが、」真紗耶さんの表情がまた翳りを見せる。「ですがそれは、束の間の幸福だったのです。ねえ巫彩さん、私が数日前に見たある夢は、柴門さんの生み出す造花によく似ておりました」

「どんな夢を見たの？」

「まあ搔い摘んで言えれば、柴門さんと一人きりの志穂で、幸せに暮らす夢ですよ。でも、青いタンポポや緑の薔薇が現世にないよう、そんな生活も、現世では絶対に無理なんです。ありえない幸福、ありえない安らぎ……けれども確かに美しいんですよ」

「この人もまた、私と同じ叶わぬ願いを抱いているのだと思つた。

「真紗耶さん、あたしもね……、木泊兄さんの今にも消えちゃいそうな姿を見るたび、朱音の重く俯いた顔を見るたび、紗那の寂しそうな横顔を見るたび、眞子の諦めたような笑顔を見るたび、この世に居るのがこの五人だけだつたら良かつたのについて、何度も思つたわ」

「さようですか……」

沈黙した空氣。なのにあたしは、更に空気が重くなる質問をしなければならない！

「真紗耶さん、 束の間の幸福 つて、どういつ……？」

すると真紗耶さんも、もう哀しさが限界を超したのか、逆に無表情になつて、まるでキャスターがニュースを読み上げるみたいに淡淡と語りだす。

「柴門さんが造花工場の一員になつて半年近くが経つた頃、プラスチックを精製する設備が大爆発を起こしました。死者四名、負傷者五名。当然、犠牲になつたのは工場で働いていた男の子たちです。校舎に居た果音様、理奈子様、そして柴門さんの三人は無傷でしたが、工場は全壊。生き残った男性5名は結局、果音様を捨てて施設

「へ逃げて行きました」

その淡々とした解説が、あたしの心をズタズタにした。

果音さんも理奈子さんも女神様みたいな人で、志穂は女神たちの愛によつてやつと優しい人間になれるところだつたのに、それなのに、どうしてそうなるの？　どうしてそんな結末を迎えるければならないのかしら…？

あたしは無言のまま真紗耶さんの隣へ行き、真紗耶さんが皿らの座つた椅子の隣に置いた細長い包みを手に取つた。

「これ、Sweet Seasonのワインナリーにあつたワインでしうう！？」

「巫彩さん？　まあ、そうですが、よく判りましたね。貴女が昨日、飲みたそうにしていましたので……」

真紗耶さんが言い終わる前に私は包み紙を破き、台所から栓抜きを取つて来てコルクを抜き、そのままボトルに口をつけて一口ほど飲んだ。

「ゴクゴクゴク……あーっ！　真紗耶さん！　どうしてですか！？」

「どうして爆発事故なんか起こるんです！？」

「なにを怒つているんです巫彩さん？　不慮の事故、ですよ

妙に不自然な笑みを見せる真紗耶さんが実に訝しい。

「本当に？」

「不慮の事故、不慮の事故、不慮の事故…………なわけがないでしょー！？」

真紗耶さんまでもが激情を露にし、あたしの隣まで来るといの手からワインを奪つた。

「真紗耶さん！？」

「ゴクゴクゴクゴク……ああ巫彩さんっ！　次々に集団自殺していつた首田宗志教！　ですがね！　どこを探しても教祖の名前が見つからなかつた！　それで……爆発事故が起こる前、やけに年をとつて見える男が、造花工場で働き出したのです！　果音様は寛大な方

で、来る者の詳しいプロフィールは聞かないと決めておりましたから！ その果音様の寛大さが！ あだになってしまったのですよ！

ああーっ！

「まさかあ……！」

あまりに禍々しい予感に、あたしの全身がガタガタと震え出した。真紗耶さんもほどばしる感情を抑えられないのか、あたしのツインテールを双方の手で鷲掴みにして何度も引っ張りながら激情的に話を続ける。

「ええ！ その まさか ですよ巫彩さん！ テロ……自爆テロです！ 死んだ四人のうちの一人の名前が、首田宗志教教祖の名前と一致したのです！ そういうえば爆発が起こる数日前、柴門さんが『新入りが工場で変な動きをしている』などと漏らしておりました！ 教祖は表立つことはすることなく、ネットだけで色々なものを批判していた輩なので、私も柴門さんも教祖の顔を知らなかつたのが悲運でした。きっとあの教祖が設備に何らかの細工を！！」

「嫌つ！ なんて醜い奴らなの！？」

あたしはその場に崩れ込む。真紗耶さんに掴まれたままのツインテールに引っ張られ、頭が痛い！

真紗耶さんはツインテールを持つたまま私あたしを見下ろし、死んだような目で話を続ける。

「巫彩さん、その教祖は昔、酷い差別に遭つた人間だそうでね、『それでも頑張った自分』を武器に、不登校児やオタクへの攻撃を必死で行なっていましたよ！ 木泊さんが本を出版したという話を見つけてきて、それをネット掲示板上で批判し、木泊さん叩きの口火を切つたのもその教祖なのです……！ しかも教祖本人は、自らが自分を虜めた者たちと同じことをしているのだといつ事実に全く気づいていない！」

「教祖はそこに志穂が暮らしていたことを知つていて、復讐として自爆テロを！？」

「それならまだマシですよ！ 復讐ならば柴門さんを殺すはずでし

よう？…………恐らく教祖は柴門さんの居場所を突き止めたものの、いつしか柴門さんへの恨みより、造花工場で果音様に守られて和気藹々と暮らす子供たちへの嫉妬のほうが強くなつて、自爆テロを行なつたのでしょうか！」「

そのあまりの醜悪さに、とうとう両手で耳を塞ぐあたし。

「嫌あつ！ 汚いつ！ 聞きたくない聞きたくないつ！ 汚い汚い汚い！ 嫌あーつ！」

あたしのツインテールを手放し、今度は耳を塞ぐ手をつかんで無理やりに話を聞かせてくる真紗耶さん。

「巫彩さんつ…………それでも果音様と理奈子様は頑張ろうとしたのです！ 努力して、何とか元の造花工場に戻しましょう…………ってね！ 話が首田宗志教のことから果音さんたちのことに移ると、あたしは再び聞く耳を持つた。

「それで、どうなつたのよ！？」

あたしは『頼むから平和な展開になつてくれ』という懇願を込めて訊いたけど、その願いはいとも簡単に玉碎されたのだ。

「果音様と理奈子様は…………必死で造花工場の信頼を回復するため、寝る暇も惜しんでビラ配りに精を出しておられました…………。ある日、私は田園地帯で、お二人を見かけたのですが……」

【Recollection of Masaya】悲劇

それぞれ、大量のビラが入っていると思われるステッケースを二つずつ持つて歩くお二人。

すると、不意と、理奈子様がよろけたのです。果音様はステッケースを手放し、理奈子様を抱き締めます。

「理奈子っ！ 大丈夫！？ お願い、無理しないで！ 貴女まで死んでしまったら私はもう……！」

それでも理奈子様は果音様の身体から離れます。

「大丈夫だよ、のんちゃん。私、頑張るよ……！」

しかし案の定、そう呟いた傍から理奈子様は無惨にも倒れてしまつたのでした。

「理奈子！？ 理奈子理奈子理奈子！？」

【M i s a e - s v i e w p o i n t】着火する想い

「当然それは……体の疲れというよりは、心労がありました。そして精神病院へ行つた理奈子様は……」

真紗耶さんの言葉が途切れた。それと同時にあたしの心に『リタリン』の四文字が！

「真紗耶さん！ その精神病院で理奈子さんはリタリンを……！？」
「はい。あれを打つと、不思議なほど寝ずに行動が出来る、と。まあリタリンは合法的な薬ですから。果音様は理奈子様がリタリンを打つのを止めようとはしなかつたのですが、その頃ちょうど、毎日新聞などが反リタリン運動を始め、リタリンの入手が困難になってしまったのです」

「……勝手に処方しておいて、危険だと判つたら今度は断固としてリタリンを敵視……か」

「それで果音さんは……リタリンを不法入手するよつになつてしまつたのです」

「つ……」

目を閉じるあたし。運命はこの人たちをどこまで不幸にすれば気が済むのかしら？

「やがて理奈子様は 私、空を飛べるんだよ…… などと、変なことを仰るようになつて……ある日、ビラ配り帰りの電車の窓から飛び降りてしまわれたのです。走行し始めた直後でしたから、命は助かつたのですが、元通りに歩けるようになるには不可能とのことで……」

「……あたしは、酔いも混ざつて放心状態。声を発するのがやつとだつた。」

「真紗耶さん、リタリンって麻薬なの？」

「リタリン乱用者も、最初は軽鬱や眠気などの治療薬として、医師から処方され受動的に服用を始めた例の方が多いのですが……」

リタリン大量摂取による急性中毒の痙攣を起こした患者が居ましたし、他にも、不眠、不安、焦燥感、興奮、口渴、食欲不振、動悸、頻脈、高血圧、体重減少、頭痛、胸の痛み、不整脈、支離滅裂な行動、自殺念慮、幻覚、妄想、など、麻薬中毒によく似た症状が出るそうです。スリルを求めて万引きに走った乱用者も居たとか」

淡々とリタリンの解説をする真紗耶さんは、もう何かを諦めきつているような顔をしている。あたしは、

「……？」と、何かを問う顔を真紗耶さんに向けた。

その後、果音さんたちがどうなったのか知りたかったけれど、声に出して《知りたい》とは、もはや言えなかつたから。

真紗耶さんはすぐにあたしの気持ちを察してくれた。

「校舎跡に残されたのは、果音様、柴門さん、そして、体が不自由になつた理奈子様の三人。果音様は必然的に、理奈子様の看病のため校舎にほぼ缶詰となり……。そして柴門さんは、三人の理奈子様の薬代および生活費を稼ぐため、働こうとしたのですが」

「どこへ行つても《首田宗志を殺した犯人》としての志穂の顔を知つている者が現れた、と」

「そうです。当時は windows95 が発売されるなどして、インターネットが爆発的に一般人へと普及し始めた頃でしたから、柴門さんの噂もまた、燃え広がるように日本中世界中へと拡散してしまつて……。それにそこら辺でアルバイトするだけでは、大したお金にはなりませんし。だから私たちは、私たちは……あんな DVD を売る生活に……」

こうして過去漸がようやく《現在》に繋がつた……。

志穂と真紗耶さん、二人の弁による長い長い回想が終わりを告げたとき、まるで劇の幕を下ろすように、サービスと冷たそうな雨の音が窓の外から響いてきた。

意識が朦朧としていたけれど、これは謝らないわけにはいかない。

「『めんなさい真紗耶さん。あたし、あたし、そんな事情があるつ

て知らないくて、あんなDVDを売つているアナタたちを、不可解に思つたこともあるの。本当に、浅はかだつたわ」

「いいんですよ。あの、巫彩さん。ちょっと失礼しますね」

真紗耶さんはまるで精神安定剤を出すかのように携帯を手に取る。

「真紗耶さん？」

「柴門さんには言えませんでしたけど私、巫彩さん、貴女とメールで話してくるときだけは、憎しみとか恨みから解き放たれることが出来たんです……」

そういうことなのね。この人には、《恨みを思い出せりに居られる人》が居ないんでしょう。

「あ、そう言われてみれば…… そうよね」

「お解り頂けたようで、嬉しいです。柴門さんの毒々しい諧謔性を見ていると、柴門さんの安住の場を破壊した首田宗志教教祖への憎しみに繋がっていきますし、木泊さんの透き通った瞳を見ていると、こんな純粹な少年を攻撃してきた首田宗志教への恨みが募ってきます。そして母の顔を見ていると、施設で育つた母をいちいち色眼鏡で見てくる世間への怒りが湧いてくるのです！」

「真紗耶さん…… それじゃあアナタ、心の休まる暇もないわよね」「はい……。思えば私は小さな頃から、醜いものをたくさん見てしまいました。それが私の心に蓄積されて、恨みだらけの人間になつていた……。でも、巫彩さんへの言葉を書き込んでいたとき、ふと気づいたんですね……自分が本当に純真な心で文字を打つているということに」

あんな義両親の元で育つたわたしには、何となくその気持ちが解つた。

「憎い者だらけなときに、奇麗な者を見つけると、死にたくなるほど幸せよね……」

「ええ。もう、醜い奴らのことなんかどうでもいい。こんな純粹な心が自分の中でも生きていって、気づけただけで幸せだつて思いました。まるでシャフリヤールですよ私は。そして巫彩さん、貴

女はそのシャフリヤールに復讐心を萎えさせたショエラザード……

眞緑耳
いで俯く。

卷之二

「……だからさつと、造花工場に居た頃の柴門さんもそうだったんですよ。柴門さんはも果音様たちと共に居るときだけは、とても純粋な心で居ることが出来た。自分が愛しいんですよ、きっと。だから今、あんな状況になつても、あの場所に留まり続けておられるのではないか……？」

悲しい　たた悲しい　なんども「悲しい人たちの嘆なのかしら？」
誰も悪くない。

誰も生まれながらにしてよしむな心を持つた人間ではない。
それだというのに、首田宗志教……ただそれだけの愚かな悪によ
つて、こんなにも多くの人間が不幸になつてゐるなんて！

雨は次第に強まり、いやが上にもあたしたちの悲しみを增幅させる……。

床に崩れ込んだあたしは両手で顔を覆い、ただ子供のように泣くことしか出来なかつた。

耶さんは「」の肩を抱いてきた。

「巫彩也ニシ！ 悪しきのは過去の」じだナドモアゼニませんのよ
！？ 最近の柴門さんは、怪我が耐えぬのです！ いつもいつも、
《撮影時》に見ることになる生々しき痣の数々！ 理奈子様です！
理奈子様がリタリンの副作用で暴れて果音様や柴門さんを……！

「果音さんの絶望も並大抵のものではないわよねッ！」一人でも多

くの子供たちを救おうつて、総ての財産を投げ打つてまであんな場所を生み出したのに、それが逆にあだになつて、逆に引き取つた人たちを死なせるハメに……っ！ ああ酷い酷い！ そのやつかみから、果音さんが志穂を虐待してゐることも一バシン！

あたしの頬に鋭い衝撃が走った。

「巫彩さん！ いくら女性でも、そんな愚かな推測をされたのでは
殴らすにはいられません！ あんな女神様のような方が虐待なんか
するもんですか馬鹿馬鹿しい！ それは、それは、確かに柴門さん
の癌は、《意図的に》柴門さんを殴ろうとしなければつかないよう
なもの……ええ、違います違います！」

「ほら！ アナタだつて薄々感づいてたんじゃないの！？」

「ハジで真紗耶さんは再びワインをあおる。

とは絶対に！

あたしも真紗耶さんの手からワインを奪いつ。

「ゴクゴクゴク……ふ、はははは！ 首田宗志教みたいな汚らわしい奴らの手にかかるたら、女神様みたいな果音さんが悪魔になつたつておかしくないわよっ！」

「……」考えたく思は……う……

今度は真紗耶さんが両腕で耳を塞ぐ。

けれどもあたしはほどばしる激情を自分でもコントロールできな

くなつていた。

「あたしだって考えたくもないわよ！でもね、志穂は私の友達なの！　真実を知らなきゃ友達を救うことなんか出来ないでしょー！？……救いたいっ！　志穂も！　果音さんも！　理奈子さんも！みんなみんな首田宗志教の悪意から救いたいのよッ！　それから、

それから

「ロロロロロロー」 テインパーを乱れ鳴らしたかのよつた雷鳴が轟く。春の嵐かしら、風も強くなつてきた。

「巫彩さん……？」

その弱々しい声に、今ばかりは腹が立つた！

「それからアナタにだつて、本当の姿に戻つてほしいッ！」
隣に崩れ込んでいる《真紗耶さん》のカツラを剥ぎ取り、ついで
に自分の袖でマイクも拭き取つて《真紗耶》に戻すあたし。
しばらく雷鳴も雷光も途絶え、あたしたちも沈黙する。

けれど、天の裁きを告げるよつた点滅が一人を照らしたとき、《
真紗耶》が言葉を発した。

「み、ミサエ……なにするの？」

「なにするの……つて……アナタのほうが最初に、あたしにその姿
を見せてきたんぢやない？　どうしてあたしにだけ本来の姿を晒し
たの？」

「…………」

「あたしと……やり直したかつたんぢやないの……？　志穂との生
活はとてもじやないけど重くてつらくて、変装してパロディにでも
しなきややつてらんなかつた……。けどそこから抜け出して、あた
しと……つて」

言葉を遮られるかと思つたけど、なぜか真紗耶は何も言わない。
おかしいと思って横を見ると、真紗耶は俯いて涙を零していた。

「そんなん……つ、そんなこと……は……」

これで解つた……この人にとっての変装は、精神的な防具なんだ
つて。

防具を外された今、ここに居るのは志穂に《造花の愛をくれる少
女》を演じさせた、愚かで脆い少年……

年甲斐もなく飲んだ酒が全身に回り、何もかもが嘆かわしいこと
に思えてきて……あたしはうずくまるその背に片腕を回す。

「なーに辛氣臭い顔してんのさ…？　あ！？　この中里巫彩様の愛
を得るチャンスなのよ！　あんた！　はつははははは！」

そして、天変地異を告げるかのような長い長い雷鳴のどどりやー。
あたしの中で眠つていた何かが目覚めた気がした。

『真紗耶さん』の化粧を乱暴に落とし、なおかつ激しく取り乱したあたしの赤いチュニックは艶めかしく乱れ、片方の肩が露出している。

すると真紗耶の涙に濡れた、けれどもどこかどす黒い怨念を感じさせる声が、この体に伝わってきた。

「ミサエ、自分の言ったこと、解つてる……？　おしほ一人じゃ、稼げない……。ミサエがおしほの代わりをするの？　私とビデオを撮る？　それでそれを売つて、おしほを助けるお金に変える……。私と付き合つて……そういうこと」

偉そうな口調で「たくを並べる真紗耶にのしかかり、地べたに押し付けるあたし。

またゴロゴロと鼓膜を破くよつな雷鳴が響いた。

「構うかよ……そんなこと構うか構うか構うか構うか構うか構うか構うか構うか構うかああああーっ！　真紗耶とあたしがビデオ売つて？　志穂を自由の身にする？　結構じやないの！？　アナタと志穂を少しでも明るい世界へ行かせてやれるならね、こんな体の一つや二つ、ドブに投げ捨てたって構うもんか！」

「私はドブじやない」

「うつさいわね！　言葉の綾くらい理解しなさいよ…」

ずつとそのままの体制でうずくまっていたあたしたちを、少し弱まつた雨の音が見守っていた。

平日の昼に一人で外をふらついていても、街ゆく人を〇一だと勘違いさせるため、いつも着ているという志穂の高校時代の制服。確かにそのスリムでシックなデザインはまず学生服には見えない。

次の雷鳴が響いたとき、あたしは真紗耶を起き上がらせ、その襟元からリボンをスルリと解いてみせ、黒いブレザーを脱がすと、… 血のついたブラウスが目に入った。

これは、志穂が首田宗志を殺した際に着ていたものに違いない。これを着ることで真紗耶さんは、志穂との結託を信じられぬほど強

いもの」にじょうと思つたんでしょう。

「…………」真紗耶はなされるがまま、だつた。

やがて豊胸によつて異常に膨らんだ胸が露出すると、あたしは生まれてから一度も感じたことのない、得体の知れない懐かしさに泣くのを通り越して田を光らせた。

「大きい胸……お母さん、みたい」

あたしがその谷間に顔をうずめると、

「私、知らない」

真紗耶はボソッとそう呟き、スカートのポケットから小型の録画機を取り出して録画ボタンを押した。

【M i s a e - s v i e w p o i n t】 着火する想い（後書き）

またしても1-5禁のボーダーラインに悩む partでした。

【Shuhos viewpoint】悲哀の校舎跡

「この呪われし校舎跡を叩き潰すかのような夏の嵐。その轟音が、『彼女』が開かずの間で大暴れする打撃音を搔き消す。

こんな中でも、果音は先ほど私に、

「あの子に何かあつたら、志穂、貴女が理奈子を守るのよ？ 死なせたりしたら、殺すから」

などと勝手なことを言い残して出かけて行つたのだった。果音は、どんなことがあろうとも半月に一度、どこかへ出かけて行く日がある。薬を買いに行つているのである。

無論、それは不法入手。合法的には、あんな大量のリタリンは入手することが出来ないだろ？

嵐は止まないけれど、開かずの間から響く轟音は止まつた。こんな恐ろしい夜は、久しづりに彼女の顔を見たい。

そう思つた私は、ドアの前で膝を抱えることをやめて恐る恐る部屋を出、長い長い通路を時折輝く雷光に照らされながら渡る。

そして開かずの間の前。

私は果音に渡されていた合鍵を使って厳重な鉄の錠前を、初めて自らの手で開けた。

そしてブイドロの「」とき音を立てる重い扉を開ける。

その部屋の中は、廊下以上に木の腐つた匂いに満ちており、廃病院の「」とく凄惨に荒れ果てていた。果音が片せど片せど、大暴れする彼女によつてすぐに荒らされてしまつ。

その瓦礫の真っ只中に横たわる彼女。

あちこちが切り傷と打撲痕だらけになり、服も元の形状が判らぬほど干切れてしまつてゐるけれど……

……その紅茶色の髪だけは今でも全く色褪せていないし、やつれ

て青痣だらけになつてゐるその顔も、『真紗耶が変装する理奈子』よりずっと高雅な愛らしさが感じられる。

「理奈子様……」私は彼女に、何年かぶりに声をかけた。

「志……穂……うつ、ババッ！ 『じほつじほつ……！』

理奈子は私の名を呼ぼうと口を開いた拍子に、先ほど食べたものを吐き戻してしまつた。最近、理奈子はほとんど食事を受け付けなくなつてゐるらしい。

『相合傘』を見て嘔吐してしまつた自分の想い出して胸糞が悪かつたけれど、私は理奈子をお風呂場で奇麗にしてあげようと、その異常に軽くなつた体を持ち上げた。

そして第二理科室を改造して建てられたお風呂場の前に立つた瞬間！

「志穂つ！ あ、貴女まさか！ 理奈子を溺死させ……っ」背後から果音の声！

「か、果音様！」

戸惑う私に駆け寄ると、果音は乱暴に理奈子を奪い、そのまま私を睨みつけた。

「理奈子には……私たちしか居ないの！ だから……そのときは、私たちのどちらかが殺^やることになるんでしょうけど……」

ここで果音、理奈子を廊下に下ろして私に『王の』とき怒りの目を向けた。

「……貴女になんか殺^やらせない！」

「そんな……私はただ、理奈子様を奇麗にしてあげようと思つて……」

その言葉が、燃え盛る果音の炎に油を注いだ。

「私が、理奈子が汚くなつても放つておいてる……？」

「いえ……そういうわけじゃ……私は本当に……」

「きあーつ！」

果音は両手で私を張り倒して廊下に叩きつけると、私を風呂場まで引つ張つていき、浴槽に溜まつた水を桶ですくつて私に何度もぶ

ちまけてきた。耳にも目にも、冷めた水がお構いなしに入つてくる。

やかて

フジタの研究

理奈子の最大限の声が虚しく響き渡ると……果音は一瞬だけ竦みあがり、ただでさえ死体のようにな蒼白い顔面を、余計に白く凍りつかせた。

「あつ、り、理奈子……！？」

まるで急所を突かれたかのような衝撃に満ち満ちた一瞬の沈黙。しかしすぐに今までにないほどの激烈なる絶望が果音の心を襲い

果音は十字架を胸に突き立てられた悪魔のごとき悲鳴をあげ、私の体を足で何度も何度も打つてきた。その衝撃で私の体は風呂場の隅まで追いやられ、その拍子に冷たいシャワーが噴き出して私の全身を震え止がらせる。

果音は私を殴りながら泣いていた。雷光によつて浮き彫りになる
その涙の粒には微塵の濁りもなく、聖水のようにどこまでも透き通
つてゐるのであつた……。

【Schno - s viewpoint】悲哀の校舎跡（後書き）

七章はこれで終わりです。

八章以降はエログロな要素は失せ、ヒューマンティックな悲喜劇となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192u/>

こうもり族の反乱

2011年10月8日03時32分発行